

ごめんください、  
足尾のこと  
教えてください！

—科研版—

## この冊子を手にしてくださった方へ

志村春海

この本の制作者の一人、志村と申します。私は、平成二四年度から三年間、栃木県日光市の足尾地域で、地域おこし協力隊<sup>[1]</sup>として暮らしながら聞き取り活動を行いました。その聞き取りの内容の一部をまとめた冊子が「ごめんください、足尾のこと教えてください!」「ごめんください、足尾のこと教えてください!」<sup>[2]</sup>です。冊子では足尾の生活やそこに暮らし続ける人々（ときには理由があり足尾を離れた人々）のお話を紹介しています（たとえば、製鍊所から出てくる煙を被った植物のことを「チョリチョリ」と言つたり、各家庭にお邪魔すると必ずある自前の鉱石のコレクション、坑夫さんから伺う技術が詰まつた坑内空間の仕組みや、坑夫さんならではの仕事感など……）。テープレコーダーで録音しながら聞いたお話だけではなく、ちょっとした立ち話やお茶飲みのときの会話、大量の昔の写真や古文書を家のなかで広げさせてもらひながらのお話など、さまざまな場面をひっくるめて聞き取りを行なってきました。

そのような対話を通して足尾の知らない一面に、衝撃を感じると同時に、無意識に出てしまう言葉や思い出話、人間らしい感情に出会えることは尊いと思いました。またその一方で、こうした曖昧な語りを文字として残す難しさに悩みましたが、聞き取りの手法に詳しい好井裕明先生にアドバイスをいただくことで、これらの良さを崩さないまま形にしてこれました。

私は平成二六年度で地域おこし協力隊の任務を終えましたが、科学研究費の支援を受けることであ

平成二八～三〇年度まで継続することができました。本冊子はこの六年間の活動内容をまとめたものです。各章では執筆者それぞれが関心のあるテーマについて執筆していますが、読者の方にご理解いただきたいことがあります。本冊子で紹介する聞き取り内容には、歴史的事実と異なることや主観的に表現されていることがあるかもしれません。また、執筆者によって、語りの表現や引用の方法が異なります。これらは、語りの言葉をありのままに残すことや、その語りを聞いた私たちがそのときどう受け取ったかということを大事にしたことによるものです。その点をご理解いただいたうえでお読みください。

また、本冊子の後半部分は資料編として過去の冊子をそのまま掲載しています。前半部分の本編と繋がっていることもありますので、ぜひ見比べながらお楽しみください。

最後に、足尾について語つてくださった方々をはじめとして、さまざまなかたちでご協力いただいたすべての皆様に感謝いたします。

### 注釈

「1」地域おこし協力隊

平成二一年から総務省の取り組みとして開始した制度。過疎地域に、地域外の人材を一定期間誘致し、その地域の活性化を促進する活動を行う。

「2」「ごめんください、足尾のこと教えてください!」「ごめんください、足尾のこと教えてください!」<sup>[2]</sup>

日光市のホームページからダウンロード可能。<https://www.city.nikko.lg.jp/tukisinkou/ashioikitorih.html>

この冊子を手にしてくださった方へ【志村春海】 2

## 足尾の概要【三浦一馬】 8

一〇〇年続いた生協——三養会 ..... [好井裕明]

【コラム】 三養会、最後の灯りが消えた日 ..... [市乃瀬昌弘]

長門修造さんの戦争とシベリア抑留 ..... [志村春海]

【コラム】 地域おこし協力隊って何をやっている人なの? ..... [中村哲也]

足尾のなかで老いるということ ..... [三浦一馬]

変わりゆく足尾の納涼祭／足尾高校定時制と聞き取り

プール制という工夫 ..... [好井裕明]

【コラム】 残していきたい足尾の記憶 ..... [中山貴仁]

【コラム】 足尾の魅力を伝える ..... [長澤美佳]

国鉄足尾線の廃線に対抗した特別乗車運動 ..... [中村哲也]

【コラム】 寺子屋の今 ..... [中山京]

“足尾を調べる”ということ——村上安正先生 ..... [志村春海]

足尾を知るためのオススメ資料

..... [好井裕明／三浦一馬／志村春海／中村哲也]

おわりに【好井裕明／三浦一馬／志村春海／中村哲也】 144

132 116 114 98 97

96 76 47 45 34 31 13



## 足尾の概要

三浦一馬

栃木県の日光から車で山の中へ三〇分ほど進み、約三キロに及ぶ長いトンネルを抜けて、やつと足尾にたどり着きます。今では想像しがたいことですが、周囲を山に囲まれたこの場所は、かつて鉱山都市<sup>(1)</sup>と呼ばれていました。

一八八七年、経営母体が古河鉱業（現、古河機械金属株式会社足尾銅山事業所。以下、「古河」とする）に変わったことで、足尾銅山は急速な発展を遂げ<sup>[2][3]</sup>、日本一の銅の産出量を誇るようになりました。平地が少なく<sup>(4)</sup>、周辺の町から離れていたため、生活に必要なものは古河から提供されていました。たとえば、鉱員の住居である社宅<sup>(5)</sup>や風呂場、水場、トイレ、購買所は、古河の関係者であれば利用することができます（その後、古河関係者以外でもこうした施設を利用できるようになりました）。また古河は、祭や運動会といった年中行事を主催したり、映画や演劇、歌謡を興行したりするなど、住民の文化活動も積極的に担っていました。こうして古河は、足尾住民の生活をまるごと支えていくこととなります。山奥であるにもかかわらず、そこには最先端の都市的な生活が存在し、最盛期には三万人近くの人びとが暮らしていました。群馬から行商に来る人もいたといいます。こうして銅山を中心とした足尾特有の社会が形成されていったのです。

日本の銅鉱業は、戦時期の銅線需要の拡大に伴って発展していきました。その過渡期には、巨大な資本を持つ財閥による独占体制が定着しています。古河もまた、こうした財閥の一つで、戦後の

解体の影響を受けましたが、一九六三年に銅の輸入が自由化されるまで日本の銅鉱業において重要な位置にあり続けました<sup>(6)</sup>。

しかし、環境規制の強化や資源の枯渇、採掘条件の悪化により、一九七三年二月、足尾銅山鉱山部は廃止され、閉山となります。その結果、これまで古河を中心に形成されていた町の構造が変化することになり、人口が急激に減少<sup>[7][8]</sup>しました。また、足尾内でも人口の流動があり、役場や学校、商店などがある通洞地区に人口が集中していきました。古河は、関連企業の経営や坑内から排出される汚水の処理のために足尾に残っていましたが、かつてのような影響力はありませんでした。こうして足尾に暮らす人びとは、これまで古河が支えてきたものを再編成する必要に迫られていましたのです。

閉山対策として、企業誘致や観光事業の推進、トンネルやバイパスの建設などさまざまな施策<sup>[9][10][11]</sup>が講じられましたが、人口減少や高齢化は進行していきました。二〇〇六年には、足尾町、今市市、日光市、藤原町、栗山村<sup>(9)</sup>が合併して日光市となっています。

この冊子を編纂するための科研費チームが聞き取りの活動を本格化させたのは二〇一六年ですが、そこから現在に至るまでの間にも、過疎化を感じさせる出来事がありました。購買所であった生協の閉店や支所となつた役場の機能の縮小、閉山後に誘致され留まっていた最後の企業の撤退……。そして、人口はついに二〇〇〇人を割りました。今回の聞き取り調査は、このような状況のなかで行われたものです。

### 参考文献

- ・足尾町郷土誌編集委員会『足尾郷土誌』（一九九三年）

- ・足尾町役場企画課「広報あしお 締刷版 第一号」(足尾町、一九九〇年)
- ・足尾町役場企画課「広報あしお 締刷版 第二号」(足尾町、二〇〇六年)
- ・岩間英夫「産業地域社会の形成・再生論 日立鉱工業地域社会を中心として」(古今書院、一九九三年)
- ・除本理史・閑耕平「足尾銅山と自治体財政」『東京経済大学会誌 経済学』二四三号(二〇〇五年)
- ・村上安正『足尾銅山史』(隨想社、二〇〇六年)
- ・生井貞行「銅山閉山にともなう足尾町の変容」『経済地理学年報』二八一一号、一九八二年)
- ・生井貞行「銅山都市の衰退と経済再建 栃木県足尾町を事例として」石井素介・長岡顯・原田敏治編『国土资源利用の変容と地域社会』(大明堂、一九九六年)
- ・日光市「平成26年度 日光市統計書」
- ・武田晴人『日本産銅業史』(東京大学出版会、一九八七年)
- ・山下克彦「四産炭地域の変容と地域振興の取り組み」山本正三・千歳壽一・溝尾良隆『現代日本の地域変化』(古今書院、一九九七年)

## 註釈

〔1〕これまでの研究において銅山町の一般的な特徴として、单一の資源に依存した「一銅山・一企業・一集落の性格が強い」、「銅山が築き上げた社会は閉鎖された、地底での共労・運命共同体的性格」(岩間一九九三・六)、町の発展が「採銅→起業→発展→繁栄→衰退のサイクル」をたどるものであり、こうした性質は「他都市との有機的な結合がばかりにいくほか、新たな産業を展開するための用地の規模や条件も乏しい」といわれています。(中略)基幹産業の銅山業の衰退が、地域全体に直接的な影響を与える」(山下、一九九七・八二・一八三)。

〔2〕足尾銅山は一八八七(明治一〇)年に官営から古河の経営者、古河市兵衛により買収され「以後昭和四八年の閉山までの九六年余りの期間に六七万五、一三九トン(但し自山銅)を産出した」。総産銅量が推定八三万トンであるので、そのほとんどが古河の経営に移ってから産出されたものでした(村上二〇〇六年一二五・二九)。

〔3〕足尾銅山は古河の発祥地でありながら、経営が基盤に乗ると事業は銅業だけでなく広く、足尾外に分散していく傾向にあつたと考えられています。「足尾銅山で採銅・選銅・粗銅製錬を、日光にて精銅製錬を行っている。工業のうち、機械工業と通信機の工場は小山市を中心に展開し、その他の工場は古河電工が横浜同でした。そのため、そこで暮らす人びとはみな同じような生活を送り、必然的に密な関係性が形成されました(岩間一九九三)。

〔4〕「四方を山で囲まれ、極端に平地が少なく約九五%の山地が占める」(『足尾郷土史』二三)。

〔5〕たとえば、社宅では「採銅、選銅、精錬などの各事業所を中心にしてそれぞれ社宅が形成され」、「地区的階層性も見られ、所長、副所長などの管理職員の住居地区は駅の近くの交通の便が良いところにあり、組合などの居住地区は町はずれの生活環境が不便なところ」(生井一九八二)に建てられていました。多くが木造平屋建てで、一つの長屋に三~五軒の世帯が居住し、光熱費は無料であるが、浴場、水場、トイレは共同でした。そのため、そこで暮らす人びとはみな同じような生活を送り、必然的に密な関係性が形成されていました。

〔6〕詳しくは、武田晴人、一九八七、『日本産銅史』を参照。一九二〇年代では、とくに電線需要の増加で国内での銅需要は拡大し、産銅業のなかで「需要の七割を占めるに至った電線工業への原料銅の供給」が重要なとなる。「電線工業では『東京線』と呼ばれた普通品市場では小企業が入り乱れて激しい競争が展開する一方で、有力三社(古河・藤倉・住友・引用者注)は外国企業との技術提携を進めて電力・通信の両分野にわたるケーブル製造を拡大し、安定的な地位に立つようになった」。そうしたなか、古河商事は古河鉱業と協定を結び、積極的に輸入銅を受け入れ、当時割高な鉱業部産銅に代わって銅線市場での地位の安定化を図った。(武田一九八七・二四七・一五〇)

〔7〕一九七〇年と一九七五年の国勢調査の比較では地区別の人口は「社宅部は本山の一〇〇%減を筆頭に、砂畠八二・一%、遠下七九・〇%というように、通洞の二六・六%減を除いて、大幅な減少」となり、急激な人口移動が生じた(『足尾郷土誌』六六)。

〔8〕一九七三年一月に町が行った足尾町全世帯を対象とした「銅山部廃止に伴う各般に及ぼす影響予測調査」には以下のようにある。回答数は二五九四回、回収率は八六%でした。これによると居住希望としては「閉山にかかわらず住む」と答えたのは四五・六%、「今後の情勢をみて決める」が四三・九%、「転出する」が一〇・五%で、このうち「転出する」と答えた世帯の世帯主の職業は「古河鉱業 足尾事業所」六六・三%、「古河事業所 下請け」が八・八%、「商工業」が四・〇%、「サービス業」が二・二%、「その他」が一八・七%でした(『広報あしお 昭和四八年二月二五日特集号』より)。このように閉山後に古河の正社員たちは足尾に見切りをつけ関連会社へ移動したいと考えている一方で、残りたいと希望する約半数の一

八二世帯。けれども、古河が発表した人員計画では町内での配置転換は計四二六名であり、推定で六六二名が整理対象人員となり解雇されることになっていました。つまり、足尾に残りたいと希望したとしても、その半数も残ることはできませんでした。

〔9〕閉山直後から足尾で調査を行ってきた生井さんの研究（生井一九九六）は閉山の影響を知る上で非常に重要なものです。

〔10〕閉山直後の一九七四年、古河の関連企業は一九社で従業員は八一九人であったが、一九九一年には六社が廃業、四社が事業転換、七社が従業員削減となり、全体の従業員は二〇八人と七四・六%の減少となりました。また、誘致企業に関して、一九七一年から一九八八年までに一社が参入、従業員は三四一人でした。けれども、一九九一年には四社が廃業、三社が規模の縮小となり、全体の従業員数は二五五人となつてしましました。他方、生活面において影響を商店などの数を細かく記録していた。それによると、足尾銅山の採鉱部と精鍊部門の撤退により「書籍・文房具店、豆腐・納豆店、菓子・パン店、美容・理髪店やタバコなどの住民の日常生活に密接に結びついた業種や酒場、パチンコ・釣堀などの余暇施設を廃業へと追いやり、住民の生活に支障をもたらした」（生井一九九六・二二五）と述べている。ただ、生井さんが調査を行なった一九九一年には誘致企業七社が足尾に定着していたことや銅山観光のオープンなどもあり、「企業城下町」的産業構造から、相互間の独立性の強い様々な産業によって成り立つ構造へと変化した（生井一九九六・二二六）と評価していく、足尾にも明るい兆しが見えていた様子が伺える。

〔11〕『ごめんください 足尾のことを教えてください その二』「用語集」にも閉山とその経過が詳しい。

〔12〕通洞地区では鉱員社宅が多く建てられていましたが、閉山後は「一部が町に移管され町営住宅となり、他は社宅として古河鉱業の新規および残存事業に関わる従業員が居住」（生井一九八二）することになりました。足尾町としては住民の流出を防ぐためにも古河の社宅を買い上げ特別公営住宅にする必要があり、一九七六年（一九九〇年）では「町が宅地を造成して居住者に安価に貸し出しそこに持ち家の建設を促進する方式（一九八七年からは住宅等建設資金利子助成も開始）と、町営住宅を居住者に譲渡する方式」とを通じて、持家支援政策を開始した。ただし、いずれの方式においても土地は町有のままである。町営住宅、特別町営住宅との違いは、持家が個人所有となっている点である（関・除本二〇〇五）。現在、かつて一五地区あった社宅は銅山会社から町へ譲渡がなされ六地区で特別公営住宅として残っています。水道などが整備され、二軒を一軒にするリフォームがなされるなどして今でも生活している方もいらっしゃいます。当時の面影はわずかに残っていますが、一部では住民が完全に撤収した後も、そのまま放置され廃墟と化しているものもあります。

## 一〇〇年続いた生協——三養会

好井裕明



さらっと書かれているこの文章に、私は驚きました。足尾には百年以上続いている生協があるのだと。足尾で生活文化の聞き取りを始めて、多くの方からお話をうかがいました。それの方からまとまった語りではないものの、必ず出てくるのが三養会であり生協なのです。私たちは、三養会を長年ささえてこられたTさんに何度も写真や貴重な資料をみせていただきました。他の方々からも資料はいただいていますが、この章では、Tさんの聞き取りなどを中心にまとめたいと思います。

そもそも足尾銅山生活協同組合なのに、なぜ「三養会」なのでしょうか。古代中国の学者東坡は『群談採餘』の中で「安分以養福（ぶんにやすんじもつて福を養う）寛胃以養氣（いをゆるやかにして氣を養う）省費以養財（ついえをはぶいてもつて財を養う）」と記し、人間生活にとって最も大切なことは、福、氣、財の三つを養うことだと説いたのです。これが語源で、「三つを養う」ことから、「三養会」と名づけられたのです。ただの購買組合ではないのです。足尾で暮らすうえで、人間としての暮らしをたてるうえでの理念を高らかに掲げた興味深い名前ではないでしょうか。

Tさんからいただいた資料に『県内生協の歩み 足尾銅山生協三養会』があります。この冊子から三養会の歴史を概観しておきたいと思います。

### 三養会の歴史から

私の手元に一枚のチラシがあります。二〇一六年九月のものですが、二〇日から月末までの「閉店セール」を案内しています。

「皆様方には、一〇〇余年にわたり、ご愛顧を戴きましたが、この度、諸般の都合で、閉店することになりました」

さりと書かれているこの文章に、私は驚きました。足尾には百年以上続いている生協があるのだと。足尾で生活文化の聞き取りを始めて、多くの方からお話をうかがいました。それの方からまとまった語りではないものの、必ず出てくるのが三養会であり生協なのです。私たちは、三養会を長年ささえてこられたTさんに何度も写真や貴重な資料をみせていただきました。他の方々からも資料はいただいていますが、この章では、Tさんの聞き取りなどを

くらしの生協  
**三養会だより**  
会員のみなさまに贈る!  
閉店セールのご案内  
(最終版)  
**2016年 9月 20 日より 30 日まで**

皆様方には、100年余にわたり、ご愛顧を戴きましたが、  
この度、諸般の都合で、閉店することになりました。  
つきましては、閉店セールを行いたいと思います。期日は、  
9月 20 日～9月 30 日まで (9月 25 日は休店致します。)  
価格につきましては、現在の価格の半額程度と致します。  
但し、(魚・野菜・市場関係の食料品については、半額には  
なりません。)  
皆様お誘い合わせの上、ご来店をお待ち申し上げます。

渡良瀬売店 TEL 93-3760  
通洞売店 TEL 93-2645

※ 長い間のご愛顧、誠に有り難うございました。  
改めて、感謝とお礼を申し上げます。

一九〇六年(明治三九年)六月、「足尾銅山の直営配給所とは別に、山に働く労働者のための購買組合、本山三養会を設立し直営配給所で取り扱わない日用品の供給を開始したのが始まり」、一九三一年(昭和六年)四月一四日に、それまでの独立していった五か所の購買組合を「統一して單一組合として発足、古河鉱業(株)足尾鉱業所の従業員をもつて組織する産業組合法による購買組合として設立」したのです。

そして、「足尾銅山従業員の生活用品はすべて、当生協が取り扱うこと」となりました。

一九五〇年(昭和二五年)九月に産業組合法の施行に伴って、組織変更を行い、足尾銅山生活協同組合三養会として発足。一九六一年一月一日をもって、名実ともに完全独立、役職員数一四〇名によつて、自主運営することになったのです。

昭和三〇年代初め、県内生協の一部で店舗の近代化が始まります。従来は「対面販売」であつて、米、味噌、醤油、月賦品代金などは、掛売(給料より差引き)、他の商品は現金販売で、その都度、商品別の伝票を起票する供給方法だったのです。

一九五八年(昭和三三年)二月に、愛宕下売店を「セルフサービス店」に改装して「レジスター」による販売を開始します。組合員からの評判もよく、残りの七店舗も逐次セルフサービス店に改装したのです。

一九六五年(昭和四〇年)二月に養鶏部門に進出したのですが、足尾は寒冷地のため採卵率が低く、一九七六年(昭和五一年)六月に閉鎖しました。

一九七一年(昭和四六年)には、組合員に無添加の食品を供給したいとの願いから、約二四坪の建物と二坪の冷蔵庫による生協自前の食品加工所をつくり、職員四名で主に総菜品を生産する体制をつくりました。

また一九五五年(昭和三〇年)前後より、佐藤艶子先生講師で春、秋二回ほど組合員の主婦延べ三〇

○人を対象に各地区で料理講習会を開催し、地域の食生活の水準を高めたのです。

娯楽面では、一九六八年(昭和四三年)には「都はるみシヨー」「生協寄席」などで多数の芸能人を招いて催しを行いました。また日曜日ごとに生協会館を無料で開放し、薬湯の利用ができるようになつたのです。

一九五四年(昭和二九年)には、組合員を対象に生命共済事業を開始しました。

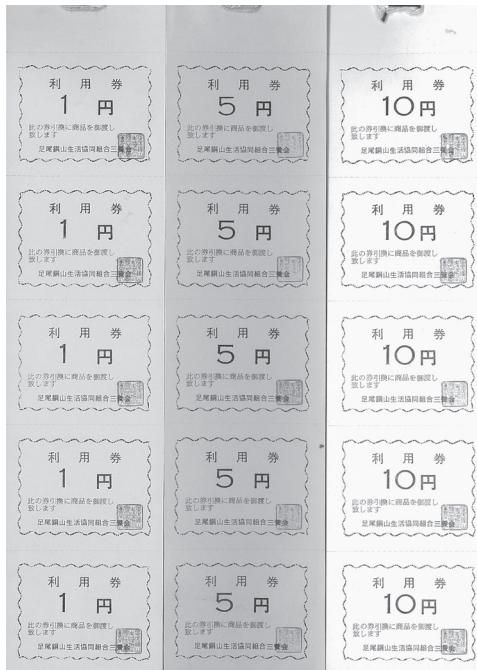
一九五一年(昭和二六年)ごろ、全国生協の中で、先進地域の五生協が、生協相互に共通する諸問題などについて研修したいという目的から「五社会」を作り、年二回生協のトップが出席し討議を重ね、生協発展に寄与してきました。

一九七三年(昭和四八年)二月に足尾銅山が会社都合により閉山。足尾の人口も一挙に七〇〇〇名台に減少。この事態は三養会にとつても死活問題であり、運営の全体的見直しをし、本山売店(約三〇〇世帯)、砂畠売店(約三五〇世帯)の閉店と職員の一部勇退を余儀なくされたのです。

女も男もワンワンいた——Tさんの聞き取りから

### 金券と利用券

「金券っていうのは昭和二七、八年かな。その頃ね、アルミとか貨幣が(足りなくて)、一円とか五円とか、つり銭に困っちゃうんで、一円、五円、一〇円という生協独自の券を作り、生協内部で実際の金として使つた



利用券

んですよ」

「こっちは商品券なんですけども、今の贈答用の商品券ではなくて、米やみそなど掛売で売ったんですよ。それで翌月給与から天引きしますってことで。すると赤字になる人は、毎月毎月これ（商品券）を生協で現金代わりに貸すんですよ」

〔（金券や商品券も使はず生協を利用できなくなる人っていましたか？）

あんまりいないですね。労務課との相談をしたなかで、商品券を売つてくださいという人がはつきりわかるんですよ。たとえば商品券三万円分売つてくださいということになつたとき、労務課に話をして「こういう話があつたんだけれども、売つていいですか？」と聞いて、「ああ、いいよ。来月（その人は）働けるから」という連絡があるわけ」

### パンを売る

「パン工場があつた、木の箱に三〇か四〇くらい入つて、四五箱くるんだろ。それをみんな待つていてね、パンだから掛売通帳なんだよ。……あの時はまだ若かつたから、「あんちやん、パンんな」「おう」とか言つて、手なんて洗わなくてさ、「おう」なんて言つて渡してさ。ジャムなんかも、今の感じじゃなくて、一斗缶にジャムが入つてきていて、しゃもじで、経木を丸めて、くるつと丸めて（しゃもじですくったジャムを包む）。それで量り売りしたの」

### 年二回の大売り出し

「七月と一二月の大売り出しをするとね。お客様を集めるためにね、都はるみショードとか、島倉千代子ショードとか、水前寺清子だとかね、生協主催でやつたんだよ。生協寄席というのもあつたんだよ。Wけんじが来ただろ、漫才のね」

### 生協会館について

「あの当時、一日五〇円くらいしたんかな、その券買つて、薬湯に入つたり、テレビ見たり、将棋したりお茶飲んだりして、一日つぶして帰る人が多かったです。要するに、日帰り温泉だよな。……朝九時頃に始まつて、夕方三時頃までつて形で、年寄りがずいぶん來たね、家族連れとかも。ショーケースに三養会から前日にお菓子持つてきて、置いたり、缶ジュースやサイダーとか置いて」

### デパートみたいな三養会

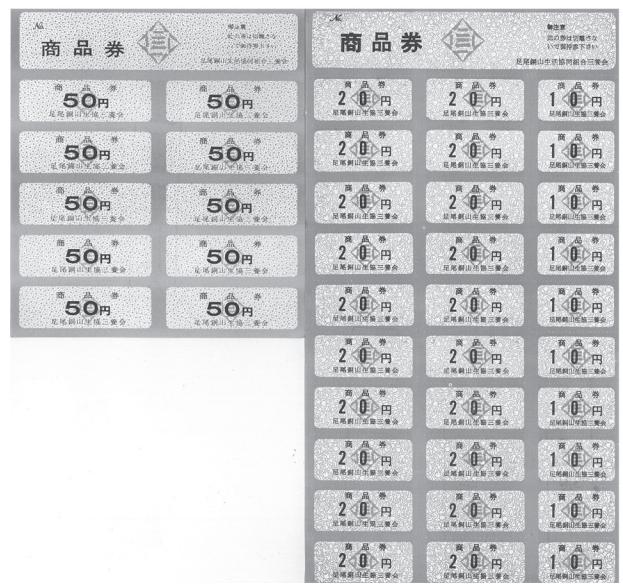
「今思えば、本当にデパートみたいなもんだつたよね。デパートですよね、本当に」

「通洞三養会、すごく良かつたもん。道路一つ挟んで反対側に家具センターなんかがあつて。何でもそろつたの」

「衣料品係とか、雑品係とか、そういうのがいて。渡良瀬の生協で一六人くらい。通洞でも一六人、一七人。通洞の方が（店は）大きかつたけれども、いたんですよ。店長がいて、店長の次の人がいて、あとは魚屋が一人、八百屋が一人、食料品が三人くらい、あとは雑用係だとか、いっぱいいたの」

### 女も男もワンワンいた

「話をえて、若い男女の結婚などを聞く。若い男女はどこで出会つたのかそれはね、どこにでも。女も男もワンワンいたから。たくさんいましたよね。映画館もあつたでしょ。『今晚、映画行かないか？』な



商品券



生協会館（旧五日庄）山側から見たところ。生協会館となり日曜に会員に開放。薬湯、囲碁、将棋、軽食（うどん）などを提供した。



対面販売の店頭風景。各売り場で重さを計り、伝票を切ってからレジに持っていく。



当時の専務理事が月に数回各売店を視察。量り売り対面販売の頃。秤もまだ旧式だった。



昭和三〇年頃に、改装した通洞売店。対面販売をしている。



秋の漬物の時期。白菜を大量購入。各家庭で一五から二〇個白菜を買った。

んで、目星のつけていた人なんかいるわけだよ。映画に行ったり。あとは中禅寺湖なんか皆で、五人か一〇人かで歩いて行って」  
「（いや、ワンワンいたというのが凄いなと）いました。本当に（女も男も）いました」

### お客様への工夫は

「あんまり、ありませんが。ただ言えるのは、業者の人々に話を聞いて、新しい商品なんかも入れてみたりとかさ、結構値段安くがんばつてもらつて、あんまり儲けないで売つてみたり」

### なぜ大規模店舗が来なかつたのか

「（人がたくさんいた頃、どうして他の大規模店舗などが足尾に入つてこなかったのか？）ああ、前にそれ言われたことあるんですよ。よく生協がやつていられるねつて。よそから資本が入つて大きなスーパーだの作れば別だけれども、まず土地がないというのが一つあるんですよ。古河の土地だから。それと以前社宅にちょこちょこトラックが来ていたんだけれども、社宅への販売お断りなんて言つて、追い出したこともあるんですよ。社宅内での販売はご遠慮くださいと」

### 生協の日常から

Tさんから、数多くの写真を見せていただきました。すべてが当時の足尾の暮らしを記録している貴重なものなのですが、私の判断で二〇枚選んで、Tさんに簡単な説明をつけてもらいました。



化粧品販売のマネキンが各店を回った。マネキンとは商品の販売促進をする販売員のこと。



オーシャンウイスキー販売拡充のため生協に寄贈されたオート三輪トラック。



戦後は、まだランドセルなど珍しい時代があった。ランドセルの色は、赤と黒。



ウイスキーの宣伝看板と福引大売り出し。当時お酒は貨物列車で足尾に入ってきた。



ウイスキーの飲み方を教えるカクテル教室。生協だけがこうした催しものをやっていた。



昭和三六年頃、栃木県内生協で順次各店をセルフサービスとした。愛宕下売店が最初。



鮮魚売り出しの店頭風景。築地から足尾まで卸された魚を持ってきていた。



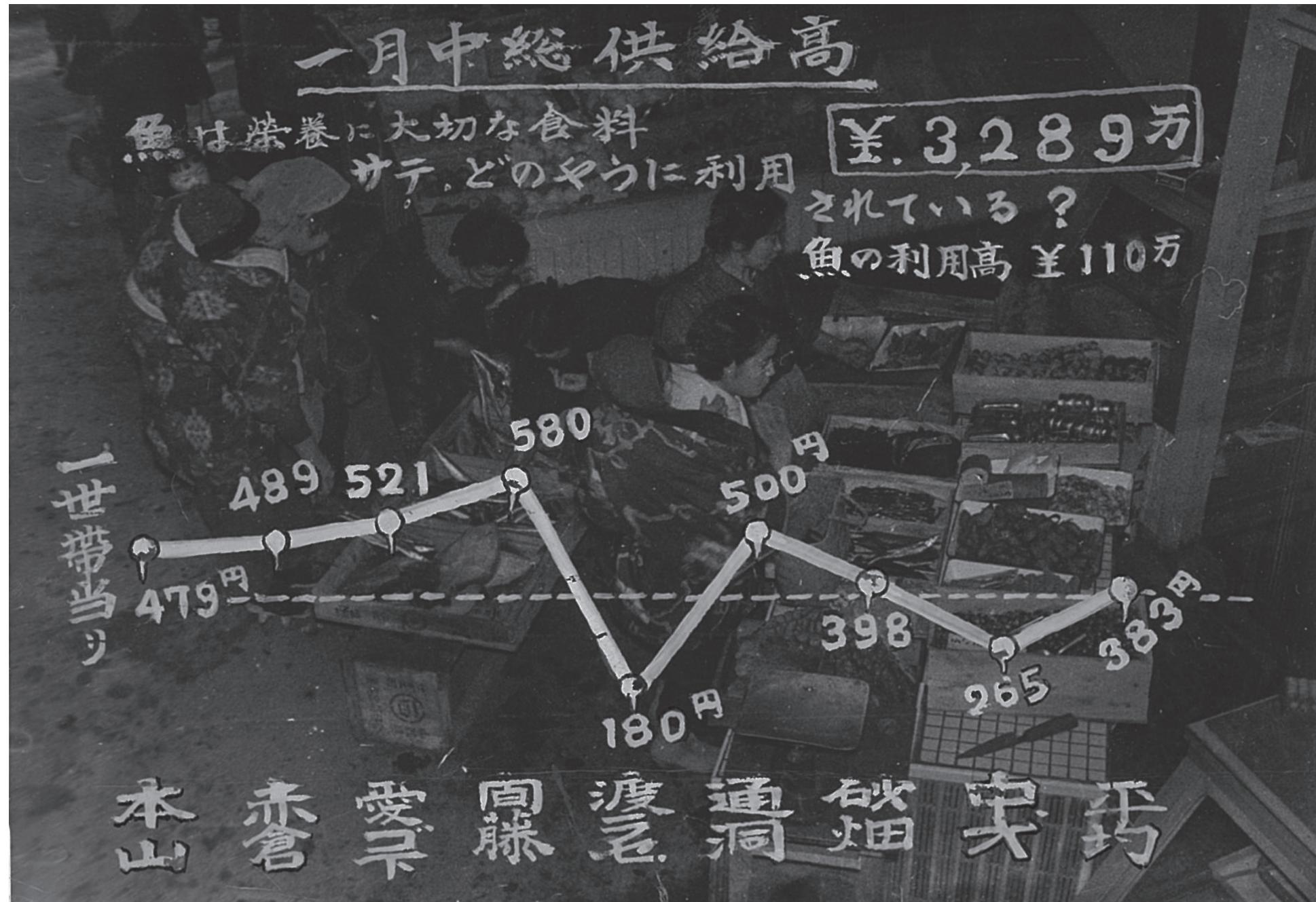
レジスターを導入した中才店。当時レジに打ち込む商品の分類記号を「ヨキミセサカエル」とした。たとえばヨー①は菓子という分類。



店員のレジスター講習会。当時レジスターは一台数十万円した。



渡良瀬店。写真の右にある計量器から左に見える新型計量器に変わりつつあった●●頃の店内と店員さん。



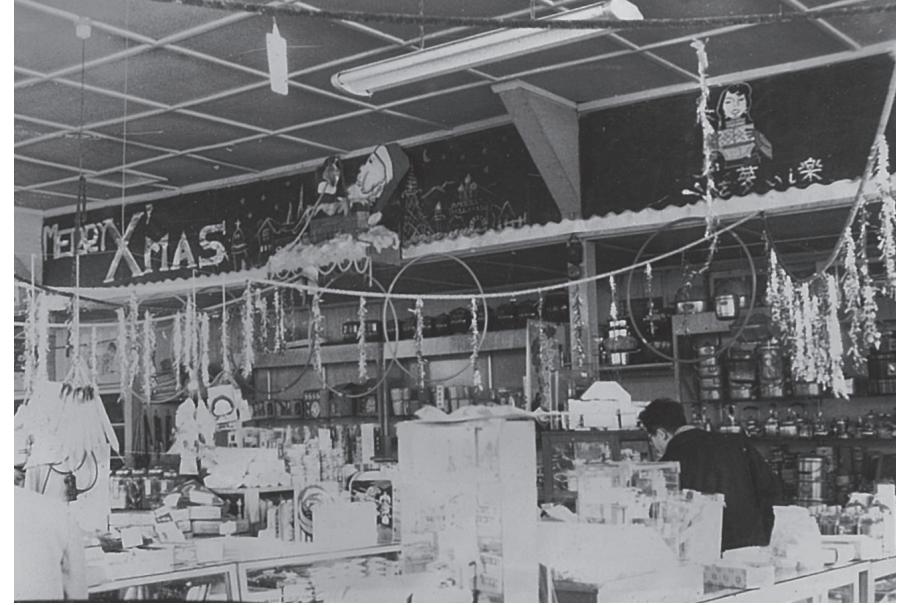
月当たりの総供給高。小滝坑が閉坑になるまでは、小滝店もあわせて九店舗あった。間藤が一番高いのは、上の平に住む人も買ったから。通洞には他にたくさんお店があったので、供給高は、そこまで高くない。



店内のつり広告。お盆のバーゲンセール。七夕まつり、生協寄席ご招待とある。



嵩末福引大売出しの看板。昭和四〇年頃、都はるみなど芸能人を呼び、足尾劇場でショーを企画。お買い上げ額によってショーの観覧券を渡した。



中才店の店内風景。クリスマスにはケーキ販売をしていた。当時はプレゼントを買う習慣はあまりなかった。



戦前は中央倉庫(生協本部)からガソリンカーやリヤカーなどで商品を分送していたが、戦後は自動車での輸送となった。当時の生協貨物トラック。

## 足尾にとつて三養会とは何であつたのか

多くの写真や語りを紹介してきましたが、三養会を考えるうえで、興味深い資料があります。『生協三養会』というタイトルの冊子です。B五版で一〇頁ほどですが、毎月組合員に向けてだされた月報なのです。実際に見ることができたのは一〇六号（一九六一年七月一日）から二二三号（一九七一年一月一日）ですが、当時の様子がよく伝わってきます。

各地域売店からの発言。組合員の主婦で構成された家庭会からの要望、家庭会が実施した工場見学記。毎月の総供給高や毎月の生協の予定など。セルフサービス方式が導入された象徴的な道具としてレジスターがありますが、その名前をつけた「レジスター」というコラムでは、よい品物をよりよく提供するには、どうしたらいいのかなど生協の向上を考える多くのエッセーが掲載され、まさに『盛況であった生協』の日常の熱気が伝わってきます。

カラーテレビや洗濯機、暖房器具など当時高価だった耐久消費財も組合員価格で安く購入できたり、冬になればスキー、スケート用品の紹介もありました。洋服や下着などの普段着の紹介、石鹼や洗剤など生活用品、またマヨネーズやインスタントラーメン、ジュースなど食料品の紹介も毎月載っています。

たとえば一一一号（一九六一年一月）を見てみましょう。「レジスター」というコラムでは、掛壳帳を大切に、店員と客のやりとりをもつと効率よくすべきだと書かれ、別の頁では足尾中学校が当制服化を検討していることが取り上げられ、①全生徒が気軽に同じ服を着られること、②親にとつて医療費負担が軽減されること、③情操教育に役立つこと、が主張されています。興味深かったのは、女子通学服の合理化が唱えられ、「ヒダのとれない洗濯の楽な製品」を開発中だと書かれていたことです。制服に変わることは賛成だが、できれば洗濯が楽なほうがいいと、普段の暮らしへのまなざしがしっかりと反映されているのです。

また一一四号（一九六二年二月）では、歳末販売に協力した足尾高校生へのアンケート結果が載っています。三養会へは「商品全部に値段をつけること」「ソロバンは四つ玉に切り換えること」「一日二十五〇円の手当は少なすぎる」と注意し、お客様へは「いまだに尺貫法で買う人がいるが、早くメートル法を覚えてほしい」「私たちの計算をもつと信頼してほしい」「閉店後当然のように買い物をする人がいる。時間は守ってほしい」と注意しています。当時の買い物の様子が目に浮かんてくるようですね。

三養会では、毎年夏冬に総供給量の目標達成もあり、大売出しをしていました。そこで行われた福引で豪華賞品が当たったり、都はるみショーや生協寄席に行けたりしたのです。私が個人的に調べたかったのは、日本万国博覧会でした。一九七〇年に大阪で開催され、半年間の会期中に六〇〇〇万以上の人人が入場したのです。まさに日本中が熱狂したイベントでした。足尾ではどうだったでしょうか。

二〇二号（一九七〇年二月）に、歳末大売出しで日本万国博御招待四〇名決定の記事が載っています。この四〇名とあわせて栃木県生協全体で九八名が当選したようです。二〇六号（一九七〇年六月）には、参加した男性の「万博見学記」が載っています。二日間で四〇館しか回れなかつたこと、ソ連館とアメリカ館の対比、日本館の見事さ、古河の七重塔パビリオンに触れた後、日本企業のミドリ館・全天周映画（テスコロラマ）でみた渡良瀬川沿いを疾走するC五二の映像の迫力に感動したことなどが書かれています。

『生協三養会』には、もっと多くの内容がみちています。この膨大な資料を読み込めば、足尾の暮らしについて興味深い分析もできるでしょう。ただそれは私のとつての今後の課題にしたいと思つています。

日本最初の職域生協としての三養会。それは足尾銅山閉山という出来事を境に急速に人口が減少

足尾のみなさんお久しぶりです。日光市足尾地域の第三期の地域おこし協力隊を務めました市之瀬です。私の任期中に歴史的に見ても、そして地域住民の方にとつても、重要な存在であった三養会が閉店しました。そんな三養会が閉店するまでをここでは、少し振り返れればと思います。私が地域おこし協力隊として、着任して間もなくのことでした。「三養会が閉店するらしい」そんな噂話が、聞こえてくるようになりました。私は、最初は商店が閉店してしまうのか残念だなぐらいの感覚でしたが、足尾銅山のことを学んでいくと、三養会が足尾銅山では欠かせない重要な役割を担っていることが分かつてきました。

そこから、私は三養会について地域住民の方に聞き取り調査を行ったり、足尾銅山閉山前の三養会の資料などの収集をはじめました。最初は、三養会に勤めいていた方々に足尾銅山閉山前の当時の販売方法や仕入方法、閉店時には通洞、渡良瀬にしかなかつた店舗が、各地域に店舗や出張所があつたことなど、他にも多くの当時の様子を教えて頂きました。また、聞き取り調査をさせて頂いた際には、当時の貴重な三養会が配布していたチラシや利用券、伝票なども見せて頂くことができました。次に、三養会を利用していた方々にも、お話を聞かせて頂き、当時の三養会の活気や、利用する側の目線、現在のお買い物事情など、当時を思い出しながらも、閉店することへ

## コラム

## 三養会、最後の灯りが消えた日

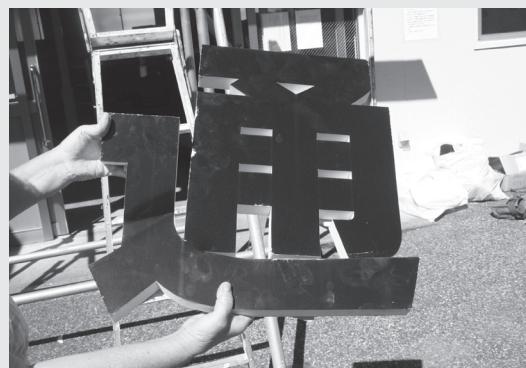
市之瀬昌弘

し、高齢化も進んできた足尾という街で、人々が日常の暮らしをたてていくうえで、不可欠な地域生協でもあつたのです。古い資料からは、当時、日々の糧を得たり、娯楽や教養を楽しむうえで、生協がいかに有効に機能していたのかが読み取れ、古い写真をみれば、当時の街の繁栄や人々の暮らしの『熱』を感じ取ることができます。

閉山後は、移動がしづらいお年寄りにとつて、歩いて買い物ができる貴重な場所であり、知り合いとつきあううえで重要な場所だったでしょう。だからこそ、百年続いた三養会が、ただ儲からないという企業論理だけで閉じられたしまつたことは、残念でならないのです。



通洞商店看板撤去中の様子



通洞商店看板撤去中の様子

その後、私は都合により足尾を離れることになりましたが、今回改めて、足尾のことを思い出しながら、この文を書きました。足尾での思い出の一つ一つが、大切な宝物であり、私は足尾のことが大好きだと感じさせてくれます。この場を借りて、足尾でお世話になった全ての方々に、心よりお礼を申し上げます。今後も、ぜひ足尾にお邪魔させてください。

その後、私は都合により足尾を離れることになりましたが、今回改めて、足尾のことを思い出しながら、この文を書

きました。足尾での思い出の一つ一つが、大切な宝物であり、私は足尾のことが大好きだと感じさせてくれます。この場を借りて、足尾でお世話になった全ての方々に、心よりお礼を申し上げます。今後も、ぜひ足尾にお邪魔させてください。



渡良瀬商店最後の様子

の寂しさを感じることができました。

三養会の歴史を学び、関わってきた方々のお話を聞いていくと三養会が閉店してしまうことが、私にとつても寂しく感じるようになつていきました。

閉店の日が、近付くにつれて私は、渡良瀬の三養会に足を運ぶことが、自然と多くなりました。店内の商品が少しづつ無くなつていく様子や、住民の方との何気ない会話など、その瞬間を大切にしたいと感じていたからだと思います。

閉店当日も私は渡良瀬の三養会にお邪魔しました。直接、従業員の方にお礼を伝える方や、お店に行けない方は電話で気持ちを伝えていました。三養会が住民の方にとつて、大切な場所であつたことがわかります。そして、迎えた閉店の時には、住民の方から従業員の方々に花束を手渡していました。その光景は、私が足尾で活動した中で、一番、胸が熱くなつた瞬間でした。

# 長門修造さんの戦争とシベリア抑留

平成二四年の夏に、元足尾町役場が閉鎖し、新しく銅山観光の隣に足尾総合支所が出来ました。その一階には小さな展示スペースがあり、聞き取りの内容をそこで紹介する展示を始めましたが、夏には、足尾の中の戦争に向合う内容を心がけました。この章では、平成二六年度夏に実施の「長門修造さんの戦争とシベリア抑留」のパネル内容を掲載します。

この展示では、足尾出身の長門修造さんが昭和一八年に志願兵として出兵してから、中国で終戦を迎えた後にシベリアで抑留され、昭和二三年に足尾に戻るまでのルートと各地での出来事をまとめました。聞き取りの内容が中心となるため、歴史的事実に必ずしも当てはまらない部分もあるかもしれません。出兵した方個人の貴重な記憶を紹介するものですので、ご理解をお願いします。

「」の中は長門さんの語りです。

### 1 足尾——一九四二年(昭和一七年)頃、一八歳。大日本帝国陸軍志願

「軍国主義——憧れの兵隊」足尾で学生生活や工場で働いていた頃に見聞きする情報は、軍国主義一色。長門さんもあこがれを持ち、引き込まれるように兵隊に志願した。『あの頃、私が学校に行つても軍国主義で「兵隊、兵隊」ってね。今ならいろんな会社に入つて課長とかになれば「どこのあれは出世した」と言うけれど、当時は軍隊に行くのが出世だからね』『私は今の野路又の高校跡の所に工場があつて、そこで働いていたんだけれども兵隊に志願していつたんですよ。(中略)「空だ、男の行く所は」なんて看板があつて、飛行機の特攻隊とかああいうのにみんな憧れちゃつたんだよね』

### 2 宇都宮——一九四三年(昭和一八年)一月二〇日、一九歳。東部三六部隊(高野隊)歩兵第六六連隊補充隊

#### 3 下関から釜山への移動——昭和一八年一月二八日、下関出発。一月二九日、釜山上陸

下関から釜山までの船の移動は、玄海灘の波が激しく困難なものだった。『私らはね、足尾にいるから船なんて乗つたことないでしょ、だから船酔いが大変でね、「死んだ方がいいな」と思ったね。船がググーっと上がつたり下がつたりして、立つていられないんだよ。あっちにぶつかつたりこっちにぶつかつたりしてね。参っちゃつたね』

### 4 青島(桜ヶ丘)——一九四三年(昭和一八年)二月、一九歳。北支派仁四二二〇部隊[岩佐隊・竹本隊]第四一師団要員入隊第一紀 教育一等兵

「中国の風景」内地での訓練中と中国では食事情や物資の状況が違っていた。『中国に行つてね、日本で玄米飯を食べていたのが米の飯になつたんだよ。銀飯。「あれ、こんなに違うのかな」と思つてね。だけれども、腹いっぱい食べることはなかつたね。青島は海の直ぐ側だから魚とかが沢山出たね。神社にお参りに行つたり、国防婦人会の人達が「兵隊さん、兵隊さん」つて日の丸の旗を振つて迎えてくれたりしたね。(中略)一方で、あの頃は道路脇には中国人が真っ黒になつて死んでいるんですよ。(中略)餓死というのかね、みんな死んでいて泥だらけになつて蠅がブンブンいたつて構わないんですよね。昭和一八年頃だね』

「ビンタの軍事教育」青島では、軍事教育を本格的に受ける。『簡単に言えばね、教育とは軍事精神を鍛える所さ。(中略)朝昼晩で「一つ、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」なんてね。五箇条の御誓文つていうのがあるんですね。(中略)一週間にいろんな当番をやるんですよ。食事当番から馬の世話、茅掃除とかね。それが皆軍事教育の一部なんだね。



キャプション

(中略)軍事教育っていうのはもうビンタだね。それが教育なんだよ。「いやあ、えらい所にきちやつたな」と思ってあの頃は本当に涙が出たよ。自分が好きで志願して来ちゃつたからしようがないなと思ってね。ビンタも一回、二回じゃないんだから、一〇回くらいぶつ飛ばされたんだから。それでも、口の中が切れちゃつてね、朝ご飯にみそ汁を食べる時に口の中が痛いんだよね。ビンタの傷が。それが教育なんだよ。ビンタが教育で、軍事精神をぶち込むんだよね』

### 5 济南——一九四三年(昭和一八年)七月、一九歳。北支那方面軍第一二軍幹部教育隊転属。第二期教育

石門——一九四三年(昭和一八年)一一月五日、二〇歳。北支那方面軍下士官候補者隊

昭和一九年一月二〇日 上等兵

昭和二〇年七月二〇日 兵長

昭和二〇年一月二〇日 伍長

### 6 興安南省洮南——一九四五年(昭和二〇年)七月一日二才興安南省洮南弘一四一七一部隊(大西隊)

「盗んだスイカでいきつなぐ」長門さんが中国にいる間、多くの日本軍が南方に向かった。手薄になつた満州を侵攻してくるソ連軍と戦うため、長門さんの所属する部隊も新京に集結。物資も弾も少ない中で、戦いに備えていた。『一週間も一〇日も満州の平原を歩いてね。食べ物もご飯なんか炊いたら敵に見つかっちゃうからね。中国はスイカとかを作るのが上手なんだよね。もの凄く美味しいんだよ。八月の頃は暑くて一番果実が熟していて、見渡すかぎりアクアウリとスイカ。食べ物がなかつたから「しょうがない」って中国人が作ったスイカをかっぱらって、それをご飯の代わりに幾日も食べたんだから』

〔通信隊でのある会話〕配属先の通信隊では、様々な情報をいち早く知ることができた。『私は、原子

爆弾だつて終戦前に知っていたんですよ。中国で幹部候補生と仕事をしていた時があつたんですが、その人から「アメリカで新型爆弾が出来た。マッチ箱一つで富士山が吹っ飛んじゃうんだよ」と八月六日の投下前にお聞きましたよ』

〔終戦の時〕日本の玉音放送で天皇の放送があつた時に、放送室にみんな入つてね『ああ、これで日本は負けたのか』と思つてね。いやあ、だけれども、まさか負けるとも思わなかつたし、勝つとも思わなかつたね』

### 7 新京——一九四四年(昭和一九年)八月一九日、二一歳。武装解除

『武装解除』『武装解除って、みんなロシア人が来て裸にされちゃつてね。みんな取られちゃつてさ、惨めだつたよ。(中略)女人の人(日本人)なんてね、頭の毛を切つちやつたり散切りにして、顔に炭とかを付けて汚くして襲われないようにしてね。略奪されないようには、みんなだいたい一〇人、二〇人のまとまりになつて行動していたね』また、逆に日本が攻めていた時は、敵に対する略奪や強姦などもあつた。

### 8 新京——黒河省黒河——ブラゴエフスク——ブカチャーチャ(昭和二〇年九月一〇日~一〇月)

「行き先もわからないまま北へ」ロシア人にシベリア鉄道に乗せられて、どこに行くのかも分からず、北へ北へ進んだ。逆らうことはできず、まさかシベリアに行くと思わなかつた。』

### 9 ブカチャーチャ——一九四五年(昭和二〇年)八月一六日~一九四七年(昭和二二年)四月二五日、二〇~二二歳。第二三収容所。炭鉱内作業

〔収容所の生活〕シベリアに抑留され、収容所の第二三収容所に入つて鉱山で働く。ロシア人から

「ヤボースケ トウキヨウ ダモエ（日本人 東京に帰れるぞ）」といつも嘘をつかれて、帰れるのはわからなかつた。ライゲル（元罪人収容所）という体育館のような収容所で生活し、終戦直後は外が零下五、六〇度ある気候の中、板一枚の上に毛布一枚で寝るためとても寒かった。翌年からは、暖房も設置されたため建物の中は寒さが解消されていく。寒すぎて凍傷や凍死、疥癬（かいせん、夜盲症）になる人などがいた。朝っぱらに起きて「おい、朝だぞ、起きろ」なんて言うと、頭のおでこあたりが紫色なんだよ。寒くてもう凍つちやつていてね。そういうのが毎日で、ほとんどが来たばかりの少年兵だつたね』

戦争に来たばかりの若い兵隊は、体も弱く病氣になりやすかつた。

「天皇万歳」ではなく「おかあさーん」と泣きながら亡くなつていくのを何度も見た。

「墓地が掘れない」死体は、自分たちで日本人墓地に埋めることになつていて。『一〇人くらいの屍が集まると大きなソリで日本人墓地まで乗せて行くんですよ。そこで穴を掘るんだけれど、零下四五度もある地面はコンクリートと同じくらい固い。とてもじやないけれど掘ることなんかできなけれど、命令だからしようがない。薪で火を燃してみたりするけれど、一〇センチくらいしか掘れないんだよね。今度は自分が参つちやうから、しようがないから死体の頭とお尻だけを穴の中にちよつと入れてね、雪とかあいうのをかけたりしたんだよね』

「ロシアの鉱山」炭坑では、カンテラを交換する仕事をしていた。『炭坑の中も日本と違つていね、もうロシアつていう所は野蛮だったね。仕事でカンテラを交換に行くんだけれども、日本の炭坑なら立坑で上がるんだけれども、ロシアでは梯子を降りて行くんですよ。（中略）あとは日本ではちよつと真似できないような技術があつたね。日本だったら手で発破をかけた後に削つたりす

るなんだけれども、ロシアの方ではモーターの機械で「ガチャコンガチャコン」って自動で削つてね。そういう所は楽だったね』

「知らない土地での入院」腸出血になつたため、半年くらい病院のよう所で寝たきりになる。『ロシアの看護師つていうのは陸軍の少尉くらいの階級で偉いんだよね。そういう人が看病をしてくれたんだけど、コップみたいなやつに火をぱつとつけて燃したものを持ちに当てるんですよ。それが効いたんですよ。四ヶ月も寝たきりで、髪の毛も全部抜けちやつてね、酷い目にあつたんだよ』その後、体の丈夫な人と病人が選別され、もう働けない病人だった長門さんは日本に帰ることになる。

#### 10 ナホトカ——一九四七年（昭和二二年）四月二十四日、二二歳。港出発

「共産主義教育」一ヶ月ほどナホトカで共産主義教育を受ける。『朝から晩まで共産党の歌を歌わされるんです。歌を歌わないと、日本に帰らないと言われるから、みんな一生懸命だよ』

「帰国への実感」日本に向かう船にのる港でのエピソード。『もう海がみえたんですね。「あー、これは本当に内地に帰れる」って思った。それまでは本気でできなくて、また騙されて収容所に戻されるんじゃないかと思った。だから私は、海が見えたから近づいて海の水を飲んだら、辛いんだよね。本当に。「あ、これは辛いから、川じゃないんだ海なんだな。あー、これで日本に帰れるのかな」ってそこで初めてね「あー、これで内地に帰れるのかな」と思つたですよ』

#### 11 海のうえで

「軍艦と貨物船の違い」清洋丸の造りがキャシャで驚く。『階段みたいなのを降りて船底へ行くと、鐵板が一枚でね。軍隊ではそういうことはないんだけれども、鐵板一枚の造りで「ペララララ』って動いているんだよね。だから、鐵板が水圧でつぶれないように角材でつつき棒をしてあるんです

もん

「ある少年兵の告白」 帰国する船の中で、少年兵から終戦前の中国で、軍事用品の毛布を中國人に売っていたという謝罪を受ける。『内地に帰る時にね、少年兵が「班長殿、俺今だから言うんだけれども、戦闘の時に毛布を中国人に売り飛ばしちゃったんだよ』って言われたんだよね。我々の軍事教育の中では、私腹を肥やすために中国人に売り飛ばしたりなんかすることはなかつたですよ。それが終戦間近には、なあなあでそういうのがあったんだね、それを自状したんですよ。「いやあ、これだもん。日本は本当に戦争に負けたな」とそう思つたですよ』

### 11 京都舞鶴——一九四七年(昭和二二年)四月二九日、二二歳。舞鶴駅上陸

「久しぶりの日本」 一端、舞鶴で入院(どのくらいか)をしている間に、支給されたお金(いくらもらつたか)は全て使つてしまつた。うどんが一〇円。足尾に来る時には五円だけしか残らなかつた。退院後、シラミなどを除去する消毒薬 DDT を頭から被つて消毒したり、お風呂に入れてもらい、綺麗な服に着替えて足尾へ向かう。

### 12 上野・桐生——一九四七年(昭和二二年)五月、二二歳

足尾までの電車がなくなつてしまつていて、一晩電車の中に泊まる。

### 13 足尾——一九四七年(昭和二二年)五月、二二歳

「畑が出来ている」 朝一番の電車で足尾に向かう。来る途中で、足尾の山が畑になつてゐるのに驚く。『山が畑になつてゐるのが電車の中から見えたんだよね。内地の人もみんな苦労したんだなと思つたね。これが一番足尾に来てたまげたね』

戦前に働いていた野路又の工場働き、その後家でやつていた馬車引きの仕事を行う。自宅での靴製造業や坑内での仕事、古河の工場で八〇歳まで働いた。現在は趣味の民謡を楽しんだり、鉱石を使ったオブジェ制作などに励む。

#### お話を振り返つて

この展示の準備でとても印象に残つてゐることがあります。展示に使う内容(掲載内容)を、長門さんに校正してもらうために、原稿をお渡しました。その翌日、長門さんから珍しく電話がありご自宅に行つた所、「原稿を読んでいたら、色々なことを思い出してしまい、直すべきか迷つてゐる」ということでした。よく聞くと、読んでいたら眠れなくなつたらしく、話した内容が改めて目の前に出されて困惑したような、嬉しいような、興奮したような感じでした。その後、日を改めて、長門さんの家で、原稿を私が読み上げ確認してもらいました。長門さんが「そうなんだよね」とうなずいたり、じつと聞いたままだつたりしていました。結局のところ、大きな修正はせずに原稿は仕上がつたのですが、長門さんの感情がどういうものだったのか、私にわかることはできないと改めて思い出すことがあります。

現在、全国に約五〇〇〇人（平成三〇年四月一日現在）が地域おこし協力隊として活動しています。平成二一年度に総務省によって創設された地域おこし協力隊の制度は、今年で一〇年目の節目を迎え、全国各地の隊員による活動と実績の積み重ねによって「地域おこし協力隊」の名前は社会で認識されるようになってきました。

ですが、みなさんの中には「地域おこし協力隊」の名称や人を知っていても、はたして彼ら（彼女ら）が具体的に何をするために来ているのか、よくわからない人も多いのではないかでしょうか。そもそものはず、地域おこし協力隊の活動は、事前に決められた活動があるわけではありません（一部を除いて）。地域おこし協力隊は若者が都市部から地方に移り住み、そこで生活を通して地域特有の資源や魅力を把握しながら、地域が元気になる活動を協力隊員自身が考え生み出していくところに特徴があります。たとえば、ある協力隊は地域の自然を堪能できる観光ツアーや企画したり、別の協力隊は耕作放棄地を活用して地域の気候にあったブランド野菜を考案したり、また別の協力隊は空き家を利用して民泊業を営んでみたりと地域おこし協力隊の活動は隊員の数だけ違います。そのため、自分の住んでいる地域の協力隊がどんな活動をしているのかを知るために、実際に協力隊の活動に興味をもつて見る、聞くしかないのです。

## 地域おこし協力隊って何をやっている人なの？

中村哲也

コラム

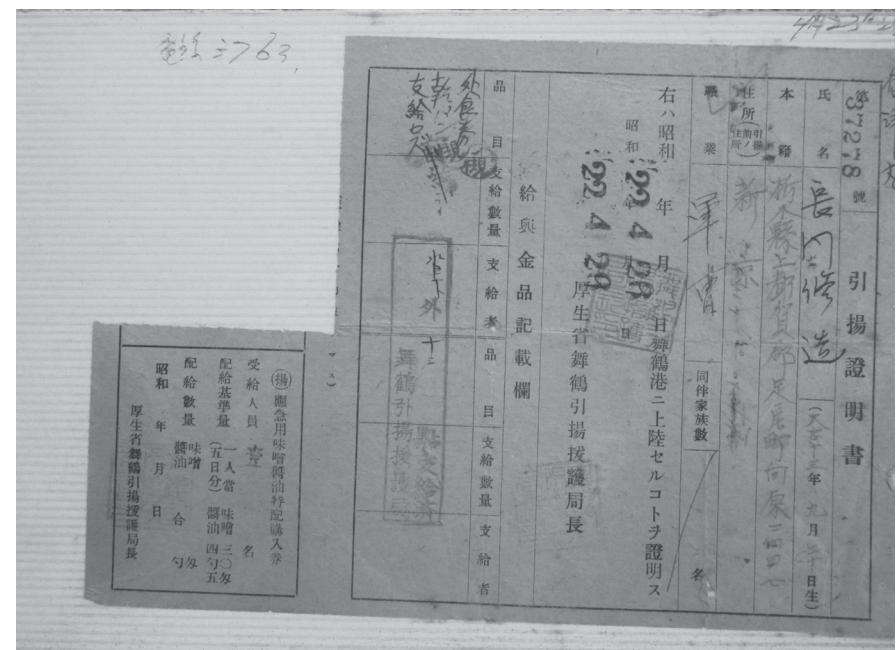
С П Р А В К А О Т РУД Е	
СТАНОВОЕ АРХИВНОЕ УПРАВЛЕНИЕ при СОВЕТЕ МИНИСТРОВ СССР	
ЦЕНТРАЛЬНЫЙ ГОСУДАРСТВЕННЫЙ ОСОБЫЙ АРХИВ	
ул. Выборгская, 3	
нагато сэйдо	
имя, фамилия	место рождения
место рождения	нр.б. ТОТИГИ, у. КАМЧУГА, г. АСНО
год рождения	1924 г.
место пребывания в ШЛЕНУ	ЛАГЕРЬ № 23, БУКАЧАЧА
период пребывания в ШЛЕНУ	16.08.1945 г. - 25.04.1947 г.
сумма невыплаченного заработка	2027 руб.
Листоверность данных подтверждена. Вышеуказанная сумма невыплаченного заработка подлежала выплате при репатриации. Однако этот расчет не был произведен в силу запрета вывоза советских рублей за пределы СССР.	
Директор Центрального государственного особого архива В.Н.Бондарев	
1992 года	

氏名	其門 郡造
生まれた場所	新木戸郡賀都足尾町
生まれた年	1924年
捕虜の場所	第23地区 ブガチャチャ
捕虜の時期	1945.8.16 - 1947.4.25
支払わなかった賃銀残額	2,027 ルーブル

資料の真実を確認するに正確である。上述の賃銀残額は帰国時の時支払うべきであったが、ソ連ルーブルの外貨への輸出禁止のためにできなかったものである。

中央国立特別公文書監修長  
V・N・ポンダレフ  
1992年 6月25日

労働証明書。足尾に戻って来てから、自分で申請して手に入れたということでした。



シベリアから帰国した際の証明書のようなもの。左上の切り抜きは、何かの配給の引換券だったそうです。

ただ、地域おこし協力隊の活動は千差万別ですが、活動の根底には共通している点もあります。それは、よそ者（地域の外）の視点から地域の魅力を発見し、それを活かそうとしている点です。そう考えると協力隊の活動は、地域の人が気づかなかった、又は見過ごしていた地域の価値を再発見する機会をつくっているともいえます。

現在、足尾地域には二人の地域おこし協力隊が活動しています。その二人が足尾のどんな魅力を発見し活かそうとしているのか。ぜひ、その活動に興味をもってもらい、みなさんが応援していきましょう!!

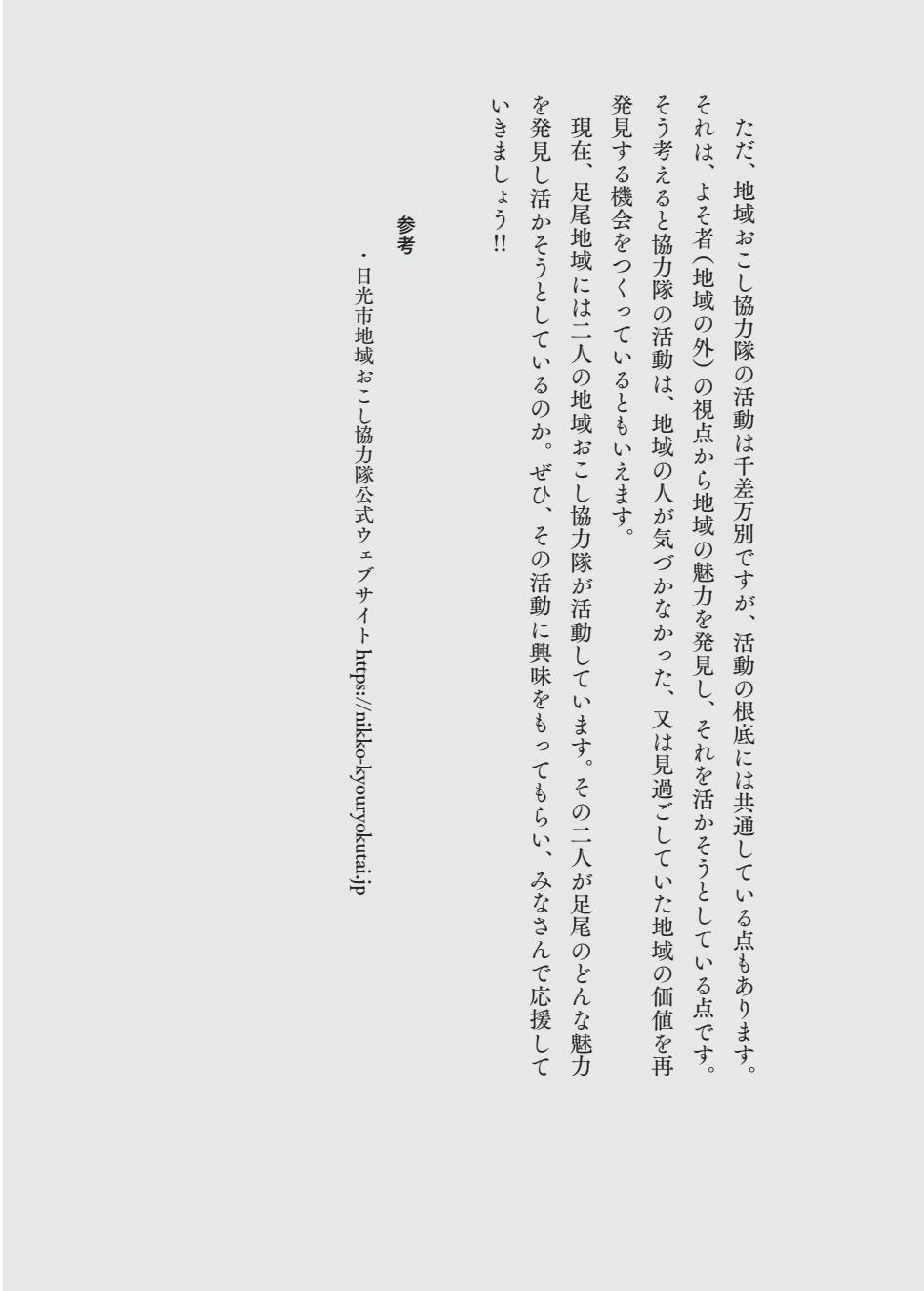
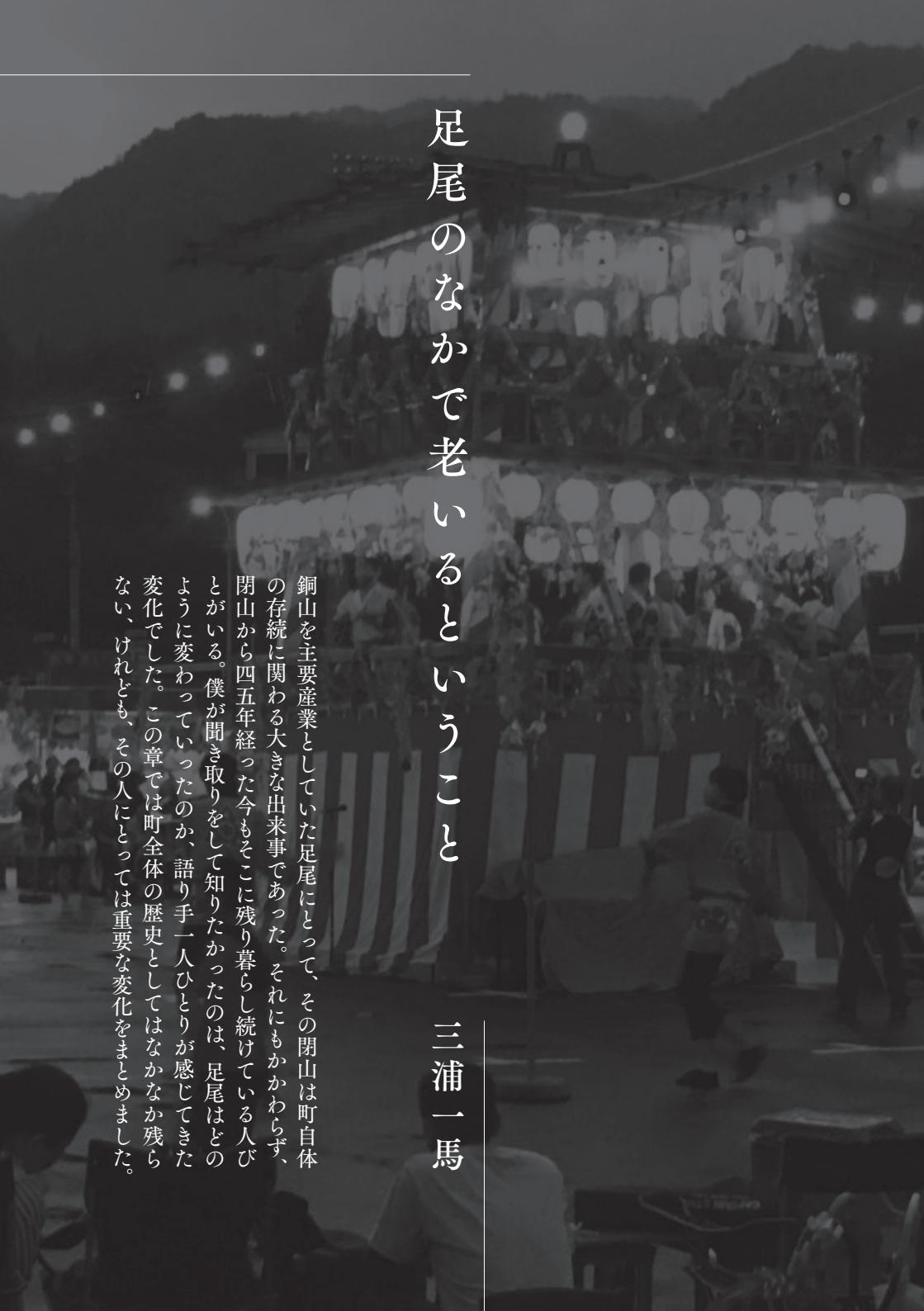
#### 参考

- ・日光市地域おこし協力隊公式ウェブサイト <https://nikko-kyouryoutai.jp>

## 足尾のなかで老いるということ

三浦一馬

銅山を主要産業としていた足尾にとって、その閉山は町全体の存続に関わる大きな出来事であった。それにもかかわらず、閉山から四五年経った今もそこに残り暮らし続けている人びとがいる。僕が聞き取りをして知りたかったのは、足尾はどのように変わつていったのか、語り手一人ひとりが感じてきた変化でした。この章では町全体の歴史としてはなかなか残らない、けれども、その人にとっては重要な変化をまとめました。



## 変わりゆく足尾の納涼祭

### ある年の納涼祭

私が足尾に通い始めて三年が経ちます。普段の足尾は人もまばらで、ひつそりとした雰囲気が足尾のイメージとしてありました。なので、ある夏の日、夜の足尾支所前には普段では想像できないほど人びとが集まって櫓を囲み、輪になつて踊つているのを目にした時、何か大変なことが起きてしまった気持ちになり落ち着かなかつたのを覚えています。足尾の方にとつて、納涼祭は一年の中でもつとも足尾が盛り上がる行事の一つで、私とは違う意味で胸高鳴るものであるということを、ある日、聞き取りをさせていただいた女性に納涼祭のこと尋ねた時に感じました。「太鼓の音を聞くと体が踊り出しちゃう」と語り、今年もこの季節が来たと言つて、着ていく浴衣の話を楽しそうに話されていたのがとても印象的でした。

### 納涼祭と囃子方

納涼祭はもともと夏季に別々に行われていた銅山が主催する「盆踊り」と足尾町商工会が主催の「夏まつり」を一九六四年より合同で行われるようになります。その頃には主催は足尾町、後援に足尾銅山、商工会、地区労協議会、観光協会となっていました。一九六五年には既に五日間に縮小されています(『広報 あしお』六九号、一九六五年七月)。

今では、一日限りのお祭りとなつてしまつたが、かつて納涼祭は銅山きつての一大イベントであり、最盛期には七日間から一〇日、毎晩行われたそうです。納涼祭の会場の中央には大きな四階建のやぐらが祭りのためだけに設けられ、それを囲む人の輪は何重にもなつていています。それだけ盛り上がるお祭りなのですから、その囃子方も高い技術を持った人たちでした。囃子は大太鼓、小太鼓、つづみ、櫓、鐘、笛、唄で構成され、その経験者たちには祭りの数日前に会社から囃子方に選ばれたという通達が届きます。そして、その練習には古河公認で仕事の早上がりが認められていたそうです。他にも古河が積極的に支えていた地域の催し事はいろいろとあります。年に一度の納涼祭で囃子方など責任のある役割に着くのは名誉なことでもあり、同時にプレッシャーのかかるものであつただろうと思います。前田三郎さんは当時の様子を描いた文章には以下のようになります。

『唄は今年も誰々さんだよ』という具合に、すばらしい喉を聴かせてくれる人の名前も噂されて、町中に盆踊りのムードが拡がっていく。(中略)(宵の口は子供が多いが)「日がどつぶりと暮れる頃には、何時の間にか踊り手も、見物する人も増えてくる。仕事から上がって、一杯やつてから悠々と現れる人は、大体ベテランである。この人達が加わることで、踊りは一層盛り上がる』

(足尾を語る会 一四号・二二一・二三「盆踊り唄」に誘われて)

出して聞き取りが始まるのが恒例でした。そうした雰囲気の中でもAさんが、これは譲れないとばかりに語気を強めて語るのは直利音頭を始めとする足尾の民謡についてでした。Aさんは民謡の唄い手として、足尾町の合併の際に作られた足尾の民謡のCDでその唄声が収録されるほどの腕前で、CDを聴かせていただいたこともあるのですが、普段の雰囲気からは想像できないほどの勢いと張りのある声でした。「本当にBさんが唄ってるんですか」という失礼な質問に対しても照れ笑いしながら「そうだ」と答えてくれるAさんでした。

唄い手になるきっかけは古河に入社してすぐの一九歳、会社の宴会で唄った時に上司にその才能を見咎められること。他の唄い手たちの多くが民謡経験者である中で、初心者だったAさんは囃子を聞く踊り手たちに言い勧めながらもAさんは唄い手としてやぐらの上に立ってきました。

Aさん それは何かから真似してね。踊っている人は「そうかい、そうかい、そうかいね」ってね、ぽんぽん言うんだから、それがないと「交代」って言われちゃうんだから。声が悪くて「ぼんおーどーりー（↓）」なんてやると、「どうした、どうした」って言われるんだから。

奥さん 「音頭取りはどうしたー」なんて（笑）

Aさん あおられちゃうんだよね。

聞き手 本当に、一緒に作っているというか掛け合いというか。

Aさん 昔は鼓が聞こえない時があつたら、「鼓、どうしたんだコノヤロー、鼓が聞こえないぞ」ってな、鐘の人が。ちやんちやか、ちやんちやか真剣に叩きながら、踊りながらやつてる人もいたんだから、その鐘がの人が聞こえなくなつたら、すぐに親方がやぐらに上がつてきて「鐘はどうした」って。

（二〇一七年一〇月二〇日）

唄や囃子方が上手くないと遠慮なく野次られ、調子が良いと合いの手が入つたり、踊りに一体感が増したりと当時の祭りは囃子方と踊り手が互いに引き立てあうことでの盛り立つてきました。先に引用した前田さんの文章にベテランの踊り手が祭りの盛り上がりに欠かせない存在であったことも、こうしたことから納得ができます。

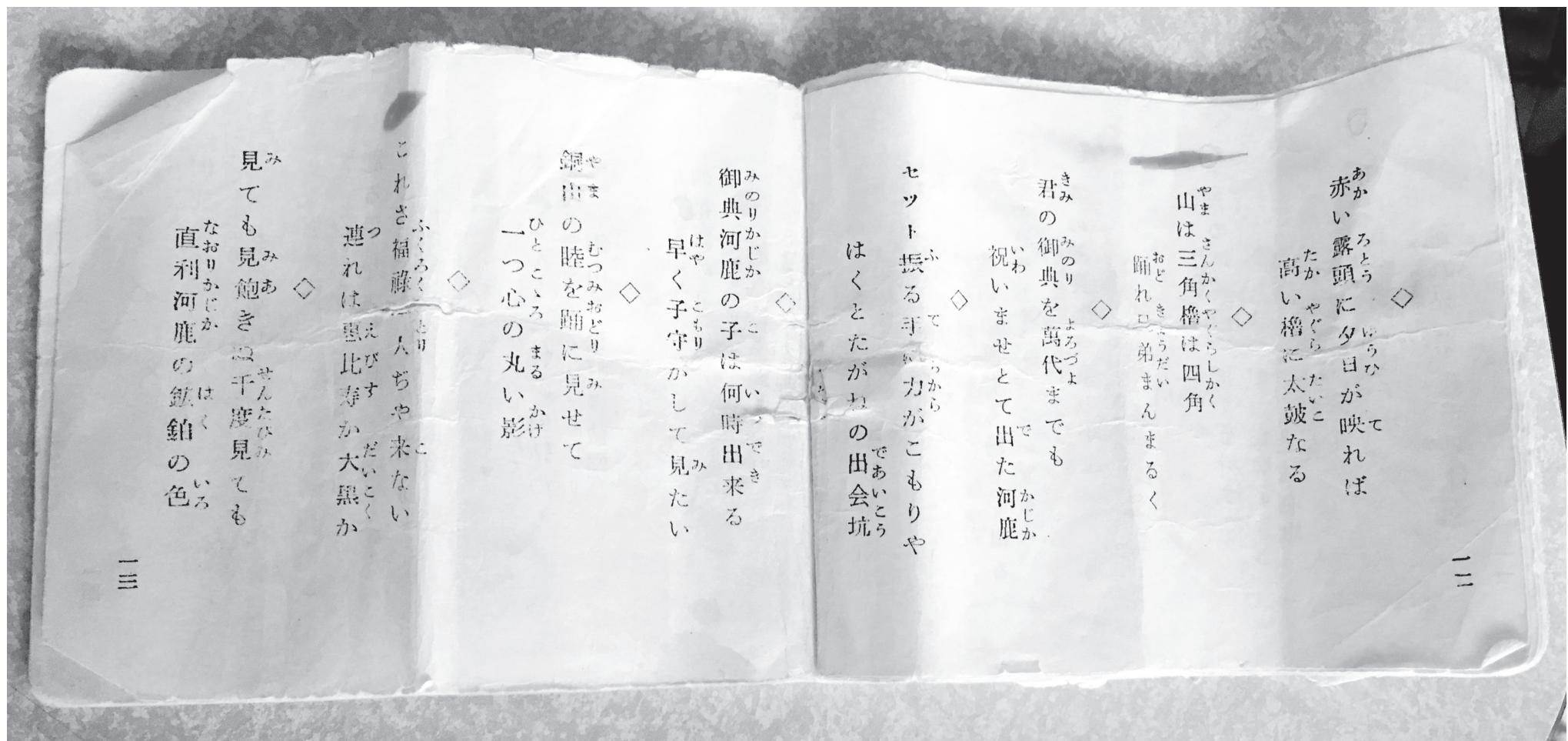
こうしてAさんの話を聞いていると、四方の山々や体に響くような鼓や鐘の音、すっと伸びていく唄声と怒鳴るような掛け声が響いて混ざり合つて町全体が鼓動していくかつての納涼祭を想像することができました。

### 閉山後の納涼祭

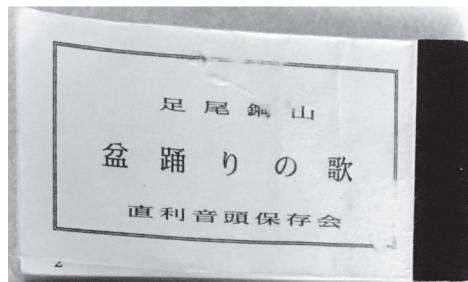
銅山が閉山してから足尾の町は大きく変わっていました。銅山中心で成り立つてきた町で銅が採れなくなれば、もうこれまで通りには生活していくことは出来ません。足尾に残るために別の仕事に就くことにならざるを得ない訳ですが、そのように全員が残ることが出来たわけではなく、多くが足尾を離れる選択を余儀無くされました。二五〇〇人以上がその年に足尾を去り、その多くが社宅からの流出でした。先ほど、納涼祭のお話を聞かせてくれたAさんは閉山から約一ヶ月、来る日も来る日も同僚たちを送り出す日々が続いたといいます。また当時、足尾では離れていく人の移動だけでなく、地区間の人口の移動も始まつており、多くが現在中心部となつてゐる通洞地区に集まつて來たため、地区ごとの固有性は消えつつありました。Aさんは当時の町の様子を「めちゃくちやだつた」と語ります。

聞き手 あの、やっぱり閉山の後の雰囲気って変わりました？

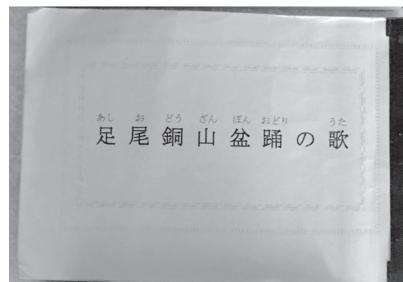
Aさん もう、めちゃくちやだよ。うん。



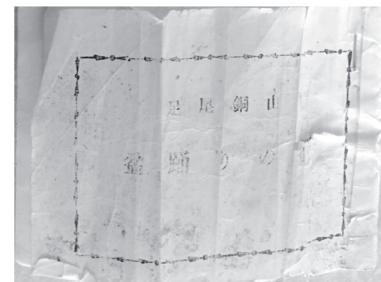
歌詞カード③本文



歌詞カード①表紙



歌詞カード②表紙



歌詞カード③表紙

上段：どの歌詞を歌うかはそのとき気分で決める。よく歌われる歌詞にはマーカーで印が付けられている。

下段：歴代の歌詞カード。右から順に古いもの。Aさんが愛用しているのは一番右のもの。

Aさん それは静かになつたってことですか？

Aさん 毎日、見送つてさ。だから、俺らなんか機械方で修理なんかしたから、悪いから二の番で入つてくれつてなつて、引っ越し手伝い。引っ越し手伝いだつて三〇回から四〇回ぐらいやつたかな、トラックに乗せて小山の方に行つてとか。だから、大変だよね。三〇人じゃきかないよね。丘の人は行つちやうがね、忙しいから。ところが残つてたから、やってやるよつて。通洞の部落の人はあそこの家が引っ越しだつていえば、行つて積んで行つてやつたのさ。

今まで家族のように付き合つてきた仲間たちを見送る体験はどのようなものだつたのでしょうか。そして、足尾に残ることになったことをAさんはどのように引き受けたのでしょうか。当然、閉山は毎年行われていた納涼祭にも影響しました。きっと今年の納涼祭は中止だろうと多くの人が思ったことでしょう。しかし、驚くことにその年でも納涼祭は行われました（「広報あしお」一九七三年七月、八月に記載あり）。

Aさん もう本山がつぶれちゃつて、通洞が無くなつて、本山が無くなつて、通洞だけ盆踊りやつてて。それで全部、会社無くなつて、閉山になつちやつたら。それで二月に閉山になつたから「八月が来たら、お盆どうするんだ」つて。

Aさん 聞き手 帰つてきても何にもないですもんね。

Aさん ね。その時、みんなあつちこつち出ていくんだ。二月に閉山が決まつたんだから、五、六月にどんどん引っ越して、（みんな）「今年は終わりだな」なんて言つてたんだよ。「もう、終わりだな」つて。そしたら（役場にいた学校の先生が）「終わりにしたらダメだ」つて。それ

で「どうするんだ」つて言つたら、「足尾に（囃子方が）何人残つてる」つていうわけさ。そしたら、「三人か四人残つてる」つて言うんだよね。その人が出ていった人を上手く呼んで「やらなきやだめだ、一回やればまた続くから、なんとかやつちやうべ」つてそういうことになつたのさ。

（一一〇一七年八月四日）

さらに、納涼祭を行うために苦労したことには祭に欠かせない太鼓を集めることでした。太鼓は古河から各地区へ保管を任されており、閉山後は各地区にそのまま太鼓が残されることになりました。そのため、各地区で革の張り替えるなどして大切に保管されていた太鼓を貸し出すことを渋る地区もあり、これを説得しなければならなかつたと言います。

こうして閉山後であつたのにも関わらず例年通り納涼祭が行われたことは大きな意味を持ちました。一つには、これまでの古河の主催とはいいかなくとも、残つた人たちの思いで納涼祭を継続出来たこと。これは無くなつていくものが多い足尾の中で大きな希望となつたのではないでしょうね。もう一つには、お盆の時期に行われる納涼祭が足尾を離れなければならなかつた人たちの戻つてくるきっかけになつた事です。これは今後も続くことになる納涼祭の雰囲気を大きく左右することになるような意味を持つたことでした。

それから数年間の納涼祭に参加するのは、それを見に来た人たちだけでなく、かつての囃子方たちもおり、飛び入りで囃子に加わつたそうです。古河にも認められ、ヤジが飛び交う荒々しい頃の納涼祭を体験して来た、一流の囃子方たちが入つてきて囃子を盛り上げる。その時、かつての足尾の納涼祭の雰囲気が戻つてきたんだとAさんは教えてくれました。

Aさん 最後の方になると、九時過ぐらいになると「よし、いっちょうやるか」つていう仲間が

いたんだよ。それが今年、一人が一人しか来てなかつたんだよ。いつもは足尾の盆踊りの時、他から来てるんだよ。そうすると「Aさん、最後だからいつちょうどやるよ」って言うと、並ぶんだよ、すごいんだよ。そして、笛吹くのも違うんだよ、プロ級だ。○○と△△さんが笛吹いてくれるんだよ。そうすると、午後九時三〇分ぐらいまでバンバンバン、そうすると頭から(唄う声も)「はー」って出てくるんだよな。だけど、踊りは早くなるんだよ。だから、最後のぐらいは変わるんだよな。笛が息がつけなくて速いよってなると、太鼓が変わるんだよ。

(二〇一七年一〇月二〇日)

祭りの終盤、かつての囃子方たちが飛び入りで盛り上げに入つてくると、音色が変わる、雰囲気が変わる、それにつられてAさんの唄声も前よりももっと伸びるように出てくるようになる。囃子方、唄い手、そして踊り手とともに作り上げる納涼祭が、かつての足尾が戻つてくる瞬間でもありました。こうした納涼祭が閉山後も足尾で続いてきた事は残つた人たち、出て行つた人たち、どちらにとつても昔を思い出せる貴重な時間だったと思われます。

そして、一年に一度の納涼祭で帰つてくる人たちに足尾に残つた者として唄を聴いてもらい労いの言葉を受け取りながら、また次の年にも戻つてくる人たちを待ち続けてきました。

Aさん 今でも一人でいて、「どした?」なんてたまに電話が来たよね。何十年ぶりに來たよな。「寂しくなったんべ」って聞いたら、「足腰良くなくてな」って言つてた。それもものすごく釣りが好きで、一緒に鮎釣りなんか行つてたから、「もう川なんか歩けないよ」なんて。「釣りやつてるか?」って言うから「やつてないよ」って言つて、「そこの田場だつて飛び越せないので、おつかないからやつてない」って言つたら、「そうか」なんてな。盆踊りで唄つてるんだから」って。

だから、八月にお盆に帰つてくるでしょ。そうすると、「ああ、いい唄聴かせてもらつてるよ」って言つてる人がね。

(納涼祭を觀に来ても、すぐには)始めは誰が唄つてるかなんてわからないがね、閉山になつてお盆に帰つてきてから「Aさん、ああ!」なんてね。

聞き手 こうして、閉山後も足尾に残ることになったAさんが唄い続けることは変わつていく足尾だからこそ意味を持つようになりました。Aさんは祭りで唄い続けながら変わっていく足尾で「戻つてくる」人たちを想像し、その期待に応えようとしてきました。彼ら／彼女らを向かい入れる役割を担い続けること、こうした意味を持ちながら六〇年以上も唄い続けてきたのだと思います。そして、現在ではこうしたAさんが想像する納涼祭も少しずつ変わっていき、唄い手としては二〇一七年を最後の年としました。

### おわりに 変わっていく歌詞と納涼祭

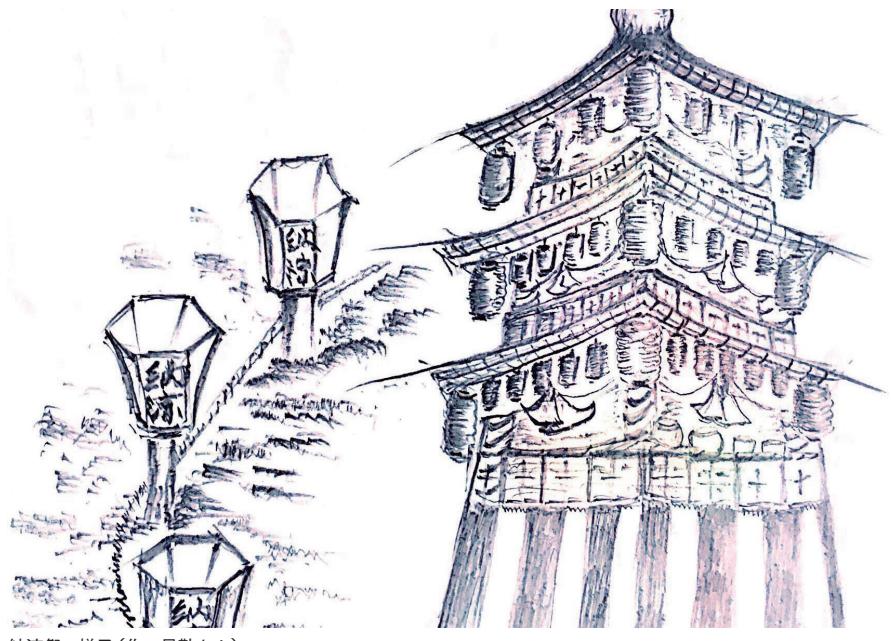
納涼祭で使用される直利音頭は昭和初期から使われるようになつたようで、唄は選鉱場での女性たちの作業唄であり、囃子は八木節、踊りは「石投げ踊り」といった要素を混ぜ合わせて作られたものとあり(「わたらせ川」五号一一〇頁)、足尾銅山の歴史のなかでは比較的新しいものといえます。

歌詞については、杉本賢治さんによると、「銅山が募集によって選択したが、この募集が何時から行われていたかは明確ではない。戦争や銅山の盛衰に因って一定ではなく」募集が行われ、歌詞は定期的に追加されてきました。たとえば、杉本さんによると、歌詞にある「青葉の小滝」は精煉所が廃止されしばらくしてから、つまり大正期に作られたものであることや歌詞に使われる「河鹿」には具体的な名前が付されていること、「ラジオ」や「テレビ」など時代を表すものの名前が使われること、「薺の葉入り」の盃は模範鉱夫に贈られた品であり模範表彰があつた時代であつたことなど「銅山の労作唄として生活、人情や友情など、その時代を反映した秀唄も多く収録されている」といいます(杉本一九九六)。

また、「広報あしお」には、一九六九年六月と一九七三年七月に足尾町で広く公募がなされており新しい歌詞が追加されたようです。ちょうど閉山の年であった一九七三年八月に新しく追加された歌詞にはやはり閉山をテーマとした歌詞がありました。

銅山<sup>やま</sup>は閉めても心はとじぬ 新生足尾の道開く

このように納涼祭はその時々の社会の中で少しづつ変わっていくものでした。閉山から四五年が経つ現在でも「直利保存会」の方々を中心に納涼祭は続けられています。今も踊りを誘う太鼓の音を聞くことができるは本当に大切なことです。ただ、月日が経つにつれ、年々「戻つてくる」人は減っていき、昔のようにはいかないこともあるかもしれません。そうだとしても、かつて、直利音頭の歌詞が募集してきたように納涼祭は少しずつ変わっていくものであったことを考えれば、変わつてゆくことも足尾の納涼祭の重要な要素なのだと思います。



納涼祭の様子(作:星勤さん)

## 足尾高校定時制と聞き取り

### 定時制が気になっていく

かつて足尾には五つの小学校と三つの中学校、そして高校が一つありました。けれども、現在では少子化のため小学校と中学校が一つずつになり、高校は二〇〇七年に廃校となりました。そのため、足尾の子どもたちは高校進学をきっかけに別の地域の高校に通うになります。学校というのは単に教育の場であるだけではなく、地域コミュニティの中心であり、将来の地域の担い手を育つていく場でもありました。さらに足尾では小学校と高校の前身が銅山による私立学校だったこともあります。ある時代では高校を卒業してそのまま銅山に就職することが一つの流れであったことから銅山の盛衰と大きく関係するものでした。私は調査で足尾に通うようになつた当初、廃校に注目し、これが地域社会に与える影響から足尾の変化を探つていきたいと考えていました。

この調査に協力してくれたのがBさんという方で、足尾高校で長年教員をされていたこともあり学校関係に詳しく、実際に各小学校の跡地を案内してもらつたこともあります。現在も三つの小学校は建物が残つたままで、すっかり廃墟の様相を成すものもありました。そんななか、高校跡地では建物は全て壊され綺麗な更地となつており、山間地のため平地が少ない足尾ではそこだけが不自然に空洞となっていました。そこへ訪れた時、かつて高校があつたことを示す石碑を見ながら、Bさんは「なにも全部壊しちゃうことないのになあ」とつぶやいていたのを覚えていました。新任教

師として足尾高校に赴任して以来、定年まで勤めあげてきたBさんにとつて、この場所は特別な場所であったのだと思います。そんなBさんに足尾のことを窺つているうちに、私の関心は学校全般から樂しそうに語られる足尾高校の定時制へと変わつていきました。聞けば、赴任してからわずか一年で全日制から定時制への異動を希望したと言います。それほどまでにBさんを魅了した定時制とはどんな場所だったのでしょうか。ここでは、今はなき足尾高校の定時制について共に歩んできたBさんのお話を基にまとめてみました。

### 初めて見た足尾の印象

Bさんが足尾へやつてきたのは一九六四年の閉山の一〇年前でした。まだ足尾には一万五千人以上が暮らしていました。Bさんは足尾に縁もゆかりもなく、漠然と鉱山町の足尾としてしか知らなかつた外の人として足尾にやつて来ました。<sup>(1)</sup>初めて足尾を見た時のことをBさんはこう振り返っています。

**長澤さん** それでも鉱毒の町みたいなイメージはなかつたですか？

**Bさん** いやあ、だから驚いたよ。物の本で足尾って言う地名ぐらいは知つていたみたい。だから、意外性は感じなかつたけど、調べて日光の隣だとかね。僕はびっくりしたね、その頃、桐生から行くでしょ。びっくりしたのは原向の堆積場。今はコンクリートで整備されてるけど、僕が来た昭和三九年はそのままなんですね。いわゆる茶色の土の堆積場、この頃はその面影が見られるのは少ないですけども。歴史館の横に捨て場がありますよね、規模は小さいんですけど、あれがぶわーっとつながるわけ。コンクリートのところが全部ですから、かなり長いでしょ。あれを見たときはかなりビックリしたな。

中山さん 最初に足尾に来た時の印象っていうのはどんな感じだったんですか？

Bさん うーん、ビックリさせられて、あとはちょうど列車の座席を隣合わせた人がおばさんで「うちに寄つてみますか？」って言うんですよ。それが掛水の足尾機械か製作所の工場長の奥さんらしくて、そこへお邪魔してお茶をごちそうになつたんですけど。そこで学校のおんぼろの自家用車を待つて、初めて社宅に行つたんですかね。それで社宅のイメージの違いはあったかな。僕も横浜ゴムで社宅住まいだつたんですけど、いわゆる普通の二階建ての一戸建てとか、長屋にしたつて三軒の二階建てとかで、ああやつて平屋なのは。それではまず聞いたのは、今でも覚えてるんだけど、「この町に本屋はありますか」なんて聞いたのは覚えてるんですけど。僕はあまり驚かない人間だから、あまりハッと思つたことはないな。

Bさんが足尾に來た當時<sup>(2)</sup>、まだ日光へは車で三〇分ほどで抜けることができる日足トンネルはなく、険しい峠道を行くしかありませんでした。そのため、町外への交通の主流は足尾と桐生を結ぶ足尾線（わたらせ渓谷鉄道）で、足尾へ行くためにはこれに乗り、山の中へぐんぐんと進んでいかねばなりませんでした。山を抜け、車窓から見えたものは鉱山町特有の、他の地域にはない景観でした<sup>(3)</sup>。Bさんが語るように、外から來た人間にとつて足尾といえど鉱毒事件のような暗い印象が先行してしまい、それ以外の社宅や水場、風呂など銅山独特の暮らしやその雰囲気<sup>(4)</sup>というのはそこに足尾踏み入れて見えてくるものでした。たまたま「列車に隣り合わせたおばさん<sup>(5)</sup>」にお茶をご馳走になつて初めて社宅に入つていったシーンは足尾にあつたおおらかな雰囲気を感じさせます。

さて、こうして足尾高校の全日制の教員として赴任して來たBさんですが、その頃、ちょうど戦後生まれの方々が高校生となる時期で生徒数が増加しました。全日制では卒業生数がこれまでの一

四〇名程度から約二三〇名に増加しました。ちょうど日本全体が勢いづいていく変化期でもありました。そんななか、Bさんは全日制でたつた一年教えた後、自ら定時制へ異動します。当時、山奥の足尾に赴任することは一般的には敬遠されるものであつたにもかかわらず、さらにその定時制に赴任したいという人は多くはありませんでした。それでもBさんは「定時制の方が面白そうだったから<sup>(6)</sup>」と異動願を出したといいます<sup>(7)</sup>。

### 足尾高校定時制

足尾高校の前身は一九三三年に足尾銅山事業高校で銅山の経営する学校でした。その後一九四四年に足尾工業学校、一九四八年に足尾町立高等学校になります。一九五〇年には県立足尾高等学校。全日制と定時制の両方を備えていました。その後、足尾高校は県立になり「今まで大学に進学させてのに足尾の在来の学校の中等教育程度では非常に困難な状況下にあつたのですが、県立となつて勉強さえ大いにすれば他の県立高と同じく進学ができるという長年の念願が足尾に実現した」(広報あしお一九六五年三月、コラム「足尾ところどころ」)ことになります。その後、定時制は一九七九年に閉校、足尾高校も二〇〇七年に閉校とされました。

創立記念誌『20年誌』には定時制が創設された頃の様子が描かれています。当時の教師は全日制との兼任で、専任の教師はおらず授業もままならなかつたようです。初の専任教師となつた方はこう振り返っています。

のことが分からず、夜間部といふとやつとわかるという状態でした」（『20年誌』「初期の定時制」中村康哉）

定時制のこと自体、足尾町民にさえ知られていないなかで、やつと教員の体制が安定してくるのは一九五一年ごろからだつたそうです。その後、足尾の定時制では完全給食の開始、運動場の夜間照明の設置など、徐々に教育の場としての環境が整えられていきました。

当時、定時制の生徒はほとんどが日中仕事をしている方や経済的な理由で学校に通えなかつた方、看護学校の生徒で資格のために高校へ通う必要のある方が生徒として入学していたので、場合によつては教師よりも生徒の方が年齢や給料が上であることもありました。そのぶん、それぞれ多種多様、個性的な人たちが集まつていたといいます。そうしたなかでは、物事を何でも討論をして決める自由な雰囲気があり、分け隔てのないやり取りがあつたそうです。

### 定時制の演劇

ここで、Bさんが足尾高校の定時制を語る上で欠かせないものとして定時制生徒会を中心に行われていた演劇について触れたいと思います。定時制では年に一回足尾町で行われる芸術祭<sup>(9)</sup>に演劇を上演することが恒例となつていたと言います。『20年誌』には、定時制が設置された八年後の一九五八年から参加してきたとあります。しかし、一九六四年にあることを理由に一旦中断されました。それはちょうどBさんが定時制へ移動する前年のことでした。そして、定時制の生徒会顧問となつたBさんは演劇を再開することにしたそうです。

Bさん 定時制は伝統的に演劇をやつていた。それで僕が来た昭和三九年つていうのはオリンピックの年なわけ。それを口実にして演劇が無くなつたの、中断したわけ。「みなさん、

演劇よりもオリンピック観たいでしょ」と。

三浦 演劇つていうのは一年に一回やるもの、

Bさん うん、その頃には芸術祭がありますからね、ちょうどそのころ生徒会の顧問していた人が演劇にあんまり熱心じやなかつたんでしようね。それで僕が定時制に変わつて復活しちやつたわけ。熱中したね。

三浦 先生は演劇してたんですか？

Bさん 全然素人。

三浦 なんていきなり。

Bさん 生徒会が主催して演劇をやるという伝統がずっと続いていた。それで足尾町に芸術祭には素人演劇の伝統がずっとあつたわけ。そこには社会人や役場、鉱業所の人も参加した

し、高校も参加して。そういう伝統があつて、この頃の生徒会は楽しくて。ほとんどの行事は生徒会がやる。卒業式と入学式以外は生徒会がやる。遠足、運動会、海水浴とかね。一回生徒会長を連れて下調べに行つたことがあるけど。僕はずつと生徒会を任されて、意気揚々として（笑）結婚したのに、演劇が始まると帰りは一〇時か一一時ごろになる。定時制の授業が終わつてから練習で一〇時か九時、授業は五時に始まつて八時ごろ終わるのかな。二時間ぐらいやると一〇時になるでしょ。

演劇に関しては素人だったにもかかわらず、Bさんが頑張つて復活させました。それは演劇といふのは定時制の伝統であり、それを芸術祭といふ町の行事に参加して発表することは定時制にとって大きな意味を持つと感じていたためでしょう。

演劇の脚本は既存のものを使用したことと、脚本の研究や稽古を行い、小道具作りには毎年

予算を使いすぎると怒られるほどでかなり熱心に取り組んでいました。実際に一九六九年に生徒会が発行した広報誌には練習時間は「九月・週三回、一一月、一一月・日曜を除く、時間八三五・九三〇」、注意書きとして「おそらく一〇・三〇まで」と書かれていました。演劇の練習はなかなかに大変なものだったことが伺えますが、「この頃の生徒会は楽しくて」と語るよう充実した日々だったようです。<sup>19)</sup>

けれども面白いことに、こうした演劇に生徒たちが必ずしも賛成であったわけではなく、毎年演劇を続けるかどうかについても議論されていました。それは何でも討論して決める定時制ならではと言えるもので、簡単には慣例に従わないというような生徒たちの姿勢が垣間見える気がします。当時、演劇の参加についてのアンケートを行なっており、一九七〇年では「賛成票二二、反対票二一、どちらでもない一八」であつたと生徒会発行の広報誌に書かれていました。それでもBさんが押し通す形で進めて、毎年終わつてみれば「やつて良かつた」と生徒たちも感じていたそうです。

### 閉山と定時制

こうした定時制の活動や雰囲気は銅山の閉山が近づいてくると変わつていくことになりました。生徒数の減少、それに伴う教員の減少で行事が行えないようになり、教員の余裕もなくなりかつての定時制特有の雰囲気はなくなつていきました。そして、何よりも定時制の存続 자체が危ぶまれるようになつていきました。こうした不安定な社会状況を受けて高校だけでなく町全体の話題となり、問題となつた、全国紙に掲載されるほどの大きな事件が全日制で起きました。Bさんはこうしたことの背景に銅山の閉山があつたことは否めないと振り返ります。<sup>20)</sup>

Bさん その昭和四〇年ごろから荒れだしてきた。荒れた原因つていうのは確かに閉山が四八年

だけど、その前兆だつたり、合理化の問題とかありましたでしようし。もう一つは若い先生が多くなつた。学校の生徒も増えてきた。今まで歳とつて足尾でがつちり教えていた先生がいなくなつて、生徒の質が変わつたといえば語弊があるかもしれないけども、いわゆるいろんな幅を持った生徒たちも増えてくるわけですよね。そういう点で先生が若くなつて抑えが効かなくなつたっていうこともあるし。それから生徒の質の変化もあるでしようし。それがどれくらい影響したかわからないけど。（二〇一六年六月一一日）

この事件は一九七三年三月、八名の生徒たちが留年となつたことが発端でした。当時、多少成績に問題があつたとしても何とかして進級させるのが暗黙の了解とされていました。けれども、その年に着任した校長先生が成績の基準を満たさない生徒には厳しく対応するよう指示したため、多くの生徒が留年することになりました。Bさんによると、この校長は鉱山町で暮らす子供たちに対し「暴力的だ」という偏見を持っていたので厳しい態度をとつたのではないかといいます。そして、留年した生徒をめぐつては留年の代替案として、全日制から定時制へ転学させるという提案が校長から出されました。これにBさんはこれに猛反対をしました。当時のBさんにとってこの措置は定時制を低くみたものであり、定時制にやりがいを感じていたBさんにとって許せるものではありませんでした。<sup>21)</sup>

Bさん 校長に変人扱いされたのは大論争したからなんです。全日制の生徒を退学させる代わりに定時制に移させてくれと。だけど、それはおかしいと、全日制から定時制に行くつていうのはおかしいじゃないかと。今から考えてみると、確かに定時制に対する侮辱じゃないかっていう風に考えただけど、考え方によつては転学を認めても良かつたんだよせんでした。

な。今から考えればね。だけど、それが校長の勘に触ったみたいで。

**志村** 定時制に移すのは良くないんじゃないかなっていう意識は定時制の先生方、全員で持つて

いたものなんですか？それともBさんだけで。

Bさん いや、大論争やったんだよ。転学に賛成する人と、反対する人と。どちらが多かったのかなあ。最終的には転学はさせないと。確かに生徒からの批判もあったと思うんだ。彼らにとつては友達ですからね、全日制でなぜすぐ退学という形をとるんだと。僕が言つたのは全日制に復学させると、それで「どうしても定時制のほうがいいんだ」と言うんだつたら納得するって言つたんだ。それを全日制を退学させといて、定時制に移させるつていうのはおかしいっていう論法をとつたんだけど。

(二〇一六年六月一日)

また、閉山によつて不安定な状況になつたのは生徒たちだけではありませんでした。鉱山関係者が新たな職場へ移動を余儀なくされ、それに伴い多くの子どもたちも転校したため、教員も人数過多となり人員の配置転換が行われることとなりました。当時の新聞報道には以下のようにあります。

「足尾高校でも五百二十六人の生徒のうち二百人がいなくなる。小、中学校(足尾中、足尾、本山、原小)では千六百三十人のうち六百二十一人が銅山関係従業員。また足尾町の二幼稚園(足尾、本山)には現在百十一人いるが、来年同町で小学校に入学するのも八十二人。(中略)県教委の推定通りに児童生徒数が減ると、高校で十二人、小、中学校四校で二十四人の先生が“余る”ことになる」

(『読売新聞』一九七二年一月一六日)

「教職員の大半は地元出身者で、三十五歳以上の中年層のため『生徒が減ったからといってすぐ

に他校へ移動するのは困難』とみられている」

(『下野新聞』一九七二年一月一六日)

高校においては一二人の教員が異動することになることが予想された。ただし、Bさんによると、この配置転換で苦労したのは小中学校の先生たちで、彼ら／彼女らは地元出身の方が多く、既に結婚し足尾に定着していました。一方、足尾出身ではなく独身が多かつた高校の教員のなかにはむしろ足尾を離れたいと思う人の方が多かったです。Bさん自身は「結婚していた」ということと、少人数教育が非常に好きですから」と足尾に残つた理由を語っています。けれども、残つた先生たちも教員の数が減つたことで本来の専門以外にも複数の教科を掛け持ちしなくてはならず、大変なことだつた日々を過ごすことになりました。

そして閉山から三年後、ついに足尾高校定時制の廃止が検討され始めます。高校の進学率の上昇に伴い、全国的に定時制自体を希望する人が減少し、定時制の統廃合が進められた時代でした。その時、すでに足尾高校の定時制の生徒は八名。最盛期の一九五七年には一七五人以上が在籍していました。Bさんが定時制に異動した一九六五年では一五四人が在籍していましたので、これは大きな変化と言えるでしょう。その後、一九七六年には募集を停止し、一九七九年に最後の卒業生四名を取り出し定時制は廃止となりました。

こうして、閉山の影響を受け変わっていく定時制でBさんは教員として過ごしてきました。それはこれまで通りにはいかないとの連続だったことは想像に難くありません。Bさんが力を注いでいた演劇も一九七一年を最後に途絶えてしまします。また、銅山の不振のなかでは、働きながら定時制に通える余裕がないばかりか、足尾の外へ働きに出ていく人もあり、定時制自体が足尾の中での存在感を失つていくことになりました。

こうした変化の中で、定時制の担つていた役割も変化してゆくのでした。かつての定時制では多

くの生徒がすでに足尾町で職を得ており、多くが卒業後も足尾に残り続けていました。つまり、定時制の教育とは直接的に足尾の次の担い手に関与できる場であり、地域の未来に関わっていくことであったのです。そうであるからこそ、Bさんによろしく定時制に深く関わることは地域での重要な役割を果たしているという実感につながるものであったと思います。このことはBさんが定時制の廃止後に投稿した新聞記事に描かれていました。

「一年間の全日制課程勤務後、定時制に移り、魚が水を得たように、自由に、自分の教師としての信念で活動しました。（中略）全日制の生徒の多くが、卒業後地域外に出るのに較べて定時制卒業生のうち二百人ほどが、この町に住み、中堅として活躍しています。定時制がこの地域に果たした教育の意義は大きなものです。そして卒業生の子弟たちが数多く高校に入学しています。（中略）一人でも多く『落ちこぼれの子』をつくらない、これは父母や教師の共通の願いです。（中略）今、この町の観光開発の目玉として日本一という坑内観光の工事が進められています。しかし観光開発とともに、この町が鉱山研究のメッカになることが私の夢です」（『毎日新聞』一九七九年八月二九日「毎日郷土提言賞」）

### おわりに——聞き取りとBさん

今回の語り手であつたBさんは元協力隊志村さんの紹介で知り合いました。教員をしていたためか、足尾に暮らしている方とは少し感じが異なり、一步引いて足尾を眺めている感じを受けました。志村さんからは「聞き取りで」というよりも、プロジェクトのアドバイザーとしてお世話になるかもしれない」と伝えられていました。こうしたBさんへの聞き取りは筆者には聞き取りでもありましたが、同時にどういったことに関心があるのか、どうすればそれを知ることができるのかところもあります。

Bさんへの聞き取りは自宅の一軒隣の、書斎として使つている一軒家にお邪魔することができたのです。壁一面が本棚であり、どれもびっちりと様々なジャンルの書籍が並んでいて初めは圧倒されました。一つ一つの質問にしつかりと考えてからゆっくりと丁寧に答えてくれる姿が印象的で、時には一分近く長考してから答えてくれることもありました。回を重ねるごとに、このよううに本に囲まれて、Bさんと向かい合つてゆっくりと聞き取りをしていくことに慣れていくと、まだまだ調査自体に不慣れであつた私の思考をゆっくりと整理しながら言葉にすることができました。

そんな聞き取りの冒頭やその約束のために連絡したとき、必ず「最近は堕落で」とか「毎日怠惰に過ごしてばかりで」というような「日々いかにもしていいなか」という話から始まります。とくに、時代とともに、定時制高校や自分の生活がどのように変化してきたかという話題のとき、Bさんは皮肉交じりに話します。先ほど引用した新聞記事と現在のBさんの語り口はまるで違うのです。

けれども、「外の人」として足尾にやってきてから現在に至るまでのさまざまな出来事を、私たちに辛抱強く教えてくれるBさんの姿は「先生」そのものです。足尾が変わり、そこでのBさんの役割が変わつても、変わつとも、「外の人」として足尾にやつてきてから現在に至るまでのさ



高校跡地と記念碑（筆者撮影）

わらずにそこにあるもの——それは、自分を頼る者たちに対するBさんの誠実な姿勢なのではないでしょうか。<sup>(2)</sup>

## 参考資料

- ・ 栃木県立足尾高等学校、一九六九、「栃木県立足尾高等学校 定時制 20年誌」
- ・ 定時制閉校記念実行委員会、一九八〇、「栃木県立足尾高等学校 定時制閉校記念誌」
- ・ 足尾町郷土誌編纂委員会、一九九三、「足尾郷土誌」
- ・ 近藤和子、一九九四、「高校定時制始まりの頃」「足尾町民がつづる足尾の百年 銅山に生きた人々の歴史」
- ・ 杉本賢治、一九九六、「足尾の盆踊り歌と直利音頭」「足尾を語る会会報」六号、三四一三九頁、足尾を語る会
- ・ 前田三郎、二〇一〇、「『盆踊り歌』に誘われて」「足尾を語る会会報」一四号、二一一二四頁、足尾を語る会
- ・ 茂木真弘、一九九九、「足尾に残る銅山唄」「わたらせ川」五号、一一一六頁、わたらせ川協会

## 注釈

- 〔1〕昭和四十（一九六六）年の校内行事（生徒会・部活が主として関係したもの）。全校スケート大会、予餞会、会食会、フォーケダンス、\*修学旅行、古峰原高原遠足、校内球技大会、校内県南球技大会、県南定時制体育大会、キャンプ（中禅寺湖）、県下定時制総合体育大会、\*校内生活体験発表大会、校内体育祭、生徒会他校訪問、他校との親善試合（足工・足高）、文化祭、学校長との座談会、足尾町芸術祭演劇参加、\*駅伝競走大会、定時制新聞発行（\*印は生徒会が直接関わらなかつた行事）
- 〔2〕他の大きな要因としては、高校進学率の高まり。それに伴つて、クラスは普通科二学級、機械科二学級、家政科一学級の編成になり、昭和三十九年に鉱業科が廃止され、機械科三学級となつた。生徒数の大幅な増加である。このことに伴つて、様々な変化が見られた。(1)生徒の多様化。今まで少人数のこぢんまりした学校が中規模になつたこと。生徒の学習意欲。生徒の様々な意識に多様化が見られた。(2)教員構成も今などなどあつたと思います。

## Bさんのコメント

- 〈1〉僕にとって、栃木県は父の故郷、絹村（現：小山市に合併）であること、戦後に中国から引き上げてきた父の実家があるぐらい。採用試験に合格して、赴任希望地を聞かれたけれども「どこでも良い」と言ったがならない傾向があつたらしい。(3)上級生と下級生の問題。(4)科別意識。(5)学校の施設、設備の問題。などなどあつたと思います。
- 〈2〉三重県で受けた授業で鉱毒事件の触ることはなかつたようです。だから、足尾について暗いイメージは持ちませんでした。いやあだから驚いたよ。低いトタン屋根の長屋群。原（足尾内の地区名）などの大きな堆積場、高校寮のあった「上の平」から見るばげ山や精錬所。鉱山町は初めてですから。
- 〈3〉昭和三十九年ころは、今のように、日足トンネルではなく、桐生から足尾線（現在のわたらせ渓谷鐵道）に乗つて足尾に来る。足尾に近づくにつれて、山また山。渡良瀬川の渓谷。平野の伊勢で長く育つた僕にとって初めて初めての風景。足尾に入つてビックリしたのは、原の堆積場。今は長いコンクリートの壁で整備され、堆積場は緑化されていて、昔の面影はありませんが、長く続く、茶色い廢石の山がぶわーつてつながつてゐる。コンクリートのところが全部そうですから、かなり長いでしょ。あれはを見たときはかなりビックリしましたね。
- 〈4〉列車の席で隣り合わせた中年のおばさんが、「うちに寄つてみますか?」と言つたんですよ。足尾駅で降りて、掛水（地区名）の社宅に行つたわけです。初めて足尾の地を踏みました。社宅は一軒屋でかなり広い家でした。この女の方は、古河系の工場の幹部（工場長？）の奥さんだったようです。奥さんと何を話したか覚えていませんが、「この町には本屋はあるのですか」と尋ねたのだけを覚えています。
- 〈5〉この家でお茶をご馳走になり、高校に電話をしてくれました。本当に親切でした。これが足尾なのですね。高校から、大型のおんぼろ自動車（高校の公用車）が迎えに来てくれて、高校に行き、校長などに挨拶して、その日は終わり。学校で一丸旅館が予約されていて、そこで一泊。この一丸旅館の女将さんは気持ちの良い方で、優しく、親切な方でした。今は黄泉の國の人になつてしましましたが、足尾に来て、この宿に泊

まったく多くの人が懐かしく思っているのではないでしようか。

（6）昭和三十九年はまだ独身で、教材研究のために、かなり遅くまで残業していたものです。その頃は新卒採用の教員はさほどの校務分掌もなく、部活動も社会研究会というあまり活発でないクラブでしたので教材研究に熱中できたのです。良き時代でした。

（7）定時制の職員室の雰囲気は私には良いものでした。昭和四十四年四月当時教職員は校長（全日制と兼務）を含めて十八名いました。定時制の職員室は休み時間になるとよく生徒が入ってきて、コーヒーを飲みながらよく雑談に興じたものです。私の高校生時代は劣等生で職員室は鬼門でしたので、なおさら和やかで賑やかで楽しいものに感じました。

（8）足尾での生活は「上の平」の高校寮から始まりました。「上の平」は昔は古河の職員用住宅でしたが、後に町営住宅となり、高校の教職員も多く住んでいました。私が赴任する昭和三十九年前後から、若い独身者が多くなり、独身寮がいっぱいになり、一般住宅にも独身者が住むようになりました。一部屋でしたが。食事は賄い付き、風呂は共同風呂。その後、野路又に高校の独身寮ができました。

（9）文化祭は、学校を解放し、多くの町民が来校した。何年度だったか、職員と生徒で「鹿沼こんにゃく・みそおでん」の店を出し、好評を得たことがある。売れすぎて品物が足りないほどだった。冷たいコーヒーを出してお客様に怒られたのを覚えている。定時制の職員と生徒が一体になって出来たことも定時制ならではのことだろう。

（10）私が定時制に赴任した頃は、在校生は百二十名ほどいたし、それなりに、生徒会活動・部活動などは盛んであった。昭和四十年を境にして徐々に生徒数は減少し、それに伴って、活動も盛んでなくなつていった。生徒たちは昼間働き、夜遅くまで部活動などの活動をよくやつたと思う。演劇などやつている時は、夜十時ごろ下校ということもあった。よく頑張ったと思う。自分自身もよく一年中働いたものだ。若さのなすことでした。

（11）今から考えると、定時制を希望した生徒に強い希望があるとすれば転入させても良かったのではないかと考えます。この生徒は一年留年して卒業したと聞いています。他の生徒はどうなつたのか。退学した生徒もいると聞いているが。校長のとつた留年の措置は正しかつたのか。全日制の職員会議でどのような議論が行われたのか。留年を決定する以前に何らかの教育指導、救済措置は取られたのか。今では不明確である。

（12）私は副担任を含めてあまり担任を持たなかつたが、担任をして、一番苦労したのはいかに退学者を出さないかであった。退学の理由は非行による退学。欠席日数の不足による退学。成績不振による退学。私が受け持つた昭和四十五年度卒業生の機械科の生徒は十四名卒業したが、數名やめている。一人は職場の事故で死亡（この時は泣けて仕方なかつた）。他は欠席しがちで退学してしまつた。何回か家庭訪問したがダメだった。家庭訪問をすると、父親がいて、昼間から酒を飲んでいるらしく、私も勧められ、断つたことがある。一人も退学者を出さず卒業させることは至難の業か。卒業していった生徒は今どのように暮らしているのだろうか。

私は社会科の教師として社会科の全科目（倫理・現代社会・世界史・日本史・地理）を、ある時期は免許外として、国語まで教えた。教材研究にいつも四苦八苦したものだ。自分でプリントを作り、それに沿って授業した。教科書をあまり使わないので、生徒から教科書を買って損した、などと言われたものだ。試験はそのプリントから出したので、ほとんど赤点（欠点）は出なかつた。本当に、良い授業をやつたか、後悔している。三十七年間の教師生活で本当に良い授業ができたことはあったのだろうか。先日、教え子から先生の授業は面白かったと言われたことがあるが、本当かな？。

好井 裕明

---

プ  
ル  
制  
と  
い  
う  
工  
夫

**はじめに**

足尾での暮らしや文化、仕事の話をうかがつていて、銅山閉山五年前に会社が二五名に勇退勧告（事実上の解雇通告）を行い、それを不当として、七人の労働者が地位保全を求めて裁判闘争をしたという事実を知りました。足尾銅山の歴史をまとめた本などには、そうした出来事があったとはつきりと記載されていません。しかし、足尾で生きてきた人々の暮らしを考えるうえで、こうした生活や労働をめぐる闘いがあつたこととそれをめぐる語りをまとめておくことは大切でしょう。そして、なによりも、不当解雇裁判を闘つた当事者の語りは生き生きとして、印象深いものでした。

当事者の男性七人のうち、五人にお話をうかがうことができました。ただ裁判をめぐる話や厳しかった当時の暮らしの話だけでなく、自分はなぜ労働運動に専心するようになったのか、自らが生きてきた歴史など興味深い語りと出会え、一方的に事実や思いなどをただ聞き取るというより、むしろ、私たちが彼らと語り合うという感じの聞き取りとなってしまったことも多かったです。この章では、五人の語りを抜粋しながら、不当な解雇処分に暮らしの場からひるむことなく立ち上がり、足尾だけでなく全国から多くの労働者の支援をえながら、裁判闘争を続けてきた彼らの生活と闘いについて、簡潔にまとめたいと思います。

### 勇退勧告を受ける

「だからね、これ（勇退勧告）は俺んとこも来るなつづうんで、緊急にみんな集めて、来たときは、喧嘩は絶対にしちゃダメだと。できればテープレコーダー持つていって録れと。それがダメならね、一回向こうが言つたら、あんたこう言いましてねつて、どんな下手な字でもいいから、自分の目の前で書いてくれって。そういう指示を出して、やつたんだよね。で、テープレコーダー持つていつたのは私だけだったんだけれど、それでああだこうだ言ってね、最初、ドスンと（風呂敷包みを出し



不当解雇の裁判を初めて1年がたった昭和41年8月1日に出された冊子。表紙のデザインについての説明が裏表紙にあります。「白色は平和、緑は自由と幸福、赤は情熱、力、闘争力、独立。白色で丸い部分は太陽を、真中の七角は銅の結晶体と七名の仲間を表します」

たら、(向こうが)たまげてね。「えーっ」なんて後引いてんさ。「ダイナマイトじゃないから安心しろ」なんて言つてね(笑)。風呂敷包みにわざわざ包んでいってね。「何ですか」って言うから、テープつて言つたら、「ああテープ録んじやあ、だめ」と。「ああそう、テープに録音できない、人に聞かせられないこと言うんじやあ、聞いてもしょがないから帰る」って言つて。向こうが(別室へ)退却して、相談したから、ゆっくり待つてたん。そしたら労務課長がね、課長も東大出なんて言うけど気がいいんだよね。それで「ちょっと待つてくれ。相談してくる」なって言つて。向こうが(別室へ)退却して、相談して。「じゃあ、録つていい」っていうんでね。それで昔のテープレコーダー(大きなオーブンリールのデッキ)だから、彼らの前にマイクおいてね、(課長の前に)マイクを置いてね、さあどうぞって、始また」

「ちょうど私は子供が生まれて四日目くらいでしたね、掛水俱楽部に呼ばれたのがね。労務係が家に来たんですよね。「掛水俱楽部に来ててくれ」ということで。日にちは忘れちゃったんだけれども「いついつ、何時に来てくれ」と。それで、そこで「あなたも、勇退してもらいたい」ということになつた。理由は要するに「会社のためにならないことを、組合の大会でも職場でも言つてはいるから」とね。……私は何も解雇されることもないし、理由は何ですかと言つたら、副課長は、会社の炭鉱や鉱山を回つて、その人が行くところで必ず(労働者の)首を切るという人だったんですね。その副課長がいきなり「自分の胸に手を当てて考えてみろ」なんて言われてね。考えてみればわかるだろうと言われてね。私は目をつぶっちゃつてね、そこで寝つ転がつてやろうかなと思つたんだけれども、座つて腕組して、目をつぶつてしまふいたんですよ。そうしたらね、次に呼んでいる人の時間が迫つてきたから、副課長が「あなたたは会社のためにならないことを言つてね」と言つて、怒鳴つたんですね。「いてもうのが困るから、次の人が来るから」と言つてね」

「私はね、要するに会社に対してもういいよにならないと。会社の主張に因縁というか異を唱えていると、だから会社の方針の妨げになると。だけど組合の運動のなかでの主張なんだから、正当な組合運動だっていうことなんですよ」

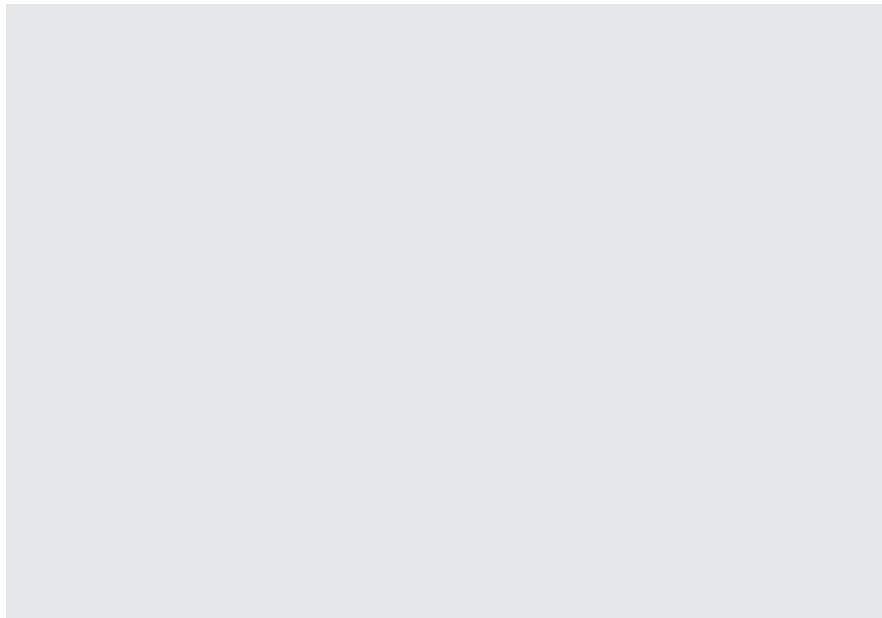
経営の合理化から、勤務状況の良くない人だけを勇退勧告の対象とするという会社側の説明を組合が論議し了解しました。だが蓋を開けてみれば、実際に該当する人だけでなく、普段から労働運動を熱心にしていた活動家も対象になっていたのです。明らかにこれは「運動潰し」です。

彼らは、勇退を勧告される場やそのやりとりを面白おかしく語つてくれました。説明を漏らさず録音しようとテープレコーダーを持ち込み、対応に慌てる根は気のいい課長の姿。「会社のためにならないんだ」と恫喝され、その場に寝転んでやろうかと腕組みし黙り込む姿。その状況が目に見えるようです。労働者ができるだけ効率よく都合よく管理しようとする会社側、会社と常に対抗し、働く権利や労働条件や状況を少しでも良くしていくことを運動する彼らが生きている現実の落差が彼らの語りからにじみ出でています。

勇退勧告の場というのは、要するに辞めてほしいということを会社が労働者に丁寧に説明すべき場なのです。にもかかわらず理由の説明もなく、「お前の胸に手を当てれば、わかるだろう」と言われ、首になるような覚えもないと黙つていたら、恫喝してくるとは驚くべきことではないでしょうか。

## 『ガンバロウ』を出し続ける

彼らは、勇退勧告を受けた翌日から、事実を労働者に伝えようとガリ刷りのビラを出しました。



「ガンパロウ」追加

**勝つたぞ、連帯の力**

「解雇無効、不当労働行為」と判決

定刻十分前についた足場から無終公判に参加者は、各地からの守る会の仲間や赤旗友の会の幹事田・鶴井・毎口、共同連帯など各派の記者などから囲まれる。「争はれたが、なぜだ應戦は？」、「勝敗についてどうぞうか」「生活費のアーリ割は……？」など矢張りの質問攻めにあつた。「勝利以外に判決はありません」ときつぱりいいたる弁護士たちに審理ははじめた。十一時三十五分終わった。裁判長以外が退席。

「まだいまから判決下さい」といふと、古川本社労務係員、田中製鐵労務課員の記者もいるので、「お断り」した会社側は、そこで傍聴席の傍聴席。一隣、いよいよわが辯護士が法廷を離れる。ローバイした会社側文一一申請人等が被申請人の従業員としての地位を有することを認め、「はい」と答えた。この点で傍聴席はうなづきあつた。

裁判長への連絡、各地への連絡などびくともしてゐるが、会社は各々さゝ非協意としている。「これはすぐ組合活動の一環としているが、これがまたもので、法廷の不

1969年7月10日  
大94号  
加木保上労働局別冊  
労働問題研究会編  
著者:齊藤博

判決速報

「高校時代にガリキリを教えてくれる先生がいて覚えたのです。学校新聞なども発行していたのですが、それからガリ切り担当になつて、銅山に入つてから、私はガリ切りを知つていたので、支部の機関誌を担当したんですね。で、『ガンパロウ』の話は解雇されてからになるのですが、勇退勧告だつたわけですから、だから断ることもできるだろうという私の判断だつたんですね。だけれども労働組合の方は一切関知しないということで、独自にやらなくてはいけない。掛水俱楽部に呼ばれて勧告されたわけですよ。その次の日には個人名でガリ切りやつた。坑口で配つちやつた。「私、首を切られようとしています」とね。それでみんなびっくりしちゃつたんです。勝手に『ガンパロウ』という標題をつけて配つちやつたんですけれども……。じゃあ『ガンパロウ』ということで、我々の機関誌を出していこうと。裁判の経過だけではなくて、職場の仲間の支援も受けなくちゃいけないのだから、職場の現状の苦しさとか要求とかそういうのも取り上げてね、みんなを励ましながら、自分たちの闘いを支援してもらえたらしいのではないかということで、それでみんなで原稿も検討しながら書いてきたのです」

「原紙が擦り切れるほど、刷りましたからね。本山坑、通洞坑、小滝坑と三つありましたけれども、

それは『ガンパロウ』と名付けられ、裁判が終了するまで一三〇号近くまで出し続けられたのです。彼らの一人から話をうかがつていたとき、「そういうえば、こんなのもあるよ」と部屋の奥を探して出された黄ばんだわら半紙の束。それが『ガンパロウ』だったのです。

裁判を進めるうえで、七人は反対同盟委員長、副委員長、事務局、財政、生活、家族会、情宣とそれぞれの担当を決め、役割を分担します。『ガンパロウ』は情宣を担当したガリ切りの名人が刷り続けたのです。

「ガンパロウ」94号

組合員全員に行きわたるくらい刷らなきやいけなかつたから、一〇〇〇枚以上は刷つたでしょうね」

「いやあね、最初はね、黙つてみんな（『ガンバロウ』やビラ）取らなかつたですよ。会社から取るなつていう指示がありましたから。だけどだんだんやつていくうちに取るようになりましたよ。（裁判や状況）わかつてきたのか。だから裁判だけのことをやつてているんではなくて、仲間の問題で抗議したり、仲間をオルグつてサークルのようなかたちでやりましたからね。そういう点でだんだんだんだんわかつてくれて、で署名してくれたりね。そういうのも出てきたんですよ」

「だから、坑口まで行くの。朝に行つて、みんな出勤のときに『ガンバロウ』やビラ配るの。そうすると、管理職が来て「取るな」「ここは会社の場所だから駄目だ」とか言つてね。「ふざけんじやない。これは権利だ」とか言つてね。突っぱねてやりました」

聞き手：『ガンバロウ』を渡したら、その横に『ガンバロウ』を捨てなさいという箱が置いてあつたとか？

「本山の連中は、あんまり捨てていくつていう人はいなかつたんじゃないかな。みんな持つて行つてね。「がんばれよ」とかね。それで配つた後に支部に行つて、支部でお茶飲んだりしてね。（組合の）偉い連中は「早く帰れ」と言つていたけれども、俺らは「馬鹿野郎、俺らはまだ組合員なんだ」と言つてね、いろいろなことを話したりしてきましたね。俺らは首切られたつて、裁判をやつていふのだから、ここの人間なんだつていうところでね、意思表示をして、本当に会社と労働者とつながつてているんだよということを見せていたいというのもね。みんなが帰つてくる頃は必ず坑口で話

したりしてね」

組合があてにできず、個人で会社に立ち向かわざるを得なくなりました。勇退勧告があつた翌日、事実をみんなに知らせようとすぐにガリ切りし『ガンバロウ』第一号が出たのです。裁判の最初はマスコミも注目し、新聞記事や報道もありました。しかしそれ以降は自分たちから情宣しなければ、不當に首を切られようとしていること自身も忘れ去られてしまうでしょう。だからこそ自分たちの裁判経過を報告するとともに銅山で起つた様々な問題も取り上げ、働く仲間とともに「ガンバロウ」と、朝早くから坑口に立ち、『ガンバロウ』を配つたのです。

『ガンバロウ』を配り始めると、「ビラ紙屑はこの中へ」と書かれた箱が会社の門のところに置かれました。でも誰もビラを捨てませんでした。最初、ビラをとらなかつた仲間たちも、裁判の経過がわかるようになり、理不尽な解雇であることがわかると、様子が変わってきたのです。ビラ配りを制止しようとする会社側のやりとりなど彼らの日々の運動の姿や熱が語りから伝わってきます。法廷での裁判も重要ですが、なによりも『ガンバロウ』作りやそれを配る現実のなかにこそ、労働運動の日常の深さが象徴されていることを感じました。

さまざまの嫌がらせや切り崩しを受ける

彼らが裁判という手段で会社と対抗しようとするととき、会社側はさまざまの嫌がらせや彼らの切り崩しをしていました。今より給料がいい職場を紹介するから裁判をやめろとか、親戚を脅して、身内から裁判をやめるよう説得させたりとか、まさに「あめと鞭」であり、硬軟相混ぜた手段が使われたことがわかります。会社を守るために、労働者の暮らしに圧力をかけていくという現実。それは足尾だけでなく当時も今も、日本のいたるところでみられるものでしよう。多分それくらいはや

るだらうなと思いながら、同時に、それを笑いながら軽妙に語る彼らの言葉の後ろに息づいている怒りや呆れを感じていました。

「解雇されたのが二〇人くらいかな。そのなかで裁判闘争をやったのが七人ということで。一〇人くらいでやる予定だったのが、一人減り、二人減りでね。会社の圧力というのも相当強かつたんですよ。……元労働組合の偉い人が圧力をかけてきたりとか」

「切り崩しというのはすごかつたですよね。親戚の義理のおじさんになるんだけれども、「あんたのこと首にするよ」というくらいまで。(おじさんが)「お前、裁判やつたって大変だぞ、やめろや」って言つてくるようなね。だから「縁を切つたって言つてこいよ」と言つたくらいですよ。(Bとは)縁を切つたから関係ないよ、と言えよ」と言つたりね」

「私に直接来たんじゃなくて、私が信頼している職場の人がいて、彼はS課長と仲が良かつたの。その人が「こういう職場があるから」と私のところへ来て、「裁判をやめろ」というようなことはありました。月給五万円だったの。そこを斡旋するからと。当時は坑内で一日働いて、一ヶ月働いて三万六、七千円でした。Aさんあたりにもそんなような話があつて。で、何て言うんですかね、いくらかふらついているような人に対しては、高压的に社宅を出ろと言つたり、攻撃をかけてくるような感じとか。……そうですね、それとやっぱり、奥さんの方から切り崩しをしていくつてね」

生活にも不当解雇の影響が直撃しました。チケット制にして共同風呂から閉め出されたことが印象深く誰からも語られました。それまでそのような制度はなく、社宅にある共同風呂には自由に入れるのです。風呂へ入ること。それは身体の汚れを落とし、疲れを癒し、明日への活力をつけるという日々の暮らしでもっとも基本で重要な営みともいえるでしょう。解雇したのだから社宅から出ろという指示もあったのです。裁判をさせないために、日常の暮らしにまで土足で踏み込み、彼らの生活する権利を侵害しようとする権力の姿がそこに象徴されています。

ただ興味深かったのは、こうした権力に対して、彼らと同じ場で暮らす人々が自分の判断で認めようとしなかつたり、彼らとどう付き合つていけばいいか、最初はためらいをみせながらも、心ではずっと支援していたことです。

「社宅を出ろとは言われたんですね。それでね交渉したんです。そんなことはまかり通らない、我々には居住権があると。それで会社もそのままになっちゃったんじゃないかな。(聞き手・お風呂も嫌がらせがあったと聞きましたが)ええ、チケット制をやりました。でも券がなくても風呂へは入れました。(共同浴場の)番をしてる人たちがそのまま(会社の指示を)無視してやつていたということですね。券があつたことは間違いないです。だけれども、労働者がそこまで会社の立場に立つて嫌がらせはしていましたね」

「(風呂)入っていくでしょ、そうすると皆が下を向いてサーッと風呂から出ちゃうの。俺としゃべると、話をしてたというんで、誰かに言われるんじゃないかと。ある人が私としゃべつていると、別の人があれを会社に言うんじゃないかなって。みんな猜疑心になっちゃうの。そういう組合潰しといふか、団結を潰すようなことが平然と行われていたんです」

「我々が解雇されてから、今度はお風呂の券を作るようになつたんですよ。社宅の券。結局私たち

が入らないように券制度をつくった。月別になっていて、お風呂場の窓口に人がいるんですよ。その人が(券に)判子を押すんですよ。解雇されてしまったから券は配当されないんですね。子ども券もないんですよ。でも、子どもにはそんなの関係ないがね。そうすると、その人はいい人でね、誰かが券を忘れたとするでしょ。それをわざと「くれや」って言つてもらつて、うちの子どもの名前を書き換えて、子どもに渡したの。そういうふうに守ってくれた人もいるわけ」

〔聞き手：社宅に住んでいる周りの人はどうでしたか？〕やつぱり、今まで近い人は皆、離れていたです。あんまり近くない人で労働組合の話をよく聞いてくれた人なんかは、陰ながら応援してくれたりね。うんと近かった人は逃げちゃったり。それとあとは、助けてくれたり。ジャガイモが採れたから持つていけやとかね。「もうこしを茹でたから持つていけや」なんてね。……あとは社宅によつてもうんと違うんですね。俺がいた所は精鍊所といつて、精鍊所の社宅で愛宕下という所なんですがれども、そこは案外、会社側の人が多いんですよね。会社側といつよりも、（社宅）に入れたら「はいはい」というようなね。で、坑内関係というのは反骨が強いので、「ふざけんな」という感じで。……だから、三養会に行つても、女房らなんかはかわいそうでしたよね、白い目で見られるというよなね」

ブル制という工夫をして乗り切る

彼ら男たちは不当解雇に正面から立ち向かい闘つたことについて、自分たちは正しいことをやつてきたんだと、意気揚々と、生き生きと楽しそうに語ってくれます。ただ気になるのは解雇され収入が途絶えるなかで、裁判をしていた間、どのように暮らしていたのかということでした。どうしたら誰も脱落することなく裁判を進めることができるでしょうか。彼らはみんなで相談し、家族が

一緒になることが大事だと考え、家族会とプール制という工夫を考え実践していくのです。

「『プール制をやろう』ということで、やっぱり家族が一緒にならないと、食べていかないと、家族や子どもがいたりするとね、ちょうどね、子どもが小さかつたからね。……みんなプールです。働いた賃金も全部一切合切、お金は財政担当が管理する。「あんたのところは何人家族だから」という風に。それをみんなで決めてね。一人いくらかなんて。それと親がいるうちといないうちでは違うからね。親は働いていないから。そういうことで「一ヶ月、お前のところはいくら、お前のところはいくら」という感じでね、生活費を出していく感じで。仕事はどうするんだということで、労働担当が、あんたらは、どこ、「俺はこっちの方が良い」とかね。「土方仕事の方が良い、山仕事の方が良い」って、そういうようなことで、仕事にいったんだよね」

「（働いて）得た金を全部集めるんですよ。家族構成で分けるんです。今の会計みたいに伝票を打つて、親にはいくらとか、家族構成でいくらとか、それによつて賃金が決まつたんですよ。……働いた人のお金を集めて（わけたと）」

当時足尾だけでなく日本各地で労働運動は盛んでした。合理化による不当解雇の裁判闘争は行わ  
れていたのです。彼らは各地の実践を参考にして自らの暮らしと闘いを進めていったのです。いた  
だいた資料の中に、当時の「伝票」がありました、個人的内容があるのでコピーは載せませんが、昭  
和四六年一月分でした。本人給、妻、家族何名、手当の欄があり、決められた額が記入されています。  
そこから同盟費、生協、電気料、貸付金が差引かれ、家族ごとに割り振られる月額が一番下の欄に  
書かれていたのです。

「子どもが生まれたばっかしだったし。女房もショックは大きいですよね。母乳が出なくなっちゃつて。ミルクを買わなくちゃいけないから、ミルク代を出してくれたり、そういう配慮はしてくれたですよね。だから別に不満もなかつたし。着るものもね、皆でお下がりみたいにくれたりしてね。だから着物も買わないですねんだし。本当は最低限の生活だったんですけども、不満はなかつたんですよね」

「厳しい。子どもがかわいそうですよ。ボーナスもらう時期になると何買つてもらつたって、子ども同士だから言いますよね。けれども俺らの子どもたちはそういうことがないでしょ。ボーナスがないんだから。一ヶ月の給料もね、七人で闘つていたけれども、五人しか働かなかつたときとか、三人しか働かなかつたときとか、ほかの人たちよりも(生活費の額が)低いですよね。だから生活は相当ね(厳しかった)。だけれども、ひもじい思いをさせないようにといふうなことで」

「正常で働いていた時の金額の三分の一以下。だからものすごく参っちゃいますよね。家内もいて、子どもも長女が生まれたばかりだったのですから。町に働きに、両親がいましたから。反物を売つたりしたんですよ。そり引きもやりましたし、ダンプの運転もしました、いろんなことをやりました」

「働いて得た賃金を家族の事情に合わせて配分し、暮らしを乗り切つていった「プール制」という工夫。厳しさの中でそれぞの家族が協力してわかちあう人間的な厚みに裏打ちされた理性的で醒めた、見事な実践だと言えるのではないでしようか。

### 裁判が進むにつれて周囲の反応もかわっていく

裁判についてもここではまとめきれないくらい、彼らは多く語り、たくさんの資料をいただきました。当時重大な社会問題や冤罪事件を扱った自由法曹団から著名な弁護士や若手弁護士たちが担当してくれたのです。彼らが毎回払った弁護料は足尾に来る旅費にも足りなかつたといいます。それでも弁護士さんたちは手弁当でやってきました。慣れない陳述書をどのように書いてらいいのかなど、社宅で裁判をどう進めるのかを相談する彼ら。彼らは慣れていたのですが、弁護士さんたちは南京虫に噛まれることはまいつていていたようです。他の労働者の陳述書も数多く見せていただきました。彼らが普段仕事などさぼつていないことや正当な組合活動、労働運動をして、他の労働者からも人間的な信頼を得ていたことなど、いかに解雇事由が不当で、恣意的で、事実にそぐわないものであるのかを例証する内容でした。これらはすべて裁判の証拠として出されたのです。

公判は月一回のペースでありました。宇都宮地裁で行われ、公判内容がすぐに『ガンバロウ』で情宣されていきます。会社のさまざまな圧力の中で、多くの仲間が支援し、陳述書を書いてくれたと思います。

当時足尾の街では、古河が一番だという空気があったのです。だからこそ彼らが裁判を起こしたこと自身驚きだつただろうし、否定的で悲観的な雰囲気もあつたでしょう。しかし、公判で会社側の証言がでてくるあたりから、雰囲気が変わっていったといいます。周囲の人々も、実際のところ、どのような理由で解雇されたのかがわかるようになり、その不當性を理解し始めたのです。

「まさか会社は裁判するなどとは思つていなかつたのでしょう。これまで不当行為だろうというのは何回かあつたんですね、でも裁判にかけたということはないんですよね。……いわゆる街の雰

囲気として、一番偉いのは鉱業所だというわけですか。町長はその次だから。そういうような雰囲気でしたから、だから裁判を起こす者もなかつたし、裁判やつてもすんなり会社が勝つだろうというような話だったから。裁判に勝つたって、大騒ぎだつたですからね、会社を負かしたというね」

「そうですね。裁判で会社の証言が出てくるわけですね。いわゆる解雇理由が出てくるわけですよ。そうすると、その理由をそつくりそのまま職場の人間に伝えるようにして、組合が何にも助けてくれないんだということを書いてね、職場に配つてね。「ひでえなあ」ということになつてくるわけですよね。……真の解雇理由を会社が出してきたのは、みんな嘘だというようなものばかりで。職場の皆も「なんだ」という感じで、それから真の輪というのが、グワーッと広がつていきましたね」

「だから、だいたいね、裁判が始まつて、そうだね四、五年たつてね、だいたい筋がわかつてきただんで。ある人が言つていたのは「ただ、なんて言つていいのかわからなかつた」って。嫌で避けたのではない。激励していいのか、慰めの言葉を言つていいのかわからないので、私は避けていた、かわして避けていたんだっていう話でね。ちょっと救われたけれどもね。最初は腹が立つたよ」

裁判の中身も興味深かつたのですが、法廷で昼ご飯を食べたという話に思わず笑つてしまひました。法廷内で飲食などはできないでしよう。今も昔もそうであるはずです。でも、彼らは、うまいうまいと言いながら、傍聴する人々と一緒にキノコ汁を食べたのです。担当した裁判官の裁量といふか力量というか、当時の地裁のおおらかな様子が見えるようです。

「いやあ豪華だったですよ。うちの親父さんがキノコを採る名人だったものですから、ちょうど

キノコの時期なんかはね、Aさんの母親が魔法瓶にキノコ汁をいっぱい持つてきて、それを法廷の中で分けながらお昼ご飯をしたりしてね、ハハハ、いやあ、うまいうまいと言いながら食べたんですけどね」

「當時やりましたよ。でも、それはうまくないということで、いつ頃だつたかな、裁判所の事務長に交渉しようということで、俺と弁護士二人で話をして、「法廷ではまずい」と。「じゃあ、どこでやるのか、廊下でやるのか」と言つたら、調停室というのがありますよね。離婚とかそういうようなことを調停する部屋です。そのような部屋なら良いのではないかということで。でも俺ら(の裁判)が終わつてから、そこもダメになつたようですね」

### なぜ裁判をしたのか

裁判は宇都宮地裁の一審で彼らが完全勝訴しました。その後会社は控訴し、東京高裁で和解が成立したのです。控訴の時点では、足尾銅山は閉山しており、労働者としての地位保全が確認されたうえでの実質的勝訴としての和解が打診されたようです。

公判の期間は、控訴も含め七年間でした。やはり日本の裁判は長いと思います。彼らは、なぜ裁判という手段を選んだのでしょうか。

「危機感というよりも、名誉回復ですよね。だって、会社は不良鉱員だから首を切つたのだと。けれども、俺らは不良鉱員ではないわけだから。一生懸命やつていて、会社も休まないわけですし。……七人分全部の名誉回復ですよね」

「当時、合理化というのがあって、解雇の理由は欠勤が多いとか、仕事ができない人とか、会社が必要としない人という、そういうことだったんですね。組合大会の中でも委員長がそういうようなことで、全体を納得させた。ところが実際はふたを開けてみると、特定の活動家の首を切つたということなんですね。……『なんだ、こんなことで組合は嘘ついた』と、会社に対する怒りというよりも、組合に対する怒りの方が強かつたですね。……当時は労働組合の人たちの裁判闘争が各地であったんですね。そういう時代的な背景もあって「じゃあ、俺らも裁判をやろう」ということになったんですね。単純な、労働者としてひとつ意地をみせてやるというような、そんなものはありましたね」

「どうしてああいうふうに気楽に闘えたのかなという感じですよね。全国的にそういうような闘いがあった。じゃあ我々も闘つていこうという、そういうようなことがものすごくあったのかなと。あと一つは会社に対して、俺らはひるまないぞという、そういうような意地ですよね」

人間としての名誉回復。労働者としての意地。不当な権力に立ち向かった理由として彼らが語る言葉です。ただ私は彼らから話をうかがってきて、ある表情が心に突き刺さっています。社宅にうかがい、不当解雇の裁判について話を聞きたいと言ったとき、ある奥さんが私たちに示した何とも言えない表情です。語りたくないという否定ではないのです。なぜそのようなことを聞くのですか。聞いてどうするのですか。話を聞いたとして、当時の暮らしで自分たちが体験した苦痛や苦悩、怒りや悲しみ、そして喜びなど、本当にわかるのですか。そんなことを訴えるような無言の表情なのです。

名誉や意地を貫き通すために闘う。ただその闘いは、法廷場面や集会だけではありません。不当な理由で壊された日常を再建し、いかに生きていくのか。妻や子どもと彼らがいかに暮らしてきたのか。その日常にこそ闘いがあつたのだと表情が訴えていると感じました。日常での闘いを聞き取るのは、まだまだこれからなのです。



キャプション

長澤美佳

## 足尾の魅力を伝える

コラム

地域おこし協力隊として足尾に着任し、自然や動物を身近に感じることのできる暮らしをとて も贅沢なことだと思っています。

これまで、地域の方から足尾についてたくさんのお話しを聞かせていました。銅山の歴史のみならず、人々の暮らしや思い、生きる知恵、人情など、書籍や資料では知ることのできない貴重なお話ばかりです。そして、何よりもお話を下さる方の生き生きとした表情こそが、その時代時代の足尾の歴史を物語っているのだと思います。

私は多くの方に、「銅山」「足尾」だけではなく、違った角度からの足尾の魅力を伝えていきたいという思いから、野生動物の写真展や絶滅寸前の在来野菜の栽培に取り組んでいます。そして、これらの活動ができるのは地域の方をはじめたくさんの方々のご理解とご協力のおかげであり、いつも温かく、親身になって相談にのつて下さることを心から感謝しています。今後も、頑張って参りますのでどうぞよろしくお願い致します。

コラム

## 残していきたい足尾の記憶

中山貴仁

地域おこし協力隊として足尾に来て約二年が経過しました。ここまでたくさんの方々に助けられ、協力隊として活動することができました。私は足尾の歴史を地域住民の方から聞き取つて、冊子としてまとめるという活動をしています。聞き取りをしていると個人の記憶を残すことの重要性を感じます。足尾には様々な産業遺産があります。その多くは、当時は最先端の建造物で、足尾にヒト・モノ・カネが集中したことを示す遺構であります。そして、それらは大抵、「社会」や「時代」という言葉を引き合いに、大きな物語で語られます。それとは対照的に、一人の人に足尾の歴史を聞くことは個人のレベルからの視点であり、産業や社会に比べると小さなものですが、そこには「生活」や「仕事」、「人間関係」など私でも理解し易いテーマで歴史が語られます。だからこそ興味深く、足尾の歴史を知る手がかりとして残していくかなけれど感じます。これからも、より多くの人のお話を聞いて、残していくけるように頑張つていきたいと思います。



キャプション



国鉄足尾線の廃線に対抗した特別乗車運動 中村哲也

## 1 はじめに

“足尾町には、電車が走っている”

このように言つてしまえば、それはごく当たり前のこととて「電車が走っていることぐらい当然だろう」と思われるかも知れません。ですが、足尾町に電車が“いま、ここ”で走っている事実の裏側に、廃線の危機に対抗した住民運動の歴史があることをどれだけの人が気づいているでしょうか。

足尾町で暮らす人々にとつて生活を脅かした歴史的な出来事には、足尾銅山の閉山と国鉄足尾線（以下、足尾線）の廃線問題がありました。足尾銅山の閉山が主に雇用や地域産業の衰退といった経済的な問題であるのに対し、足尾線の廃線問題は町民の生活の足に関する問題です。足尾町は「陸の孤島」と表現されるほど周りは山々に囲まれ、当時、車社会が浸透してきたとはいえ学生の通学や日常的な買い物などには鉄道という移動手段は地域生活に欠かせないものでした。この足尾線の廃線を巡る住民運動は、町の交通手段がなくなるかもしれないという危機感を抱いた一部の町民らによって特別乗車運動（さくら乗車）を行ったところから始まります。足尾線を残すための住民運動は約二年半もの間、継続的かつ連続的に行われ、次第にその活動は一部の町民の活動から町全体の活動として取り組まれるようになっていきます。

この取り組みについて、私は次のこととに興味を持ちました。**①なぜ足尾線の廃線を阻止するための活動が一部の町民の活動から町全体の取り組みへと広がったのか。**そして、**②なぜ特別乗車運動が長い期間もの間、続けてこられたのか。**このことに着目しながら町民への聞き取りや資料を涉獵していくと、町民の足尾線に対する価値観の変化が浮かびあがりました。

そこで本章は、足尾線の廃線問題に対する特別乗車運動の歴史を取り扱いながら、町民と足尾線

の関係性を描写したいと思います。

## 2 足尾線の廃線問題の概要

足尾線の歴史は古く、その歴史は大正元年一二月三一日、足尾銅山から採掘された銅を搬出する交通手段として同線の前身である「足尾鉄道株式会社」として、私鉄から始まりました。その後、私鉄であった足尾鉄道は大正七年に国が重要路線として買い上げ、日本国有鉄道（以下、国鉄）足尾線となり、渡良瀬川沿いに群馬県の桐生駅から足尾本山駅までの四六kmを沿線住民の生活の足として、さらには産業物資輸送の足として走り続けてきました。

この足尾線の廃線に関する問題は、昭和五五年一二月二七日に当時、国鉄によって運営されていた特定地方交通線、いわゆる赤字ローカル線の廃止促進が盛りこまれた「日本国有鉄道経営再建促進特別措置法」が施行されたことに始まります。

国鉄は第一次廃止対象路線の選定承認申請を昭和五六六年六月に運輸省に申請しました。足尾線は第一の廃止承認申請は免れたものの、乗車人數が減少している現状に廃線の危機を感じた一部の町民らによって、同年七月から独自に三〇人ほどの特別乗車（さくら乗車）を開始します。町民のこうした地道な活動が行われる最中、昭和五七年一月に国鉄が承認申請した第二次廃止対象路線三三線の対象路線に足尾線が含まれると、廃線の撤廃に向けて一、一〇〇名の町民を集めた大会が開かれました。町は、この大会で採択された決議書をもって運輸省や国鉄に陳情に行き足尾線の存続を訴え続けました。この陳情により、一時は廃線が延期されたものの、昭和五九年六月、当時の運輸大臣が足尾線を含む第二次廃止対象路線三三線のうち二七路線の選定を承認したことにより、足尾線の廃線が現実のものとして歩み寄ってきました。そこで町は、廃線を阻止する一縷の望みをかけて廃止除外基準の一つである「ラッシュ時ラッシュ区間千人以上乗車」に着目し、昭和五九年七月か

ら昭和六二年一月までの期間、町全体で積極的な特別乗車運動を開始していくようになります。

この特別乗車運動によって廃止除外基準の一つである『ラッシュ時ラッシュ区間千人以上乗車』が達成され続けると、半年に一回、足尾線の廃線を具体的に協議する「足尾線特定地方交通線対策協議会」は四度(約二年間)に渡って審議の中止を余儀なくされています。しかし、このまま活動を続ければ足尾線の廃線は免れるかもしれないという雰囲気が漂いはじめていた最中、昭和六一年一月二八日、国鉄の分割民営化を決める「国鉄関連八法案」が可決され、足尾線存続についての住民運動も転換を余儀なくされています。そして、約二年半もの間続けられた特別乗車運動は国の一方的な廃線を阻止し、所期の目的を達成したとして昭和六二年一月一四日に終結します。そして、現在は、一部路線が縮小しながら町民や観光客に愛される私鉄として走り続けています。

### 3 町民の特別乗車運動の取り組みと町民・行政・企業との連携

#### 組織的な活動と町民相互のつながり

生まれてから足尾町で生活を続けている七〇代の男性は、特別乗車運動について次のように話しています。

「特別乗車は、当然俺もやったよ。(組内で)当番を決めて、月に一二、三回ぐらい乗つてたかな。乗車数としてカウントされる時間と区間が決まっていてから、特別乗車をする日は会社が始まる時間に間に合わなくて、有給休暇をとっていたよ。会社も活動に理解してくれていたから、何か言われるってことはなかったね」

この男性の言葉からは、足尾線の廃線を阻止するための運動が企業をも巻き込んだ取り組みであつたことが窺がえます。そして、「当番を決めて」という男性の言葉の背景を追っていくとこの活動が組織的に行われていた事実が浮かびあがります。

特別乗車運動が始まつた当初、足尾線に乗る・乗らないは個人の判断に委ねられていきました。その意味で活動は不安定です。ですが、廃止除外基準である『ラッシュ時ラッシュ区間千人以上乗車』という一つの目標が定められたことで「不安定な活動」が目標を達成するための「計画的な活動」に変わっていきました。その中で、町民の特別乗車は「組内」(くみうち)という地縁組織のグループ単位で行われるようになります。組内の中で当番表をつくり、誰々が何日の何時にどこからどこまで乗車するのかを決めていました。この組内を一つの単位として組織的に乗車運動を進めていったことが一人ひとりの活動負担の軽減に繋がり、さらに当番の人が何らかの事情で乗車できなくなれば、組内の別な人が当番の変わりに乗車するなど町民同士が互いに協力しながら活動が行われています。

この活動に参加していた男性は次のように話しています。

「みんなで活動していたから、自分がやらないといふ気持ちにはならなかつたよ。そりゃあ、大変なときもあつたけどさ。周りの人と協力してやつてきたからさ」

特別乗車をするのは月に数回とはいゝ、それが約二年半もの間継続していくば少なからず活動の負担感が生じてきます。実際に聞き取りのなかでは大変さを語る声もありました。ですが、町民はその活動をやめるという選択肢にまではいき着かない。上記の言葉には、その背景にある一つの要因として町民同士のつながりの深さを物語っているように思います。

(1) 昭和60年6月10日

広報あしお

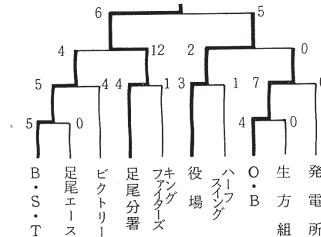
第308号



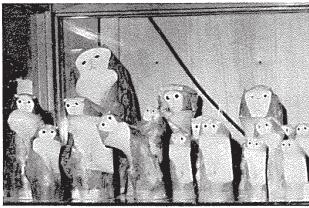
みんなのページです  
何でもかうこうです  
(話題をお寄せください)



優勝した「足尾分署チーム」



「足尾分署」春の覇者に  
昭和60年度春季  
全町野球大会



絶好の野球日和に恵まれた去る

五月十二日・十九日の両日、「昭

和六十年度春季全町野球大会」は

六十年度

春

行

わ

れ

た。

において開催されました。

十九日行われた決勝戦は、若手

の成長著しい「足尾分署チーム」と

と試合

者

「

役

場

チ

ム

」との対

戦

となり、双方で三本のホームラン

が

飛

び

出

打

勝

つ

り

て

勢

い

に

勝

し

て

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝

し

て

と

幸

勝&lt;/div

## 町民・行政・企業の連携・協力体制

特別乗車運動には町の役割も大きく働いています。町は積極的に国や県と交渉し足尾線の存続を訴えてきました。そして町役場の職員も毎日交代で特別乗車運動に参加する傍ら、町長の業務命令により職員の公務出張は足尾線を利用していました。さらに、企業も従業員の特別乗車運動に理解を示すだけではなく、従業員の出張には足尾線の利用を奨励するなど活動を積極的に応援、協力をしていたそうです。

町民が特別乗車運動を継続できたのには、町民一人ひとりの意思や町民同士の関係性もさることながら、町民・行政・企業が一体的に連携・協力しながら進めてきたことが大きいように感じます。この三者の連携・協力体制が特別乗車運動を町全体の活動として位置づけ、そのことが町民の運動を後押ししていったと考えられます。

でも、足尾町に限らず、時には対立する住民と企業、住民と行政といった利害関係の異なる者同士がなぜ、足尾町では協力する関係として結びつき、町全体の運動としての位置づけが築かれたのでしょうか。そこには、それぞれの組織が持つ目的が「足尾線の存続」という一つの事象によって集約されていることが影響していたと考えられます。足尾線は町民が生活路線として利用しているため、車を運転できない学生や高齢者などを中心に廃線になると生活に困ってしまう方が出てきます。企業も産業資源を輸送する産業路線として活用していたことから廃線になると移送手段の変更を余儀なくされてしまう。そして行政は、足尾線が廃線することは第二の閉山として地域産業の衰退を招き、さらには生活が不便になることで町民が町を離れ、人口減少の加速化が危惧される。つまり、町民、行政、企業のそれぞれに持つ目的が「足尾線の存続」というビジョンに集約化・統合化され、

共通の目的を達成するために連携・協働関係が促進され、町全体の活動として広がりを見せたと考えられます。

## 4 町民が特別乗車運動を継続できた背景

### 特別乗車運動に対する町民のモチベーション

歴史的に見れば、地域におこる何らかの危機や変化に対抗する住民運動は、全国各地の様々なところで散見されます。ですが、その運動が町全体の取り組みとして継続的かつ連続性をもつて長期間続けられてきたケースとなるとそう多くはありません。それは住民運動を始めた頃のようなら々とした住民のモチベーションが時間の経過とともに減退していくからです。そう考えると、なぜ足尾線の廃線に対する特別乗車運動では約二年半もの間、町民の活動のモチベーションを維持することができたのでしょうか。このことに着目していくと町民が特別乗車運動の成果を目に見える形で把握、感じていたことが大きく影響していたと考えられます。

町民は特別乗車運動による乗客数の累計や廃止除外基準であるラッシュ時ラッシュ区間千人乘车が達成され続けたことによって、半年に一回、足尾線の廃線を具体的に審議する「足尾線特定地方交通線対策協議会」が四度に渡って審議を中断させている事実を把握していました。当時、この活動に参加していた男性は次のように話しています。

「あの活動（特別乗車運動）は、大変だったけど足尾町に鉄道がなくなると困る人も多いから、自分の番（その日、乗車する当番）じゃなくてもできるだけ足尾線を利用してましたよ。最初は、活動をしたところで足尾線の廃線は変わらないんじゃないかなって思う時もあったけど、廃線の話し合いが延期に活動に参加していた男性は次のように話しています。

なつたりすると、「もしかすると」っていう思いにはなつたよね。自分達の行動で足尾線が残せるかもってあの時は思つたよ」(( )内筆者補足)

この言葉からは、町民が特別乗車運動に関する情報に接する機会があり、そのことによって足尾線の廃止を阻止できる可能性を抱いていたことがわかります。つまり、活動とそれに対する成果の積み重ねの体験が、町民の内面に可能性や希望を抱かせてきたことで特別乗車運動に対するモチベーションが維持されていたのではないでしょうか。

### 活動の成果を伝えてきた町の広報

活動と成果の因果関係が町民にファイードバックされていたことが、町民の活動に対するモチベーションに影響を与えていたとすれば、活動の結果や途中経過が町民に伝わらなければこの現象は起きません。では、どうやつて町民は情報を入手していたのでしょうか。この情報伝達の役割を果たしていたのが町役場の広報誌でした。町役場が毎月発行する広報誌(広報あしお)には、昭和五六年六月(第二五〇号)から廃線撤廃運動が終結する昭和六二年四月(第三三〇号)までの間、毎号で足尾線の廃線に関する特集記事が掲載されました。そこでは乗車数の状況や国や行政の動きが逐一掲載され、町民に向けて定期的に情報発信と特別乗車運動の推進を呼びかけていました。新聞や雑誌のように購読する一部の人を対象にした情報発信ではなく、町の広報という全町民に向けて発信、配布する情報媒体を活用することで、町民は自然と足尾線の廃線問題に関する情報と接する機会を持つていました。つまり町の広報誌が自分達の活動がどのような成果や結果に繋がっているのか把握することを可能にし、特別乗車運動に対する町民のモチベーションを高め、維持するために大きな役割をもつていたと考えられます。

### 5 町民の足尾線に対する価値の変化

運動を始めた当初、足尾線廃線に対する住民運動の目的は移動手段の確保でした。ですが活動を継続していくうちに鉄道の車窓から見える四季折々の町の景色や町の中を鉄道が音を鳴らして走る姿に愛着を感じるなど、町民の内面に足尾線が単なる移動手段との認識から町に溶け込む魅力の一つとしての思いを抱くようになります。このことは直接 特別乗車運動をしていた大人達ばかりではありません。町で生活する子ども達もその思いは同じで、当時、小学校六年生の女子児童は足尾線の存続に向けた啓発作文の中で次のように書いています。

「(中略)お父さんやお母さんは、車を使っているので、あまり足尾線を利用していない。お父さんたちにもたくさん乗ってほしいと思う。でも、お父さんも足尾線のことを考えていないわけではない。足尾線の写真をたくさんとっているからだ。足尾線沿線の美しい背景をバックに次々と気動車を写し出す。お父さんの撮った足尾線の写真がカレンダーになって、町中にはつてある。お父さんは、ニコニコしながら「足尾線を残すためにとらなくちやな。」といった。私は足尾線のまわりの景色は本当にすばらしいと思う。だから、本当に親しまれるんだなと思う」(『広報あしお縮小版』第三一〇号 六六七頁)

また、同じく町内の中学校に通う女子生徒は次のように書いています。

いるほど、私たち足尾に住む人には耳慣れた言葉になつてゐる。(中略)私は以前、足尾線に乗ると「足尾線は遅いからイヤだなあ。」とよく言つてゐた。だけど、今は足尾線はイイなあなんて調子のいことを言つてしまふ。本当にこの頃そういうのだ、それは景色だ。親せきの人は私の家に来た時、「足尾の川の水は、どうして透き通つてゐるの?」と不思議そうに言つてゐた。私は川の水は、どこでも足尾と同じだと思つていていたから、こちらの方が、そんなに不思議がるのが変だと思つたものだ。でも、たまに出かけると、どこへ行つても足尾みたいな所はない事に気付いた。(中略)日本のどこかに、乗つてみたら水がきれいな川を「ヨイショ、ヨイショ」と登つていくと、景色がとつてもきれいな、あまりもうからない国鉄があつてもイイじゃないの、なんてつくづく思う。今何でも、せかせかしているから、ノンビリ、ゆっくりとした足尾線を残してもらいたいと思う(後略)」

『広報あしお縮小版』第三一五号六八五頁

この言葉からは町民の中で移動手段の一つとして考えられてきた足尾線に対する認識が変わつてきたことがうかがえます。それは特別乗車運動が子どもから大人まで町全体で『足尾町に足尾線がある』ことの意義と価値を見つめ直す機会になつてゐるようを感じました。このことは、足尾線が単なる移動手段としての価値を超えて代替不可能な地域固有の魅力として独自性と固有性をもつ存在に位置づけられていつたように思います。もし、足尾線が移動手段としての価値しか持たないようであれば、車社会が普及し、鉄道以外の他の移動手段が充実していくことで特別乗車運動はもつと早く収束に向かつたのかもしれません。ですが、足尾線が町に欠かすことのできない魅力の一つとして町全体がその存在価値を再構築したことで、足尾線を守ることを目的とした特別乗車運動の意義と価値が高められていたよう思います。

## 6 特別乗車運動の終結と課題

昭和六一年一一月二八日、国鉄の分割民営化を決める「国鉄関連八法案」が参議院で可決成立し、また時期を同じくして古河鉱業(株)が鉄道輸送を陸上輸送への転換と足尾線からの完全撤退を発表すると、足尾線存在についての運動も転換を余儀なくされていきます。そして昭和六二年一一月一四日、当初の目的は達成されたとして特別乗車運動の終結が宣言されます。その後、国鉄足尾線は民営として東日本旅客鉄道株式会社(現・JR 東日本株式会社)が二年間の運営を引き継ぎ、そして平成元年三月二九日からは第三セクター方式の鉄道会社として設立された『わたらせ渓谷鐵道』が路線の運行を継続し現在に至っています。(一部路線の縮小)

住民が何らかの危機や問題に直面したとき、連帶してその危機を乗り越え、問題を解決するために起こす住民運動は抵抗としての性格を帯びています。その意味では、足尾線の廃線に対峙してきた特別乗車運動は『抵抗としての住民運動』といえます。そして『抵抗としての住民運動』の目的はあくまで危機の回避、問題の解決であり、それらが達成されることで終結します。足尾線の廃線問題に対する住民運動も、鉄道の存続という事実に到達することによつて終結することになりました。それは目的が移動手段の確保であつても地域の魅力を守ることであつても変わりはありません。そして足尾線の路線存在が決定すると町民の足尾線に対する関心は次第に低下していきました。このことについて、特別乗車運動に積極的に関わっていた男性は次のように話しています。

「この活動(特別乗車運動)は足尾線を残すことばかりに目がいつてしまつた。なんで足尾線を残したいのか、足尾線を残してどう活用していきたいのかというところまで、みんなで考え、話合いながら活動していくばよかつたって今になつて思うよ」( )内筆者補足

この男性の言葉からは、「足尾線を残す」ことから「足尾線を活かす」ための住民活動が芽生えなかつたことがうかがえます。

足尾線と同じように廃線の危機に直面した和歌山県の貴志川線では（二〇〇三）、足尾町の動きと同じように対策協議会の立ち上げや署名運動、ノーマイカーデーによる利用促進運動など地域ぐるみで存続運動が行わっていました。ただ、足尾町と異なるのは、住民の有志によって「貴志川町くらしと環境よくする会」や「貴志川線の未来をつくる会」など、貴志川線の存続を手段として沿線住民の生活をどう良くしていくのか、地域の未来にどう繋いでいくのかまでを描いて活動していました。つまり、貴志川線の廃線の危機に対する住民運動は、廃線を阻止する『抵抗としての住民運動』と貴志川線の存続を手段として町の未来像をみんなで創っていく『提案としての住民運動』を合わせ持ち、和歌山鉄道として継続されていくことが決まるとその鉄道を活かしたまちづくりが地域の中で展開されていきました。

足尾線の特別乗車運動の歴史は、「足尾線を残す」役割を果たしました。そして、現在、国鉄の後を引き継いだ「わたらせ渓谷鉄道（旧足尾線）」を中心に車両のイルミネーションや、足尾銅山の観光と連携した観光事業、沿線の風光明媚な自然を堪能できるトロッコ列車など地域の魅力を活かした、又は引き出す様々な企画が行われています。ただ、これから未来に向けて「足尾線をどう活かしていく」のかを町民自身が考え、具体的な活動を創っていくためには、未来の足尾町を担う子ども達に特別乗車運動を続けてきた大人達の足尾線に対する“思い”を伝えていくことも大切なよう思います。きっと、その先に町民、行政、企業（わたらせ渓谷鉄道）が連携・協力した新たなまちづくりとして、「足尾線を活かす」ための新たな町民運動が生まれていくのかもしれません。

## 7 終わりに

ここまで足尾線の特別乗車運動の歴史について私が見たり、聞いたり、調べたりしてきたことを通して感じたこと、考えたことについて書いてきました。こうした記述は、別の角度から見れば違う捉え方があるのかも知れません。ですが、私自身の主観から「足尾線の歴史はこういうふうに見えてるよ」という内面の世界を伝えることによって、これまでとはまた一味ちがう足尾町に対する視点が提供できればいいなと考えました。

「足尾町には、電車が走っている」

こうした何気ない日常風景の中にも、足尾町の歴史が存在していることを様々な方に知っていただければ幸いです。

まさか、6年も足尾にいることになるとは！

私と同時期に地域おこし協力隊として活動していた、中山京さんは、退職後も足尾で暮らします。がら塾や寺子屋の活動を続けています。そんな中山さんの6年間の足尾の生活を改めて振り返ります。

志村 中山さんは、地域おこし協力隊で足尾に来た直後から、プライベートでも中学生への塾を始めましたよね。その経緯はどういうものでしたっけ？

中山 私たちの前任から「足尾だとなかなか塾に行くことは難しいけれど、学校以外での勉強をして将来の準備をしたい子がいる…」ということで紹介してもらつたんです。僕も、大学生の頃は家庭教師のアルバイトをしていたり、英語や中国語が得意なので役に立てればと思いました。子供達を通して足尾の方との関係が作れたり、足尾の状況や子供目線の足尾や過疎地域の特徴や良さもわかりました。それに、親御さん達が手料理の差し入れをくれたりして、逆に良いきっかけになりました。美味しい手料理に囲まれて、だいぶ体重も増えました…。

志村 新しい地域に来たばかりなのに、そうやって業務時間外も活動していくすごいと思っていました。しかも、（同僚だからこそ言わせてもらうと）グータラな中山さんが、子供に

対してのことになると、真剣に考えているのも良くわきました。塾は発展して寺子屋にもなったり、塾は今でも続いるんですよね。中山さんが「子供を相手にしたことに関わって、その成果がわかるまで期間で最低でも6年間はかかるから、それまでは足尾にい続ける」と言い出したことは、とても印象に残っています。改めて、6年目を迎えた今はどのようを感じていますか？

中山 ここだけ、少しだけお待ちください…。ここだけ、少しだけお待ちください…。ここだけ、少しだけお待ちください…。ここだけ、少しだけお待ちください…。少しだけお待ちください…。ここだけ、少しだけお待ちください…。少しだけお待ちください…。少しだけお待ちください…。

“足尾を調べる”ということ

志村春海

——村上安正先生



足尾で働いていたときに制作したという手書きの図面



ご自宅の資料の一部

私が足尾の地域おこし協力隊に入ったばかりの頃、「何から手をつけたら良いものか……」といふことで、公民館図書室の本にとにかく目を通していました。公民館の一角には、村上文庫という書庫があり、鍵付きの棚には、鉱山関係、労働運動関係、鉱山をテーマにした小説や詩集、発行されたものだけではなく、企業や鉱山学会が作ったパンフレットといった、足尾を多方面から知るために資料が入っていました。ラインナップから、どことなくただ事ではないような気配が……。手作りのような資料も混ざっていたり、「郷土史」「歴史」の範囲を越えるような幅広さ、そして村上文庫ってなんなのだろうか? 足尾ってどのように研究、理解されているものなのか? など、何もわからないながらも、足尾の深みのようなことを感じた瞬間でした。

その後、村上安正さんは、足尾のことを知るためには必ずお名前が出てくる、重要な方であることがわかりました。たとえば、今では聞くことが不可能な戦中・戦後の足尾の状況も言及している『足尾銅山労働史』や『足尾に生きた人々』。そして銅山を技術的、文化的にも理解するための辞書的な存在である、『足尾銅山史』など、丁寧に聞き取りを資料化していることが伝わる著書ばかりです。

著書の中の遠い存在だと思っていた村上先生と話ができるのは、「ごめんください、足尾のこと教えてください!」発行がきっかけでした。冊子を読んだ村上先生がお電話をくださり、その後も冊子の感想や、修正や補足のご連絡をいただきました。それからも、電話や手紙で連絡を取り合うようになり、二〇一六年に初めて足尾でお会いし、葉山のご自宅でお話を伺う機会にも恵まれました。

先生のご自宅には、今までの研究活動の資料ファイル、MOデータ、戦後から続いている日記ノートの束や、ご自身で制作した坑図などが、書斎に机の下のスペースから、天井までの本棚までぎっしりと保管していました。インタビューでは、聞き取りの哲学のようなことが自然に言葉の

節々から滲み出でていて、こういう風に足尾に向き合い続けた方がいたのだなど、改めて衝撃を受けたのを覚えています。

村上先生は、古河機械金属に在職し、その期間に『足尾銅山労働史』の編集を手がけることをきっかけに聞き取り活動が始まっています。閉山時には転勤し、足尾を離れます。が銅山で働いてきた立場、足尾に住んでいた方の立場でもあり、かつ工学や技術者の立場からも客観的な研究を続けられました。

村上先生からお電話やお手紙をいただく度に、先生が足尾のことを本当に想っていること、そして足尾の様々なことを議論する相手を探していることが伝わりました。具体的な鉱山の内容や議論に関しては、私では到底、村上先生のレベルに追いつくことはできませんが、先生は私たちの質問を快く受け入れてくれました。

二〇一八年に入院中の先生とお会いした際に、今だに足尾の研究で、まだやりたいテーマがどんどん出ていましたし、議論をする仲間を求めていました。村上先生に、そういう仲間や環境が揃つたら、また違う先生の研究活動や、足尾理解の広がりにもなったのかもしれません。私には、その役割は担えませんでしたが、村上安正さんという足尾に向き合い続けてきた一人の研究者について、少しでも紹介できればと思います。

なお、村上先生の貴重な資料のうち、書籍関係は栃木県立図書館に寄贈する予定と伺っています。

二〇一六年一一月二〇日に私たち(志村、好井、三浦、市ノ瀬)は村上先生のご自宅にお邪魔しながら、お話を伺いました。その時にいただいた資料の抜粋と共に、お話を紹介します。

### 聞き取りのきっかけ

村上先生 就職して三年目ぐらいに、労働組合の機関紙、全国版に投書を出したことがあったんです。そして、足尾のことは何も知らないんで、勉強しようとした。それでそういうものを総合してやっているうちに、僕のところに回ってきた仕事が、古老の聞き書きだったんですね。それが足尾銅山の思い出と資料編に入つてますよね。それをやつて新聞に連載で一回ぐらいやつたかな。その後、争議、鉛毒事件とシリーズでやることになつて、聞いた内容を文字化し、目を通してもらひ、また話を聞いて手直しをしてまとめていった。そういう能力を認められたからか、労働組合ができて一〇年目に、一〇年史をやるということになつた際に、当時私はまだ二十五歳だったんですけど、組合から「お前がチーフやれ」と言つて言われて。相当きついんですけど、それも無休でやらされたんです。仕事が終わつて、空いてる時間をそれに費やす。三年かかったかな。それでできたのが足尾銅山労働史。たまたまその時に都立大学にいた共産党系の方が色々教えてくれましてね。もう一つは当時、思想の科学というのが盛んになつた時代。昭和三〇年代ぐらいから雑誌を出したりした時代で、生活つづり方とかやまびこ学校とかが入ってきて、そういうものからの歴史をたどるという流れがあつた。もう一つには、労働運動史を作つた時は組合員が呼んでくれるにはどうしたらいいかと考えたわけですよ。それには歴史的確証がおけるものはおいて、取材した人の中から話を聞いて織り込んでいくということを、無茶ではあつたけどやつたんです。

それまでお話を聞いた人の語りを織り込んでいく「労働運動史」というのはなかつたん

村上先生 ですか？

なかつたです、あつても議事録ですよね。組合の議事録を集めたのが労働史だった。読んでも、面白くないし、明治の時代、大正にも労働運動はあつたし。それから戦後の食糧危機の時代の問題もあつて、複雑な事件が重なつて、戦後に山がおかしくなつてきて、なんとか立て直そつていう体制を総合的に物事を見ないと表せないという気持ちがあつた。しかも、私は鉱山の経験者で一代目ですから。そしたら、割と評判が良くてね。他の組合にも宣伝のパンフレットを作つたんですよ。

### 足尾に生きた人々——歴史認識

村上先生 結局、聞き取りというのは、話し手と聞き手の相互関係ですよね。それが改善していくといろんな展開が出てくるし、ほかの話が出てくるのが一番いいと思う。だから、中国人と朝鮮人の問題がだいぶあつたんですよ。それで中國人の問題については下野新聞の『声の欄』で父親が捕虜の収容所の責任者をやつていた人の娘にいてね、それが僕のところに来て、聞いてきたので、教えたりしたというケースはありました。だから、そういう人たちには大事にしてやつて。

もう一つは朝鮮人の問題ですが、栃木県で足尾の朝鮮人の問題で講演した人がいるんですけど、「残虐な行為を受けて、ひどい目にあつた」と言うんですよ。その人の説だと、「六キロのレール、長さ二・七メーター、一本を麻縄で縛った荷物を持って、はしごを二〇〇三〇メーター上がる仕事は残虐だ」と言うわけですよ。だけど、線路夫の仕事というのではなく、六キロのレール運びは一番軽い仕事なんですよね。それを「いじめられ

た」と言つて。「途中で仕事をやめて逃げたときに、高跳びしたときに選別ももらつた」と言う話もあつたんだけど、そういうことは抜きにして、残虐行為だというのであればちょっと違うし。

また、中国人の問題がありますね。一トン積みのトロッコで三〇〇キロから四〇〇キロぐらい積んだトロッコを四人で押した、三人で押したと書いてあるんですよ。「体力のなくなつた人たちで三人四人で押させるのは残虐行為だ」ということでNHKの記者が来た時に私は「三人四人で押すような坑道というのは幅はいくつなのか」聞いたんです。普通の坑道の幅は、一メーター三〇とか四〇なんですよ。だから、どう押しても二人以上は押し切れない。それを三人四人で押させるということは札をかけて、仕事をやりますって言つてきた人に対して、無理をして配番したのは残虐行為ではないわけですよ。むしろ、本来は収容所で寝てると食事は半分になつちやうわけですよ。そうなるとやせ衰えちゃうからやつていたのに、仕事内容だけを引き抜いて「ひどい」と言うのはね。とうとうその時には記者は黙つてしまつたんですけどね。だからね、そういう外国人の問題というのは、慎重に考えないといけないんです。

### 聞き取りの様子——語り手との関係性

村上先生

(資料を見ながら)最初、南助松さんに話を聞きに行つても、なんにも喋らなかつた。「俺はもう今日は会いたくねえ」って、そういうのが何度もありましたよ。やつていてるうちにだんだん情が移つてきてね。「他の人は来て、本を作つても何にも言つてこない」って。「そういうことをやられると私は話したくない、顔も見たくない」って。結局、聞き書きで一番いいのはお互に信頼関係ができる、絆ができると、それが活きてくるんで

すよね。これは理屈じゃないんですよ。だから、相手によって全然違うわけですよ、門前払いくったこともありますけどね。

**聞き手** 村上先生 何回くらいから話を聞けるようになりました?

白井さんは南助松が生きているときには直接、話はしなかったんです。それでもね、行くと奥さんだけ残った時には、細かい話はしないんだけど、打ち解けた格好で「どうぞ、お茶入れますから」ってことで。そういう仲になつた。足尾で一番問題なのは現場で働いていた人がいないでしょ。いないけども、何か残したいという想いはありますよね。だから、何が問題なのかということです。働いていて誇りに残っていて、息子に伝わつたり孫に伝わつたりして聞く話はありますよね。だから、それは大事にしなくちゃいけない。それで、こういう資料など理論的なものを集めたうえで整理をしていく努力が必要だと思うんですね。

### 冊子「ごめんください、足尾のこと教えてください!」について

**聞き手** 私たちの冊子について、楽団演奏の友達のお父さんのことについて補足してくださいましたよね。<sup>[2]</sup>

**村上先生** 合同委員会というのがあって、体育とか音楽は別のグループになっていてそれぞれに予算がついているんですよ。それに対する予選とかもあるから。あとは合同の全山運動会というのもありましたから。

**聞き手** 音楽だけです。だから、いわゆる式辞をやる時は労務課が管理を持っていた。あとは削じやあ合同委員会による演奏と楽団の演奏は別?

**村上先生** 音楽だけです。だから、いわゆる式辞をやる時は労務課が管理を持っていた。あとは削

岩機の字が岩を削る機械となつてゐるんです。これは違つて、僕は錐という字を書いてるんです。削るんじやなくて叩いて碎く。発破をかけるための穴を空けるんです。英語で言うと、Rock drillです。岩石にドリリングする、穴をあける機械。これはいつの間にか登用漢字になつて。それまではひらがなで書いてたんです。

**聞き手** 古河も「さく」ってひらがなでもんね。

**村上先生** ダイナマイトの穴を掘つて入れないと届伸できませんよね。あと「すかり」の問題。見たことある?

**聞き手** 掛水俱楽部にあるやつですかね?

**村上先生** あそこは前は銅山記念室があつて、そこには出してたんだよ。銅山観光に行く近所に風呂場があつて、そこの棚の上に石の結晶がゴロゴロ乗つかつていた。そこに黄銅鉱とか

黄鉄鉱、石英とかの結晶がつながつていてるようなものがたくさんあつたんですよ。

それで面白い話があるんだけど、昔、坑内に働いていい連中と、中禅寺湖に温泉に行つて、そしたら、「金がないけど、どうしようか」とてなつて、「すかり」があつて「これでどうにかならないか」とて言って。金じゃないんだよ、黄鉄鉱だから鉄なのに。そしたら、「お金はいりません、その代わり石を譲つてください」とて。七、八千円、飲み放題でお土産も付いて帰つてきた。

**聞き手** 珍しかつたということですよね。

**村上先生** 價値がわかんなかったんだろうね。向こうが錯覚を起こしたなら詐欺じゃないよね、ハハ。でも、「すかり」の持ち出しの取り締まりはあつたんですね。出てくると火薬袋に入れて持ち出してた。だから、出そなときには火薬検査っていうのをやるんだ。坑口で

係員が待っていて、開けてチェックされて没収される。  
聞き手 「すかり」自体は使えるものになるんですか？

村上先生 使えばしないよ、飾りに使つたり。全部じゃないけど。二割か三割くらいだね。

### 歴史をまとめる意義——正統派ではないけれど

村上先生

せっかくやるんだからね、聞き書きが歴史ではないと言ふんだけど、違つた意味での隠された歴史があるんだから、そういうのを確立してやるのが学問的にもいいことなんだと思うんですね。昔の正統派ではないんだけどさ。そういうことができればお手伝いしますよ。

あとは、聞いた話がどこまで確かなのかというのも加えていかないと、おかしくなっちゃう。一定の人の話を聞いて、正しくて他のものが駄目だとしてしまっても駄目だし。むしろ、何にも言わない人でひと言、ふた言、出て来た言葉の方が重みがあることが多いんですね。あとはそういう人たちを取り上げると、「今度はこういう人が見つかったよ」とて言ってくれる人が出てくるんですよ。そうすると輪が広がつてくる。

聞き手

『「めんくだい、足尾のこと」を教えてください！』はそういう意味もあって、読んでくれて「ここは違うよ」とか言ってくれる人が出てきてくれる方がいいですよ。

村上先生

あれを読んで一番生々しいのは植生盤のところで、現に植生盤の仕事で子供を大学にやつた人のいるし。それから植生盤の前の仕事で、河原から砂利とか石を運ぶへいっぱち。

戦後は履物がない時分で、坑内でも地下足袋が足らない時代だったんですよ。だから、

以下は、お邪魔した当日にいたいた資料を抜粋したものです。一部中略していますが、太字のところは太字のままで、記載通りの言葉のままで掲載しています。

2016/11/20

私の聞書ノート

村上安正

私の経歴

1931年3月下旬の商家に生まれる。1945年3月東京夜間大空襲で被災して足尾に転居し足尾工業学校に転学。1958年通洞坑の現場係員に転属。1971年末本社に転勤。1971年3月定年で退職。以後2001年まで他社で勤務する。その間閉山後に足尾記念室や坑内観光の事業に参画する。

私の聞書記録

1955年4月『ぜんこう』編集部からの依頼で、古老野田勇太から明治期からの聞書を中心に「足尾銅山の思い出」を一回連載後、以後鉱毒事件の対象8年争議まで計30回分連載（～1956年8月）  
1956年3月『足尾銅山労働運動史』の編集責任者になり、執筆から編集発行までを任せられる。戦前の運動者へのインタービューは南助松ら6名、他に在籍中の坑員対象の座談会を一ヶ月開催し記録する。1958年7月に本書を発行（690P）、その座談会妙録は拙著『足尾に生きたひとびと』

228Pに入れた。

尚拙著『足尾銅山史』2006年3月654Pでは、限定した鉱山史ではなく総合史とすることを心掛け、主要な聞書の活用も心掛けて書いた。別紙に近代の記録を抄載。

(中略)

メモ、会話、日記から編集、自伝、口述を資料で補完する。

#### 口述史と歴史の違い

聞き手は話してが体験した事實を話したことをまとめ、それを引き出し、それを歴史的事実を照合しながらまとめる。一職場のこと、家庭生活、事件など。歴史は文書などの史料をベースにしてまとめるが、口述資料を加えることで豊かな表現になる。日立の『鉱山と市民』は正史と聞き書きを共存した著作で、塙作楽が監修。

#### 口述史の持つ危険

口述内容の格子を決める。口述対象者（個人または小集団）。話の糸口、進行のため聞き手と話し手との信頼感が大切。本題から離れた内容も見逃さない。発言者の膨張癖や寡黙癖にも注意する。聞いた内容は精査をして誤りを正す。

特に坑内仕事の口述は、閉山後40年以上を通過、坑内現場勤務者は殆ど珪肺で世を去る。採掘跡は今全く見られず。往時の状況をまとめて検証できるのは私を含め数人しかいない。また資料の内容を吟味して選択しないとどんなでもない誤りを冒すことがある。また父母が坑内や生活の体験談を聞いた場合には、真偽を充分検討する必要がある。また口述史専門家の下した断定が誤っている場合もあるので要注意。

#### 戦時下に虐待されたとする足尾での中国人、朝鮮人の実情について再検討する。

中国人は軍が爺ヶ沢に合宿施設を収容所に入れ日常生活を管理、「ここから引率して坑内係員詰所で受渡し、仕事が終わると隊伍を組んで退勤した。これが拘束時間。鉱山が現場で受け入れた中国人は作業場現場まで日本人が案内した。その中には実作業できない者もいたが、この場合は収容所で休養させられるべきだったが。休業中の食事は就労時の1/2しか支給されなかつた。この場合の作業例では、1t積み粗鉱を積んだ鉱車を3人で押し運搬したという証言もある。NHK記者はこれが明らかに虐待の典型だとしたが、私はこれは温情だと論破した。そのわけは普通坑道の加背は1・4mと狭く一人押ししかできず、3人押し用の坑道は基幹坑道しかなく、脱線しても手助けが得られた。

朝鮮人は邦人が居住する社宅地域から隔離した社宅に集中居住し、これを仕切る朝鮮人が就業を強制的に督励しリンクしたことがある。1960年代に朝鮮人問題を告発した朝鮮人は強制労働の体験をこう述べる。彼は線路夫見習中の最初の仕事は、上部坑道の線路延長のため6kg/mレール2本(重量32・4kg)ミニラロープで縛り、肩に吊るして高さ30m上げる作業だつたが、これを半島人に対する虐待行為だと糾弾した。だがこのレール運搬車は初心者向けの最も軽い仕事だつた。これを聞いた時、私は啞然として口がふさがらなかつた。

#### 話し手の選定

雄弁者に頼り過ぎないこと。また個人だけを対象にせず、数人同じことを聞く。先ず話し手との信頼関係を作り。その内容を把握できるように心掛ける。

証言者からも片言や呟きでも聞き出す努力をする。  
聞き出した話をまとめ、足らないところを補足し、事実に突き合わせる。そして疑問点があれば直ちに書き出す。

私が学んだこと

初心者では期待できる答えが出ないことがあるー「白井操の生涯」

まず聞き手に顔を覚えてもらい、話を聞き出すよう努める。その都度靈場などを出す。基本的な事実を踏まえ、これに対応する努力をする。その上で疑問に思うことや事実誤認を正す努力を重ねる。

(中略)

誤った解釈から生じた誤り

岩波文庫『近代はやり唄集』に載つた「足尾銅山ラッパ節」の歌詞の中の下飯場の熟語に著者がつけたルビが「げはんじょう」になつていたが、正確なルビは「したんば」になる。

これを筆者は飯場の本来の意味を全く知らなかつたとしか云えない。飯場制度については平凡社版『世界大百科事典』や『広辞苑』にも載つてゐるが見ていない。飯場については漱石の『坑夫』改版の注でも正確に記述していた。他にも大切を歌舞伎の大喜利になぞらえ、金州は、本来坑夫仲間で相手の名の頭文字で呼び合う単語だつたが、注では遼東半島の地名を持ち出す愚を犯した。こういう誤りを改め正しい解釈に直すべきである。

年経つて当時のことを知る者が激減した。その中で松木の植生盤運搬に携わつた女性の発言は当事者

しか判らない生の声が記録された。だが坑内の場合、次世代からの発言で物足りなかつた。

足尾のこと教えてください ーから

抗葬には樂団演奏があるー銅山に共同委員会がある、体育競技や音楽隊の運営を助けた。運動会の行進もブラスバンドが先導した。

従業員は坑夫ではなく鉱員。削岩機は鑿岩機ではない。

鉱物結晶は、スカリと呼び珍重された。主に石英や方解石をベースに黄銅鉱などの金属鉱物の結晶が共生する。その在処は鉱床脇の空隙部で、入り口は狭いが中は広く人間の女性陰部に似た構造で、これが大直利につながる可能性が高い。直利が出ると退坑時に酒樽の鑑を抜いて酒を振る舞つた。またスカリの持ち出し取締りのため抗口で「火薬点検」を行つたが、話し手はこれを知らない。閉山から45

#### 村上安正著書一覧(代表的な著書)

- ・村上安正『足尾に生きる：私の人生八〇年』隨想舎、2012
- ・村上安正『足尾銅山史』隨想舎、2006
- ・村上安正『山の町足尾を歩く—足尾の産業遺産を訪ねて』わたらせ川協会、1998
- ・村上安正『足尾に生きたひとと：語りつゝ民衆の歴史』工房隨想舎、1990
- ・村上安正編『足尾銅山労働運動史』足尾銅山労働組合、1958

科研費チームが足尾に通いながら、出会った、足尾を知るのに優れた資料をご紹介します。

---

番外編

## 足尾を知るためのオススメ資料

**1 「広報あしお縮小版」**

だれでも、一度は自分が住んでいる地元の広報誌を目にしたことがあるのではないでしょうか。地域で起きている出来事や話題といったローカルな情報を扱っている市町村の広報誌は、新聞や週刊誌のように不特定多数の人に向けて情報を発信するのとは異なり、読み手として想定しているのはその地域で暮らしている住民で、その記事は極めて土着性と地域性が色濃く反映された内容になっています。

その地域固有の広報誌として、足尾町が昭和三四年一一月から平成八年三月までの期間に毎月発刊していた「広報あしお」を凝縮して二冊の本にまとめたものが『広報あしお縮小版』です。本書の特徴は足尾町の時代的変遷を大局的に追うことができるほか、掲載されている町民の声を通じて、当時の町の雰囲気や臨場感を読み手に提供してくれるところにあります。また、四〇年以上の広報誌が凝縮されているので本に多少の厚みはありますが、町民向けの広報誌という性格上、専門的な用語が乱立することなく平易な文章で読み易いことも本書の特徴の一つ。

足尾町の歴史を知る入門書として、ぜひ手にとって読んで欲しい一冊です。

〔中村哲也〕

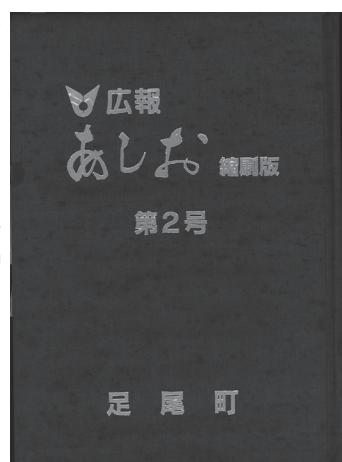
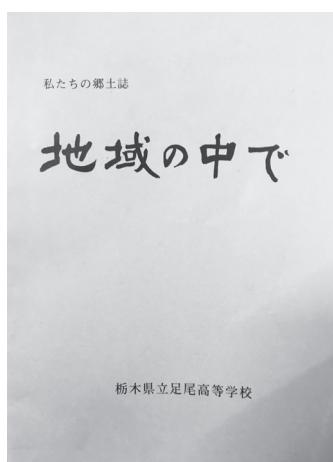
## 2 生井貞行「銅山閉山にともなう足尾町の変容」（一九八一年、「経地年報」二八一、六〇—六九頁、経済地理学全）

足尾の歴史や産業技術などに関する研究は数多くありますが、閉山後の足尾についてまとまつた研究は多くありません。その中でも、閉山直後の足尾で実際に調査を行い、各地区の人口や社宅の変化、財政、産業構成や事業所数の変化など町の変容を細かく記録した貴重な研究です。閉山の影響といつたときに古河関係の労働者とその家族に注目が集まりがちですが、その他にも銅山町を構成していた商店や娯楽施設など町部と言われる地区にどのような影響を与えたかを明らかにしています。足尾町がどのように変わつていったのかを知るうえで、とても参考になる論文です。日本の学術論文検索サイト「C・i・N・i・i」から閲覧できます。

## 3 栃木県立足尾高等学校『地域の中で』（一九八五年）

足尾高校普通科の授業の一環として行われた聞き取りの記録集で、昔の足尾について、それぞれの関心のあることを祖父母や両親、友達から話を聞いて調べたことを生徒たちがまとめています。これまで暮らしてきた足尾で、身近な語り手に対するユニークな視点から聞き取りがされていて、なかなか地域史には残らない細かなエピソードが紹介されています。ここで取り上げる二つの冊子はどちらも閉山から約一〇年経った時のもので、聞き手の生徒たち自身は物心ついた時に閉山を経験した世代だったということも興味深いです。自分が暮らしてきた町がほんの少し前までとは大きく変化していくことを知つていくことはどのようない体験なのだろうかと考えずにはいられませんでした。

この冊子で興味深かったのは閉山によつて足尾から転出した後に、足尾に戻つてくることになったある家族の記録です（〔22 閉山〕一一五一一七頁）。この家族は閉山後、父親が古河系列の会社へ転勤となつたために足尾を離れるが、三年後には足尾にある別の古河系列の会社で募集があり家族会議の末、足尾に戻ることとなつたそうです。その理由は転勤先の仕事が忙しかったことと親戚の多くが足尾に残つていたことだったそうです。記述からでは何人がそうして戻ってきたのかはわかりませんが、



「Uターン組」とされていることから一定数はそうした方々がいたのかもしれません。出て行く人と残る人以外にも、戻ってくる人たちがいたことに気づかされました。足尾歴史館の二階にある学校関連の書籍コーナーにて閲覧できます。

【三浦一馬】

#### 4 足尾高校『あかがねの里から 足尾町見聞録』(一九八六年)

こちらも『地域の中で』と同様の足尾高校普通科による聞き取りの記録集です。ちょうど足尾線の開通に伴って銅山の労働者が増えた時期に山形県から足尾に働きにやってきた両親に聞き取りをしています(庄司伊都子「閉山前の足尾の生活」三五—三六頁)。今は無くなってしまった「婆火」という精錬所の近くの社宅で暮らしており、夏は火の粉が降りかかるぐらい近くで打ち上げ花火をしてしたこと、雨の日には山水は濁ってしまったので、赤倉のロータリー近くの豆腐屋裏の井戸に水を汲みに行かねばならなかつたこと、冬は凍ったダムでスケートを楽しんだことなどが描かれています。この冊子は聞き取りが中心で、生徒たちの心情とともに昔の足尾について描かれています。身近な町について身近な人たちに聞き取りをしていた姿が目に浮かびました。足尾歴史館の二階にある学校関連の書籍コーナーにて閲覧できます。

【三浦一馬】

#### 5 『明るい町』編集部『町民がつづる足尾の百年 銅山に生きた人々の歴史』第一部・第二部(第一部一九九四年、第二部二〇〇〇年、光陽出版社)

足尾には『明るい町』という地域政治新聞があります。一九八九年に足尾は町制施行百年を迎えたのですが、それを記念して一九八八年九月から「足尾の歴史とともに生きてきた人たちの、貴重な人生体験」を聞き書きする「町民がつづる足尾の百年」という企画が始まりました。『明るい

町』に連載され、それをまとめたのが第一部、第二部の二冊です。足尾町民ののべ三六九名の語りがおさめられており、そこで生きている人々の声から足尾の生活と文化を知るうえで必須の本と言えるでしょう。「銅山に働く」「足尾の教育・文化」「思い出の名所・旧蹟」「銅山町の商店街」「苦楽を共にしたやまの暮らし」(以上、第一巻)「銅山で働いた人たち」「町を支えた商人・職人さん」「歴史の跡をたずねて」「思い出のくらしと名所」「足尾の教育・文化・スポーツ」「革新のたたかいの足跡」(以上、第二巻)。いまはもう多くの方が亡くなられており、聞き書きされた語りは、当時の足尾を知るうえで、本当に貴重な記録です。地元新聞の地道で息長い企画に、私は敬意を表したいと思います。

【好井裕明】

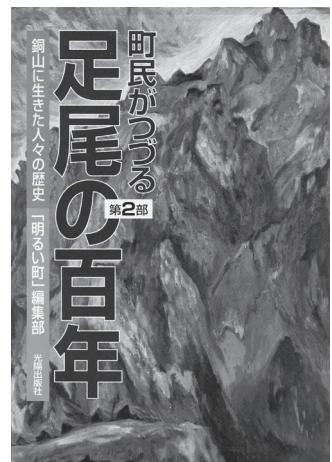
#### 6 新井常雄『新井常雄版足尾銅山写真帖』(隨想舎、二〇〇一年)・伊東信さんの写真

私たちが聞き取りで伺うことのできる、ちょっとと前の昭和の足尾を記録している写真家の一人が新井常雄さんです。鉱員として働いていたことから、精錬所や仕事場、松木の写真が特徴的です。書籍が発行されていました、平成二四年に栃木県文書館には撮影された写真のネガが寄託されており、同館で閲覧が可能なため、その写真を私たちは見ることができます(実はこの保管を繋いだのは、村上安正さん)。改めて当時からの村上さんの資料の扱い方にも感心してしました)。

新井常雄さんは、同僚の写真友達がいました。そのうちのお一人である、伊東信さんには、私自身、協力隊在職中にお世話をなりました。ご自宅で資料を見せていただいた時、木箱や缶箱に湿気で風化しないよう



6



5



5

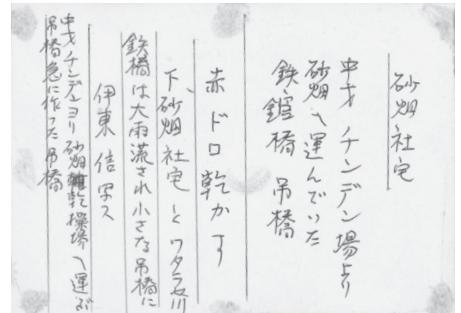
に、丁寧に昭和三〇年代に自分で現像した白黒の写真がびっしりと保管されていました。伊東さんの写真は、ご自宅の砂烟の風景や、行事、休日の家族の山遊びの様子、そして閉山時の社宅の解体写真など、生活に密着した記録でした。手作りのアルバムや、多くの写真是、裏などにきちんと撮影日やメモ書きがあり、相当な資料であることは一目でわかりました。

たとえば、アルバム『砂烟橋が出来るまで』では東京タイムズ社賞を受賞した昭和三〇年撮影『砂側橋』写真から始まる記録です。「基礎工事は始められた」「一本のロームによつて運れて来る 品物は二人の女によつてリやカーペット坂を引つ張る」此れが又 大変な汗だつた(メモのまま記載)といった工事工程の説明から、完成のテープカットの様子では「花火も青空高く上げられはじめられた」初めて四輪車が新橋を通つて砂烟へ入るのだなどなど、事細かでユニークなコメントセンスがあります。

伊東さんの冊子「ごめんください、足尾のこと教えてください!」にも多くの写真を提供していただきましたが、制作中に永眠されました。残つた大量の写真の保管方法をご遺族が悩んでいらっしゃり、文書館にも相談の上で、新井さんの写真のようく寄託することとなりました(現在栃木県立文書館でアーカイブ作業中)。

写真 자체の美しさや、人の想いが詰まつた資料の強さにも触れるこの面白さを教えてくれる、足尾のカメラ愛好家達の存在。その資料の一部が、然るべき場所に保管されることによつて今後、必要な方にも伝わることを願います。

〔志村春海〕



「砂烟社宅中才チンデン場」の写真表面(上)と裏面(下)

## 7 足尾町教育委員会・足尾町文化財調査委員会『足尾銅山の産業遺跡』 (一〇〇六年)

「日本で最初に架けられた細尾索道」「足字銭鑄銭座があつた場所の検証」「製鍊所の名物であつた四本煙突」「神子内に残る軽便馬車鉄道の跡」「保存された渡良瀬橋」「積年の煙害に終止符をうつた自燃製煉法」「囚人を使役して労働力を補つた明治初期の足尾銅山」「国産第一号のさく岩機を作成した足尾銅山工作課」「間藤水力発電所から足尾町営電気事業への進展」「掛水社宅で没した『富岡日記』『富岡後記』の著者和田英」「足尾銅山にいた隠れキリストン『東庵』」「足尾銅山の私立校であった本山小・小滝小・実業学校」「県下に誇つた足尾銅山附属病院」「日本最初の電気機関車の発達」「古河市兵衛没後の坑職夫の生活記録」「無用の長物であつた製煉所の大煙突」「煙害で消滅した松木地域旧三村」「新聞で見る足尾銅山閉山の序章」等々。見出しから主なものを列挙してみました。まだまだ興味深い見出しが並んでいます。当時の写真や図版も多く、優れた調査報告書です。足尾銅山を考えるとき必見です。非売品なのが残念です。

### 8 村上安正『足尾に生きる 私の人生八〇年』(随想舎、二〇一二年)

日本産業技術史学会の学会賞をとつた労作『足尾銅山史』は、著者のライフワークです。自宅へお話をうかがいに行つたとき、銅山で働いていた時に著者が手書きで作成した坑内調査の図面を何枚も見せていました。私は、その詳細さ、ち密さに驚嘆し、著者のまじめな仕事ぶりに感動したのです。本書にも、こうした著者の誠実さや生真面目さが反映されています。「錦糸町時代 生い立ちから戦災まで(一九三一年～一九四五)」「足尾時代 戦後の生活(一九四五～一九四九年)」「ビジネ



ス生活 足尾鉱業所（一九四九年～一九七一年）「本社勤務（一九七一年～一九八六年）」「学会賞受賞まで」「わが人生を顧みて」「あとがき」。著者の自宅書斎には二階の床が抜けそうに思えるほどの文献や資料があり、倉庫には、さらにそれに輪をかけたくらいの資料や文献が置かれていました。産業技術の立場から足尾銅山を徹底的に調べあげた在野そして現場の研究者としての自負が著者の語りに貫いています。

〔好井裕明〕

## 足尾に生きる

村上安正

私の人生八〇年

隨想會

### 9 上岡健司『鉱山の仲間とともに』（光陽出版社、二〇一二年）

お話をうかがいにいくと、上岡さんは必ずにこやかな笑顔で迎えてくださいます。弁舌さわやかでユーモアたっぷりに労働運動でのエピソードなどを語ってくれた著者。私はこの人こそ、足尾での本当の意味での知識人だと感じ入り、お話を聞き入っていました。明治以降、足尾銅山でどのような問題があり、労働運動が盛んになつたのか。また運動が資本側の力でどのように抑え込まれようとしたのかなど、著者の人生語りのなかに、鮮やかに浮かび上がります。目次の章立ては次の通りです。

「坑内労働者のたたかい」「銅山の繁栄と我が家暮らし」「軍國教育、そして敗戦の混乱」「労働組合運動へ」「不当解雇反対で裁判闘争」「町長・町議選をたたかう」「閉山」「町民の団結」「長男を突然失う」「うつ地獄へ陥る」「3・11東日本大震災後のいま」「おわりに」

著者の暮らし、そして人生のなかに労働運動という“筋”が一本しっかりと貫いており、その事実が読者に感動を与えていることがわかるでしょう。足尾銅山の労働運動を知る必須の一冊です。

〔好井裕明〕





五年ほど前、志村さんから一通のメールが届き、足尾へ初めて訪れるようになりました。その後、足尾の行政の方や学校の先生など、多くの方々の真摯で暖かい協力を得、地元の人々から、いろいろお話をうかがつてきたのです。私はこれまで差別問題や薬害HIV感染被害問題などで聞き取り調査をしてきていますが、今回は、これまでとはまったく異なる聞き取りを志村さんたちと行つてきました。

日光市の街おこし協力隊として、期間限定ですが、足尾に住み、顔なじみとなり、地域の人たちと日常的な関係をつくり、深い信頼関係を築いている志村さんや中山さん、市之瀬さん、長澤さん、中山さん。彼らを中心として、そして彼らに協力してもらいたいながら、私も生活史の聞き取りをしたいと考えたのです。それと足尾に何回も訪れるなかで、聞き取りの成果は、確実に地元の人々に還元したいと思うようになったのです。そして、足尾で暮らす数多くの人々にお話をうかがう仕方は、ある意味『ゆるく』『無理をしない』聞き取りでした。それは、ただ学術的で根掘り葉掘り聞き、正確で深い情報を搾り取ろうとする聞き取りではありません。そうではなく、志村さんたちの生活実感を第一としながら、私のような研究者もそこに寄り添っていくという地域中心・地域還元型とでもいえる聞き取りでした。そして、本書は、聞き取りを実際に行つたメンバーが全員何かを書き残すという方針で、それぞれがまとめた足尾をめぐるテーマを出し、それをもとに構成していくま

す。

本当に多くの人々からお話をうかがえました。それをすべて本書に記録することなどできませんが、本書には、多くの語りから得た足尾をめぐる『生きられた』知が反映されています。これまで得られた多くの語りは、まだどこかで役立てることができればと思います。聞き取りに協力していただいたみなさん、本当にありがとうございました。

なお、本書は、平成二八～三〇年科学研究費基盤研究(Ｃ)「産業遺産の記憶と『生きられた』生活世界の社会学・足尾の生活文化史聞き取りから」(研究代表・好井裕明)の成果となります。

〔好井裕明〕

足尾を初めて訪れたのは二〇一五年の冬でした。私はしばらく北海道で暮らしていたこともあります。寒さにはある程度慣れていたのですが、身にしみるような寒さは北海道のそれとは違い、閉山した町というイメージともいまってか悲しい気分になつてしまつたのを覚えています。けれども、聞き取りを通して気付かされたことは、確かに足尾は静かになつていく一方の町であるかもしれないけれど、そこで暮らす方々にとつてはそうした足尾も生活の一部で当たり前のものであるということがでした。

聞き取りに関わるようになつたきっかけは元地域おこし協力隊員だった志村さんに誘われてのことでした。そこで、同じく志村さんに呼び寄せられていた好井先生に出会い、当時は大学院を探して彷徨っていた私は日本大学に進学することで落ち着き、現在までなんとか聞き取りを続けていくことができました。

また、これは何処の馬の骨とは知れないような私にお話をしてくれださった足尾の皆さんのおかげ

私が足尾町に興味を持ちはじめたのは社会人として大学院生を過ごしていった時期でした。周囲の同級生達は自分のやりたい研究テーマが早々に決まり、実際にフィールドに出て調査をしたり、関連する資料を涉猟して論文の作成に向かって確実に前進している中、そのような優秀な学生とは程遠い場所に位置する私は何もできないまま時間だけが過ぎていきました。

こうした悶々とした日々を積み重ねていた時期にたまたま仕事で足尾町とかかわり、そこで地域の方々から足尾町の生活や歴史についてお話を窺ったことが私にとって足尾町との関わりの始まりでした。その時にどのような話を聞いたのか、その全容はすでに忘れてしましたが、足尾銅山や公害といった町の表面的で断片的な知識しか持ち合わせていないかった私に足尾町の歴史の奥深さや地域の魅力を丁寧に教えていただいたことを憶えています。

〔志村春海〕

念ながら調査不足です。また、生活や山仕事に密着していた女性の視点を扱えなかつたのも心残りです。それに、坑夫達の喧嘩話や、インチキ話、子供のガキ大将の話などは、とてもお行事の良い内容ではありませんが、生き生きとした素晴らしい話です。やればやるほど、次の視点が広がり、聞き取りは果てがないこともわかりました。

足尾には町史がないまま日光市に合併しましたが、さらに過疎化も進み、一次資料に触れたり、銅山としての足尾は遠くなっています。でも、それも今の足尾の現実で、足尾の人が足尾を好きなことや、語り出すと止まらない様子（時には話せない瞬間）も大事な姿ですし、これからどうなつたとしても、終わりはないと思います。私も通常回数が減つたとしても、足尾に向き合い続け、これらの足尾に関わっていきたいです。

足尾の聞き取りで、よく覚えている日があります。足尾に来て一年目の冬のある鉱員さんへの聞き取りで、おそらく、三時間以上はお邪魔していました。企業の福利厚生で行われていたスポーツや行事の面白さ、坑内の空間の広さや事故の話…。後半には、社宅の近所付き合いが時代とともに変わってしまったことを、話し手自身が、語りながら気づいていき、寂しさとも違う、もう戻れないことを確認するような、なんとも言えない瞬間にになりました。正直、多くの情報に頭はいっぱいいっぱいで相当疲れたのですが、それでも大きな何かにぶち当たつたような、聞き取り（らしきもの？）の醍醐味を思い知りました。そこから幸運なことに、一緒に足尾の聞き取りを楽しんでくれる仲間も増え、ひとまずは六年間のまとめに取り掛かることができました。関わってくださった全ての皆様、どうもありがとうございました。

本当は、もっと掲載したい内容は沢山あります。まず、栃木県以外の下流部や、企業の視点は残念ながら調査不足です。また、生活や山仕事に密着していた女性の視点を扱えなかつたのも心残りです。それに、坑夫達の喧嘩話や、インチキ話、子供のガキ大将の話などは、とてもお行事の良い内容ではありませんが、生き生きとした素晴らしい話です。やればやるほど、次の視点が広がり、聞き取りは果てがないこともわかりました。

足尾の聞き取りで、よく覚えている日があります。足尾に来て一年目の冬のある鉱員さんへの聞き取りで、おそらく、三時間以上はお邪魔していました。企業の福利厚生で行われていたスポーツや行事の面白さ、坑内の空間の広さや事故の話…。後半には、社宅の近所付き合いが時代とともに変わってしまったことを、話し手自身が、語りながら気づいていき、寂しさとも違う、もう戻れないことを確認するような、なんとも言えない瞬間にになりました。正直、多くの情報に頭はいっぱいいっぱいで相当疲れたのですが、それでも大きな何かにぶち当たつたような、聞き取り（らしきもの？）の醍醐味を思い知りました。そこから幸運なことに、一緒に足尾の聞き取りを楽しんでくれる仲間も増え、ひとまずは六年間のまとめに取り掛かることができました。関わってくださった全ての皆様、どうもありがとうございました。

〔三浦一馬〕

少しずつ足尾町に関する興味を覚えた私は、町に関する資料を集めては休日の日に足尾に行つて地域を散策し、地域の方々からお話を聞くということをしばらく続けていきました。その中で地域の方々が語る足尾町の歴史は、教科書や公的な文書には載っていないような内容の面白さと熱量に溢っていました。そして文章には記されていない、残されていない一人ひとりの内面にある足尾町の姿をもっと知りたいと思っていたところ、このような生活史の聞き取り活動をしていたのが、当時、足尾の地域おこし協力隊として着任していた志村さんでした。こうして志村さんの活動に羨望の眼差しを向けつつ、時折、ホルモンを食べながら情報交換をさせていただくうちに、志村さんを介して好井先生や三浦さんに出会い、今回の活動に声をかけていただき参加させていただきました。

今回の聞き取り活動には時間的な都合がつかず参加できない日々も続きましたが、それでも少ない時間の中で科研チームの皆さんや足尾の皆さんに会って話を伺えたことは、私にとって貴重な経験と財産となりました。大好きな足尾町に関わることができて嬉しかったです。そして本当にありがとうございました。

〔中村哲也〕

## 資料編

協力 日光市

ごめんください、足尾のこと教えてください！——地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集

## この冊子を手にしてくださった方へ

この冊子は、平成25年度から足尾で活動する地域おこし協力隊「1」が行つた、生活史の聞き取りの内容を抜粋して掲載しています。「聞き取り」と表現していますが、最初は「足尾について教えてもらえませんか?」という立ち話から始まり、お年寄りの集まりや日常的なお茶飲み話など様々な場面で、地域の方にお話を伺つたものです「2」。私たちの聞き取りでは、話し手の方にとっての出来事の見え方や気持ちを大切にしています。そのため、中には曖昧な部分や歴史的事実と異なるもの、適切ではない表現などが含まれることもあるかもしれません。けれども、過去がそのように記憶され、今このように語られるということも貴重な足尾における生活史の一側面だと考えています。話の信憑性について、疑問を持たれる方もいらっしゃるかと思いますが、「こういう生き方や想いもあつたんだな」ということで読んでいただけたらと思います。

冊子を読んでみて「自分の経験や見方とは違うので、言いたいことがある」「意見や記憶を伝えたい」という方は、地域おこし協力隊までお知らせいただき、是非お話を伺わせて下さい。この冊子が、様々な視点に出会うきっかけとなれたら幸いです。また、冊子とは別に聞き取り全体の文字おこし資料を日光市役所足尾総合支所で保管しています。

最後になりますが、貴重なお話を聞かせていただき資料化にご協力くださった皆さま、いつも私たちの活動をご支援してくださる皆さまに深く感謝申し上げます。

1 総務省の取り組みで、人口減少や高齢化などの進行が著しい地域に、地域外の人材を一定期間誘致し、その地域の活性化を促進する活動を行つている。日光市足尾地域では平成23年度から導入。

2 この冊子での基本的な聞き手は、地域おこし協力隊の志村春海(以下、S)、中山京(以下、N)。また、口述史の観点から、日本大学文理学部社会学科教授の好井裕明さん(以下、Y)にご協力いただきました。

02 この冊子を手にしてくださった方へ  
04 凡例

### | Q1 | チヨリチヨリって、どういう意味ですか?

渡良瀬川と鮎 [2014年1月10日]  
ハゲ山のウド [2014年2月10日]  
煙に慣れる [2014年5月19日]  
公害の足尾というイメージ [2014年8月20日]

16 足尾小話「お客さんからのお土産」

### | Q2 | 坑内ってどんな場所なのですか?

坑夫のお父さんの仕事 [2013年7月11日]  
カンテラの光 [2014年1月10日]  
坑内の職場 [2014年9月18日]  
足尾小話「坑内でのユーモア」

### | Q3 | 社宅の暮らしへ、どんな生活だったのですか?

鶏小屋にみえる [2013年11月26日]  
夢のような近所付き合い [2014年1月10日]  
部屋の広さ [2014年8月19日]

### | Q4 | 戦時中、外国人の人とどんなやり取りがありましたか?

イモとコッペパンを交換 [2014年4月15日]  
豊な知恵を教えてもらう [2014年7月]  
近所の人や進駐軍との交流 [2014年7月7日]

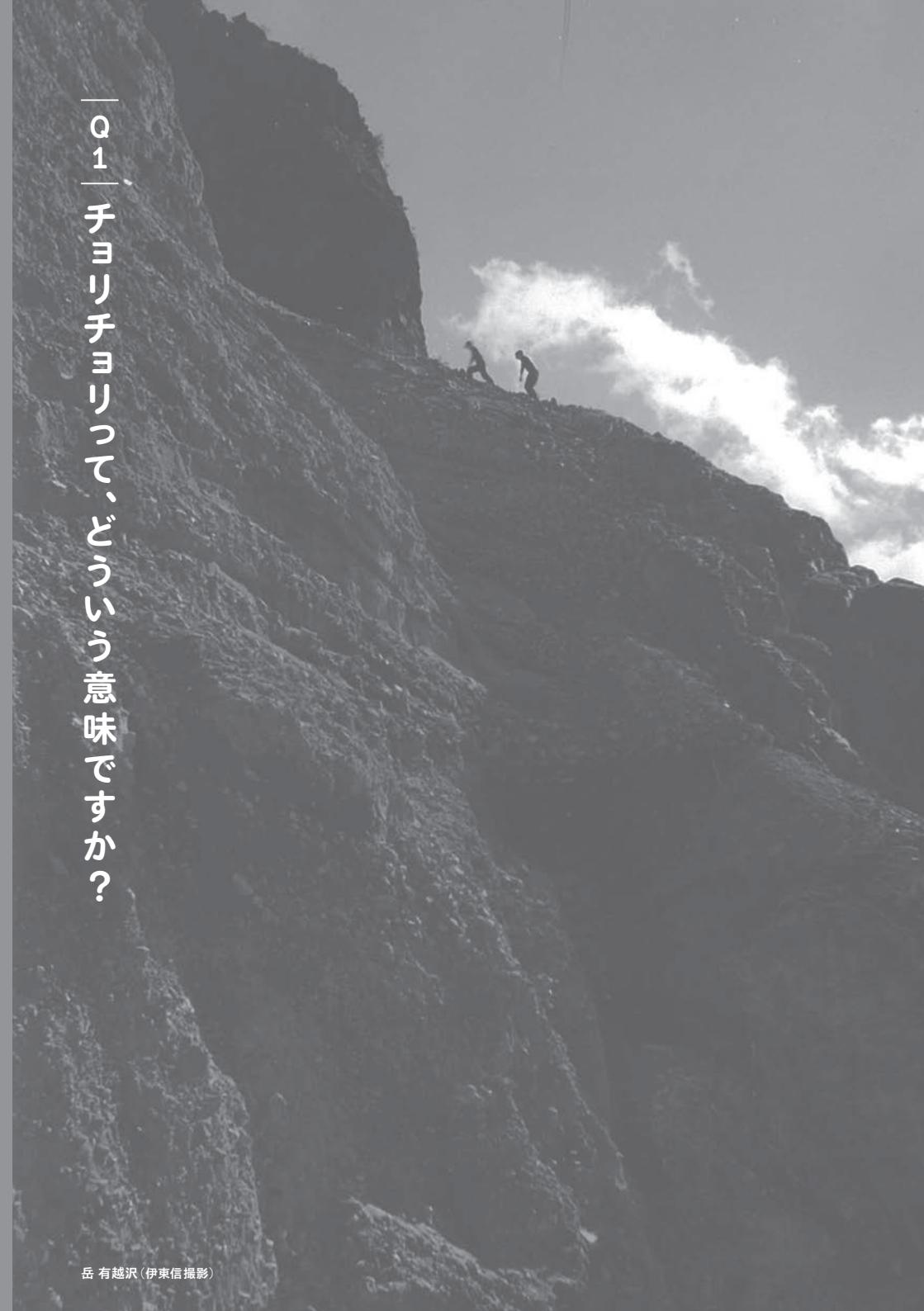
### | Q5 | キラキラした石、見つけたのですが……

鉱石のようなお菓子 [2013年7月11日]  
喫飯所で鉱石を洗う [2014年3月5日]

58 坑内のしくみ

60 おわりに  
61 地図  
62 年表  
63 用語集  
64 クレジット

## Q1 チヨリチヨリって、どういう意味ですか？



### 【凡例】

- ・話し手の方は、次の通りに掲載しています。
  - 1 ..夫婦の場合は、夫、妻。兄弟の場合は、兄、弟。
  - 2 ..男性はM、女性はF。複数の場合はMa、Mbと表記。
  - 3 ..市職員はPa、Pbと表記。
- ・沈黙は、……。○○……。○○。……○○。
- ・省略は、……(省略)……。
- ・話の途中で途切れている時は、「」で次の会話を統っています。
- ・笑い声はカタカナ表記。もしくは(笑)です。
- ・語りの中で誰かの発言の真似などは、「」で表しています。
- ・冊子全体の共通する用語は63頁の用語集に掲載。
- ・その他の鉱山用語地名や補足には注を入れ、典拠があるもの以外は協力隊が編集しています。
- ・( )の使い方は2種類あります。
  - 1 ..インタビューの場の状況や状態を表しているもの。
  - 2 ..文脈を理解しやすくするために編者が補ったもの。

### 【聞き取り抜粋の編集方法について】

- ・聞き取りを行った時系列順に掲載しています。
- ・聞き取り抜粋箇所の後に、協力隊2名のコメントを掲載しています。
- ・話し中に出てくる地名や言葉については、61頁「地図」、63頁「用語集」をご覧下さい。

高齢者の集まりで押し花を作る場面のこと。会場付近で昔は植物が見当たらなかつたので、遠く（豊潤洞〔1〕）まで花を摘みに行つてゐたという話になつた。その中で、「煙で植物がみんなチョリチョリになつた」と皆さんがあくまで花を摘みに行つてゐたといふのを言つてゐた。この「チョリチョリ」、私たちにはあまり馴染みのない言い方なので意味を尋ねると、製鍊からの煙で植物がチョリチョリ（枯れたような、しなうてしまうような感じ）になつてしまふという意味だと知つた。当時チョリチョリにならないように煙が来たら植物に新聞紙を被せて守つたという話は、このよだんな会話だけではなく、新聞記事でも確認できる〔2〕。「公害の町」というイメージが先行し、実際の生活ではどのような風景があつたのか知らなかつた。少し聞きづらいとも感じていた公害の話題だが、実際の生活の中に馴染みのある場面として、ふと登場する。

## 渡良瀬川と鮎

〔2014年1月10日〕夫・妻・志村・中山

偶然お会いした方に、仕事から生活風景、人間関係や当時の気持ちなどの話を聞かせていただいている。初めてお話を伺つた時は、台風時、銅山の施設が浸水し、水処理をする専門の方が苦労されたとのこと。そこから公害の話題になる。昭和30年代の話。

夫 それで、鉛毒問題が出ると駄目なんだよな。インチキもある。鉱山も大変だつう。……だから魚なんか今、渡良瀬川の

下流あたりで、鮎釣りやつてゐるでしょ。あれだうて始めはそこの人らがするくてさ。鮎を渡良瀬川に放して、「死んだら鉛毒のせいだ」と言つて賠償とする気になつて、始めはそれでやつたんだよ。鮎放して死んだらそれ調べて「これは鉛毒、鉛毒で死んだ」と。そうしたら、鉛毒が入つてないで、いたずらとかああいうので死んだつて。だから一匹死ぬと大変だつた。持つてきて調べて、「鉛毒だ」と言つたら直ちに「賠償とするべ」とそこの人らがわざと放したんだから。鮎を。いたずらばかりなんだもん。モリで突かれたとかそういう跡ばっかりあつて。んで、今度はそ

こあたりで鮎釣りやつてゐるもんね。……だからもう、目の敵でいろいろのを取る氣でいたんだよ。

S ふーん。

妻 フフフ。

夫 そういうあれがあるんがね。それそこのやつが言つていたもん、「まさか渡良瀬川で鮎釣りができるとは思わなかつたよな」と。頭のやつが言つたんだべ。「鮎が死んだら賠償取れつから放してみんや」と。そういうのがいたんだよ。そうしたら、「死なねえんだよな」と言つて。

一同 ハハ

妻 ね、

夫 「鮎が死んだら……」って言つたから確認してみると、「先が突かれたとか、跡があるから駄目だよ」と。知つている人はね、近くで鮎釣りができるって喜んでね。

妻 フフフ。

「お話を聞いて」

〔2014年2月10日〕夫・妻・志村

話し手の人柄のおかげで、こういう話題にユーネクさが加わり、嫌な気持ちだけではない形で今知れることが凄い。また、笑い話だけでは収まらない出来事の周辺で起つた事実も伝わる。

N 鉛毒による被害は広く研究されてきたが、このような足尾の住民が見聞きしたことや、古河が激動の時代に、当時の知識や技術を結集させて公害対策に取り組んだこともまた事実であると思う。様々な立場の方の色々な記憶を残すことが大切だなと思った。特に、公害対策に取り組んだ方々のお話を伺つていきたいと思う。

足尾では山遊びをしている方も多く、この夫婦は山菜やキノコ採りなど季節ごとに山の幸を楽しんできた。ハゲ山として知られる、松木エリア〔3〕も昔は遊び場の一つだった。昭和30年代までの松木の話。

妻 会社の社宅が松木の方にもあつたの。

S 松木の奥にですか？へー。それはどういう人が暮らしていたんだですか？

夫 会社の人とか、製鍊所に通う人とか、本山坑に通う人、そういう人たちの川に放した人の様子も目に浮かぶようで、人間らしさを感じた。

社宅があつたの。

S —あ、松木にもあつたんですね。へー。でも今つて、ゲートで仕切られちゃつているじゃないですか【4】。昔は松木の方に自由に行けたんですけどね。

妻 —私も行つて、ウド採りなんかをして。

夫 —昔は松木にウドが出たんですね、

S —あ、そうなんですか。私はもうゲートがある状態から来ちゃつてるので、なんて言うのかな、松木は立ち入り禁止の場所ついています。イメージしかないんですけれども。皆さんからのお話を聞くと、松木の川で遊んだり、松木を越えて中禅寺まで遠足に行っていました【5】とか、そういう話を聞くと、同じ場所なんだなと思って。

妻 —いい所なんですよ。

夫 —こつからよく、松木の久藏を通つて、中禅寺にみんな行つたんですよ。

妻 —歩きで山越して。

S —ああ、なんか遠足とかで行つたって聞きました。じゃあ、松木に遊びに行つたりしたんですか？

妻 —みんな、この辺の人なんかも向こうに遊びに行つたの。

S —遊びに行くつていうのは、登山とかそういう、木の実とかそういうのを？

夫 —採りながらね。

の木が生えると日陰になっちゃうから、駄目なんです。

S —あー、なるほど。ちなみに、その松木の場所つて、その山に遊びに行つていた時は、やっぱりそのハゲ山だつたんですか？

妻 —そうそうそうそう。ハゲ山が多かつた。

S —じゃあ全然、

妻 —今と違つた。今と違う。

S —なんか、ハゲ山、ハゲ山つて言われて、木がないっていうのは、頭ではわかるんですけど、どういう風景だつたのかがあまりわからんと言つたか。

妻 —わかんないよね。

夫 —ウドなんかが出て、鹿とかなんかがみんな食べちゃう。新芽の上を。

妻 —ハゲ山つていうか、そうね、何て言つたら良いだろうね。あの、道路の所に石がいっぱいあつて歩くでしょ、石が一杯あつて。

S —全部ですか？

妻 —全部、山が全部そういう風になつていて。

S —砂利みたいな感じですか？

妻 —そうそうそう。そういう山なの。

S —じゃあ、土が無い？

妻 —ない。土が無いんです。

S —へー、ウドか。

夫 —山のウドはいい香りがしてね。旨いですよ。

S —へー。

妻 —いい所ですよ。

S —足尾のいろんな方の話を聞くと、キノコとか山菜とか山椒もそうですよね。山ウドつていうのは、普通のウドとは違うんですけど？

妻 —違うの。あのね、山のこう、ズリ【6】つて言う、砂になつて山が崩れているんです。その中にウドが出てくるんです。

S —今はもう松木には生えていないんですかね？

妻 —今はもうね、無くなっちゃつた。絶えちゃつたの。みんな採りに行つたりなんかしてね、根をみんな持つて来ちゃう人がいるんですよ。全然違いますよ。

S —だから、そこの中を掘つて行くと、白いウドが真っすぐに生えているんですよ。今はトンネルで作つてあるでしょ、ウド、白いの。あんな風なの。それもね、自然の山のあれだから、香りがいいんですね。

夫 —芽がいくらか吹いたから、

S —そうなんだ。

妻 —それでばら、今度は山の緑化が進んだでしょ。それなんですね

S —へー。

妻 —粉になつちゃうんですよ。岩が弱つて。それがそういう風に、ざらざらになつて。

S —岩が弱つて、岩が更に砕けちゃうことなんですね。

妻 —そうそうそうそう。

S —それつて、危ないです。

妻 —危ないんですよ。

S —ズルズルつて、登つても滑っちゃいますよね。

妻 —ズルーッつて、下まで行つちゃいますよ。

夫 —だから、行くとカモシカとかが落っこちて、死んでいることがありますよ。

妻 —這つて行つて。

S —え、難しそう。

「お話を聞いて」

S —今の松木の様子と、岩が砕けるという表現で、初めてハゲ山がどういうものだったのかイメージできた気がした。偶然が上手く

重なり美味しいウドが芽生え、砂利山を這ってウドを探りに行く  
風景もあつたんだ」と、驚き。そして何より、本当に楽しそうに、  
美味しそうに話してくれたため、松木のウドを食べてみたかったと  
思わずにはいられなかつた。

### 煙に慣れる

「2014年5月19日—Fa、Fb、Fc（Faの娘）、志村、中山」

商店出身の幼なじみのお二人。町部「7」からみた、銅山の社宅暮  
らしについてお伺いした。現在80代のお二人の話に、片方の娘さん  
と私たちが加わり、昭和30～40年代の様子を思い出してもらつ。  
S—ハゲ山についての話を伺うと、子供が山に遊びに行つても草  
が生えていないから姿がすぐ見えて安心したとか、煙が来た時  
に新聞紙を植物にかけていたというのも聞いたのですけれど、そ  
ういうのってあつたんですか？

Fa—そういう風にしないと、朝、煙が流れくるんだよね。

Fb—製鍊の煙が朝に町部に来んですよ。

Fa—でね、みんなね、何か作り物をしている人は、みんな植物に  
新聞をかけたんですね。

Fb—新聞をかけたってね、隙間から煙は入っちゃいますよね、そ  
れでもいくらか違うんですね。

S—やつぱり今の山の風景とは違うんですか？

Fa—私もすっかり忘れていたけれども。  
Fb—花の咲いている人はみんなね、そういうのやつた。

Fc—私の小ちやい時の昭和40年代前半もやつた。

Fa—あ、じゃあ結構最近までのことではないんですね。

Fc—いやあ、だいぶ前だよ、ハハ。

Fa—全然違う。あのね、町部はそんなことないですよ。

Fb—赤倉、製鍊の近所ですね、あのハゲ山見るとね。

Fa—私は結婚した昭和31年にな、嫁ぎ先の関係で赤倉に行つ  
て1週間暮らしたんですけども、もう煙でね。初めて、同じ足

尾にてもね、もう真紫、煙が。もう喉が痛くて痛くて、いられ  
なくてさ。1週間だから我慢していられたけれど、私、そうじや  
なければいられなかつた。で、あそこに住んでいる人はそれが普  
通になつちゃう。

Fb—でも、赤倉に1週間いたんだ。

Fa—1週間いたんだよ、お勤め、お勤め。ハハ。お勤めの意味でい  
たのよ。それでね、子供の時からそこにいた人はもう、平気ね。  
やつぱりその嫁ぎ先に住んでいた子供は煙が平気ですよ。やつぱ  
り慣れちゃつてね。

S—そういうのあつたんだ。

Fa—だからあの辺の山はまるつきりのハゲ山。草一本生えていな  
い

かつたもんね。

Fb—茶色かつたもんね。

Fa—そうそうそう。今行くと青くなつていてるでしょ？

N—天皇陛下も青くなつてているのを見に来ますもんね「8」。

Fa—どのくらい青くなつているかをね。

### 「お話を聞いて」

S—コンパクトに感じる足尾の中だけれど、住民同士の「同じ足

尾でも」わからぬ場所があつたというのが住んでいる人の感覚の  
ようだ。各地区で日常生活が事足りていたのだと思うし、煙が溜  
まる所と溜まりにくい場所がはつきり分かれていたんだな、と地図  
を見ながら想像する。

S—私が足尾に来る前はどうしても教科書の「公害の足尾」って  
いうイメージが強くて、実際はどうだったのだろうと思って来て  
みたんですね。煙が町に来た時に野菜というか、植物に新聞紙  
を被せたっていう話を聞きます。そういうことって、子供の時のご  
記憶でありますか？

M—結局、もう煙がせめて来るっていうのはわかるんですよ。も  
う、あの、いると。

S—えっと、それは煙に色とかがついてるんですか？

M—製鍊の方から風に乗つて、うん。やつぱり植木なんか大事に  
する人は多分そういう風になつたんだと思うんだよな。

S—やつぱりチヨリチヨリになつちゃう？

M—あの、喉なんかやられたりなんか。うん。だけど我々が物心  
化に関する聞き取りももつと行っていきたい。

公害の足尾というイメージ

「2014年8月20日、M、志村、中山、好井、Pa、Pb」

公害に関して聞きたかったポイントは、①生活の中にあつた風景  
や感じたこと、②銅山従事者として公害にどう向き合い感じて

いたのか、の2点。閉山後も銅山関係で働いていた方と、足尾育  
ちの市職員2人も加わり、それぞれの経験を交えながら、昭和  
30年代から閉山あたりまでのことを思い出してもらつ。

S—私が足尾に来る前はどうしても教科書の「公害の足尾」って

いうイメージが強くて、実際はどうだったのだろうと思って来て  
みたんですね。煙が町に来た時に野菜というか、植物に新聞紙  
を被せたっていう話を聞きます。そういうことって、子供の時のご  
記憶でありますか？

M—えっと、それは煙に色とかがついてるんですか？

S—やつぱり本山がガードになつてているから。

**M**—田元交差点から本山の方は、そんなに酷い所はなかつたね。

**Pb**—ただ、やっぱり自溶製鍊が31年に出来た「**10**」後の俺が小学校低学年の頃だから、その30年代の後半くらいには松原まで煙が来て。やはり喉が痛い、目が痛いというのが、そういう日が年に2、3回。

**S**—そういうじゃあ、年に2、3回のそういう煙が町部まで来る時っていうのは、例えば通常よりも多く作業していたとか?

**Pa**—ガス抜きしていた。新聞にも載っているんだけれども「**11**」。

**S**—ちなみに他所から足尾を見ると、どうしても『公害』っていうイメージが強くなっちゃっていると思うんです。そういうイメージを見て、例えばMさんが働いていた頃には浸透してたんですね?

**M**—別に従業員の中では、公害に対する意識つていうのはただもう。その、閉山になつてからの方が騒ぎ始まつたから、そういういろいろなことで。

**S**—あ、閉山以降に?

**M**—うん。閉山前っていうのはそんなに大きな騒ぎっていうのは無かつたから。だから田中正造さんがどうのこうのっていうのは、閉山の頃の従業員っていうのは、そんなあれ持つていなかつたから。その当時は、閉山になつてから、こういろいろ大きな騒ぎがだんだんだんだん出てきたような気がするね。そうだよね、閉山前、そんなんに大騒ぎしていなかつたものね。



上:松木ダム 昭和35年。下:早春の釣り。芝の沢の下の川  
(伊東信撮影)

のは全然持つていなかつたよね。これで食べてきたんだもんね。

うん。ただ後からいろいろ話を聞くと、あ、酷いこともやつたんだな、つう感覚はあるけれどもね。今はね。

**Pa** 一下流は水の害。鉱毒で、地元は煙の害。……

**M** まあ、とりあえず足尾の人間なんていうのは、さほど公害に対しての考えは誰にしろ持つていなかつたと思うよ。うん。

**Pa** でも、神子内川では泳いだけれども、渡良瀬川では絶対泳がなかつたね。ハハ。

**M** だからそれはね、徹底している。それはね、足尾の人間はやらない。

**S** 一え、それはどういう理由からですか？

**M** 一結局、松木沢、久藏沢と仁田元沢や、本山の出川が本山の横を通つて流れているだろ。あの、神子内川はあの渡良瀬の所で合流しているわけ。で、だからその渡良瀬の三養会の下の所では泳ぐけれども、合流地点はその公害関係の水が混ざつちやつているつてことで、その下からずつとここまで、

**Pa** 一誰も泳がない。

**S** 一そういうものだつて伝わつていたんでしょうか？ 親とかから教えられて、「じゃあ、その川で泳ぐのはやめよう」つていう風になつていた？

**M** 一向原の川の、川の近くまでは皆、川遊びしていただけれども、

**Pa** 一誰も泳がない。

**S** 一じゃあ、神子内の方は違う？

**Pb** 一まあ、わざわざ渡良瀬川で泳がなくとも、神子内川にしても内の簾川、そういう綺麗で淵のある川がかなりあつたから。

**D** 一うん、そうそう

**S** 一いやあ、神子内の方は違う？

**Pb** 一まあ、わざわざ渡良瀬川で泳がなくとも、神子内川にしても内の簾川、そういう綺麗で淵のある川がかなりあつたから。

「お話を聞いて」

**S** 一足尾に来た当初、町部から見える渡良瀬川は透明で綺麗に見えたけれど、「人が住んでいる所の水では誰も遊ばない」と教えてもらい、「足尾の人は、どんなに綺麗な水で遊ぶんだ！」と驚いた。昔から教わっていた川の境目の話が、少しは今にも影響し

渡良瀬川の近くはやらない。

**Pa** 一ダメより上は泳いでいた。

**M** 一そうそう。

**S** 一そうすると、やっぱり本山エリアの人たちつていうのは、まさに煙もだし、川の水も泳ぐのは控えなきやいけない、となりますよね？

**M** 一だから、本山関係の人らは山を越えて庚申川に遊びに行くんだよね。

**Pa** 一舟石を越えて、旧林道。

**Pb** 一昔の写真を見ると、松木で泳いでいた子供の写真なんかが結構ある。

**M** 一松木エリアにある松木沢、久藏沢、仁田元沢の3つの川が流れている所で良く遊んでいたもの。

**Pa** 一あそこは、ゲートができるまで遊んでいましたもの。

**M** 一だから煙害はあつたんだけれども、河川の影響っていうのはそれほど無かつたのかな。

**M** 一沢釣りの人は随分入つただろうね、子供はガラス箱とヤスデカジカやイワナ、ヤマメ釣りをして遊んでいたからね。……我々はただ、「渡良瀬川っていうのは泳ぐ所じゃないよ」つていう、そういう感覚は小さい頃から植え付けられているから。

**N**

一住んでいると「あたりまえ」で疑うこともなく慣れてしまうことがあるのだと思う。社宅では電気、水道代がタダであったのだが「今でも時々水を出しちばなしにしてしまう」という声を多く聞く。企業城下町であつた足尾の人々特有の慣れは、奥が深くとても興味深い。

1 瞳奥宗光の次男「潤吉」が古河市兵衛の養子になつたことが縁で、瞳奥宗光の別邸を柏木平に移築した。現在は残っていない。  
2 「白い煙が襲う」公害の原点がいまなお『朝日新聞昭和46(1971)年10月1日金曜日栃木県版』

3 高原木、安蘇沢など、足尾から中禅寺湖に向かうエリアなどを指す。

4 銅親水公園から松木エリアに向けての道には、足尾砂防堰堤上流工事用道路のゲートがあり、一般車両は通行禁止となつていています。

5 昭和60年代くらいまでは、小学校の遠足は、松木から中禅寺湖までのピックnickが定番だった。往復8時間の道のり。

6 「砾(すり)」。本来の意味は磨石のことだが、粗鉱を含めた発破で起きたものの全般を指すようになった。(『村上安正、『足尾銅山史』、随想舎、2006年、600頁)

7 銅山関連施設のすぐ近くにある社宅や三養会エリア以外の商店街エリアのことを町部と呼ぶ。赤倉、松原、赤沢など。

8 平成26年5月21、22日に天皇、皇后両陛下が1泊2日の日程で栃木県と群馬県を訪問。22日には足尾の銅親水公園や環境学習センターを訪れ、松木地区の緑化をご覧になった。

9 田元の交差点から松木に向かって、間藤、赤倉などのエリアを指す。

10 昭和31(1956)年「自溶製錬法」「電気集塵法」「接触脱硫法」を応用した脱硫技術を世界で初めて実用化し、従来に比べ重硫酸ガスの大削減に成功。

11 2の新聞記事のこと。

足尾小話「お客様さんからのお土産」

昭和20～30年頃に子供だった方から見た古河に勤めていたお父さんのお客さんの話。

M一足尾では、水力発電を自前で持っていたわけだから、他からの電気を使わずに銅山運営やっていったからね。

S一そういうような技術を駆使したことを足尾でずっとやつてきたんですね。そんな風景で、生活にも染み付いていると思うんですけども、大学で足尾を離れた頃に、足尾の特殊性などを他所に行つて改めて感じられました。

M一なんて言うんだろうな、足尾に集まつた職員集団みたいな……つまり、古河で働いていた人は、東大卒とか旧帝大系を出た優秀な人たちがうじゅうじゅういたんだよ、いっぱい。私の子供の頃はね。うちの親父も古河で働いていたんだけど、そうすると、たまたまこの家のにそういう人たちが酒飲みになんかよく来ていて。だからね、多分栃木県内では、当時の我々の子供だった頃の足尾の社会っていうのは、もの凄くハイソサエティだったと思うよ。俺は。

S一きっと話している内容もそうなんでしょうね。M一当然で、連中は東京から来るわけだから、お土産を持ってくるものはね、子供がいっぱいいる家っていうのを知つているわけだ。それでその人たちが来るところ、もうとても我々が目にしたことのないようなもの

のなんだなお土産が。

S一なんですかそれ、例えば?

M一例えば、私が今でもよく覚えているのはね、鉛筆あるだろ。鉛筆1ダース。俺の名前が打たれているわけだよ。

S一あ、なるほど。

M一名前入りの鉛筆。

S一あし、版が押してあって金とかで名前が書いているやつですね。

M一そうそう。あんなの、カルチャーショックだぞ。

S一たしかに昭和20年代の話ですもんね。「凄いな」ってなりますよね。

M一うん。それから、今はこんなあたりまあだけれども、電気の湯沸かし器とかね、

S一そういうの、当時もあつたんですね。

M一この間、子供の家に行つたら電気湯沸かし器があつて「これ、お父さんすぐ沸くんだよ」なんてね。

「こんな陶器のお皿に置くとすぐ沸けちゃうんだよ」って言つてたけど、あんなの俺たちがガキの頃にあつたよ。

S一ハハ。でも、そういうのがお土産で……へー、凄いな。

M一当然で、だつて我々が子供の頃、もうコーヒー沸かして飲んでいたもんな。

S一そーなんですか、なんかコーヒーとか結構、どのくらいの世代だったかわからんないですけれども、やつ

ばお洒落なものとか、結構貴重なものだった時代があつたということを聞いたことがあるようだ。

M一多分、私は昭和18年生まれだけど、その頃、まさしく小学校の低学年だっただけれども、そのころに、パークレーテーでコーヒー入れていた家なんてないぞ、あんまり。

S一ハハ、凄いな。

M一それはね、全部ね、そういう人たちが文化を持ち込んだわけだ。

S一はー、そういう人たちがモノだけではなく、使い方や楽しみ方とか、そういうのを全部。

M一それからそういう人たちが話している内容を、それとなー、こういう小さい家だから全部話が聞こえるわけだわな。全部。その内容のレベルの高さといふかね。だから、そういう風土というのは、もう、その門前の小僧じゃないけれども、結局、染み付くんじやないかな。自然と。

S一なるほど。

M一それと、今思えば、そんな人たちは足尾に来るのに東京から自家用車で自ら運転して来るんだよな。車種は何だったかわからなかつたけど、時代から推測すると、ルノーかオースチン、あるいはビルマンあたりじゃないかと思うんだけど。子供ながらに、そんな自家用車がうじゅうじゅ走り回つている東京ってどんな所なんだろう……と想像を膨らませたのを覚えているよ。東京に一度行つてみたいなつてね。

## —Q2— 坑内つてどんな場所なのでしょうか？



観光施設の足尾銅山観光<sup>1</sup>では全長 1234 キロメートルある坑道のうち 700m が公開されている。その先は柵越しにライトを照らしながらごく一部を覗くことしかできず、現在の足尾しか知らない私たちにとって、坑内は遠い場所だ。「坑内には野球場くらいの広さの空間がある」「坑内で、奥に見える光めがけて進むと 10 分歩いても、その光にたどり着かなかつた」などなど、足尾の人から耳にする坑内にまつわる話は、想像し尽くせない。今、実際に坑内で働いていた元坑夫さん<sup>2</sup>から直接話を聞ける機会は案外少なくなってしまった。

### 坑夫のお父さんの仕事

「2013年7月11日—兄、弟、志村、中山」

昭和10年代後半に生まれ、昭和35年まで足尾で暮らしていたあるご兄弟のお話。小滝坑に勤めていたお父さんの仕事について、当時の子供目線から覚えている内容をお伺いした。

S —お父さんに、坑夫の仕事を何か聞いていましたか？ 变な質問なんんですけど、「仕事は大変だ」とか…。

N —やっぱり危険と隣り合わせ？

弟 —どんな感じなんでしょうね。私も自分の子供には、仕事の話を全然してないからな。ハハ。

兄 —でもなんか楽しそうに、集まりがあつて、割とすぐに帰宅するという感じでしたかね。そんなに締め上げられて働くような感じではなかつたような気がするんですよね。……でもね、

なんか働いている時間は短そなこと言つていたね。坑内では長くは働いていられないと思うよ。朝から晩までね。本当にまともに働いたら体がもたないと思うよ、きっとね。だから、親父は結構喜んで働いていましたよ。……（省略）……余暇とか娛樂、夏の日の長い時は仕事が終わると野球、テニスを楽しんでいましたね。また、若者は柔道、剣道をしていましたね。用具も施設も整っていました。あとはやっぱり神様っていうのかな、足尾の人は山を大事にしていたみたいですね。月1回は親父も朝早く

く出ていくんですよ。一日は間違なく行つていましたね。「今日一日だつて」言つて、いつもより1時間くらい早く出て、それであらんとお神酒かなにかをやるんでしょうね。見たことはないんですけども。

弟 —それは坑内にあるんかね？

兄 —坑内の入り口かな？ 坑内の入り口か何かに、ちゃんと朝、毎日一応はお参りはしているんだろうけれども、月一はちゃんとしていました。今日はお参りつて感じで、服装もちゃんとして行つていましたね。ネクタイなんかはしていませんでしたけれども。あの普通の人は、服装は鉱員だから作業服で行つちゃうんですけれども、普通の服を着て行つたから。ネクタイまではいかないけれども、その日だけはちょうど違うんだ、なんかね。

S —そんな話は初めてですね。

兄 —月一、一日つていうのは僕は記憶にありますね。なんか、お袋なんかも弁当を作つたりするのがあるから、早くからやつていたみたいですね、そういうのは。

N —あ、ちなみに弁当の内容つていうのはどうのだったんですか？

S —やっぱり厚い弁当箱なんですか？

兄 —あのね、薄くなるのはずっと後ですよ、足尾は。

弟 —俺が知つているのは薄い弁当箱だつたけれども。

兄 —あそう、俺の頃はやっぱりドカベンといわれるものですよ。でつかいやつで。ドカベンですよ。

S —それにお米とおかずなんですか？

弟 —思い出してみると、イカの塩辛を梅干しのようにお弁当箱の真ん中に埋めたおかげが大好きでしたね。

S —ちなみに、ちょっとネガティブな話になっちゃいますが、事故の情報は社宅にもすぐにつわてくるものなのですか？ あんまり子供だったから記憶ないでしようか？

弟 —俺の記憶だとすぐわかる。外で遊んでいるとサイレンが鳴る。そうすると周りの大人たちが、ざわざわざわざわする。すると誰かが、「あーだ、こーだ」って話になる。サイレンっていうのはね、毎日定時には鳴るんですけどもね、鳴らない時間に鳴る時があるんですね。そうするとそういう落盤の事故なんですよね。

兄 —何回も聞いたことある。

弟 —うんある。そんな話しそよつちゅうある。しそつちゅうつていうか、まあ、あるわね。だから親父だって部下の人たちにはよく言つていたらしいのですが、「下着だけは綺麗にしておきなさい」って。

兄 —何があつてもいいようにね。僕もそういう話はあつたけれどもね、直接あつたのは、僕の同級のお父さんが事故で亡くなつた。その話はよく知つている。そこでやっぱり葬式。その葬式がやっぱ

り凄いんで記憶にある。それしかないですよ。葬儀には、楽団のビッグバンドが入るんですね、ブラバンの。それだけは覚えているんですけれども。

S — その演奏はやっぱり、古河がやつてくれたんだですかね？

兄 — そうでしょうね。やってくれたんでしょうね。

弟 — 楽団っていうとそれ古河だ。

【お話を聞いて】

S — 他の人からも教えてもらった葬儀の話題と通じる所がある。「下着だけは綺麗にしなさい」と声を掛け合ったり、山の神様を大事にしていたという習慣は、理屈どうのこうのを越えて、働いている人ならではの感覚や常識のように感じる。

N — 葬式に古河の楽団が来たことに驚いた。足尾に来て、古河が手厚い福利厚生や文化活動を奨励したことをよく耳にする。付属の学校や病院もあつたし、家や道路の修理まで行つた。また、運動会やお祭にも力を入れ、それらの写真を見ると信じられないほどの盛り上がりを感じ取ることが出来る。

## カンテラの光

【2014年1月10日 — M、志村、中山】

坑内の道具の一つ、カンテラ【3】にまつわるお話を。



通洞坑口前にて記念撮影 砂畠主婦の会 坑内見学(伊東信撮影)

S | 坑夫さん以外で坑内に行ったことのある人は少ないのだが、何人かの女性の方から見学に連れて行ってもらったという話もたまに聞く。

S — カンテラとか銅山の道具一式って、やっぱり皆さん自分のものを持っていたんですか？ 当時働いていた人は？

M — カンテラから始まって、途中でキャップランプ【4】になつたら。カンテラを大事にして、ほとんどの家があつたかもしないよ。だから、キャップランプになるまでは、みんなカンテラをつけて行つたから、山でもなんでも。男体山行くのでも、カンテラで行つたからすぐわかるんだよね、「足尾の人」が来ているな』なんて。

S — えー。

M — もう、カンテラの光が違うから。「おお、誰だ、あれは？」って全然違うから。こうやって、山歩いていると、男体山登りなんて、「あれ、足尾の人か？」 「あれ本山のあれだよ」って。

S — 光でわかるってすごい。

N — カンテラってどのくらいの光が出るもんなんですか？ M — あれね、火が出るでしょ？ やっぱりそのままじゃ駄目で、やっぱり照り返しちゃうんかね。

S — 丸い部分のことですか？

M — それを、自分で作るんだよね。

S — へ、作るんですか。一人ひとり作るんですか？

M — 自分で照り返しちたいなのを作るのさ。それを作るには、電話のベルかな。電話のベルなんかを、ダンダンダンダンって叩いて。

M — へ。

M — それが一番良いって。それで磨くんだけよね。真鍮磨きっていうて。  
S — 磨かなくちゃ駄目なんですか?

M — 鏡みたく磨かなくちゃいけない。

S — ちょっと見たくなる、その磨いている姿も。

M — それを自分で、真鍮を丸く切つて、真鍮の板があれば切つて、トントントントンと叩いて突くの。それを、もう暇さえあれば外してこう、中でも仕事の合間とかに磨くんだけよね。それは自分がそれだから、だから、「何メーター先まで俺のは見れる」とか。

S — やっぱり上手い人は、ずっと先まで見れるのですね。

M — あんまり真鍮部分をでかくするとね、邪魔になるとかあるけれども。本当にね、バーッと明るく、

S — 凄そう!

「お話を聞いて」

S — カンテラが懐中電灯のように山登りなどでも使われていたことが面白い。自分で手直しも出来て、案外使いやすいのでは。

他の人も、カンテラの中に入れるカーバイトで火遊びをしていた、という話もよく耳にすることから、一般的な道具だったようだ。

N — 手作りのカンテラにはそれぞれ愛着や誇りがあつたようだ。話にもあつたように、カンテラが使われなくなつてからも、まだ。

た閉山になつてからも自宅で大切にしている方が多く、何度も見せていただく機会もあつた。

## 坑内の職場

【2014年9月18日】M、志村、中山】

坑内の線路を作る線路夫だった方のお話。閉山までの坑内の日常や感覚。

S — なんかあの、銅山観光とかでは、エレベーター[5]みたいなやつを見たりするんですけども、あれに乗る時って、振動がうたりスピードも結構早いんですね。

M — 早いね。遅いのと早いのがある。

S — あ、遅いのと早いのがあるんですか。

M — 場所によって早い所と、遅い所がある。ケージの枠が見えるんだから、枠がくついていて、枠が見えるわけだよ。

S — 結構怖くないですか?

M — 怖くはない。

S — 怖くはないですか。へー。

M — 危ないんだよね、手なんか出していたらやられちゃう。だって、手出ちゃうもん。

S — ですよね。本当にあの枠の中にピタっと収まって動くん

すよね。

M — 中には10人乗れるようになつてているんだよ。

S — 10人も乗るんだ。

N — エレベーターでの怪我、事故も結構あつたんですね?

M — えー、落っこつたこともあるんだよ。落っこっちゃつて。

S — 落っこっちゃう。

N — じゃあ、もうそうしたら?

M — 縄が切れ。

S — えー、怖い。そうするともう全員ですよね。一気に本当に450メートルとか。

M — そうね、最初に300メートル。そして、また違う所に150メートル下に行くから、450メートル地下。足尾ではそこが一番深いね。落っこちやつたのはたまたまだよね。ブレーキがあるんだけれども、効かなかつたんだよね。落っこちてね。

N — え、じゃあ全員お亡くなりになつた? その事故の時は?

M — いやあ、その時は一人くらいだったんじゃない?

S — あとは怪我とかで?

M — べつちゃんこだよね。

S — やー、怖いですね、本当に。:

N — 坑内での、300メートル下の熱さっていうのはどんなものですか?

M — いやあ、仕事をやっているのは12時半くらいまでだよ。それ以上はやんない。その後は飯を食つて帰つてくるようだから。飯を食つてそれで「ああ、帰らな」って言って、坑口に2時に出でると、判座[6]をかけて、風呂に行く。

N — じゃあ、え、ごめんなさい。出勤が何時ですか?

M — 7時。坑内関係は、朝7時から始まつて、熱い所で仕事をし

ている人は午後2時まで。2時までに坑口に出てくる。他の人は2時45分まで。

N — で、7時から2時間くらい仕事をして、

M — まあ、それはもう、そういう感じで[7]。

S —いろいろ移動とかもありますよね? きっと坑口に入つても。作業の場所に行くまでも時間がかかるものなんですか?

M —そこは電車が出ていたでしょ、だいたい4キロかな、俺らがいた時は。4キロ。4千メートル。それで、帰りは歩くだろ? 4キロ歩くだろ?

S —じゃあ、本当に、移動でも時間がかかりますよね。へー。

……(省略)……

S —いやあ、凄いなあ。全部人力で線路を敷くんですよね、凄い。でもそういう人力で、例えばすけれど、線路を坑内に1日

M —いやあ、何メートルくらい作れるんですか?

M —いやあ、何メートルっていうことないよ。あれは。18尺のレールを半分に切つてから運ぶんだよね。じゃないと上がりでいけないがね。

S —材料自体をうごこんですね。じゃあ、そやつて材料自体を半分にして運んで、で1日作業をした場合って、例えばどのくらい?

M —いやあ、……あれをだつて……発破かけたって、1メートルくらいしか進まない。発破をかけると1メートル。線路の作業は、線路を半分の9尺にしてそれを担いで坑内に運んで行くんだけれど、3日か4日作業を続けないと線路が入る大きさにならないからね。あとは、ズリをとる人が線路を「延長してくれ」って言えば、俺がそこに行つて延長するわけ。そうじやなきや行かない、



昭和28年 朝の出勤入坑(伊東信撮影)

俺も。とにかく裸だし、本当はおつかないんだけれどもね。熱くていられないがね。便所場もあるあいう、どうしようもないよ、坑内だから、どぶ。どぶが流れているから、そこに小便でも何でもしちゃうんだから。下で顔洗っているんだから、

S、N —えし、  
M —だつてしまふがないがね、分からんんだから。

S —全部一緒になつているんだ。  
M —する所ないがね、あんな所で。

N —え、あのそういう下水つていうのはどういう?  
M —掛樋「8」つて言うんだね、俺らは。掛樋つて、どぶとは言わな

いんだよね。

S —でも、水はあれですよね、きっと坑内から染み出でている水とかもそこに流れているんですね?

M —そうそうそう。そういうのも流れている。で、飲む水は別にみんな持つて行くわけ。鉱車の中に水を入れたり、パイプで水を引いたりしているから、そういうのは大丈夫だよね。飲んだり食つたり。あとはご飯食うのは電熱器で熱せられるから。坑内の

が熱いから、パンツ一丁みたいになつて仕事をするんだよね。みんなね、熱いのが分かつていてるから。こんな長ズボンなんか着ていたら、動けないよ体が。

S —汗で多分濡れちゃつて動けないですよね、服が。へー。そう

なんだ。  
……(省略)……  
S —坑内での事故の話も聞くのですが、事故つていうのは知らないうちに酸素が無くなつていたとか、そういうことですか?  
M —酸素がないんじゃなくて、ガスが発生するんだよね。ガスが、ガスで死んだ人もいるし。あとは落盤つてつきものだからね。落盤。  
N —一番多いのは落盤事故が多いんですね?  
M —そうだろうね。落盤は多い。そういう所にあんまり行かないけれどもね、落盤。  
S —そういう、例えば落盤事故とかにあいややすい危険な職種はあつたんですか? 例えば、最前線の進鑿とか。

M —進鑿は進鑿。発破かける専門だから。余計なことやらない。絶対にもう。それで、支柱さんは棒を作るから。水や、鉄管は水が専門。俺らは線路が専門。だけど、やっぱり頼まれて手伝うことがあるんだよね。「今日は悪いけれども、手伝ってくれ」で。それで一人で夜中に坑内に行つたことがあるよ。一人で入つて行くんだから。一人で坑口から4キロ離れた所に歩いて行つて、300メートル地下へ下へ降りて行つて。それで切羽「9」へ行く、

S —一人で、その暗い所に入つて行くのって、怖くないですか?

M — 悪いと思つたことはないよ、ハハ。怖いと思ったことはないね、それは。ただ、嫌だなっていうのは、「ここ」、昨日人が死んだんだなっていう。そういう所には行きたくないよな。そんな訳でね。「ここ」で、死んだんだよ。昨日」なんて。そんなのあるよ。

……（省略）……

N — 1回こようやつて坑内の方からのお話を聞いて、いろいろ想像はするんですけども、やっぱり絶対見てみないと分からぬものですね。そういう地下300メートルの様子っていうのは。

M — は、経験しないと分からぬ。あの坑内が、300メートルか、3キロになつちゃうと、地震つてあるだろ。坑内だと地震じやなくてね、盤ぶくれ【10】。

N — 盤ぶくれ？

M — 坑内に座つてると、盤ぶくれの衝撃の風で持ち上がりつちゃうの。ボカンと。凄いからね、あれ。

S — え？ ジャあ、座つてると風でフツと、体が上がるっていうことですか？

M — 飛ばされて、線路を引いたやつがみんな壊れちやうから。ぐちやぐちやに。

N — はー。

M — また仕事をやらなくちゃいけない。

S — 大変だ……。

M — それと、俺らはもう、「絶対、坑内では口笛を吹いてはいけない」と言つだろ？

S — それは、どうしてなんですか？

M — 山が怒るって言うんだよね。山が暴れる、て言うんだよね。事故が起きる。何かそういう話は聞いたよね。赤い着物は駄目だとか。

S — ふーん。あそか。坑内の中つて静かなんですか？

M — 静かだよ、何にもないよ。

S — なんにもない。

M — だけど、閉山後にポンプが調子悪くなると頼まれたんだよ。「悪いけれど、ポンプ見ててくれ」なんて。それで、一人で行つて歩いたけれど、何があの掛樋、どぶね、坑道の脇に水が流れている所。そこを歩いていると、カラカラカラカラ音がする時があるんだよ。そうすると、電気の球、あれが引っかかっている時があるんだよ。カラカラカラカラ。気持ちよくはないね。

S — ちょっと怖いですよね、なんか。

M — ああ、「ここ」で人が死んでるんだよな」って思つても、あんまり気にしない。そういう思いは一杯あるね。

### 「お話を聞いて」

S — サクサクと感情的にならずに話してくれた印象。事故の話や、一人で暗い坑内に入つて行く所も、誇張せずに淡淡と話しつづけてくれていて、それが余計、実際に仕事をしている人の感覚のようを感じた。

N — 坑内の話は迫力があつて、まるで異次元の空間が広がつてゐるように感じられ、まさに想像を絶する。熱気、蒸気、爆音、爆風、さらには盤膨れ……。そんな死と隣り合わせの世界での仕事をわかりやすく説明して下さった。

1 足尾にある主要坑口のひとつである通洞坑の一部を利用して作られた坑内を見学できる市営の観光施設。  
2 「坑夫」という言葉はマスコミでは用語を換えて、「坑員」「坑内作業員」と表記するが、この冊子では現地の方が使ってきた言葉をそのまま掲載している。

3 「カンテラ（オランダ語 Kandelaar）」ブリキまたは鉄板製容器に油を入れて、灯心を灯した。（村上、前掲書、611頁）

4 キャップランプ（Cap Lamp）頭上灯。ヘルメット前面の引掛け金具にランプを固定し、光源との間はゴム管やキャップタイヤでつながる。灯源は腰のバンドに固定する。（村上、前掲書、611頁）

5 垂直に開鑿した坑道で、運搬、排水を目的にした大立坑を、ケージと呼ばれる稼働屋根と鉄骨構造のエレベーターのようなもので移動する。

6 「判座（ほんざ）」作用員の出・退勤を示す就業票。（村上、前掲書、614頁）

7 改めて一日のタイムスケジュールを伺つてみると次の通り。7:00 坑口に出勤し判座をかける。→坑内の作業場まで移動する。→9:00 作業場に到着し、作業を行う。

→12:30 作業を終わらせ昼食をとる。→13:00 坑口まで移動する。→14:00 坑口に到着後、判座をもらって風呂に入つて帰宅。

8 「掛樋（かけひ）」坑道の側溝。（村上、前掲書、609頁）

9 「切羽（きりは）」切場、切端とも書く。坑内作業場のこと。（金属鉱山研究会編集『鉱山用語集』東甲社、1976年、17頁）  
10 「盤ぶくれ（ばんぶくれ）」坑道の側壁が地圧により歪み、開き当時の坑道断面にくらべ開き空間にふくらんてくる状態をいう。側壁崩壊などが発生しやすくなり、坑道保持ばかりではなく保安上大きな問題となる。（金属鉱山研究会編集『前掲書、19頁）

### 足尾小話「坑内でのユーモア」

「坑内のなんか、見逃しているんだよな。ユーモアがいろいろあつたらな。」と振り返る方から、坑内のある場面を教えてもらった。

M—仕事を始まつて坑内に入つて行くと、誰かが「俺なんか風邪気味だ。調子悪い。胃の薬くれ」なんて

言つてな。胃の薬飲むんだってボット持つてくるんだわな。「なんだお前、ここにあるボットに入つている水を飲めばいいのに、それ飲まんのか」なんて聞いて。

坑内には、小滝の方からわざわざ水を引いてあるんだけどね。「いやあ、あれだから、胃冷まして飲んでるんだよ」なんて言ってその後「薬飲むからその水くれや」でさ。ハ、その水で薬飲んでき、「いやーこれは風邪に効くよ。いっぺんに直ちゅうな」って言うんで、おかしいと思ついたら、中に酒が入つてゐるんだよ。

S—えへへ。水じゃないんですね。

M—水じやない、酒だよ。どうか行つた時に飲むんじやないか、酒持つて置いておいて。言わないんだよな、周りから。「後で気をつけろ」なんて言つただけれどもな。

「言つうなよ」なんてな。「係員やみんなに言つうな」で。『じゃあ今度俺も持つてきて風邪薬飲むべ』なんて言つて

M—「そうだよ」わかる組夫の人も今はいない。まず組夫だって、秋田からも来ているんだから。いろんな

利くんだけよな。やっぱり飲んべえはね、なかなか上

手いよ。坑内の中でもわかんないよ。喫飯所だつてさ「あれ、このくらいの筒のあれがあつたような?」なんて言つてな。「あのプラスチックの鉄管みたいなのが持つてくれや」なんて言つて、開けてみたら一升瓶が入つてゐるんだもの。「あれー」なんて。

一同—ハハハ。

M—喫飯所の端っこに隠しておくんだ。「こ」なら見つかんない」なんて。「あそこに一升瓶入つていたよ、飲んでたよ」なんて。みんな知恵を出してな。それと、でっかい薬缶があつて、係員が回ってきた時に「何だこれ、何か煮ているのか?」なんて聞かれて。ヤカンで煮ているんだよ、芋煮たりしているんだよな。係員が来て鍋なんてかけていたらわかつちやうがね。

S—その見回りに來ている人は監視に來ているんで

すか?

M—課長、局長とかああいうのが、ほら、一箇所だけじゃないから、坑内を回つていて「みんないるかな?」と見るんだよ。「ご苦労さん」なんて。そういうデタラメやつてゐるから。ヤカン煮た時はお汁粉だとかもね。坑外にいた時も「おお、お汁粉だ、お汁粉だ」って言つてな。

「箱がなんかした」と言つていたから、そういうのがわからなかつたり。

M—で「難儀しているって、なんか困つてゐるんだべって、なんとか方言で一生懸命しゃべつてゐるんだわ。で「難儀している」とか、こうちも「ん? はつきり?」つて。この、言葉が上がつたり下がつたりするのも違うし。鉱車のことも秋田では箱と言うから

「箱がなんかした」と言つていたから、そういうのがわからなかつたり。

M—あとは、どぶのことを、掛樋つて言つたり。その、あればあるんだよ。やっぱり向こうの人らも、向こうにあ

る鉱山で働してきただべ、でも鉱車のことを箱つつたり、「大変だ」と言つるのは、「難儀している」と言つたり、「困つてゐる」で良いのに。京都弁みたいなやつとか、そういうのは「何言つてゐるんだよ」つて。だけ

ど、聞いてるとわかるんだよ、何かあつたつていうのは。だから、「とにかく、そこへ行くか」つて。ハハ。そ

ういうあれがね。聞くと秋田の人だったから。訳を聞いても、いちいち秋田弁で言われても……。

一同—ハハハ……、

## Q3 — 社宅の暮らしつつて、どんな生活だったのですか？

砂畠社宅跡

国道122号バイパス工事中

昭和48年4月8日

(伊東信撮影)

んじゃないよ。仕事中にその人たちが「ナンギしているか

ら」って言つていて。「なに? ナンギしている? なんだい? そら?」なんて、九州の人がさ「運転手さんナンギしている」なんて言つてんだよ。したら、車ひつけたりなんかになつたんだよ。そしたら大変だべつて言つうで、で「難儀している」つて。でも、その言葉がわからんなどよ。ハハ。

一同—ハハ……、

M—で「難儀しているって、なんか困つてゐるんだべって、なんとか方言で一生懸命しゃべつてゐるんだわ。で「難儀している」とか、こうちも「ん? はつきり?」つて。この、言葉が上がつたり下がつたりするのも違うし。鉱車のことも秋田では箱と言うから

「箱がなんかした」と言つていたから、そういうのがわからなかつたり。

M—あとは、どぶのことを、掛樋つて言つたり。その、あればあるんだよ。やっぱり向こうの人らも、向こうにあ

る鉱山で働してきただべ、でも鉱車のことを箱つつたり、「大変だ」と言つるのは、「難儀している」と言つたり、「困つてゐる」で良いのに。京都弁みたいなやつとか、そういうのは「何言つてゐるんだよ」つて。だけ

ど、聞いてるとわかるんだよ、何かあつたつていうのは。だから、「とにかく、そこへ行くか」つて。ハハ。そ

ういうあれがね。聞くと秋田の人だったから。訳を聞いても、いちいち秋田弁で言われても……。

一同—ハハハ……、

私たちの職場足尾総合支所の周りには一軒家や中層住宅が建ち並んでいるが、このエリアも平成10年頃までは社宅が並んでいた。当時の写真には、びっしりと黒い屋根の社宅が集まっているが、信じられない程の人が多さが際立っているような印象を受けた。現在でも足尾内の限られた場所ではあるが社宅が残っている。共同浴場、共同水場、共同トイレのことや、役職によって社宅の造りが異なるなど、町で会う多くの昭和生まれの方は何かしらの思い出や経験を持っていて、社宅暮らしはそんなに昔の話ではないことに気づく。

## 鶏小屋にみえる

「2013年11月26日—夫・妻・志村・中山」

平成8年から始まる通洞社宅解体まで、社宅暮らしをしていた元坑夫さんに色々な話を聞いてみた。社宅の暮らしの話題になつた時に、少しずつ奥さんが話に加わってくれた。

夫——ただ、同じ古河でも炭鉱の社宅の造りと、足尾みたいに面積のない所での銅山社宅の作り方の違いがあるのはわかるね。もしも足尾に広々とした土地があるんだったら、13戸並び9戸並び、6戸並びの建物が連なつているような社宅っていうのはあり得ないよね。だから、閉山後の銅山観光オープン時に他所から訪

れた子供が、わ鉄「1」に乗つて足尾に見学に来た時に「わー、鶏小屋だ。なんでこんなに鶏小屋があるの?」と不思議がっていたと話を聞かされた事がありましてね。確かに言われてみれば、子供心にそう映つたのではないかね。鶏小屋と同じように見えたんだろうね「2」。……それだけに貴重な銅山社宅なんですね。私の様に社宅育ちの者からすると違和感が無いけれど、当時訪れた人たちには心打つものが大きかつたと思います。

S——その社宅の様子が珍しかったんですね。

妻——鶏小屋だってね、電車の車窓から見る感じでしょ。まあ、他にもいろいろ社宅が見えますけれども、もう社宅がびっしりあるわけですよ。鶏小屋とかね、もうそれを聞いて私たちも良い気持

ちはしないですよ。そういう話はよく聞きましたよ。

S——そういう話はあつたんですか?

妻——そういう風に、鶏小屋のように見ちゃうんですね、他から来た人たちは。

夫——銅山観光オープンの時は大間々方面に行く途中にね、養鶏場があるんですよ。そうすると、その養鶏場が言われてみれば、社宅のような形で並んでいるのね。だから、初めて足尾に見学に来てわ鉄の車窓から町を見ると、社宅がそう見えちゃつたんだろうね。段違いに並んでいるから。

妻——足尾は線路沿いもみんな社宅でしょ、平屋で全部社宅だからそういう風に見えますよね。それに、1棟が長いでしょ。本当に1棟に5軒も6軒も世帯区分されている。私たちが渡良瀬にいた頃は1棟9軒並びに入ったこともあります。それが一番長かつたですね。あとは5軒並びとかね。もう4軒とかいろいろでしきれども、場所によつてね。狭い所はやっぱり長く作れないから短かつたりね。だからね、そのくらいあれですよ。鶏小屋の方が幸せだよ、あんな綺麗な所に住んで。ハ、酷いでしょ。

夫——そういうふうに、言つたってね。ショックだけどね。

妻——だつてね、本当ニヤ板で隣と仕切つてある造りで、仕切りぞいに家具を置いていてね。隣の声は聞こえるし。隙間風は入るし、フフ。今思えばね、それが懐かしくてね。



昭和28年 中才社宅及び砂煙一部(伊東信撮影)

**S** — ああ、そうですか。

**妻** — 今のような一般的な一軒家に入っちゃうと、本当ですよ。声は聞こえなくて、ちょっと寂しい気がしていますよね。昔はね、隣で何かあつたり、何かあれしていると声が聞こえたりね、人の話が聞こえたりしますけれども。今はもう、サッシンになっちゃうと静かなもんです。夏場なら網戸にしていれば聞こえますけれども。ハハ。

「お話を聞いて」



共同水場(伊東信撮影)



**S** | 現在残る社宅エリアの一角。手前の砂利道にも奥に写る造りと同じ社宅があったのだが、住居者がいないため平成26年に入ってから建て壊された。

## 夢のような近所付き合い

「2014年1月10日—夫・妻・志村・中山」

社宅エリアでの人とのやり取りの様子など、風景が思い浮かぶように自然に話してくれる。一方で、当時の付き合いなどを話していくと当時と今の生活の違いに気づいていくように話が進んだ。

**妻** — 社宅の中では今日あつたことみんな知っていますよ。

**S** — 社宅の皆さんですか?

**妻** — 「今日こういう事故があつた」って、みんな。

**S** — それは人づてとかで?

**夫** — もうなんでもすぐわかる。そちらに共同風呂があるから、誰々が入院したとか、誰々がどうしたとかね。あとは、丁度子供を産んだ頃に、親の自分が風邪をひいたら子供だけで風呂に入れられないから、「誰か連れて行ってくれるけ?」って頼んで「はいはい」って。「誰か子供を風呂に入れてくんねえかな、母ちゃんが風邪ひいてしまって」って言うと、おばさん「はいよ」なんて子供をお風呂に入ってくれた。だから、今考えると夢みたいだな、って。

**妻** — そういうあれはあるわね。

**夫** — だから、知っているおばさんが「ああ、任せておけ」と子供

**N** — 最初は旦那さんがお話をしてくれていた中で、社宅の話題になつた時に奥さんが話に加わってくれたのが嬉しかったし、印象的だった。女性の方が社宅にいる時間が長いから、より話題があるのかもしれない。鶏小屋と表わされることに「いい気持ちがしない」とはつきりしながらも、話しているうちに社宅の賑やかさや不便さに対しても、親しみを持つて懐かしんでいるようだった。

**N** — 今ではだいぶ少なくなつた社宅も過去には町にびっしりと軒を連ねていた。当時の写真やお話をそこについた生活を想像すると、現代が失つてしまつた大切なものがあるように思われる。



夫「お金が無くなっちゃったとかで、そこに置いておいて、忘れちゃったと言つても認知症だから、後であつたなんて言つてもな。」

「誰かさんが来たらお金無くなつた」って言うのが一番おかしいから。「どうしたよ?」って行けないんだよ。

S「うーん、確かに。」

夫「お金、やっぱりボケなんだよな。お金あれしたのがわからなくなつちやうんだから。「鍵、鍵、鍵」なんて言つて探しやうんだから。だから。だから。ね。そういう「あー、あの人はあれかな、あの人はいるのかな、いるんかな?」とか、そういう風にしか思えないんだよね。」

S「うーん…。」

妻「「見たよ」なんて言つる人もいるから「あ、じゃあ大丈夫だね」って言つうけれど。最近は家を通りかかって、あの人いるなとかね、」

夫「本当にね、考えちやうと本当に忍びないな。「昔みたいなのがな」って言つう人がいるけれど、本当に…。」

妻「昔はね、「なんかいだけー」なんて言つて入つてきちゃうの。」

S「ハ、戸を叩かないで?」

妻「「いたけー」なんて言つて、「はい!」なんてつ。そうすると、家の中まであがつてきちゃう。」

夫「違うもんな。「母ちゃんいるか?」とかね、そういうんで、ああ。まあ現代のあれにしてつけど、一生懸命喧嘩しないように、」



露路 砂畑社宅(伊東信撮影)

S | この写真を見たある方が思い出したのは、飼い犬にはスピッツが人気だったこと。(写真に写るのはスピッツ系の雑種かもしれないけれど)閉山直後には、足尾から引っ越した人がやむなく飼い犬を手放すケースが続出し、町には捨てられたスピッツが多かったという証言も。

あれしないように。

#### 「お話を聞いて」

S「「夢みたい」な社宅の近所付き合いの話をしながら自然に今へと話が広がつた。話し手のお二人も「そういえば、今は違う」と改めて気づいていく感じだた。「昔は近所付き合いが強い」、「時代が変わつた」という考え方は知識として知つているつもりだったけれど、この話にある豊な生活感や人とやり取りがまるつきり変化して寂しいような、もつたいないような、自分はその生活感とは違う所にいるし、戻ることも出来ないんだなと感じた。

N「明るく話す話し手のお二人からは、寂しさを強く感じた。同時に、実際の付き合い方が変わってしまつても、近所を想つ気持ちは変わらない方々もいるのだと思つた。」

#### 部屋の広さ

〔2014年8月19日――夫、妻、志村、中山、好井〕

会社の社宅は、役職によって条件の良い所に引っ越しをする仕組み。現在も社宅で暮らす夫婦に、今までの引っ越し経験などをお伺いする。

Y「社宅の広さっていうのはどのくらいなんですか?」

夫一 広さはね、会社の役職によって変わりますね。古河さんは。

Y一 社宅の中でもそういう違いがあるんですか？

夫一 あるんですよ。最初は6畳、3畳で、6、3畳の部屋の他に

お勝手が2畳ぐらいあつたんですよ。

Y一 6畳と3畳と、お勝手が、

夫一 お勝手は2畳です。それが鉱員の最初の社宅なんです。そ

れで、その2畳の所にお勝手があるんですけども、水道は引いてなくして、共同トイレで共同浴場なんですよ。だから渡良瀬

社宅に今でも残っている共同水場と共同浴場があるから、見て行つた方が良いですよ。ここにしかもうないですから「3」。もうここしか残つていなくて、あとは全部壊しちゃつたから。社宅は今言つたような6畳3畳の広さの所もあるし、6畳6畳になつたりもします。職場での立場が上方に行くにつれて、変わつて行く

んですね。鉱員さんから、その次が現場の係員、まあ主任くらいで、その上の会社でいう、総合職の一一番、総合職までいかない下の係長くらいになると、その上になって、副課長になるとまたぐつと

上に行つて。で、会社のある程度になつてくると、玄関があつてお風呂場があつてつていうことなんですよ。だから、私も最初に入つた時は、家内とそこ(6畳3畳の社宅)に入つたんですよ。それで、何年か勤めてから、内便所でお勝手も家中の中にある社宅に入ることが出来ました。

妻一 2回目の引っ越し先には水道が入つてましたか、昭和50年頃には社宅もほとんど水道が家の中に引かれていましたね。

夫一 それで、部屋の大きさが6畳6畳くらいか。

妻一 そのくらい。6畳6畳くらいで、お勝手が3畳くらいですか。引っ越しのたびに、少しづつ大きくなつていくんですよ。

Y一 そこはもう水道が入つているんですか？家に？

夫一 その時は入つてましたね。それでその後はもう内便所のある所で、6畳6畳4畳半か。それで廊下があつて、まあまあだつたんですよ。それでそこにしばらくいて、今の社宅に越したんです。それから今の所にずっと住んでいます。そこはね、8畳6畳、4畳半の、玄関があつてお勝手があつて、お風呂があつて、それに廊下。廊下が結構広いんですよ。4尺廊下だから結構広いんですよ。

妻一 その落差にすごくびっくりしたんですけども。

Y一 あの、掛水俱楽部で公開していますよね。所長の「4」、

夫一 役宅ですね。役宅にも一般管理職から所長宅までですが、そこは所長、副所長宅、参事宅です。

Y一 一日に見えていくわけですね。

夫一 そうそう。それで、一般鉱員さんからだいたい総合職になるのは、本社採用の総合職と、下から上がつてくる総合職では全然違うけれども、下からいったのはせいぜい、いつても副課長くらい。まあ、運よくいって課長くらいなんですよ。だから、あの20代の時に一生懸命やつて30くらいで職員にならないと、遅くなつちやう訳だね。だからみんな一生懸命やつたと思うよ。そういう会社の仕組みだと思うよ。

「お話を聞いて」

夫一 社宅は外から見ると、実際に中に入つてみるのでは随分印象が違う。今回のこの夫婦が現在暮らす社宅は、少し高台の場所に立地していて、居間から綺麗な庭も見えてとても住み心地

良がさそうだ。また、銅山の職種(地元採用、本社採用、坑内、坑外)の違いは、いろんな人に聞けば聞くほど、細分化していく同じ銅

ども。ほとんど掛水の方は本社採用の社員のキャリア組に入る所なんです。役宅のうち、掛水俱楽部でいくつかを公開していくすけれど、女中部屋とかあつてすごいんですよ。あれは古河獨特ですよ。

妻一 所長とか、あと会社の付属病院がありましたからそこの院長。副院長、そして先生たちが入つたので結構広いんですよ。

Y一 いやあ、だからね、今の部屋の数とか、仕事のね配置で家が変わつくるとかもそういうなんですねけれども、基本的にそれつて男性の理屈じゃないですか。で今お話を聞くと、家庭会<sup>[5]</sup>というのもあるということですが、その奥さんたちの中ではそういう差はあつたんですか？

妻一 だいたいないです。ないですけれども、内面では「あそこのお家では、係長だから」「あそこのお家ではヒラだから」つていうあれはいろいろありましたよね。

Y一 そういう話を聞きたい、ハハ。

妻一 ハハ、まあ怖い。ハハ、そういうのはありましたけれども、まあ、あまりいざこざとか、今ドラマやなんかでやるようなああいうのはなかつたですよね。

夫一 個人差はあるけれども、極端にはないですよ。あそこは課長さんの奥さんだから多少はあつたけれども、むしろ組合員の奥さんの方が元気よかつたから。

—Q4— 戦時中、外国の人とどんなやり取りがありましたか？



中国人殉難烈士慰靈塔除幕式 式典のようす | 昭和48(1973)年7月30日(新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵)

- 1 旧国鉄足尾線のこと。群馬の桐生駅から足尾の間藤駅まで繋がっている鉄道だが、昭和62(1987)年の国鉄民営化の影響で、足尾線も廃止の対象となり、それを阻止するための乗車運動が展開された。2年間の東日本鉄道会社による運行を経て、平成元(1989)年からわたらせ渓谷鐵道として運行している。
- 2 他の方からも、社宅を鶴小屋と言いい表わされていたと聞く。一方で、足尾に住んでいる一部の人はハモニカ長屋とも呼んでいた。
- 3 この時、現在残っている共同浴場、共同水場を案内してもらう。当時のまま残っているのは渡良瀬だけ。現在も住居として利用されているため、一般の見学はできない。
- 4 排水渠塞部に隣接する役宅。
- 5 労働組合員の奥さんの集まり。

山の仕事でも全く違うようなので、全体の組織がどうなつているのかも今後気にしていく必要がある。

N一実家のマンションで「どちらが上の階でどちらが下だ」だと

か「あそこのご主人は官僚で、あそこはどこの会社の重役だ」といった噂があることを、ふと思い出した。ある意味どこの世界もそこは同じなのかなと思った。



「お話を聞いて」

S一戦後直ぐにパラシユートで捕虜の人たちに嗜好品が落とされたという話は、他の方からも聞くことができ、戦後の一つの共通する風景だったようだ。また、別の複数の方から、捕虜の方に対する親切にした、酷い扱いをした話も聞くが、それらの場面が話題に出た時に、どう反応していいのか分からずとにかく聞き入ってしまう。

N一戦時中や戦後、また外国人捕虜や朝鮮人労働者の話を、実際に経験した方々から、足尾に来たことで、人生で初めて伺うことができた。様々な意見や見解があり、議論が尽きないテーマではあるが、少なくとも、語られるそれぞれの事実を知ろうとする努力が今の若者に必要なじやないかと、若者なりに感じた。

豊かな知恵を教えてもらう

【2014年7月】夫妻志村、中山

戦時中の暮らしを教えてもらうために、小学生だった当時の食糧事情について尋ねた。朝鮮の方とのやり取りの話になる。

S一やっぱり戦時中もだけれども、戦後も大変な時期が続いたんですよね？  
夫一一合の米にさ、水を10倍、一升入れてさ、ドロドロにして。

S一あー、おかゆとも言えない感じの？

夫一そこに今度はイモ、サツマイモのあれを入れてさ、で塩を入れて、それですすって食ったんだから。

S一あー、そうなんですね。へー。

夫一で、俺の弟なんてみんな栄養失調で死んだんだから。

N一あ、そうですか。

夫一母親が死んじやつたろ、ミルクは買えない、母親がいないからおっぱいも飲めないから。うん。で牛乳だって、ここからだと横根山【7】の牧場まで買いに行つたんだけれどもね。何回か行つたけれどもね。

S一歩いてですかね？

夫一歩いてだよ。赤ん坊に飲ませるために。母親が子供を産んで、すぐ死んじやつたからね。「子供には牛乳が良い」と言っていたんだけど、やっぱりね、赤ちゃんには牛乳は良くないんだよね。今はそういう風にわかるんだけど、昔はねそんな風に知識がないがね。牛乳飲ましたらみんな下痢しちゃう。腸を悪くしちゃうからね。だから結局重湯、米のない時代に重湯の上澄みを砂糖入れて飲まして、だから栄養失調になっちゃうがね。今なら、ビタミンが栄養だうて、みんな認識したけれども、昔はビタミンもミネラルもそんなの分からないがね。とにかく腹きつくなれば大丈夫だろう、どうにかなるだろうっていう頭だったから。

……(省略)……

夫一だから、戦後はタンパク質が摂れないがね。肉と豚肉とかそういうのがないから。結局ネズミ獲つて、ネズミを料理して食う人もいるし。

S一ネズミ？

夫一蛇を捕まえて蛇を料理して食べるとかね。

S一そんなことしてやうたんですね。

夫一千葉県とかそういうの農家へ行くとき、栃木県もそうだけどさ。農家に行けばカエルとかいろいろいるけどさ。俺そういう農家っていうの知らないから、足尾っていうのはそういう知識がないがね。見ればハゲ山で、ススキかスッカンボ【8】しか生えていないようなね、痩せた土地だから。結構、ネズミとか蛇はいっぱいいるからね。蛇を捕まえたりさ。

S一ネズミを食べるっていうのは初めて聞きました。

夫一ネズミ食べたよ、食べなくちゃ。それもやっぱり食べる知恵を教えてくれたのは朝鮮人なんだよ。

S一そなんですか？

夫一結局強制労働で足尾は随分朝鮮人がいたから、うちの隣も朝鮮人の家族だったけれどもみんな教えてくれたから。うん、「生きていくんだったら、タンパク質が必要だよ」って。当時はタンパク質なんてそんな言葉は使わないけれども「食わなくちゃ駄

目だよ」って。うん。早く言えば、生物。「生き物を食べなくちゃなんないべ」って言われた。「生きているもの食べなくちゃ、生きていけないんだから」って。  
S一ちなみに、ネズミって捕まえて皮とかとつてどうしたんですか？  
夫一結構美味しいんだよ。

S一切つて？  
夫一骨だつてカラカラに焼いて、美味しいんだよ。

S一俺、結構なんでも食べたことあるんですけど、ネズミはないです。

夫一ハハ。

N一俺、犬もウサギも蛇も食べたことあるんですよ、カエルもある。  
夫一カエルは美味しいんだ。だから終戦、昭和21、22年頃っていうと、みんな舟石【9】行くと結構野生のウサギが一杯いたんだよ。そういうのを仕掛けで獲ってきて食べたりしてね、うん。

【お話を聞いて】

S一「朝鮮の人が教えてくれたんだから」と、改めて感心しながら話してくれていたのが印象的。そして、その時にやり取りした相手の朝鮮の方がどんな人なのか知りたくなった。

N一外国人に対する印象も人によって違うのだと思う。この方のように近くに住んでいた朝鮮の人から知恵を得た方もいれば、あまり外国人と接したことがない方も多いのだと思う。

ただ、今回のような異なる文化を尊重する態度は学ぶところが多い気がした。

### 近所の人や進駐軍との交流

「2014年7月7日—夫・妻・志村・中山」

小学生だった頃に丁度戦争になり、鉄道を使って食料の買い出しをしていたという方のお話。子供目線で様々な場面を見ていたことがわかる。

夫 だからこらの人でもほら、朝鮮人の人が砂畠に住んでいた

ろ。俺は朝鮮人の子供らの友だちん所にょちゅう遊びに行つたら。同級生で。「お前の家に遊びに行くど」なんて言つてさ。すると瓶から食べ物を出すんだよ。

S え? 瓶から?

夫 一瓶。瓶からさあ、今でいえばあれだね。

N キムチみたいな?

夫 ああいうところに漬けておくんだね。「うまいの食わせつから」って言うと、今でいうキムチなんだよな。ああいうのを出してくれたり。「お前の家、瓶一杯あるな」ってやつていたんだから。

S あー、なるほどね。瓶ごと引っ越しして來たんだ。

夫 うん。こういう小ちやい瓶なんであつたんだよ。それで、一回



S | 白人捕虜収容所跡地周辺の現在の様子。“[米国国立公文書所蔵資料]に記録されている野路又の捕虜収容所の資料には、「1943年11月10日、東京捕虜収容所第8分所として、栃木県上都賀郡足尾町野路又に開設。1945年8月、第9分所と改称。9月閉鎖。使役企業は古河鉱業足尾鉱業所。捕虜はトラックで製錬所に通って作業に従事した。終戦時収容人数245人(米210,英32,他3)、収容中の死者24人。」と記されています。”(大吉利一郎、『足尾町野路又にロマンを求めて』、栗野印刷、2013年、78頁)

火事があつて大変だつて友だちの家に飛んで行つたらさ、そうしたら瓶を渡してよこすんだよ。「出してくれ」つて。  
S え、瓶を?

夫 ハハ。瓶とかね。棚みたいな家財道具じやないんだよね。そういうのの中に、衣類だってちゃんと箱に入つてあるんだよ。だから出してくれつて。もう壺で持ちやすいものになつてあるんだよね。あの、だからほら、ああいう朝鮮はほら、あつちが攻めて来たり、こつちが攻めて、何が来つか分からんんだつてね。だから、本当に、パ−つてやつて持つてやつて。

S あ、すぐに逃げられるように?

夫 逃げられるものを壺にしまつておくんだつて、後で聞いたたら、だから火事の時には壺を渡して「とにかくこれ出してくれ、おっ欠くな」なんて言つて。

S 瓶をこうやって、バケツリーミたいに?

夫 渡しながら中身の音を聞いて「金じやねえなあ」なんてね。火事で2、3軒燃えちゃつたんだけれども、お母さん、お婆さんらに「なんか持つて行つてあげられるものないけ?」って聞いて「ほら、これこれ持つて行つてやれ」なんてさ、やっぱり持つて行つたことあつたよ。「ありがとう」なんてさ。……(省略)……それで、その子が朝鮮に帰る時に家に来てね「お礼に來た」つてさ。だけ

ね、ほらいじめられたから、「あの野郎」なんつてね。でもわざわざ、「もうそろそろ、朝鮮に帰るから」なんて言つて「あれしてください」なんて来てくれた。「子供らと遊んでくれてありがとう」なんて来てくれて。だから懐かしかったよね。

S—その帰つたっていうのは、終戦後すぐってことですか？それとも、月日が経つてから？

夫一終戦すぐだね、もう暴動みたいなのが起きて、あれしちやうでしようがないんで、あれが来たんだよね、アメリカ人。アメリカ軍隊が。小学校に泊まつて鎮圧していつたんだよね。外国人捕虜などの人たちが暴れ回つたんだよね<sup>10</sup>。だからもう逃げたり、それでそのうち、ほら、朝鮮系とあれとで押さえたり何なりして。だからほら、当時外国人を使っていた人たちはみんな逃げちやつたんだよね。ほら、坑内あたりで、「この野郎、ふざけんな」なんて言つて使つていた奴は逃げちゃつた人がいるんだよ、いっぱい。いじめた奴は、

S—何されるか分からぬから。

夫一だけどやっぱり仲良くタバコなんて目の前でパपてふかしてさ、ベット置いて「じゃあな」なんて言つて。そうやつて吸わしてやつた、そういつた奴なんかは今度は帰る時に逆にお礼に来ているんだよね。「お世話になった、班長さん」って。班長さんって言うんだよね。「班長さんいろいろお世話になった、班長さん優しかったから」って来てね。家の親父の所とかに来てさ、だから終戦になつたよ。

て、その暴動が起きてちょうど取まつてもう帰るつて頃になつたらね。もう、びっくりしたんだけれど、豚でもなんでもぶつ殺しちゃうんだよね。牛までぶつ殺しちやうんだから。バケツ山盛りに肉持つてきたよ」なんて持つてくるんだから。ハハ。

S—へ、凄いですね、ごちそうですね。

夫一「班長さん」なんて言つてさ、「肉持つてきたから」なんてさ。

「犬じやなかんべな」って言うと「豚殺したから」なんて言つて。ああいうみんな長屋で豚でもなんでも殺しちやうて食つちやうんだもんね。だからそういうの言われて、「見に行くんべつて言うて見に行つたこともあるもん。ハハ。見てみると上手いんだよね。豚なんか、バーフとネットかけて、こんな変な道具でバリバリバリバリ毛とくちやつてね。

S—動物を飼つていたんですか？

N—屠場があつたのかな？

夫一いや、買い出しかなんかに行つて、ああいう所から買つてきた。あれしたんじやないかな。そんな屠殺場でもないんだよな。

……(省略)……

S—それと、終戦直後に外国人捕虜収容所に嗜好品が詰まつたパラシューが降ろされたと聞いたんですけども、ご記憶ありますか？

夫一ほら、飛行機がどんどんどんどん来たから。で、落下傘で。

てくれ、取りに行つてこい、手伝つてくれ」って言われて探しに行つた。で貰つてきたことある。だから落下傘の生地やなんかも「こんなのがいいから、みんな持つて行け」って、みんな生地を切つてくれるのさ。凄い生地なんだよな。だから「リュックサックにする」と良い」って言つてみんな、同じ様な色のリュックサックを背負つてな、ハハ。笑つたんだよ。

S—へー、そんなこともあつたんですね、面白い。

夫一布をくれたんだよ、お礼に。「持つて行くか」って聞いて切つてくれて。だから進駐軍が来た時はもうそこであれしていかから、おいらの所こうやって呼んでさ、その時初めてソフトボールとかさ、一緒にやるべつて言つてさ。

S—え、進駐軍がですか？

夫一うん、あの時「ああ、ソフトボールっていうのは」っていうのなんだな」つてさ、ほら野球じゃないんだつて。こんなにでっかいボール持つてきて、進駐軍が「野球知つてることある?」つて言つて。「ソフトボール!」つて英語で言つて、一緒にやつたことある。そしてお礼にチヨコとかをくれた。で「貰つて良いのか、先生?」つて先生に聞いたら「貰つて良い」つて言つて。で、学校に年中遊びに行くとき、ソフトボールとかやらせんの。ボクシングとかさ、あれ2、3回やるとたばつてさ。ハハ。だから進駐軍が来た時にみんな面白いことやつたり、一緒に色んなことやつたりして和や

## — Q5 — キラキラした石、見つけたのですが……



協力隊が足尾で拾った鉱石のかけら。

かだったの。でも先生はなんか「あんまり貴わないでくれ」とかなんとか言つたけれども、「仲良くするんならいいよな、しょうがないよな」って言つたの。だから遊びにいったよ、年中。進駐軍のあそこ、学校へね。

「お話を聞いて」

S 少し違う家の中の壺に気づいたり、パラシユートを探しに行く楽しさなど、子供目線だからこそその感覚。背の高い毛むくじゃ

らの進駐軍に驚いたとも言つていた。ネガティブな要素だけではなくて、純粋な変化に応じて新しい人や文化に入り込んでいく明るさも凄いと改めて思った。

N 戦後の進駐軍と日本人との関係についての話は特に興味深かつた。欧米人に初めて接する子供は、大人よりも無邪気に交流することが出来たのだと思う。異文化とふれあうこととなつた当時の興奮が話し手の語りから伝わってきた。

1 小瀧坑エリアには中国人捕虜収容所(興亜寮)跡と、朝鮮人供養塔専念寺小瀧説教所跡がある。

2 野路又の白人捕虜収容所には245人、砂畠の白人捕虜収容所には213人が収容されていた。参考：米国国立公文書館所蔵資料。

3 興亜寮と呼ばれた中国人捕虜収容所には257名の人が収容され小瀧坑内外で働いていた。

4 昭和10年9月当時の足尾の従業員は職員四六八、鉱員四六七、臨時鉱員一四五、計六五六六名で、全部日本人でしめられたが、昭和二五年から朝鮮人労働者がおもに坑内の運搬夫として使われ、七年からは、勤労報国隊や学徒動員の人たちが選鉱製煉を中心によつと入ってきた。(村上安正編『足尾銅山労働運動史』足尾銅山労働組合、1958年、178頁)

5 3.75キログラム

6 足尾の複数の方から聞く話 資料でも、砂畠と野路又の白人俘虜収容所の屋根には白ペンキで「P・W」マークが描かれてまい山あいを縫つてアメリカの飛行機が急降下し医療品や食糧などを落下傘で投下して、つい先ころまで「足尾は山の中にあるから、爆撃したくても山にぶつかってしまうので、絶対空襲はうけない」と安心していた足尾町民の度ぎも抜いた(村上、前掲書、『足尾銅山労働史』、189頁)などの記述がある。

7 足尾と鹿沼の間にある高原地帯、開拓農家などがあった。

8 イタドリ(いのこ)

9 備前橋山の中腹の本山と銀山平の中間地に位置するエリア。

10 戦後の暴動に関しては各証言や先行研究で様々な説明がある。足尾の方から聞く話では、戦時中酷い扱いを受けていた労働者が、終戦直後に意地悪をした人を探しまわったという内容。資料では、帰国の促進を求めるデモ行進や補償要求の交渉などが行われ、それらを暴動とされることがあった。参考：村上、前掲書『足尾銅山労働史』。村上、前掲書『足尾銅山労働史』。古庄正『足尾銅山・朝鮮人強制連行と戦後処理』(駒澤大学経済学会『経済学論集』第26巻第4号、平成7年3月)。

足尾に来ただばかりの頃、鉱物の置物が観光施設や商店などに飾られていて、それなりに銅山らしさを感じた。しかし、予想を上回ったのが各家庭に置かれる鉱物の有様。「友だちに貰った」「昔集めたのを持つていて」「何処の家にあるがね」など、いろいろな方法で手に入つたらしく、どこの家庭にもと言つていいほど何らかの鉱物は見かけるし、庭先に放置されている(転がっている)ことも……。よそ者にとつては感激してしまふのに、「そういえば、家にもあるよ」と棚に埃まみれになつて忘れ去られていた水晶の塊を見せられると、今でも山道などで拾えるピカピカした石(水晶などが混ざつた鉱物の破片)を見つけて喜ぶ自分が恥ずかしいような、大人げない気持ちになる。

## 鉱石のようなお菓子

「2013年7月11日」兄、弟、志村、中山

昭和30年代に小滝で幼少期を過ごしたこちらのご兄弟は、トルコ遊びや、町の様子など楽しい話題で盛り上がる。鉱物の方も、「そういえば……」ということで一瞬思い出してもらつた。

S — 足尾の人のお話を伺うと、綺麗な鉱物を家の中に飾つてたという話を聞くのですが、そういうご記憶はありますか? 例えばこういうの拾つたんですけど。【1】

兄 — もの凄く、いっぱいありましたよね。こんなのどこにでもありました。

S — あー、そうなんだ。

兄 — 黄銅鉱とか、磁鉄鉱とか、もつとキラキラしているものとか。

今言つたように、水晶とか六方石とか。引っ越しの時に全部捨てちゃつたけれども。握りこぶしくらいの塊とか、大っきいのだとリュックサックくらいの塊とか。六方石とかを、床の間の飾りもんにしていました。

N — いいなあ。

弟 — 確かに床の間にでっかいの、あつたような気がするんですよ。確かに床の間にいっぱいあつた記憶があります。水晶だな、きっとね。ボボボボって白い刺がさ。小さいながらも立派だなと思つたけれども、どこ行つちゃつたんだろうね。ハハ。

兄 — 「うんなんもん」なんて感じで。鉄鉱石とかね、金色の、石の部分が無いんだから。100パーセント鉱石。

弟 — 「綺麗だな」と思うけれども、それほど値打ちがあるとは思わないから。

S — それが普通だったんですよ。

弟 — 多分持ち出し禁止だうたんだろうな、今思えども。それ親父なんか持つてきて、どこの家にもあつたからな。ハハ。こんなでかいの、家の中に入らないだろうけれども、

兄 — だから駄目だと言いながら、堂々と持つてきていたんだろうな。本当にどこの家にもありましたよ。

弟 — あとは、足尾のお菓子屋さんでもそういうお菓子を作つてたもんね? 鉄鉱石の形をした砂糖の塊(54頁参考)。本当にお菓子だか石だか分からなくらいの。六方石みたいなのが、

兄 — 緑色のとか。

弟 — 確かに、あのお菓子もどこで売つていたんだろうな。

兄 — 間違ひなくあつた。

S — それは飴ですか?

兄 — 板菓子、砂糖の固まつた、板になつていて。

弟 — でもたぶん甘いだけなのかな? ハハ。

S — よく食べていたんですか?

兄 — たまにお土産とかで貰つて食べていましたよ。丁度なんだろ

## 喫飯所で鉱石を洗う

「2014年3月5日」夫、妻、志村、中山

社宅暮らしの話題の合間に、すかさず鉱物について聞いてみると、別の部屋から鉱物を持って来てくれた。

う、水砂糖のようなものですね。  
弟 — そうだ、水砂糖だ。硬かつたものね。  
N — 他に足尾で作つていた製品というか、今は無くなっちゃつただけだな、っていうお菓子とか何かありますか?  
兄 — 足尾は何もないんだよね、

弟 — 何もないんだよね、そう言うと寂しくなつちやうけれども、「お話を聞いて」

S — 全体の話の中では鉱物の話題は一瞬だけだつたけれども、確かに記憶にある(そういえばね、という感じで)。私の見つけた鉱石のクズは、本当に「うんなんもん」で、とても敵わない。ちなみに、鉱物のお菓子は残つていないが、現在の足尾ではあんこ玉や足字錢最中がある。

N — 鉱石を引つ越しの時に捨ててしまつたということに驚いた。よそ者からすると「もつたいない!」と思つてしまふが、足尾では人によつては「ありふれている」もので、そこまで固執しなかつたのかなと思う。



鉱石菓子 銅の花 包装紙（提供：安塚菓子店）

S | 当時のお菓子の説明文には、「銅の花は足尾銅山から産する鉱石を表現した砂糖菓子で真に鉱石を思わせる足尾の代表的な御土産品であります。銅山の主要鉱石の黄銅鉱とそれに伴って産する石英(六方石、水晶)方解石などを配して形どった作品であり、原料には砂糖菓子と白ざらめを使って加工したものであります。……お召し上がるときは、よく破碎していただき足尾の話でもしていただければ幸いに存じます」と記されている。お店の方の記憶では、昭和30年代から閉山時には確実に販売されていたが、いつしか作らなくなってしまったとのこと。

夫 何の鉱石だつてさ、もう良い鉱石なんてみんな持つて行つたんだよ。鉱物を家に飾つていた人が一杯いたんだよ。そして、飲み代にみんな売つちやつたとか、家にも親父が持つてきてたでかい、こんなウワーツてのがあつたんだから。だけど、「飲み代にしちやうべ」なんて言つて、ハハ。「また拾うから」なんて言つて。だから一番持つて行つたのは、他から出稼ぎに来てたんだ……、

N 一組ですよね。

夫 一〇組が来たもんだろ、その親方さんがそういう鉱物が好きだから買つたんだよね。

N 一買つた？

夫 一閉山の前にもうほら、「あそこに酒代に持つてけよ」なんて、初めはおじさん、「いやー、俺が買うから」なんて言つたぞ。

S 一その鉱物ですか？

夫 一鉱石。だから、そこが今どういう風になつてあるんだか知らなけれども、みんな。

N 一〇組さんはもういないですね。

夫 一いないない。飲み代に持つて行つたんだよね。

……（省略）……

S 一へー、でもそこで集まつた鉱物が、どつかにあるんですかね。お仕事していた時に、綺麗な鉱物とか見つけたりしたんですけども、

夫 一いいいい。飲み代に持つて行つたんだよね。

……（省略）……

夫一バレちゃうがね。だから面白いんだね。ほら、組夫でもなんでもさ、「持つて行けないから、ここに置いてくよ」って言つて喫飯所に行くでしょ。「持つて行けないから、○さんここに置いてくな」って。ここに置くんだけよ、夜番だと帰っちゃうがね、「明日、置いてつてくからな」って言うと無くなっちゃうのさ。そうすると

「○、誰が持つていたんだろうな」なんて言つて、そこに置いてあるの。人しかいねえ」なんて言つて、そこに置いてあるの。そうすると、「貴様この野郎」つて、なるんだよね。

S一ハハ、そういうことになるんだ。

夫一うん、「貴様、この野郎」つて指差されるんだよね。「坑内にあるうちは古河のモノなんだけれども、外に行くと俺のモノだわ」なんて言つてね。「この野郎」なんて喧嘩になつて。

S一そうなんですね。喫飯所では、どんな風に鉱物が置かれていたんですか?

夫一支柱さんだと、車夫さんだとが休む場所があるんだよね。仕事して、ご飯食べたり。そうすると「おう」って言つて入つて行くわけさ、「飯だ」なんて言つて、すると水場があつてそこに飾つてあんのさ。

S一飾つてあるんだ。へー。見てみたかったな、そういうの。

妻一ハハ。

S一どういう風になつていたんだろう、喫飯所の中に置かれていたんですか?

S一あ、いろんな人から聞いて?

夫一「鉱石とかなんとか見たいんですけども」なんて言つがね、そうすると「ああ、向こうに行つてみろ」なんて言つて。「○さんの家つて聞いて来たんだよ」つて。そのうち、鉱物を見て「これはあれだね」なんて言ひながら見ていくんだ。で、「一つ貰えますか?」つて聞くから「ああ良いよ」つて。

S一へー。えー、でもそういう人たちがいたんですね。

妻一いた、学生さん。

夫一大学生、中にはね良い石があつたみたいなんだよね。小ちゃな石でもね「これください。なんとか石つて貴重なんです」つて、S一じゃあ、石の研究している学生が来たんですか?

夫一随分来たな。

S一へー、そういうの想像がつくというか。なるほど、そういうこともあるのか。

妻一で、みんなやつちゃうんだよ。

N一高く売りつけてやれば良かったのに。

一同一ハハ。

るというのは。

夫一「いいな」つてなるがね。「いいんじゃないかな」なんて言つて水で洗つて飾つておくんだわな。だから、手のひらくらいの鉱物はもう本当に。

S一いっぱい?

夫一めずらしくないから、持つて行かないんだよな。

S一あ、当たり前だから?

夫一当たり前だから、「うん、まあまあだな」なんて置いて行くがね。「おう、これ貰うぞ」なんて言うと、「ああ、持つてけ」つてそういうんで。だから、手のひらくらいの石、あそこで横になつて埃だらけになつているけれども、詰めて、木箱作つて置いておいてね。

妻一でも閉山後、みかん箱つて、リンゴ箱とかの木箱つてあるでしょ、木の。それに鉱石が一杯あつたの。

S一あ、その、いろんな綺麗な鉱物がですか?

妻一うん、閉山までは、家にリンゴ箱2つくらい鉱物があつたの。そしてね、どつかから学生が来るの。研究だとか、何とか言つて。みんなやつちゃうの。

夫一ほら、もう引っ越しすんでさ、そんな重いもの持つて歩けないから。

妻一で、「この家に行けば、あるかもしれない」つて、誰かが教えてたんだよ。

夫一ほら、もう引っこ潜んでさ、そんな重いもの持つて歩けないから。

夫一そこの机の横に埃を被つてある石はね、ただ遊びで集めたりなんかしたから。だから坑内のは良いのが採れたんじゃないかな。坑内に入つていたから。うちらはほとんど遊びに行つて、「おう」「あ、これ貰うぞ」つて貰つて。だんだん増えると「じゃあ箱作つて入れるかな」つてこうやっておく。良いのがあると兄貴に送つてやつたり。

「お話を聞いて」

S一閉山後の石の買い占め、誰かが貰つて行つたという部分。鉱物に限らないことだが、気にしない現地の人の感覚と、他所から目線の珍しさが合わさり、持ち去られたことがよくわかる。私も否定する気持ちはないけれども、なんか胸に落ちない気もする。今更しようがないけれど。

N一キラキラ光る鉱石は、坑内で働く坑夫たちにとっての楽しみでもあつたし、もしかすると励みにもなつていただのかなと想像した。記念に飾つたり、飲み代にしたり。きっと光る鉱石を見つけたときはとても興奮し、嬉しくなつたのだと思う。

1 備前楯山の山道などでは、赤茶色がかつていて、水晶の破片が混ざっているような鉱石の破片が落ちていることがある。51頁の写真のような鉱石を割ると、黄銅鉱物や水晶が入っていることがある。

## 坑内のしくみ



足尾銅山観光内・坑道模型コントロール・マシンより

- A 製鍊所
- B 鉄索
- C ダイナマイト爆破
- D 鉱脈
- E 削岩機・トロッコ／スクレッパ運転
- F 下抗口削岩機トロッコ運転
- G 上抗口削岩機トロッコ運転
- H エレベーター機械室
- I リフト機械室

最後まで読んでくださり、どうもありがとうございました。

冊子の中には、既に知られていることであれば、ちょっと聞いたことのない場面、信じられない内容もあったかもしれません。もし、足尾に少しでも興味を持たれたなら、是非とも実際に足尾に足を運んで現地の姿に触れて頂けたら嬉しいです。

聞き取りを続けて気づくのは、「足尾の人は本当に足尾が好きだ」ということです。聞き取りでは、「自分が話すことなんてもも無い」「ちゃんとした資料みたいな話じゃない」といながらもどんどん話が広がります。また、日常の中でも足尾の場所や歴史の話題になると、周りの人が自分の経験談や知っていることを話しかけてくれます。そして、それぞれの話が濃くて果てがないので、立ち話を辞めるタイミングがなく、あつという間に時間が過ぎます。自分の暮らす場所について、こんなに話せるものかな…、といつも驚きつつ不思議に感じます。郷土愛だけではない何か、自分の住んでいる場所をもつと知りたて気持ちや、豊かな思い出を伝えたいという想いもあるのかもしれません。そんな話し手の方の人間味もひっくるめて、聞き取りを進めていきたいです。



足尾ほげ金域 MAP『日光市足尾地域 移住促進リーフレット 足尾に住んでいます』(2013年、日光市)を転用

## 用語集

### 古河

足尾銅山の事業主である古河鉱業株式会社(現在の古河機械金属株式会社)のことを指す。足尾の人が話の中で使う古河には、大きく足尾銅山の事業主である古河の会社全体を指しているといえる。会社のマークは「山一筋」の意味のヤマイチ。

### 古河市兵衛

古河財閥の創設者。天保3(1832)年－明治36(1903)年。明治10(1877)年に足尾銅山を譲り受け、銅山経営を開始。座右の銘「運・鈍・根」にあるように数年で大直利(銅脈)を当て一気に足尾銅山を繁栄させ、鉱山王と呼ばれた。

### 田中正造

足尾鉱毒事件に身を捧げる。天保12(1841)年－大正2(1913)年。明治13(1880)年栃木県議会議員、明治23(1890)年に衆議院議員に当選、この年の8月に渡良瀬川大洪水がおこり、大問題になる。翌明治24(1891)年「足尾銅山の儀につき」を帝国議会ではじめて質問。明治34(1901)年12月天皇直訴、義人の名を高める。

### 足尾の公害

「日本の公害の原点」といわれる足尾銅山における公害は、山本(足尾やその周辺)での煙害と、渡良瀬川やその下流域での水質汚濁、土壤汚染である。自然的要因に加え、用材・坑木・薪炭材需要による森林の大量伐採(6800ha)、明治20年松木大火(1100ha)、亜硫酸ガスなど有害物質の大気中放出などにより山林が荒

廃。この煙害は、昭和31年(1956)年自溶製錬法が導入され、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功。水害は、明治14(1881)年からの急激な産銅量の増加に合わせ、明治18(1885)年鮎大量死など漁業への被害から農作物へと、被害が徐々に現れるようになり、深刻な被害が発生したのが、明治23(1890)年の渡良瀬川大洪水の時だった。渡良瀬川、下流地域での水質汚濁と土壤汚染は深刻な影響を及ぼし、大きな社会問題へと発展した。

### 三養会

足尾銅山生活協同組合三養会。生協の発祥と言われている。明治41(1908)年に本格活動を開始し各社宅地域に売店があり、足尾町民の生活を支えた。現在は通洞売店と渡良瀬売店の2箇所が営業。

### 足尾の主要な3つの坑口

足尾では備前橋山から銅を採掘していた。作業場まで入る主要な坑口は「小滝坑」、「本山坑」、「通洞坑」の3つ。各坑口周辺には銅山施設や住居施設があった。現在では通洞坑の一部が、足尾銅山観光として見学できる。

参考：ふるさと足尾歴史セミナー自主研究会(文)、足尾町文化財調査委員会(監修)、『足尾銅山百選—産業遺産保存活用の手引き』、2004年

## 年表（足尾の聞き取りや日常生活で、必要なキーワードや出来事。）

和暦	西暦	できごと	人口
天文19	1550	銅山が発見される：古河鉱業(株)(現在、古河機械金属(株))閉山時発表	
明治10	1877	古河市兵衛が銅山を買収、経営を開始	
明治14	1881	鷹之巣坑で直利を発見	
明治16	1883	本口坑で大直利を発見	
明治24	1891	田中正造が帝国議会で鉱毒問題を質問	11,664
明治29	1896	第1回(鉱毒)予防工事命令発令(明治36年まで5回)	11,448
明治34	1901	田中正造が鉱毒問題で明治天皇に直訴	22,708
明治35	1902	足尾銅山との示談により旧松木村廃村	22,708
明治40	1907	坑夫による大暴動事件が起こる	34,824
明治41	1908	本山に生活協同組合「三養会」を開設 (明治39年に三養会設立準備会発足、本山三養会一部開店)	28,618
大正元年	1912	足尾鉄道 桐生駅～足尾駅開通	29,774
大正10	1921	県内初のメーデーを足尾で開催	27,387
昭和15	1940	この頃から朝鮮人労働者が銅山の労働に従事	23,187
昭和19	1944	中国人が強制連行され坑内労働に従事	
昭和20	1945	足尾銅山労働組合同盟会結成	20,997
昭和29	1954	小滝坑廃止、フィンランドのオートクンプ社から自溶製錬技術を導入	
昭和31	1956	「自溶製錬法」、「電気集塵法」、「接触脱硫法」を応用した脱硫技術を世界で初めて実用化し、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功	
昭和48	1973	足尾銅山閉山(2月28日)	8,699
昭和53	1978	日足トンネル開通(延長2,765m)	
昭和55	1980	足尾銅山観光オープン。坑内観光が始まる	
昭和63	1988	製錬所が事実上の操業停止	4,935
平成18	2006	今市市、旧日光市、藤原町、足尾町、栗山村が新設合併し、新たに日光市が誕生	3,196
平成27	2015	(現在)	2,287

### 〔典拠〕

『足尾町記念 足尾博物誌』(平成18年2月足尾町)、『足尾銅山近代化産業遺産 MAP』(平成26年3月、第6刷改訂版 日光市教育委員会事務局文化財課世界遺産登録推進室)より引用。人口データは、『足尾町記念 足尾博物誌』、永井護「足尾銅山の生産システムの変遷と空間的都市構造」(平成20年7月1日、日光市教育委員会足尾銅山跡調査報告書)他、広報あしお、広報にこうを参考にしている。

## 「ごめんください、足尾のこと教えてください！」—— 地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集

〔写真について〕

発行日・2015年3月30日  
発行・日光市役所足尾総合支所総務課  
編集・日光市足尾地域おこし協力隊  
デザイン・木村稔将

協力・聞き取りに協力してくれた皆さま、古河機械金属株式会社、

新井雅之、栃木県立文書館 安塚葉子店、皆川俊平、好井裕明

写真・伊東信、新井常雄、地域おこし協力隊

・聞き取り調査の資料を閲覧希望の方は、日光市役所足尾総合支所総務課までお問い合わせください。

日光市役所足尾総合支所総務課

〒321-1514 栃木県日光市足尾町通洞8-2

TEL・0288-93-3115

©禁無断転載

この冊子に掲載している主な写真は、現在も足尾で暮らす伊東信さん(95歳)が撮影したものです。伊東さんは、昭和18年に鍛工として古河鉱業に入社した時に、当時高価だったカメラを中古で購入し、戦後足尾に戻つてから撮影活動を本格的に開始。仕事をしながら、休日に写真仲間と松木などの足尾のあちこちを回つたり、社宅や家族の日常を写しながら、足尾町の芸術祭やコンクールなどで発表してきました。写真の裏には撮影日や、タイトルなどがメモされているおかげで、当時を知る貴重な手がかりとなっています。(掲載写真的キーワードはメモより抜粋)  
最近は、お気に入りの柳の絵を描いたり、日記をつけるのが日課です。

## この冊子を手にしてくださった方へ

この冊子は、平成25年度から足尾で活動する地域おこし協力隊「1」が行っている、生活史聞き取り集の続編です。冊子タイトル「ごめんください、足尾のこと教えてください！」にあるように、私たちの聞き取りでは日常的な立ち話やお茶飲み話、時には突然お宅にお邪魔して、足尾の方の経験談や思い出を教えていた、だいています。「私は何も知らないよ」と言ひながらも楽しそうに話し続けてくれたり、「こんな写真があつてね」とお持ちの資料を見せてくれたり、ボロつと予想外の話題になることもあります。あれば、複数の方から同じキーワードが出たりもします。様々な内容と話し手のお人柄は魅力的で、聞けば聞くほど、まだまだ知らない足尾の姿があることに気づかされています。

私たちの聞き取りで大切にしていることは、今、目の前で語られた「その人の生き方や想い」をできるだけそのまま残すことです。時には、記憶違いや間違いや一方的な見方もあるのかかもしれません、ある人にはそう記憶され、今はそのように話してもらえることも、現在の足尾の姿だと捉えています。前回の冊子と同様に、違和感や疑問を持たれる方もいらっしゃるかもしれません、「数ある足尾にある、二つの視点としての生き方や想い」に、どうかご理解くださいますようお願い申し上げます。

2014年版の冊子では、公害や銅山の仕事や社宅といった、「足尾銅山といえば…」に対応する疑問にまつわる内容を取り上げましたが、この続編では、「治山」と「閉山」が大きなテーマです。ハゲヤマのイメージでおなじみの松木エリアでは、明治30年代から手作業による治山事業が進められてきました〔2〕が、そこで働く多くは足尾の女性たちや土木業を請け負った組の方々でした。銅山と同様に、足尾地域の多くの方が関わった治山事業のありようは、足尾にとって外せない要素といえます。また、昭和48（1973）年の閉山については、よそ者の私たちが安易に触れられないような、あまり聞いてはいけない気もしています。けれども、3年間の中で自然と耳にする機会は多く、これもまた足尾になくてはならないテーマなのだと思います。

最後に、この聞き取りの活動を受け入れ、協力してくれたみなさまに感謝いたします。

平成27年度 地域おこし協力隊 聞き取り事業担当 志村春海

- 1 人口減少や高齢化などの進行が著しい地域に、地域外の人材を一定期間誘致し、その地域の活性化を促進するという総務省の取り組み。  
2 明治30年（1897年）、農商務省訓令により東京大林区署が「足尾官林復旧事業」を開始する。（参考：大間々管林署・足尾治山事務所、「足尾の治山」パンフレットより）

02 この冊子を手にしてくださった方へ

03 目次

04 凡例

### 05 | Q6 | 松木ではどんなことをしたんですか？

- 松木での仕事 [2015年1月23日]  
女性の仕事・やりくり [2015年4月16日]  
要領の良い人 [2015年4月27日]  
にぎやかな松木 [2015年8月18日]  
中学生のアルバイト [2015年8月28日]  
仕事と家事 [2015年9月]

### 29 | Q7 | “閉山”ってどういうことだったのですか？

- ある坑夫さんにとっての閉山 [2014年1月10日]  
[2014年3月5日]  
[2015年5月21日]  
残った人はいない [2014年1月20日]  
共同浴場での親切 [2014年10月24日]  
現役の消防団員 [2015年5月10日]  
引っ越し前の美容室 [2015年5月27日]  
社宅から見た、閉山から今 [2015年6月28日]  
猫の手も借りなくなる忙しさ [2015年9月1日]  
飲み方の変化 [2015年9月2日]

60 編集後記

62 年表

63 用語集

64 クレジット

# —Q6—松木ではどんなことをしたんですか？



雪の足尾銅山 思い出の仕事(伊東信撮影)

[写真裏面のメモより：山道作りは油断は出来ぬ 足尾松木除雪作業は女の仕事だった 昭和37.3.2日写ス]

## 【凡例】

- 文中に出てくる話し手のうち、男性はM、女性はFとなっている。複数名登場する場合は、Fa、Fbと表示。
- 聞き手のうち、協力隊員である2名は中山(N)、志村(S)。協力者の好井先生は(Y)と表示。
- 沈黙は、「……」。省略は、「……省略」……と表示。
- 話の途中で途切れている時は、「」で終わっている。
- 笑い声はカタカナ表記。
- 語りの中で誰かの発言の真似などは、「」で表している。
- 冊子全体の共通する用語は63頁の用語集に掲載。
- 他の用語、地名や補足には注を入れ、典拠があるもの以外は協力隊が編集している。

## 「言葉・名称について」

- 本文中に出てくる固有名詞や、話し手の方々は匿名で表記しています。
- 職種や組織の役職などは、聞き取りで使われた名称をそのまま使っています。  
事実確認が不十分なため、実際と違う場合もあるかもしれませんので、ご了承下さい。
- わかりにくい漢字、特殊な読み方をする漢字には、括弧内に読みがなをつけています。

## 「調査方法・編集方法について」

- 聞き取りを行った時系列順に掲載しています。
- 聞き取り抜粋箇所の後に、協力隊2名の事後報告や感想などのコメントを掲載しています。
- この聞き取り事業での内容は、話し手の方の了解を得た上で文字資料化し、日光市足尾庁舎で保管しています。

## 「掲載写真のクレジットについて」

- 写真のクレジットや説明は次の順序で表示しています。
- タイトル（太字ゴシック）  
撮影者（太ゴシックで括弧づくり）  
メモの抜粋や協力隊によるコメント（ゴシック細字か明朝体）  
伊東信さん撮影写真のタイトルは、アルバムや写真裏面に記入されているメモから抜粋しています。  
新井常雄さん撮影写真のタイトルは、協力隊が考えています。

足尾以外の地域で「足尾に植樹に行つたことあるよ」と話題に出る頻度は多い。協力隊も、植樹デー「1」などに参加してきたが、1日約1000人ほどの参加者が一斉に山を登り、植樹をする光景は、確かに足尾ならでは。他所からしても、足尾ハゲヤマのイメージは定着しているのだと実感する。一方で、足尾の方にハゲヤマ（松木エリア）の話をうかがえれば、植生盤「2」や砂防工事での事故、女性の働き先であつた山仕事が実体験として語られる。「足尾の女に会いたければ、松木に行け」と言うこともあつたらしい。現在は環境学習として浸透している「植樹」と共に、前々から続いている治山の全貌にも注目していきたい。

## 松木での仕事

【2015年1月23日】—夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)】

昭和30年代に、植生盤や護岸工事の委託業者として、治山の業務を請け負っていたM組。当時の写真を広げながら、業者側から見てきた松木の風景を教えてもらう。

S—あの、私の認識なのですが、松木の山には砂利しかなくて植物がない。だから、土を運ぶ必要があって、土と種が合体した植生盤を使つたのですよね。実際こういう植生盤で植物は根付いたんですか？

M—うん、根付いたよ。

S—じゃあ、やっぱり良い方法だったんだ。

M—ほとんどはね、赤土だけで焼けた土が薄く表面に残つていて、それが風でたまつたりしていたんだよね。ガラヤマだから、最初にするのは山の整地。だいたい、山がデコボコだからね。みんな削つて、整地して滑らかにしていくわけ。それをするのは、春の前。だいたい1段の間が40センチから場所によっては、20センチの所もあつたけれども。

S—じゃあ、運んだ土を石で大きくせき止めるようにし……(省略)……

て、その中に更に段々に40センチくらいの土の段をつくり、

そこに植生盤を敷いていくのですね。ちなみに、その植生盤の案をMさんが最初に聞いた時は、どう感じましたか？あんなに沢山の土がないような岩場に対して植生盤の方がは業者の立場からすると「大変だな」とか、どう感じられたのかなあって。

M—仕事は大変な仕事だよ。だけれども、この仕事は金になつた。

S—そうなのですね。へー。

M—組で請け負う山じゃない平原の仕事と比べると、

倍近くになつたんじゃないかな。

S—それはどうして良いお金になつたんですかね？

M—危険手当がつく。いつ、どこから石が転んでくるか、また下が崩れて滑つてこけちゃうかな。そういう危険手当つていうのは、非常に多かつた。

N—実際に事故とか多かつたんですか？

M—あつた、あつた。足を滑らして落ちちゃったとか。家(うち)なんかも、2人ほどケガ人を出したから。

……(省略)……

F—あとは、山の天気は危険でね。突然の豪雨の鉄砲水



植生盤の作業風景

(新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵)

S—植生盤を作っている様子。機械で圧縮しながら、土に含まれている水分を抜いている。てきた植生盤は一人7枚ほど背負い、山の斜面へと運ぶ。係の人が運んだ枚数をきちんとチェックしていたらしい。斜面に貼り付ける際には、木の釘のようなもので止める。作業中は、日焼けをしないように手ぬぐいで顔を覆っていたり、旦那さんから地下足袋を借りて使っていたとの話も。

で、1回、新車を潰されちゃったんですね。

S —あらー、本当ですか？でも、車だけの被害だったら、良かつた方になつちやうんですよね…。

M —だから、そういう時は山で雨が止むのを待つていてから行くのさ。

F —「3粒降ると、もう沢山降つてくるから松木を降りる」って、ばあちゃんがよく言つていた。

N —3粒？

F —3粒。バラバラつて降るともう逃げないと。結局、枯れ山だから、ちょっと降るとドーツと流れちゃうわけだよね。

S —そつか、そつか。森なら木の根っこで水も溜められるけれども、植物がないから水がバートと来ちゃうわけですね。

M —そうそう。そういう年が5、6年続いた時があつたな。

S —奥さんも、旦那さんがそういう危険な場所で働いているつて思うと、心配ですよね。何かあつたんじやないですか？

F —それでね、夜遊びが好きなのよ。

全員—ハハハ。

S —そつか？ そつか？

F —朝も「控えなよ」とか言おうと思うの、でも…ね、危険

M —気が荒いといえば、足尾の人は氣の荒い人が多かつたんだよ。

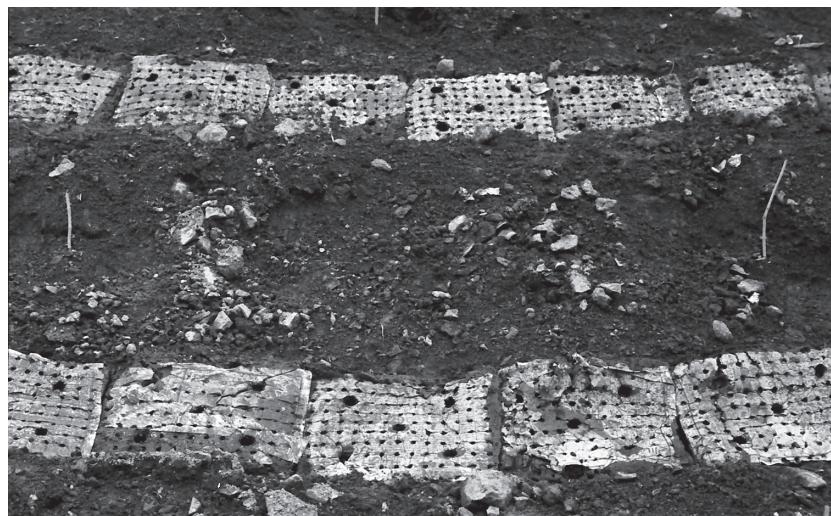
S —へー。じゃあ、仕事場で人をまとめるのも大変だったんじゃないですか？

M —それは、班長だよな。昔は世話を焼きつていう人がいて、その人が気を回していたね。で、その上で「今日はどこやれ、ここやれ」って言うのは、だいたい俺が指示をして。

N —あの、石畳は女性が運んだりもしたのですか？

M —うん。で、植生盤っていうのは、だいたい一人何枚って、一日のノルマは決まっているのですか？

M —うん、一人が100枚。それを15人だと、1500枚



植生盤の様子（新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵）

S | 表面の白く見えるものは新聞紙が被せてあるもので、穴は機械で圧縮した跡。植生盤と植生盤の間は約40センチほど。新聞紙を切ったりする準備は、家にいた奥さんが内職でやっていたらしい。

な仕事だと思うから、言わざ終いなのさ。だってね、私が寝てから、仕事終わって帰るからね。で、朝には弁当持つて仕事を行くから、段取りしなくちゃいけないでしょ。そういう事はありましたよ。普通のサラリーマンと違うから。

……（省略）……

がその日の日當になるんだ。で、10時に雨が降つて2時間くらい手がつかないとしたら、雨が降つた後の1、2時間で片付けるとか。そういう、手際がよかつた。

S —もし私だったら、働けるかな…。出来合制みたいなもので、大変ですよね。厳しいと言えば、厳しいですよね。ちゃんと仕事を終えなくちゃならないから。

M —あの頃の女人つていうのはね、今の男人よりも仕事をしたな。うん。

N —まあ、でもいつの時代も、男より女の方が働くなつて思うな。ハハ。

M —で、女つていうのは根が良いからな。男と違つて。男は危ない所だの、高い所だのは良いかもしれないけれども、そういう長い時間やるつていうのは、やっぱり女には敵わない。今でもそうなんじやないかな。

……（省略）……

M —それですね、作業場の松木ではその当時ウドがもの凄く沢山出たの。みんな昼休みにウド採りに行つちやうと、集まって来て仕事をするまでバラバラで時間がかかるちやう。だから俺の場合だけれども、ウドの季節になると、仕事を

している中から2人を必ずウド採り専門にやつて、それで収穫したウドをみんなで分けてやるの。

S —なるほど。ウドはみんなが欲しいから、ウド採り当番みたいにしちゃって、それでみんなで分けた。

M —そうそうそう。そうするとね、うんと仕事の能率が上がる。休み無しだから。

S —確かに、バラバラでウドを採りに行っちゃうよりも良いですね。

M —30人で30分遅れてみろ、仕事がえらい遅れちゃうだろ。そうすると、2人いる分よりも損が出ちゃうんだ。

S —確かに、それなら2人の当番が採ってきた方が、他の働いている人たちも安心ですよね。自分たちもウドを食べられるし。

M —貰えるからね。「もう、ウドは飽きた」なんて言うと、「じゃあ、もうウド採りはやめだ」なんてな。

N —ちなみに、ウドの他に植物っていうのは、生えていたんですけど?

M —食べられるものは、別になかったな。

S —では、動物ついていたんですか? 当時の山の方に。

M —当時の山もね、カモシカがたまに見えたらしく。あとは鹿だな。

S —鹿。じゃあハゲヤマでは、やっぱりその、植物とか動物っていうのは基本的にはいない?

M —閉山になつたら、本山の方の人なんかが、銅っていた犬を置いて行っちゃう。足尾から引き上げるために。引っ越し先には連れて行けないからね。

S —でも、犬も生活できないのではないですか?

M —いや、犬も凄いよ。1回だけ見たことがあるのはね、犬が5、6匹で鹿追をするのを見たね。

S —犬が?

M —うん。一ヵ所では固まらない。で何ヵ所かで散らばってね。山の高い所から見ている犬と、下で追っかけるやつが2匹くらいでね。鹿を追つて行くのを、2匹の犬が山の上から見ているんだ。それで鹿がどっちに曲がるかを確認したら、曲がった方に降りて行くんだよね。殺し方も上手なんだ、仲間内でわかるんじやないんか。鹿1頭くらい食べちゃうんだよね。

N —はー、

M —人間よりも賢かったぞ。あの時はね、6匹だから7匹いたんだよ。

S —でも、その犬は全部捨てられた犬だから、雑種とか、みんな同じ種類ではなく?

M —うん。で、冬場になつたら寒くて死んじゃつたりなんかさ。

S —凄い。でも、ちゃんと犬たちも捨てられた者どうして群れを作つて、生き延びていた時期があつたのですね。松木でそういうことがあつたんだ…。

M —俺だつてこうやって見ていて、関心したんだもの。

【お話を聞いて】

【2015年4月16日】Fさん、志村(S)

N —足尾といえば銅山と鉱毒事件を連想するのが一般的であり、治山事業、特に多くの女性が活躍した植生盤や植生袋のことを知る人は圧倒的に少ない。治山事業は古河による鉱毒予防技術の研究・開発とともに公害と表裏一体の歴史だ。Mさん夫妻の話からは、当時の女性の働きに対する尊敬の気持ちや、治山事業に対する誇りが感じられた。

女性の仕事・やりくり  
社宅のお母さん事情について、根掘り葉掘りいろいろ教えてくれるFさん。「植生盤の仕事は怖いから」ということで、山の道路の整地の仕事を昭和40、50年代にやつていた。

S —写真から想像していた植生盤の話が、少しずつ具体化してきた。植生盤はとても素朴なアイディアに感じるが、あまり気にしなかつたかもしれない。ウド当番の話も、業者ならではの考え。自分なら、M組みたいな所で働きたい! 効率や仕事をこなすことはもちろんだが、女性たちに気持ちよく(ウドが手に入ると安心して)働いてもらう配慮も、事業主として不可欠だったのだろう。

F —そうだね、5人は働いていた。  
S —あ、じゃあ、半分くらいは働いていて、半分くらいは專業主婦みたいな?

F — そうだね。そうして女の人たちはお針でも編み物でも、で

きる人は家で内職をやっていたよ。内職みたいな、着物の

ね。あの頃はよく着物を着たんだよね。

S — 着物の内職ですか。あと、刺繡とかもやっていたとい

う話を聞いたことがあります。

F — 刺繡みたいなものもね。見本と同じモチーフの刺繡を

作るような仕事だよね。お針だのああいうのをする人は良

い稼ぎをしたよね。

S — じゃあ、お針とか編み物も結構良いお金にはなったんで

すか? でも、やっぱり、山仕事の方が稼げるのかな。

F — そうだね。

S — じゃあ、危険が伴わない仕事という意味では、お針がで

きる人はその仕事の方が良いという感じ?

F — お針なんか、編み物だのがちょっとできる人は良かった

よね。山に行って土方をしないだけね。

S — なるほど、内職は確かにそういうのもあったでしょう

ね。でも一方で半分くらいの人は、専業主婦をやられていた

ということですよね。その専業主婦っていう家と、働きに出

る奥さんの家で、何か違いはあるたんですか? 例えば、同じ

坑夫「4」でも種類が違うとか、何が違うとか。  
F — でもないんじゃないかな?

S — たまたまそこの家の判断で、そこでは奥さんは専業主

婦をやって、いたりとか。

F — そうだよね。やっぱり、少しでも借金をすればさ、やつ

ぱり払わなくちゃならないしね。それで、借金をして誰か

から借りるっていうのも、「払わない」だのなんだの悪口も

言われるしね。やっぱり自分で働いていれば、それだけ余

裕ができるじゃない。ね、自分のものも買えるしさ。子ども

もが小さいちはさ、私らも家にいたけれどもさ。やっぱ

り子どもが学校に行くようになつたら「もつたいない」な

くて、舗装の仕事をやってみたら、やっぱり給料が良かった

ものね。良かった。

S — あ、でも、山仕事はやってみたいと思つていたんですね

か? Fさんも。

F — うん、思つていた。

S — それは何ですか? 危険そうだけれども、でも、

F — うん、「舗装の仕事なら、道路で平な所だからできる

かな」なんてさ。でも随分歳をとつた上の人らからね、随分

やられたけれどもさ。

S — やられたって言うのは、口でいろいろと言われたということですか?

F — 意地悪されたりとかさ。そして、あの「かじか荘」あるだろ? そこもA建設でやつたんだから。あの舗装をずっと。で、あの辺も掘つてさ、あのU字溝を入れたりさ。ああいうのも私たちが何人か出て入れたんだから。結構楽しかったよ。親方の面倒見も良かつたしさ。とにかくね、うん。給料が月に2回になつたからそれが魅力だったね。よかつた。私も好きなものを買ったもんね。

S — 何を買ったのですか?

F — 何買つたんだろう? 着物を買つたりさ、服を買つたりさ。自分のものは買ったよね。そして、とにかく段々お父さんが働いてくれるから、お父さんの給料で食べて行けたしさ。それだけ、良かつたね、働いてね。俸(せがれ)におもぢやを買ってやつたりさ。よかつたね。

S — 山仕事は何年くらい働いていたんですか?

F — そうだね。10年くらいやつたか?

S — 10年くらい、結構長いですね。その間に、やっぱり上手

になつていくんですか?

F — 一段々ベテランになつていってね。あれだつたよ、一輪車なんて押せなかつたんだから。それがね、もう上手になつてね。今だつて上手だけれどもさ。最初はね、荷物をひつくり返してさ、本当にやられたものだよ。でも楽しかつたね。結構、同じくらいの年配の人もいたからね。うん、楽しかつた。仕事は楽しいよ、私。でも、南橋のあの山見てみなよ、ね。私は登れないな、怖いと思ったから。……(省略)……植生盤の仕事だと、こういう梯子(はしご)みたいな背負子(しょこ)に、荷物を乗せて運ぶんだよね。私は「できないから」って言つてその仕事はしなかつたね。で、給料が安くたつていいじゃない、みんなが1000円貰う所を700円貰つたって良いじゃない、できないんだもの。ね。

……(省略)……

F — ただ、1回だけ「出てみるけ、手が足りないから」つて1、2ヶ月だけれども、植生盤の仕事をしたよね。私は毎日行かなかつたけれどもね。そこでは、板でできた背負子で植生盤を積んだよ。あとね、箱みたいなのがあるんだよ。箱みたいなのがあって、そこへ砂を入れてさ。砂を入れて、砂

とセメント、ほら、セメントのミキサーがあるだろ、それを混ぜるんだよ。それをヒヨイッと入れたのを見たことあるの。上手いものだよ。

**S** — 涙い、でも重いですよね。砂とかだから。

**F** — うん、それでね、他の人に聞いてもね、40～50センチくらいになっているのを背負うだろ、それをねヒヨイってね。ミキサーの穴のまるくなつた所に入れるんだよね、採石とね。とても上手なんだよね。私が見かけたときには「あらー、上手いものだね」って言つたの。石だつてシユツて乗つけて、石垣の積む所にシユツと落つことすの。「あら、ぶつかんなのかな」と思うくらい。上手にね。私にはできないと思ったよ。「あんなに大きな石がさ、自分の所に落つこちて来たらどうしよう」ってね。

**S** — ね、経験なんですかね。

**F** — そうだね、上手いものだよ。

**S** — 戦争がきつかけで足尾に戻つて来てから、山の仕事をされたのですか？

**F** — そう、仕事がないでしょ。その時は子どもは一人だけどもね、食べていけないじゃない。足尾の女の人が働くどちら、植生盤ばっかり。それで石背負いの働き口があつたから、私もその仕事に使つてもらつたの。でも、重いものを持つたことないのに、背負いをし始めたんだよね。渡良瀬川の川辺から、田元の上の石垣まで石を運ぶんだけれども、川石

うな身のこなし方だったのだろう。意地悪されたといった、ちょっとドロドロもあるような中でも、上手く冗談を言いながらやつてのけてきた様子は、Fさんのお人柄からすぐに想像ができた。

### 要領の良い人

【2015年4月27日】— Fさん、志村（S）、中山（N）】

戦時の足尾で、女手一つで2人のお子さんを育て上げた方。様々な仕事をしたが、昭和30年代に「石背負い（いしょい）」と呼ばれる、石垣造りの仕事を経験【3】。

**S** — 「シユツ」「ポンツ」と石を積んでいた様子を、ジエスチャーフルで教えてくれた。見ている方は、本当にびっくりするよ

は、ゴロゴロしているから背中に当たるの。それが痛いんだけども、途中で離すわけにはいかないでしょ。10人ぐらいそ

ういう人が並んで、そうやって作業をするんだよね。最後に、その石垣の所に運んだ石を落とすんだけれども、最初はどうやって落としていいのかわからないんだよね。慣れるまでは要領が悪いでしょ、まだ入つたばかりだから。要領の良い人はね、作業前に石を配布される列に並んでいる時に、自分が大きい石に当たるとわかると、列を抜けておしつこに行つちゃう。そうすると、大きい石には当たらないんだよね。そういう風に要領の良い人がいた。

**S** — なるほど。うーん、なんかありそうだな、そういうこと。人間らしいな。

**F** — で、私ら新米だから分からないだろ。並んでいて、でかい石を背負うとこう、体が折れるように痛いんだよ。だけれども、死ぬ思いで背負つてその場所まで行つてね。こうやって、石を落とすと「ギャー」って声が出たよ。慣れないうちはね。慣れてくると平気だつたけれどもね。ハハ。

……（省略）……

**F** — 当時の仕事場所を通ると思い出すよ。その辛さ。まだ

30、40代くらいだったからね。辛かった。

**S** — でも、辞めたいとは思わなかつたのですか？

**F** — 辞めたら食べていけないから。

**S** — そうですよね。それって、Fさんも事情があつて働いていて、周りの同じお仕事をしている人もいろいろな事情があつて？

**F** — 大変だよ、女の人はね。他に仕事がなかつたんですよ。うん。内職ぐらいはやつていたけれどもね。女の働く場所はなかつたからね。

**N** — お給料つていうのはどのくらいですか？

**F** — 詳しい金額は忘れちやつたけれど、9時過ぎからかなうすると、一番下の子が私を待つて、家に入つたすぐの上がり端で居眠りしているんだよ。……（省略）……まあどうにかこうにか、最低の生活はできただろうね。

じやない？

**F** — そうですか。じゃあ、短時間で稼げた。

**F** — そう。だから、まあ、女の働く所としては良かつたん

## 【お話を聞いて】

**S** — 重い石が当たらないようにわざと列を抜ける人の例は、どの時代にもそういう人がいるんだなと、しみじみ。ズルイと言ふこともできるのに、「要領の良い」と言い表してしまうことによく、妙に関心してしまう。負けてたまるか的な根性もあるだろうし、生活のためにサクサクとこなしてしまったタフな感覚を感じた。

**N** — 「当時の仕事場所を通ると思い出す。辛かつた。」と言う言葉が印象的だった。その場所は私も普段通るのだが、何も知らずにいると、氣にも留めない。足尾では人々の様々な苦みによって、石垣に限らず山の木々や谷の深さ、川の流れまでも変化してきたのだろうと思う。

### にぎやかな松木

【2015年8月18日】夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)、好井(Y)

6頁のご夫婦に、改めて仕事内容や、そこで働く方々の様子についておうかがいした。

**Y** — これ、1日仕事をしていくくらい貰えたのですか？

**M** — うん、できちやうね。山が山だから。斜面に貼り付けるんですよ、ペタンと。板に乗つけておいて。

**Y** — 貼り付けて、木の釘みたいなもので打ち込んでおく。  
：それを貼り付けて、その植生盤にはもう種とかは全部入っているんですか？

**M** — 全部、種は入っている。ヨモギだとか、アカシアだのイタドリだの。木が3種類か4種類。草の種が主だね。

**S** — 私の印象なんですが、植生盤って話だけだとすごく原始的というか、本当に根付くのかなと思うのですけれども、実際にどうでした？効果というのは？

**M** — 植生盤そのものが草の芽がね、早いからね。石山の地面があつたかいんだよ。だから、その作業をするのは6月から8月くらいまでだからね。3ヶ月目はほとんど仕上げだな。

……(省略)……

**N** — 台風なんかが来た日には全部流されちゃったりしたんですね？

**M** — あるよ、そういう時も。川ができるやうんだよな。そういう所を掃除してね。

**M** — 家(うち)でね、450円くらい。

**Y** — 1日450円で、それは日給で支払われるのですか？

**M** — そうそう。

**S** — 1日行けば帰りには450円お給料が？

**M** — そういう人もいたけれども、やっぱり15日が給料日だったね。

**S** — ああ、じゃあ出勤日を計算してまとめてもらうんですね。確かに、女の人に聞くとやっぱり家計の助けにはならない、子どもとかもいるお宅は生活が大変だったからと言つていました。

**M** — 下で仕事をする人は300円くらい。山に上がれば450円くらいになる。

**S** — じゃあ、やっぱり山の上の方がきついというか、大変だったから給料が高かったんですね。

**M** — おそらく500mくらい上がっているんじゃないかな、沢から。

**Y** — あの、植生盤を一枚一枚置いて固定していくわけですよね？それって、結構技術がいるものですか？それともしばらくしたら身に付くのですか？

**S** — やり直しとかも出て来ちゃいますよね。

**F** — 出て来る、出て来る。だから景気がもの凄く良かったの。

**S** — 足尾内の組が請け負つてそれぞれのやり方があったと思うのですが、M組は働きやすくするために何か工夫をしていましたか？

**M** — 僕の所は、給料は現金であげていたからね。

**F** — 社長は固いけれども次男のMはやわらかいから、結構働いている人に飲ませたの。「働く人は飲み食いさせなくちゃ駄目だ」つって。うん。

**M** — 半日ぐらいは仕事を休ませて、豚汁を作つてやつたりなんかしてね。「明日ここまでで、明後日までにやるんだから、明日から頑張つてくれよな」つてね。それが効いたんだよ。  
「ご苦労さん」とか「頑張つくれ」つて言うような配慮をされていたんですね。

**Y** — ただ給料を払うだけでは駄目ということですね。

**S** — 人がやっぱりついてこないと。  
——人がやつぱりついてこないと。

**M** — みかんをちょっと配るだけでも、人はスッと寄つてくるからな。

F — ちょっとした加減なんだよね、人っていうのはね。

……(省略)……

N — 聞いたことがあるのは「足尾の女に会いなければ松木に行け」と。それくらい、足尾の女の人は松木で働いていたと。

F — 働いていた。

M — だからM組だって、だいたい4月の後半くらいから始まるから。そうすると、常備の、常備というのは14、15人いたんだけれども、植生盤の時期には50人くらいに集めたんだから。

……(省略)……

Y — 松木の仕事をする場所まで、女性の人はどうやって行くのですか?

M — 車だね。トラックに乗せて運んで送迎をしたね。

F — で、1週間か2週間に1回くらい、トラックの許可を貰に行くのですよ。警察へ。

Y — トラックの荷台に人が乗っているから許可を得るんですね。

F — だから警察もその頃はバスもなかつたから、許可はしてくれたんだよね。みんなね。そのうち、マイクロバスを買ってね。

M — 一車だね。トラックに乗せて運んで送迎をしたね。

F — で、1週間か2週間に1回くらい、トラックの許可を貰に行くのですよ。警察へ。

Y — トラックの荷台に人が乗っているから許可を得るんですね。

F — だから警察もその頃はバスもなかつたから、許可はしてくれたんだよね。みんなね。そのうち、マイクロバスを買ってね。

新井さんは足が悪かったから、山の上には登れないんだ。写真の風景は本当に下の方だよ。賃金が安い所だよ。

S — じゃあ、この場所の感じは下の方だからあんまり賃金は高くない? Mさんはもう少し、高い所をやっていたのですか?

M — 最初はどこの組でも高い所ばかりやっていたんだけれども。俺が昭和30、31年かな、松木の営林署の作業所があつたんだよ。そこから中禅寺湖まで歩道を付けたんだよ。中禅寺まで行くと、2時間くらいしか時間がない。それで車で行けるのなら、中禅寺湖は1時間くらいで往復ができた。

S — 全然違いますね。ふーん。

F — 今でも歩いて行けるかね、中禅寺まで。

N — 今は木が茂っちゃって道がわからないんです。

M — まあ、俺が一番奥をやった時はね、昼休みに若い人たちが中禅寺まで行つて帰つて来ていたよ。

S — え、元気ですね。大変な仕事をして、昼休みにはわざわざ行って帰つて来るという。で、また仕事をするわけですよね。タフだ。

N — でも、荷台に女性たちがいっぱい乗っているバスが松木に毎日向かうっていうのは、

F — だから松木は賑やかだったと言うよ、毎朝。

Y — 夏になって、昼間男たちは銅山の中に行つていて、町の中には女人人がいなくなっている。

F — 人口があったから昔は。あった、あった。

S — いろいろな話を聞くと、女性の場合は山仕事か専業主婦か、それかちょっと内職をしたりとか、数名が三養会か事務の仕事をするみたいな?

F — あとは、土方ですね。それしかなかつたもんね、工場がないもん。

S — そうすると、山仕事って女性にとつて一番大きな働き場所だつたんですね。

M — そうだなあ。植生盤ができたから、

S — お金にもなつたんですね。きっと山仕事つて。

M — だから、下で働く男の人たちと、松木の中で働く人の賃金は同じ。

……(省略)……

M — これ(新井さんの写真)は下の方の写真だから。撮影者の

F — 昔の人は働いたもん。

### 〔お話を聞いて〕

S — こちらのご夫婦にはいつも、「お茶飲んで行きなさい」と誘われて甘えてしまうが、組ならではの仕事や人づきあいが染み付いているのかもしれない。人の引きつけ方や、気持ちよい労働環境のためには、媚びるわけでもなく、自然な対人の気持ちが大切なのだろうと思われる。働いている人が、休息時間にはわざわざ中禅寺湖に行く例には、重労働の中でも山の環境を楽しむ余裕があつたことに関心してしまう。

N — Mさんは常々「人間、結局は気持ちなんだよ」ということを言う。協力隊の2人のこともいつも気にかけて下さり、Mさん夫妻の家には来客が絶えない。きっとM組で働いていた方々も気持ちよく仕事をしていたのだろうと思う。

Y — 多くの女性を使い、山仕事を取り仕切つて來たご夫婦。負つて山をあがり、一枚一枚固定していくといきつい仕事をできるだけ気持ちよくやってもらいたいという思いが、語りからもれてくる。ひとは仮にいい金になつたとしても、それだけ

できつい仕事はしないだろう。その気になつてもらうための細やかな配慮をしていたのだろう。出されたおいしいお漬物をほおばりながら、ご夫婦のお人柄を想像していた。

## 中学生のアルバイト

「2015年8月28日 — Mさん、志村(S)、中山(N)」

足尾にある植樹のNPOで長く植樹に関っている方。昭和40年代の中学生の頃には、オバチャンたちに混じつて植生盤のアルバイトをしていた。

S — 前に、子どもの頃に植生盤のお手伝いのようなことをしていたと聞いたのですが。

M — いやあ、バイトだからね。そういう。まだガキの頃、中学生3年生くらいだね。

S — 中学3年生で、植生盤のバイトをやつっていたというこ

とですよね？

じゃあ、もう植生盤を背負つて、女性がやるみ

たいに山の上まで運んで？

M — 一緒になって、一緒になつて。

N — 結構、他にも子どもがいたのですか？

N — それで、どのくらいの重さなんですか？

M — だいたい、40キロくらいじゃないかな。

S — えー。それをね、山道登るわけですからね…。

M — 若いから背負えたけれども、オバチャン連中も同じだよ。結局お金になるから、それを何回かやついたら余計みたいな感じ。1日いくらの仕事もあるんだけれども、その場合には1枚いくらみたいな。職員がチェックをしていて「Mさんは30枚、Mさんは30枚だね」と記録していくんだよね、見ていてね。

S — やっぱり、ちゃんとチェックをされていて、その枚数によつて、

M — そりやあそうですよ。積んでくれてね、自分では積めないからね。積んじやうと、起きれないんですよ。重くて。

二宮金次郎が苗木を背負っているような形で山頂まで積んで行くんですよ。「山頂」ってチェックをしてもらつて、みんなで並んでね。今やつている足尾で植樹をする時みたいにずっと道沿いに繋がつて登るでしょう。ああいうスタイル。ただ道が階段じゃないから、作られた一人専用の道路をずっと上がつて行くんですよ、現場まで。だから我々も

M — 子ども？まあ、仲間がね。今では足尾にいないけれども、5、6人。それで、知り合いから紹介があつて、「手伝つてもらえないかな、体力のある若い子に」って言う風にね。バイトだから当時のお金で、1回いくらだつたかな。ちょっと金額的には思い出せないけれども、嬉しかつたんですよ。

S — 割と良いバイトだつたんですね。

M — そうそうそう。ただ、過酷だつたよ、正直な話。

S — どんな内容だったのですか？

M — あの、職員がね、遮光ネットがあるでしょ、あれが袋になつて、ミックスになつたものができているわけ。それをスコップで頑張つて入れて、職員がそれをやるのさ。我々はそのできたものを運ぶだけなんだけれども。それを今度は、圧着するんですね。そうすると、厚さが30センチくらいの…、ホームセンターにある板状の芝。ああいうようなくらいの厚さになるんですよ。ピューッて空気も抜けるし。それを縛つて重ねたものを背負つて、オバチャン連中と一緒に坂みたいな整備された道を通つて現場まで運び上げる。そういうことね。だいたい30枚くらいかな。



833段の植樹地（伊東信撮影）| [写真裏面のメモより：俺は一人で登った 大畠沢 山を愛す H18.5.5日]

どんどん上から上がって行くからね。で、下の方に来るところなんだよ、枚数をどんどん植えられるわけ。……（省略）  
……テープでラインを引かれている所へ、運んだものをストックするわけ。測量の人がね、ダンダンとテープを貼つてピンで止めていくんだけど。その前段の仕事をアルバイトがしていたんだよね。

——確か、あれですよね。夏の三ヶ月くらいの仕事だったんですね？

**N** — その、夏休み中にアルバ  
**M** — もせさん そなそなそな

すか？

**S** M  
一 一  
丁 度 夏 休  
度 み み の で  
夏 す ね。

（省略）

景だとか、仕事のやり方とかに対して。

**M**——「ああ、これを貼り付けるんだ」くらいしか思わなかつたね。これを貼り付けていくと、当時の営林署の人聞いて、「これを貼り付けたら、自然と発芽するんだよ。雨にあたつ

も種が入っているわけだからね。全部が全部発芽しなくて  
も、だから早いのかなという気持ちがあったよね。だいたい  
イタドリなどだからね。あれはもう、根深く入って行くし  
数が増えるしね。今考えればね。繁殖率も多いしね。だか  
ら、それでやっているのかなと思うくらいですかね。

2015年8月

〔二〇一五年九月一日〕

植生盤経験者を見つけるのが難しいと予測していた所、よくお茶飲み話をさせていただいている方が、経験者と判明。こんなに近くにいるとは……と、慌てて昭和30年代の仕事についておうかがいした。

S  
— 植生盤の仕事は、

F 一何歳くらいだろうな。…子どもらが学校に行っている時だよね。

**S** やつぱりお友だちに誘われて?

――そ、前橋の當林署の詫に負いたてみたしてね。人は頼まれてから出たから、長い期間は勤務しなかつたけれども、本当に暇な時に出たくらいでね。だけれども、朝が早い

「女性に渡して子ともか働いていたのも驚きたか一体力のある若い子」と同じように植生盤を運んでいた女性にも驚く。聞き取り中なぜかずっとMさんが昼休みにオバチャンたちと一緒にご飯を食べる様子を想像していた。Mさんはきっとと、とても可愛がられたんだろうなと勝手に思った。

「お話を聞いて

**S** 「結構、植生盤のやり方に「本当に根付くのかな?」とか感じるのではと思うんですけども。」  
「水は天然だから、雨水だけで大丈夫なんだよ」と聞いたら、「てね」ってね。「水はやらないで良いんですか?」と聞いたてね」ってね。「水はやらないで良いんですか?」と聞いた

**M**——それは、不思議だつたよ。「これがなるんですか？」といふ感じで。

M 実際に効果はあつたんですかね？

—効果が出るまでには、みんな流されちゃった。もう大雨が降れば一発ですよ。まあ、当時はね、我々もあんまりそういうのに興味も無かったから、アルバイトでお金を貰えれば良いなという感じだったからね。それでね、昼休みにオバチャヤン連中とご飯を食べてさ、そうするとさ「今植えた植生盤がね、雨風にあたつたりして芽が出てくるんだよ」っていうのは話に聞いたけれども。「ああ、そなんだ。それを植え付けている訳なんだね。木は植えないんですか?」って聞いたら「それだと、大変な数になっちゃうから、これだと早いんだよ」とてね。植生盤だと種がいっぱい入っているからね。そうすると、群生していくばい出てくるわけなんですね。1本1本だと大変だからね、確かにね、10000も20000

**F** — 伺時くらいに出るのですか？

**S** — 最初に植生盤の重いのを積んだり、岩場の斜面で働いた時つて、どういう風に思いましたか？

**F** — その時はみんな友だちが一緒に働いていたからね。大して感じなかつたね。自分一人で働いているのと違うから。友だちがみんな働いているから、もうそういうものだと思つてね。もう、その時代というかね。

**S** — 今話しをうかがうと、「え、凄い」とびっくりしちゃうんですけれども。お友だちと一緒にだし…、

**F** — そういうのが当たり前だと思つて働いているからね、何とも思わなかつたね。

**S** — 働いていらっしゃる方って、年齢的には何歳くらいの方ですか？いろんな？結構年配の方も働いていたと聞いたのですけれども。

**F** — そうだね。だいぶあれだね。みんな子ども関係が落ち着いて、結局は友だちが働いていると、「あ、私も」ってね。みんな釣られて行く人が多かつたんだろうね。

**S** — じゃあ、本当に意味、暇つぶしじやないけれども、そんな感じですよね。期間も春から夏と限られていますもんね。働くとしたら、週5日間とかそういうのではなくて？



労働 足尾の女達(伊東信撮影) | [写真裏面のメモより]足尾スコロで働く女達 昭和39.9]

**S** | 堆積場に溜めてある、粘土質の土を乾かすための土の掘り起こし作業の様子だと思われる。植生盤とは違う仕事だが、原堆積場などでも行われていた。戦後から昭和40年代くらいまで、足尾地域内の女性たちの働き場所として、植生盤、石背負いやイッパチ、堆積場での仕事が挙げられる。選鉱所の選鉱作業や内職の話も聞く。どの仕事も厳しい労働に感じるが、野外の仕事ではワイワイ冗談を言いあい、内職では社宅のご近所さんで集まって切磋琢磨していたなど、楽しみの要素も大きかったようだ。

**F** — 違うね。雨が降れば休み。だから、日曜でもやつている時もあるしね。雨が降ればできないから、休みになるしね。

**S** — ジやあ、「何日に出勤するよ」とかいったシフト制ではなくて、その3ヶ月間の雨が降らない間にに行くみたいな？

**F** — そろそろそう。

**S** — ちなみに、山の天気って変わりやすいじゃないですか？

**F** — カッパを持っているから、雨合羽。リュックを背負つていこんだけれども、中には弁当とそういうカッパは必ず持つて行つていた。

**S** — え、じゃあ、途中で雨が降つてもカッパを着て作業を続けるのですか？

**F** — そうそうそう。少しくらいの時はね。1回は、夕立になつてもやつっていた時もあつたけれどもね。ある時は、仁田元の所がいっぱいの水になっちゃつて通れなくなつてね。それで、ダムの所に紐を張つてもらってね、ダムの上を渡つて来たことがあるね。

**S** — えー、ロープ伝いで、ってことですか？危ない…。

**F** — そう。ロープ伝いでね。怖かつたよ。それが一番の思い

出だね。だって、普通の川だったらトラックで行つたけれども、水が多すぎてトラックが通れないだろ。だから、あそこをずっとロープ伝いでね。そうやって渡った人はあんまりいないよ。

S—「ですよね……怖いですよ、実際はね。ヒヤー。でも当時はそういうものだと思つて、

F—普通なら渡らせないからね。危なくてね。今では、思ひ出だよね。

……(省略)……

S—植生盤の仕事ではいろいろな奥さんが集まっている中で、情報交換もできただんですね。

F—「そうだね。方々から来ているから、いろいろな話が聞けますよね。

S—それはやっぱり楽しいですね。そうすると、もちろん砂烟だったら砂烟の友だち同士だったけれども、山に行けば違う地域の人も集まっているから、初めましての人もお話しするようになつて?

F—「そうだね。中才の人も、遠下の人もね、みんなトラックの送迎があつたから集まるんだよね。

S—と、おにぎりとかのお米ですか?

F—「うーんと、おにぎりじゃなくて弁当だつたかな。

S—「でも、大変ですね。朝8時には家を出て、帰りが何時でしたつけ?」

F—「たいがい5時だね。」

S—「そうすると、朝は何時に起きるのですか?」

F—「朝はそつだね……だいたい5時前だね。」

S—「え、

F—「で、ガスコンロとかがあるわけではなくて、窯で料理をしていくから、早く起きないと間に合わないがね。」

S—「じゃあ、朝5時前に起きて、お米を炊いて?」

F—「前の夜にちゃんと準備をしておくんだよね。水を入れて、窯にはちゃんと新聞を入れて細かい木を仕込んでおいて、その上に火をつけばすぐにできるようにな。朝にそんなことをやついたら間に合わないから。」

S—「じゃあ、朝に起きたらすぐに火を入れて、米を炊いて。」

F—「そう。そこで、今度はおつゆ。おつゆだって、七輪で火を起こしてやるでしょ。だから、昔のやり方を考えたら、今はもうまるっきり、遊びと同じようだよね。ハハ。何もしな

S—「1日に何人くらい作業するのに集まつていましたか?」

F—「あの頃は土建会社が随分あつたからね。随分あつたよ。それでみんな女の人は働いたからね。植生盤はたいがい女で、男ってのはあんまりいなかつたからね。監督みたいに指導をする人は男じゃないと駄目だけれども、あとはたいがい女だったね。」

S—「例えればなんですか? 大変な作業じゃないですか。そういうので、トラブルじゃないけれども「もう今日は疲れたからできないよ」と言うようなこととか……」

F—「そういうことは聞いたこと無いね。まあ、「疲れたね」くらいはあるけれども。」

S—「じゃあ、気持ちよく働けたということですね。それは、もの凄く良いことですね。」

F—「みんな働くのに一生懸命で、あとは食べる食料の話やらね。」

S—「ちなみに、お昼って何を持って行つたのですか?」

F—「あの頃は何を持って行つたかな。梅干しは必ず山の上だから持つて行つたね。卵だってそんなに買えなかつたしね。油炒めだのそういうおかずが多かつたね。」

いと同じような、

S—「ハハ、本当にそういう風に見えちゃいますよね。だって、3時間くらいかけてご飯やお弁当を作つて。旦那さんの分も作りますよね。それで、子どもがいれば子どもの分も、まあ中身は同じだけれども、お弁当を準備して朝ご飯を食べさせて、で、

F—「片付けて行かないとな。帰つて来るのは夕方だものね。」

S—「そうですよね……で、8時に車に乗つて、炎天下でお仕事をして、夕方の5時くらいに家に。トラックに乗つて帰つて来るんですね。それで、5時にお仕事から帰つて来てからは「フウ」って一息できるんですか?」

F—「できないね。買い物に行かなくちゃいけないからね。三養会が夕方6時までやつていたのかな。そこで、ある程度の品物は買ったからね。だけれども、そうじやなければ仕事なんて行けないよね。」

S—「じゃあ、本当に家に帰つて来てたら、お店が閉まる前に買ひ物をして、で戻つて来て夕ご飯の準備をして、

F—「で、食べて。で、お風呂に行って。お風呂も三養会の所にあつたからね。共同浴場がね。」

## —Q7—“閉山”つてどういうことだったのですか？



祝賀通 足尾トンネル 昭和51年8月（新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵）

S —お風呂は何時までやっていたのですか？

F —お風呂は夜8時まで。

S —ああ、夜8時まで。じゃあ、夕ご飯もかなり早く作らないといけないですよね。

F —夕方5時に帰ってきて、買い物をして夕飯をして、夜8時までにお風呂に入らなくちゃならない。大変だよ。

### 【お話を聞いて】

S —他の方からも、洗濯は夜のうちにやっておいたといった話を聞いた。時間の合間に家事をこなす積み重ねは、今も同じかもしれない。友だち同士でおしゃべりをしながらの植生盤の仕事は、気分転換にもなるような、季節の楽しみの一つにも感じる。

1 NPO法人足尾に緑を育てる会が毎年春に主催している、松木エリアの植樹地に実際に苗を持ち運び、植樹体験をするイベントには県内外から多くの参加者が集まる。2015年4月25日(土)、26日(日)に開催された第20回春の植樹デーには、約1800名が参加し、約8000本の苗を植えた。

2 足尾の植樹作業のためには、まず岩肌に土を運ぶ必要がある。昭和26年に考案された植生盤は、土・肥料・草木の種子、切りワラを混ぜた植樹用の土の板のようなもので、これを山の斜面に貼り付けていく。この植生盤筋工作業で、中心となって働いたのは、足尾の女性たちだった。(参考：秋山智英、「森よよみがえれ－足尾銅山の教訓と緑化作戦」株式会社第一ブランディングセンター、1990年)

3 松木エリアでの治山ではないが、足尾地域内の石垣を作る際の石運びの仕事のこと。お話を聞くと、当時女性の仕事が少ない中で、植生盤と同じような良い仕事で、生活に困っているような女性には、役場から斡旋があつたりもしたらしい。話し手の方は、知り合いから紹介してもらったとのこと。他にも、石垣を作る際の石運びのイッパチと呼ばれる仕事があり、植生盤とは違うが山の工事などのために砂利などを運ぶ仕事もあった。

4 「坑夫」という言葉はマスコミでは用語言い換えで、「坑員」「坑内作業員」と表記する場合があるが、この冊子では、現地の方が使ってきた言葉をそのまま掲載している。

昭和48（1973）年2月28日に足尾銅山は閉山した。今から約40年前に子どもだった人も含めると、現在足尾にいる多くの方が、何かしら記憶している出来事だ。閉山前に町中でささやかれた予感や、閉山を知った瞬間、閉山後の職探しや町の取り組みなど、閉山にまつわる時間軸は長く、話題の範囲も広い。それぞれに影響があり、今にも繋がるそれらの視点は、なるべく多様な立場から集めることが大切だと思う。

### ある坑夫さんにとっての閉山

私たちの聞き取りではすっかりおなじみの元機械方のMさん。語りが魅力的なのは、見落としてしまいそうな人間らしい部分がボロッと自然に現れるからだと思う。今までの聞き取りの中でもうかがうことのできたMさんにとつての閉山。

【2014年1月10日】夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)

F一社宅の生活は楽しかったね。みんな仲良くなんだかんだね、あっちこっちでお茶飲みしてね。まんじゅうなんか作ってみんなを呼んだりね。

「うーん。……（省略）……閉山の時にMさんが家族で残ろうと思った理由は何だったんですか？引っこ越した方が多かった中で、足尾を出ようとは思わなかつたんですね。もう他所に行っちゃつたから終わりなんだよね、そういう人もいるんだよね。友だちでもなんでも、親しくしてても。あー、人間って案外薄情なんだな、って。

S一うーん。……（省略）……閉山の時にMさんが家族で残ろうと思った理由は何だったんですか？引っこ越した方が多かった中で、足尾を出ようとは思わなかつたんですね。F一ま、できたら足尾に残りたいって。うん、私は思つた。

M一やっぱりこつちはね、いや、行けたは行けたのさ、小山なんかへね。家族の誘いもあったしね。だけどその時には銅山で仕事が見つかつたから。俺は、閉山から8ヶ月くらい坑内に入つていたんですよ。まだ坑内に残務整理で。だから、向こうの会社に席をおいて、：坑内では5、6人で残務整理やつたんだわ。坑内の荷物降ろしたり、ポンプの線を切つたりして、坑内の中が水で埋まるまでね。

S一なんかその作業っていうのも凄いですね。

N一全部埋めたんですか？

M一ほとんどね、だから何十万円もするような機械も坑内にはまだあったから、「この中の機械を出してくれたら、一人

M一年寄りたちが集まってきたよな、ばあちゃんたちが。ある時、遊びに行くと年寄り4、5人くらい集まつていてね、家族の話や、世間話をしながら「ガハハ」つって、笑つているんだよね。……（省略）……でも閉山がなくちゃ良かったんだけれどね、閉山でほとんどの人が出て行っちゃつたんだよね。私たちの友だちは、ほとんど出て行っちゃつたね。だけど、閉山で一つ人間が利口になつたのはさ、それまでつきあいがあつた人が、引っ越しした後に足尾に来ても「お世話になつたね」つて挨拶に来る人はそんなにいないよ。30人に2人くらいだよ。偶然会つてね「なんだ、ちょっとく



砂畠社宅解体中（伊東信撮影）

[写真裏面のメモより：一棟5000円売った 49.3.17日 俺は二棟買った 色々に便利する 材料買ひに来る人も 何日も居た]

数万円ずつやるぞ」と言わされたから、「じゃ。出しちゃうか」つてやろうとしたこともあるよ。そしたら、「怪我でもしたら、大変だから止めてくれ」ってことで止めたんだけれどもね。だから、坑内に置いてきた機械がだいぶあるよ。何千万つて。

「だからおまえら、ほら一人頭5、60万はなるからな」って言つたんだよね。……（省略）……だから最後は、「じゃあ今日はここ、明日はここ」って、モーターのケーブル線を切つたり、電気を切つたりね。みんなスイッチを切つたら、止まって終わりだからね。もう水が入つちやうから、それを最後までやつてきたんだよ。「これで終わり」って言って。ハハ、

S 一本本当に最後の最後ですよね。

M ー その最後をやつている時に温泉を掘つたのさ、今のが「かじか荘」の。「かじかの温泉が出来るまでがんばつてくれや」って。このボーリングをどんどんやつて、初めてお湯が出たんだよね。お湯はあつたんだよね。下にも。だから坑内に入った時だつて「帰りには温泉に入つていくか?」なんて、ドラム缶の温泉に入つたりして、帰つて来た。

S ー あ、坑内の中てつてことですか?

M ー 中で、ハハ。お湯がボーリングを掘つた穴からどんどん

出ているんだから、坑内の中で。そういう所にドラム缶を3つ置いて温泉にしていたから、そこに入つてから、坑外に帰つてきていたんだよ。

S ー 凄い!

#### 【お話を聞いて】

S ー 引つ越した方を見かけた話は、足尾に残つた側の素直な感情だと思う。同時に足尾を出なければならなかつた人は、気軽に声を掛けにくい気持ちもあつたと想像する。どちらの言い分もわかるようで、歯がゆいような何とも言えない気がする。残務処理の話は壮大すぎて理解が追いつかない所があるので、もう少し聞き貯めたい。

N ー Mさんには以前から、閉山によつて人々が足尾を去る様子を聞いていたが、当時は混乱の中、毎日のように慌しく人々が足尾を出たのだと想像される。きっと気持ちの整理なども追いつかないままのことだったのだろう。閉山は足尾に残つた人々にとつても、足尾を去つた人々にとつても、生活を激変させた出来事なのだと思う。

【2014年3月5日】夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)

M ー 俺は、閉山後の半年くらいだつたけど、坑内の工事やつていたから。それで閉山後に新しい職場に行つたら、「お前誰だ?」って言われたもんね。お母ちゃんが電話をしたらさ、

「そんな人はいねえ」って言うんだもん。「Mですが、今どこですか?」って聞いたら「そんなMなんていうのはいないよ」なんて。たまげたよな。職場が変わつてから1年くらいは、会議がある時ぐらいしか顔出さなかつたから。だから馴染みの人が2人くらいいるんだけど、「嫌になつちやうよな、行くとな」なんて言つたりしたね。……（省略）……働いている頃はまださ、頭丸坊主でき。ハハ、鉢巻してやつていたから、一目置かれていたんだよね。それで、職場内で弱い人がいじめられ正在と、その人のことを親戚だつて嘘を言つちゃうんだよ。「親戚だぞ、あんまりあれしないでくれよな」って言うと、次の日から変わつたみたい。ハハ。そういうのだもん。……（省略）……

M ー だから坑内の仕事とは違うよね、坑内つていうのはどういうのだんべな。

F ー やっぱり、気が強いつていうのかな。ほら、命が危険で

すよね。

S ー あー、

F ー 今日坑内に入れればさ、どういうことがあるのかわかんない。

M ー こんなこと言つたこともあつたよ。「お前、坑内の横間歩【1】入つて7時間でも8時間でも仕事してみろ、担架に乗つて帰つて来るようだよ」ってね。坑内で2時間も仕事をやつたらもう汗でびつしょりなんだよ。仕事をする場所なんか、もう真夏なんてもんじやないからね。シャツ一枚着ていたつて、ものの1時間もすれば汗だくになつてシャツを絞るようだから。「おまえそういう仕事したことあるか?」って。毎日命がけだよつて。「だから違うんだよつて、お前らと」つて。……（省略）……

M ー 他所の炭坑で働いていた係長が職場にいたんだよ。その人の炭坑が閉山になつたから足尾に来つたんだよね。坑内で事故があつた時にその人が「Mさん、やっぱり坑内だね。俺、炭坑にいたけれども、やっぱり違うわ」って言つてたね。坑内で働いてる俺らは仕事中に、友だちがぶつ倒れただつて、飛んで抱えてくるがね。血なんかが出ていても坑内で

見つけたりすればね。例えば癲癇(てんかん)の人が倒れているだろ、みんな「うわー」って逃げちゃうんだから。だけど中には、「何やつているんだ」って助けに行ける人が何人かはいるよね。やっぱり、そういうので気の強い人はいるんだね。それで、初めて「Mおまえ、初めはわかんなかったけれども、凄いな。あの血だらけになった友だちを抱えてくんだもんな」なんて言われたんだよね。……(省略)……でも、自分の体(せがれ)がなんかだとしたら、やつていられないべなうて思つたんだよ。本当のこと言うと、だから、気がなんだかっていうか、わかんないな、そういうことあつたよね。……(省略)……

N一山の男かっこいいですね。

F一いやあ、山の男ね。坑内はね、私らもよくわかんないよね。

M一みんな怪我しても、炭坑の人はみんなで助け合つたんだよね。そうすると、「Mさんは、山の人だな、やっぱり坑内の人だね」って。……(省略)……坑内と炭坑とかで働いた人はみんな、何か事故があれば引きずり出したりして、助け出す人が多いつて。「山で命張っているんだね。鉱山で働いている人は、そうやつて助け合つているんだよね」なんて。

N一今こう、うん、うん、って聞いているけれども、自分がその立場になつたらどうなんだろうって思っちゃうもん。……(省略)……

M一閉山になれば、それは凄いよ。子どもだって影響しちゃうよ。「親父、なんで引っ越さないんだ」なんて言い出したりしてさ、「大丈夫だよ、俺は。家(うち)はこうだから」って言つたりしてさ。だから近所にね、「いいね、Mさんは仕事があるから」って言われたり、憎まれたりな。「なんで、ああなんだよ」って。(省略)……斡旋先の会社見学があつて、「ここ行つて、見てくれよな」って言われて行けば、「いいですよ、いつでも来てください」って言われたけれど、「そんな所まで行けつかよ」って帰つて来たりな。……(省略)……東京に職場見学に行つた時に、吉祥寺に古河の寮があつたから、帰りにみんなで泊まつて來たんだけれども、そこに他の炭坑から来ていた人が「いやあ、足尾はまだ閉山が決まってないから良いよね」なんて言われて、切ない気持ちだったよ。……(省略)……

M一最終的には「足尾で働きや」つてことで、足尾に残ることになつてね。閉山で、周りは一軒一軒引っ越して行つちやう

んだもんね。かわいそうだよね。その度に引っ越しを手伝つてな。閉山で退職した人は、退職金などを元に引っ越し先に家を建てた人もいたんだよね。その人を手伝いながら、「なんだ、こんなに良い家に引っ越すんだ」って考えていたんだよ。で、後から訪ねて行くと「20年もたつたら、ガタガタになつて家に入れないよ」って。そういう造りの家なんだね。大急ぎで粗末な唐材で作つたような家だから。

S一そんなんあるんですか?

M一うん、だから2階なんて風が吹いたら響くようだから、こまかされて買ったんだか。「Mちゃん、来なくてよかつたよ」なんて言つてさ、「なんで、良い家だべ」って言つたら「良い家かな? 段々住むようになつたら、10年も住んだら、2階なんて搖れるような家だ」って。……(省略)……やっぱり惨めだなつてね。本当に、足尾の人は大変だなつてね。

【お話を聞いて】

S一坑夫の仕事感は消滅してしまつたんだなどじんわり伝わる。足尾以外の鉱山の人や足尾を離れる人、残つた人、それぞれに影響があつた。私は足尾を離れた方の話を聞くこと

はできないし、よそ者が安易に聞けるものでもない気がするけれど、足尾に残つた人・出た人の関係はどういうものなのだろう、と気になつた。

N一Mさんの言葉からは、一緒に働いた仲間たちを懐かしく

む、また仲間たちと離れてしまつた寂しさのような気持ちを感じ取ることができた気がした。

【2015年5月21日】夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)

M一だから、残務整理をやつたのは10何人かだからね。

S一え、足尾の中で10何人ですか? それは凄い少ないですね。通洞だけで? それとも本山とか全部合わせて?

M一全部あわせてね。残務整理つていうか、ほとんど、要するに会社から「ポンプのモーターを上げるのに残つてくれ」とかね。

N一どのくらいの期間がかかつたのですか?

M一だから、初めは「4ヶ月か?」って言つたけれども、俺は半年以上。……(省略)……

S一その残務処理をやることになつたのは、閉山前後に、

「やつてくれ」みたいな話があつたのですか？

M — そうそうそう。もう閉山で、みんな仕事がね。「お前は、どこどこのセメント工場ではなく、鉄管工場に行ってくれ」とかね。仲間にやつたりね。「それなら、俺が行くよ」「駄目だ」「いや、待つてくれ」とかさ。そういういろいろながあつたんだよね。……（省略）……だから、主に機械方が足尾に残って、残務整理つて坑内に残っている巻き上げ機とかをばらしたりね。閉山の日は俺はいなかつたんだよ、その日からパタンと今度は誰もいないから。

N — その様子が、だつて銅山で働いていた時は、音だつたり、人が作業している音とか、巻き上げる音とか、凄い想像ができるんですけども。

S — 賑やかでしたよね。

M — もうなにもない。もうその日から誰も入らないからね。

S — じゃあ、もうシンとしていたんですか？

M — シーンだよ。ただ、水が入るから。坑内の水が下にどんどん溜まるから。……（省略）……だから、周りをこう決めてさ、「1、2、3でお前が今度巻き上げのポンプの運転やつてくれ」と役割を決めて、かわりばんこで仕事をやって

いたね。……（省略）……残務処理では、坑内の中に残っている機械もそのままにしておいてケーブルだけは上げちゃうんだよ。ブツンつて切つてね。それで、ケーブルを切つちゃうと、もう時間との問題なんだよね。水がくるから。

S — 私、ちよつとわからないのですが、水がどんどん入っちゃうっていうのはどういうことですか？

M — そこらへんの河原で穴を掘つているのと同じで、段々掘つて行くと水が出てくるがね。

S — で、閉山前まではその水を排水していただけれど、そうやらなくなつたから水が溜まる。

M — 雨が降る訳だがね。それが全部入つてゐる訳だよ、坑内に。だから中には、水が滝みたいになつてゐる所もあるんだよ。M — あの、でかく掘つちやうがね。そうするとでつかい滝になるんだよ。「あれはなんとかの滝だ」なんて名前がついているんだ。……（省略）……

S — 坑道の中で？ 滝？ ハハ、

S — 使われなくなつた坑内は空洞ではなく、水が溜まつてい

るというのには、予想外だつた。聞けば聞くほど、更に坑内の謎が深まる。Mさんが坑内について語る時には、擬音や何とも言えない言葉で表され、わかるような、わからないような…。壯大な空間、閉山後のシンとした空気感、坑内に水が溜まって行く様子や滝の流れる音は、言葉や文字で置き換えることは不可能な世界なのだろう。

N — Mさんの記憶にある坑内の風景を、そのまま映像や絵か何かにしてじっくり見てみたいーそれが、残務整理のみならず坑夫さんの仕事をMさんから聞き続けてきて一番強く想うことだ。まさに想像を絶している…。

残った人はいない

【2014年1月20日】夫(M)、妻(F)、Faさん、志村(S)、中山(N)

あるご夫婦から紹介していただいたFaさんは、山形県の永松鉱山閉山【2】がきっかけで中学生の頃に足尾に引っ越しで來た。2つの閉山を経験した方の視点。

Fa — 私は、昭和36年の5月に永松が閉山になって足尾に來たんですよ。まだ春先の中だけれども、山形には雪が

いたね。……（省略）……残務処理では、坑内の中に残つて、それで父は山形に近い方が良いと思って「んじゃあ、栃木の足尾でいいか」と決めて。引っ越し先は、古河からうち、あつちつて指示されたのではなくて、選べたらしいですね。

N — 和歌山も静岡にも鉱山が：？

Fa — そうです、古河の鉱山です。永松では私のクラスは20人くらいいたのかな、同じ学年が。それで、閉山でいろんな所に分かれて、足尾に来たのが2、3人だったんですが、結局、今の足尾には私しか残っていないです。引っ越した先の飯盛も久根もその後に閉山になって、で、みんな足尾に来た人もいれば、他の仕事を見つけた人もいるし。足尾は一番最後に残ったんで、父の選択は正しかったのかなって思うんですけどね。結局足尾も閉山したけどね、私は足尾の地の人と結婚したので、ハハ。足尾が良かつたのかなと思うんですけども。でも最初はあれでしたね、言葉も違いますし。だからどうしても中学1、2年は内気で。元々内気な性格だったので、人と交流ができなくて淋しかったです。でも何人かお友だちができるんですけども。今でもその人たちとは、お友だちです。……(省略)……

Fa — ふるさとを離れないでずっといられるっていうのは良いですね。私はいつも思うんだけれども、主人が羨ましい。だって、ここで生まれ育つて、ずっとここにいられるんだもの。まあいろいろ変わるけれども、ね。「私にはふるさとがあるわからぬ」。

かく民家が無い。全部古河の人だから。全部って言つても、まあ出て行くのは徐々にですけれども。だから私が足尾に来た時には、全部いっぺんに「さよなら」じゃなくて、徐々に髪の毛が抜けるように、一つ一つ抜けていった。そうやって、人が出て行つたんです。だから、最後がどうなったのかは私もわからぬ。

S — ちなみに、足尾と山形で全然状況が違うと思うんですねけれども、足尾で閉山になつた時に、山形の閉山と重なる部分つていうのはありましたか？

Fa — 全然ないです。

S — そうですか。

Fa — 足尾は閉山になつたけれども、みんな外に出て行く訳ではない。社宅の家からは引っ越しましたけれども、足尾に残りましたね。……(省略)……

F — 今市や大間々に行くとね、なんかね「うわー、なんでこんなに空が広いんだろう」とてね、すごくストレス解消になるんですよ。足尾にいるとね、とにかく空が狭いんですね、もう山がね。「いや、空はこんなに広いんか」と、解放されるというか。だからね、たまには気晴らしに良いんですけども。

【お話を聞いて】

「いつて、いつも言うんですよ。帰れるふるさとが無いんですね。そこが無くなっちゃたら、そうですよね。」

……(省略)……

S — 足尾に引っ越して来る前に、足尾について何か聞いていましたか？

Fa — 全然聞いていない、引っ越した先として、3つの候補地から選ぶことになって、一番近い足尾に決めたんですね。何もわからず、親の言うところについて行くだけでしたね。どんなところかも調べもしないしね、小さかつたしね。そんな感じでしたね。

M — そこに、残った人はいたの？

Fa — 残つた人はいないです。最後まで残つた人は、最後まで誰かはいたとは思つんですけども、結局は閉山で。その、民家がないから。全部古河関係の社宅や持ち物ですものね。……(省略)……

S — そのFaさんが住んでいた山形の鉱山も、閉山で残ることができなくなっちゃつたってことですよね。

Fa — そう。全部、それにそこはお店も全部古河。足尾で、う三養会みたいなものしか無かつたし、後はなんにも、とにかく残つた人はいたの？

Fa — 帰つて来ると、今度は山に入ると安心感がね。神子内(みこうち)まで来ると安心感があるんですね。向こうの今市に行ってから、戻つて来るとやっぱり足尾がいいなと思うんですけども。でもFaさんのふるさとの話を聞いていたら、もっと足尾を大事にしなくちゃと思いました。

Fa — 私もね、最初は足尾が好きになれなかつたんですけども、神子内にお嫁に行つてから、家の周りが山の中だから。周りに山形と同じような自然があるんですよ。山菜もあるし、春になつたらそれこそゴゴミ、ゼンマイ、ワラビ、フキノトウも出るしね。ここじゃ、町ではそういうのはあんまりね。だから神子内にね、お嫁に行つて良かったなと。ハハ。いくらか永松にいたような感じが味わえているから、良いのかなと思って。だからね、今は足尾が大好きです。

S — 「永松と足尾の閉山は重ならない」と即答していたのが印象に残つている。足尾だけではないということを、強く意識させられた。Faさんの話は、永松鉱山の雪や、山の豊かな自然の

生活の話が多く、それほど跡形もなくなってしまったふるさとの想いが強いのかもしれないし、もしかしたら現実離れとなつてゐるからこそ、綺麗な記憶として残つているのかもしれない。

N—Faさんは一度も閉山を経験し、きっと多くの寂しさや辛さを知つているのだとと思う。そんなFaさんが話すふるさとへの想いには重みがあった。ベッドタウン育ちの私にとって、無機質なコンクリート、他人を気にかけない人の距離感、電車や車の音、好き嫌いは別にして、その空気が一番安心する。でも今では、宇都宮インターに入つて山に向かう時、日足トンネルを通つて山に入る時、「帰ってきた、落ち着く」としみじみと感じる。私も足尾が大好きだ。

### 共同浴場での親切

【2014年10月24日】—Mさん、志村(S)、中山(N)、好井(Y)  
昭和30年代に坑内で働いていたMさんは、労働環境のあり方に違和感を持ち、組合活動に加わった。その後、突然解雇となり、それを不服として仲間とともに裁判を行う[5]。Mさんにとって、閉山前後と解雇されてから苦労し、やりくりしていた時期は、重なつてゐる。

やつて帰ればいいか聞く人がいたんですよね。……(省略)  
……坑外への帰り方が分からぬわけ。坑内は分かれているから、入り組んでいるから。そうすると、「俺帰るから、じゃあ一緒に帰ろう」ということで一緒に帰つたりね。  
……(省略)……

M—私が組合支部の執行部に入った時に、運動方針の中に、社外工も個人の組合員として入れるという内容を加えたの。そして、昭和41年に解雇されたんです。……(省略)  
……そのハイクロウ[9]とか警察沙汰になった人とかが対象だと聞いていたんだけれども、25名の解雇通知の中に私の名前も入つていたんですよ。……(省略)……解雇とは、次の日の生活を奪うということてしまふ。仕事がなくなるといふことはその人の生活が無くなるわけだから。ところが、まさかね、自分たちがなるとは思わないよね、ハハ。

S—本当にびっくりという感じだったんですね。

M—解雇されてからは、今度は仲間で意識的に疑つちゃうんですよ。例えば、通洞の共同浴場に入るでしょう、そうすると私が行くとお風呂から出て行つちゃうんですよ。

S—えー、嫌だな、そういうの。

S—同じ坑内の仕事をしていても、喫飯所で休憩したり、仕事後にお風呂に入れないような人たちがいたのですか?

M—そういう人たちとは組夫[6]なの。何でもやる。間接の方[7]はずつとは、やれない。技術があるから自分の専門分野の仕事をやつていたの。組夫は分野が別れていないので、仕事を全行程を一緒にやるっていうね。だから仕事は大変だったね。だから働く場所も条件の悪い坑内の下へ下へ行ったからね、湿度の高い所とか。気の毒といったら氣の毒、その点があつたよな。だから帰りは、作業員が濡れたら濡れたで帰ってくるでしょ。そうすると、普通の工員の人は帰つて来たらちゃんとお風呂に入つたり、下着を取り替えて帰るでしょ。組の人たちは仕事を終わつて坑内から出ると、お風呂に入れないんです。だから乾燥室も使わない。お風呂と乾燥室がそなえられていて、ちゃんと作業着を乾燥室に入れて、お風呂に入つて自分の脱衣所で着替えて帰つて行くんだけれども、組夫の人はないんですよ。直接自分の家に行くか、飯場[8]に行くか。私がある時、仕事帰りに、組夫の人たちと一緒になつたことがあるんですよ。中には、坑内からどう

M—私が風呂に入つていくでしょ、そうするとみんなが下を向いてサーっと、ぱつんぱつんと風呂から出ちゃうの。俺としゃべると支障が出るんじやないかと思つて、避けるんだよね。猜疑心になつちやうの。ほら、私と何かしゃべつたら、その人が何か言われるんじやないかって。何か支障が出るんじやないかな、ってね。本当にあれだつたよ、最初は。

S—そういうのがあるんだ…。  
Y—それ、やっぱり昭和41年くらいからあたりでしたか?  
M—そうですね。

M—その前はそういうことはなかつたですか?  
Y—ないです。そういうことはないです。我々が解雇されてからですね。それで、今度はお風呂の券を作るようになつたんですよ。社宅の共同浴場の券、  
S—あ、じゃあお風呂に入るのに、無料じゃなくなつちやうつてことですか?

M—うん、結局、解雇された私たちが入らないように、券制度になつた、月別に。そのお風呂の窓口の人、いわばね、お風呂場の管理人がいるんですよ。昔は。その人が窓口について、券に判子を押すんですよ。そうすると、解雇されてしまった

から、私の家は該当されないんですよね。そうすると子ども券もないんですよ。でも、子どもにはそんなの関係ないがね。そうするとその人はいい人でね、子どもが風呂に行く時に、誰かが券を忘れたとすると、わざとそれをとっておいて、家(うち)の子どもの名前を書き換えて、子どもに渡したの。子どもはそういうの、全然分からなから。そういう中で、そやつて守つてくれた人もいる訳。……(省略)……他の例だと、社宅の中の本通りがありますよね、そこを歩いていて私の姿が見えると、通る予定だった道を変えてすーっと違う道に行っちゃうんですよ。ハハ。顔を見るも駄目。……(省略)……裁判が始まって判決が出て、だいたい筋がわかった頃に、ある人が「ただ、なんて言つていのいかわからなかつた」って。「嫌で避けたのではない、激励していいのか、慰めの言葉を言つていのいかわらないので、私は避けていた。かわしていたんだ」っていう話をされたね。それを聞いて、ちょっと救われたけれどもね。

### 【お話を聞いて】

S — 裁判の実体験を聞き、自分が持つていた裁判に対するイ

きあつていけばいいのかという当時の周囲の人びとの戸惑いを思いやり、気づかうMさんの優しさだ。

### 現役の消防団員

【2015年5月10日 — Mさん・志村(S)】

現在60代で消防団員を約50年続けていらっしゃる方のお話。

M — 昭和50年代の消防団は、県の操法大会【10】では1、2位だからね。

S — そなんですか、県の中で1位か2位を争うほど…。それは、足尾の消防団が優秀だったということですよね。人も沢山いたし、訓練とかも一生懸命やっていて技術が高かつた? M一部が沢山あって、そこから若い衆を集めてやっていましたよ。大会にもたいがい行くからね。足尾の場合は、結構、頑張っていたから。

S — 町の人も安心というか、凄い誇りですよね。消防団の人たちも。

M — 昔はほら、消防分署っていうのがなかったから。プロがないなかつたから。冬場なんかは詰所に詰めてね、毎日交代

メージが大きく変わった。とにかく、エネルギーが必要で、維持するのは並大抵のことではない。Mさんはあつけらかんと苦しい時期の話をしてくれながら、当時の問題点が次から次へと熱く発せられ、時間がたつても收まらない気持ちを感じた。お風呂でのそれぞの反応・対応は、自分もやつてしまいに立つということ、人が見ていらない場所で人柄が現れることを、よく表している例が沢山あった。

N — 裁判が行われている時は、古河の従業員の人たちにも複雑な想いがあつたのだと思う。Mさんも大変な疎外感を持ったのだろうと想像する。そんな中、最後まで裁判を行えたのは、仲間の存在や、日常に感じる些細な人の優しさが大きな支えであったのだろうと思う。

Y — 銅山で労働運動を熱心に進め、閉山前に突然解雇され、その不当性を訴え、長年裁判闘争をしてきたMさん。初めて聞き取りにうかがつた私も気さくに受け入れ、ぶしつけな問い合わせにも快く語ってくれる。彼の語りからは、解雇されたことへの憤り、不正への怒りが透けてみえる。しかしMさんの語りで印象深かったのは、解雇された自分とどのようにつ

ござ。冬場は、今の通洞駅前にあつたんだけれども、夜は詰めてね。今は楽だよね、やっぱり。昔と変わったことは、消防団員による夜勤がなくなつたということですね。泊まりに行かなくて良いから。一冬に多い時には10回以上かな。そこに行って、朝に帰つて来てから、そのまま仕事に行つたのさ。そういうのもなくなつたから楽だよね。

S — かつては県で1、2位を争うような消防団で団員も沢山いた時から、閉山や人口も減少して、現在になつているんですね。改めて思うこととか…、

M — 改めてつても。なにがなんでも、あれだよね。人口が少ないっていうのがあるよね。人口が増えれば、若い衆が増えれば、俺らも消防団員をやらなくて済むんだよ。

S — フツ、

M — 笑われちゃうよね。はつきり言うと笑われちゃうよ。俺らが消防団員をやつているなんて。年金生活をしているのにさ、消防団員をやつしているなんて言つたら笑われちゃうもんね。「関心する」じゃなくて、笑われちゃうよ。

S — でも、やっぱりそうせざるを得ないっていうかね、今それが

M — そうなんだよ。動けるうちはさ、

S — 活躍していただい。

M — 「動ける」って言つても、やつと動いているんだけれどもさ。

【お話を聞いて】

S — 終始、笑いながらユーモラスに話が続いたが、「こんな歳でも、消防団をやつてはいるなんて笑われちゃう」と言う一言には、今のいろいろな足尾の様子が示されている。この日の数週間後、一人暮らしのお婆さんの家が火元の火事があり、そのお婆さんは亡くなってしまった。火災にすぐ対応できる体制の維持がますます難しくなっていく中では、お話をとおり、歳だからといって消防団を抜けることはできないのだろう。ちなみに、協力隊に着任した当初から消防団に加わったNさんは3回の消火活動を経験していて、凄いなあと思う。

番外編「消防団に参加していく」

N — Mさんの言うとおり、足尾消防団は人員が不足し、また高齢化が進んでいます。これは深刻な問題で、若者の入団と世代交代が必要であることは、間違いないません。しかし、個人

的なわがままを言えば、大先輩の団員の方々には、是非、体にムチを打つて、まだまだ団員として活躍していただきたいです。おつかない団長と副団長には規律を学び、副分団長には節度を学びました。分団の方々も、いつも私のことを気にかけてくれます。部では陽気な分団長、優しい部長、実はいつも真剣なMさん、みなさんに消防のことだけでなく足尾のこと、人生のことなど、多くのことを教えていただいています。とっても楽しいです。だから、(怒られますが)カツ「いいおじ様方には、これからも頑張っていただきたいです。

引っ越し前の美容室

【2015年5月27日】— Fさん、志村(S)】

昭和20年代に美容師の修行に出た後に、足尾で美容室を開業した方。銅山ならではのお客さんの様子や、女性目線の店や町の話題の中で、閉山の一場面も語られた。

たのかわからないよね。みんな出て行く人で。足尾から出て行くから、

S — 最後に髪を切る、ということですね。

F — うん。パークをかけて、みんな綺麗にして出て行つちやつた。S — えー、そなんだ。ちゃんと引つ越す前に髪を綺麗にしてから、奥さんたちは出て行つたんだ。

F — うん、出て行つたもんね。だから美容師の私は手を使ふだろ、手が痛くて筋肉痛になつたよ。

S — それほど、沢山の人が引つ越し前に髪を切りに来たんですね。閉山のことは、あまりイメージとかできないんですけども。どんどん人が引つ越しで行く中で、でもそつやつ

てパークをかけて出て行つたんだと思うと、なんかな…。髪を切つてもらう時つて、お話をしたりするじゃないですか。Fさんも、お話をしながら?

F — その時だつて、話をしながらやつたけれども、S — どういうお話をしていたんですか?

F — 「閉山で他所に行つてから、体に氣をつけなね」とかね、いろいろなうわさ話がありましてよ。新しい仕事先では、勤務時間が長いでしょ。だから随分苦労して、嫌で帰つて

来た人もいるし、大変だつたみたい。

S — ね、きっと美容室に来る奥さんたちは、奥さんたちなりの心配とかが、いろいろとあつたんでしょうね。

F — そなそ、あつたからね。新しい所に行くんだからね。でも、向こうに行つて、向こうの人と仲良くやつてゐる人もいるけれども。逆に、なんか意地悪された人もいるみたいよ。話の様子では。

S — どうですか。

F — 水とか、どぶがとか、なんかいろいろ話を聞いたことがある。

F — うん。どぶが使えなかつたり。水底に使えなかつたりとか。なんかつて意地悪されたつて。

S — 新しく来た人つていうことで、受け入れづらかつたんですかね。

F — いろんな所があつたみたいね、里もね。小山の方へ行つたり、埼玉の方に行つたりして、いるんだよね、みんなね。

S — なんか、その閉山になるとわかつて、そうやつて、奥さんたちがパーク屋さんに殺到している時に、Fさんはどういう

F——だから行っちゃってから、お客様が少なくなっちゃうしさ、あれかなと思つたけれども。だけれども、行つてから何年ぐらいだろう、何年かはまあまあ良かつたけれども、だいぶ少くなっちゃつて寂しくなつたよね。それでほら、みんな同級生なんかも行っちゃうし。だいたい私たちと同じくらいの年代の人が行つちゃつたから。だから寂しかつたよね。今になつてその人たちが同じくらいの歳だから、「どうしたろうね」と聞いてみたりするけれどもね。

S——閉山の時か。想像がし尽くせないな。

F——そうだよね。その時に足尾にいない人にはわからなによね。

#### 「お話を聞いて」

S——引っ越し前に髪を切る奥さんの様子は、妙にリアル。また、どぶの掃除といった細かい部分での不都合に気づくアンテナは、女性ならではの情報収集力。そういう嫌な部分は、ずっと覚えている気がする。いろいろな所で足尾から引っ越しした

方が話題になるが、その人たちそれがどうだったのか気になるけれども、全くイメージができないままだ。

#### 社宅から見た、閉山から今

〔2015年6月28日——Fさん、志村(S)、好井(Y)〕

社宅に閉山後も暮らしていた奥さんのお話。

S——閉山のことはなかなかイメージできなくて、本当にいろんな人が突然足尾を離れて行つたと思うんですが、Fさんは、じやあFさんや周りの方は、大丈夫だったのですね。ただ、引っ越しとかはなかつたけれども、同じ町で閉山の影響があつたということは?

F——そうそう。ちょっと寂しかつたですね。だから「いざれば……」って気はありましたけれどもね。

Y——それは社宅の人はやっぱり、どんどん人がいなくなつていくといつ?

S——実際、日光の方と桐生の方で、トンネルができる前後で行く回数というのは変わりましたか?

F——桐生の方へは年中行けたけれども、日光・今市方面はあんまり行つたことがないから、うんと遠いように感じたんですよ。

S——日光の方へはあまり行かないんですね、山を越えて行くのに大変だったから。……(省略)……だから、トンネルができる頃は、そういうような感じでした。日光は遠い

ような感じでした。桐生の方が多かったですよね、桐生、大間々とかね。

F——私の、のんきね。あんまりそういうのを感じなく過ごしてきましたけれども。でもね、よく出かけるのに、細尾峠があつたでしょ、山を回つて行くからね。車を買ってから、何回か行きましたけれども、トンネルができたら、不便だった所から便利になつたんですね。日光方面が通れないし、鉄道

S——それを考えると、日光市に合併したつて凄いですよね。

F——だから行っちゃつてから、お客様が少なくなっちゃうしさ、あれかなと思つたけれども。だけれども、行つてから何年ぐらいだろう、何年かはまあまあ良かつたけれども、だいぶ少くなっちゃつて寂しくなつたよね。それでほら、みんな同級生なんかも行っちゃうし。だいたい私たちと同じくらいの年代の人が行つちゃつたから。だから寂しかつたよね。今になつてその人たちが同じくらいの歳だから、「どうしたろうね」と聞いてみたりするけれどもね。

S——閉山の時か。想像がし尽くせないな。

F——そうだよね。その時に足尾にいない人にはわからなによね。



平成 10 年 11 月 15 日 伊東信撮影



平成 10 年 2 月 21 日 伊東信撮影

〔アルバム内のメモより〕

表紙に記述：

足尾通洞解体始める。

平成 10 年 2 月 21 日より写ス。

社宅解体後にマンションが立つ。

裏表紙に記述：

思い出の社宅が消える。

F6 マンションが出来た。

変わり行く通洞 F3 近く二棟出来る。

通洞社宅跡にマンションが出来る。

平成 10 年 9 月 15 日

F — そうですね。今は日光の方にばかり買い物に行くから、日光の方が近いように感じますけれども。今はちょうど乗り物が不便になつてきているけれど。

……(省略)……

Y — さつき、閉山の話をうかがつたんですが、例えば閉山の後に三養会のサービスが変わったとか、そういうのはありますか?

F — 段々と品薄になりましたね。愛宕下(あたごした)の三養会がなくなつて、今度は赤倉がなくなつてつていう。今なんて2つだけです「12」。閉山後は、段々と本当に、目に見えるように寂れて行くのはわかりましたけれどもね。

S — なんか、漠然とした質問になっちゃうんですけども、今つて本当に三養会が2つしかなくて、お店もポツンポツンじゃないですか。どう思いますか?

F — 若い人たち車だから、年中買い物に行つているんですけどもね。今ね、コーポが来ているでしょ。そういうのが来る時に一緒に頼んでいるんですけども。うん。ここらはお店もないしね、不便です。

F — でも、あそこに足尾双愛病院ができるのでうんと助かります。(省略)……

たりね。……(省略)……あんまり話つていうのも出ないですもんね。昔はね、社宅にいる時は「いるー?」なんて言つて戸を開けてきちゃうけれども、今はピンポンをならさなくちやいけないでしょ。だからみんな玄関先くらいの話だけで、そういう親しみつていうのが段々薄らいぢやつてね。

……(省略)……

S — 逆に私なんかは鍵を閉めるのが当たりまえの世代なので、何て言うか信じられないというか、

F — 社宅にいる時は鍵なんて持つていなかつたですよ。ええ、

S — そういうことなんだな、つて思つちやいますね。

F — だから、洗濯物やなんかがあると、雨が降つてきたりしたらみんな入れてくれたり。戸を開けて、ほおり投げて行つてくれたりしていましたけれども。会合かなにかの集まりがあると、みんな誘い合うんですね。「もう時間だから行こう」つてね。今はそういうあればいですね。朝晩に行き会うと「こんには」「おはよう」つて言うくらいで。あんまり人通りつていうのがないから。「あの人丈夫かしら、しばらく行き会わないけれども」とか言う人もいますけれどもね。

Y — 私は大阪生まれなんですが、Sさんは世代が違

るんですよ【13】。桐生まで、病院に行つていたんですけど、くなつちゃたので、足尾双愛病院ができたので助かりました。S — やっぱり、あそこに入院されている人も沢山いらっしゃいますもんね。

……(省略)……

S — 閉山前の社宅での生活で覚えていることはありますか?

F — 飲み会で、隣が喧嘩している時があるの。そうすると奥さんが「Fさんちょっと、家(うち)の人が喧嘩始めちゃつたから、止めて、止めて」つてね。みんな背が高い人ばかりで、お父さんは小柄だったものだから、「やだ、家(うち)のお父さんが行つたら飛ばされちゃうよ」とか言つたけれども。今となつては楽しい思い出ですね。そういうことがありましたけれども、社宅から引っ越してからは本当に、「しばらく見ないけれども、あの人は元気ですか?」とか言われたりね。だから、「誰々さんがあれなんだけれども」なんて言つ

うけれども、わかるような気がして。大阪市の市営住宅の平屋で育つたのですが、そうすると、隣の家との境があんまり高くなくて、家の中が見えちゃうんですよ。で、隣の人が何をしているのかがわかる。

F — そういうの、ありましたよね。

Y — ありましたね。それが昭和30年代ですから。それも大阪の市内でもそうです。だから、普段のまさに醤油のやり取りもやっていましたし、貸し借りみたいなのも。

F — 今の住宅ではそういうのもないし。よく私らは、すぐに三養会に走つて、足りないものを調達したんだけれども、店が閉まつているとお隣さんに「あら、今日使おうと思つたら、お店が閉まつていたの」って貸してもらつたり。そういうのはありましたね。だから「会計までにちょっと3日あるんだけれども、家(うち)にこれが足りないんだけれども」って言うと、「家(うち)にあるから、じゃあ会計までいいわよ」なんてね。そういう貸し借りがありましたね。

【お話を聞いて】

れたFさん。主婦ならではの生き生きとした社宅の生活感が伝わる。文字化のための校正の際、Fさんは「顔から火が出るほど恥ずかしい」とまで言わせてしまったが、無理を言つて掲載させてもらった。Fさんに限らず、自分の話が文字化される側だったから、確かに驚いたり、慎重になつたり、恥ずかしい気持ちになる方は多い。けれども、あえて私の立場からは、その内容が「こんなこと」ではなく「面白い視点や気づき」として、迷惑がかからない程度に聞き集めていきたい。

Y一社宅でずっと暮らしてきた女性。普段の様子をいろいろと語っていた。二つの社宅を移つた歴史。語りからは社宅ごとにかなり生活の事情が異なつていたことがわかる。一口で「社宅の暮らしは」と言えないことが実感できた。少し控えめだがしっかりと丁寧な語りの中に、女性が社宅の日常で他の女性たちと関係を築き、地域の活動も進めてきたという「誇り」のようなものを感じ取れた。

……(省略)……

### 猫の手も借りたくなる忙しさ

2015年9月1日—Fさん、志村(S)

足尾にとつておなじみの食堂の奥さんから見た、閉山後の

食堂に来てご飯を食べて行くとかね。出入りが激しく、店の段取りが追いつかないくらい大変で、店の仕事に追われて過ごしましたね。

S一じゃあ、それまでは坑夫さんとかが仕事帰りに使つたり、家族が食べに来たりしますよね。閉山の時は、さらにいっぱい人が殺到したみたいな?

F一そうそうそう。結局、閉山は2月だったろ? 4月に間に合うように、どんどん引っ越して行く人ばかりだから、学校の黒板には「誰が何処に行く」って記録されてね。だから、子どもが、「母ちゃん、俺たちはいつ引っ越すんだ?」って聞いてくるような、もう引っ越しが当たり前だつて会話が家庭でされたという話だよ。引っ越しとなると、家(うち)みたいな店にお昼を頼むとか、「夜に一杯飲ましてくれ」とか。そんでもう大忙しだったよね。

……(省略)……

S一閉山の前後で、例えば人の働き方や生活習慣だとカリズムが変わったと感じられたり、気付いたことはありますか?

F一子どもの頃には本山にいたけれども、朝6時半といえ

店の様子について。当時は30代。

F一以前の足尾には小学校が5つ、中学校が3つあり、昭和28年に中学校が合併して1学年10クラスの大勢の生徒と70人からの先生を抱えた県下のマンモス校でした。大勢の人がいたけれど、閉山後は年々学校も縮小されて、今では1学年7~10名ほど。部活も限られるようですがね。でも、他へ行くことも不可能ですし、全国的に少子化の波の中にいるのですから、今は子どもたちの幸せを祈るのみですよね。……(省略)……高齢化した今、足尾の商店も大変ですよ。人口は減るし、商いも以前ほどじゃなく不景気になり、後継者も考えられず廃業を余儀なくされね。今は観光町とはいえ、食べる場所も限られていますよね。地下資源を頼つて生活する人々にとつて、避ける事のできない現実でしょうか。

S一閉山直後には、何か商店に影響がありましたか?

F一とにかく、閉山直後は忙しさが大変だった。引っ越す家ばかりで、もう自分の家で料理をやっていられないから、

ば、働いている人の通勤があつたんだよね。通路に、もう朝6時半といえば、真冬でも真夏でも、行列をなしてみんなが通つていたね。通勤の時間で、「ああ、ほら1の方(いちのかた)「14が入るんだぞ、起きろや」って言うのが親の口癖くらいだったね。みんなカンテラを下げてね。その列が閉山でまずいなくなつたよね。閉山の後は今度は、引っ越しをする人の車の列が半年くらいはずっと続いたしね。

F一閉山で仕事を辞めて足尾から離れた方々は、埼玉県とかに集団就職みたいな形でまとまって雇用先に行つたみたい。「あれもいるから、俺もそこに行くべ」とかね。そういう話はお風呂でしたみたいですよ。

S一そうか、銅山関係の人は、共同浴場の中で就職活動の情報交換をしていたと。そうですよね、お風呂で一緒にいたら「どうだい?」って話になりますよね。

F一うん。これが一番大きいみたい。そういう話題を作る所では。あとは、組合の詰所ね。「どういう所、良い所、無い所? 今日はどこか新しい就職口ないか?」ってね。町場の人っていうのは、全然そういうのに関係ないから。「かあちゃん

ん、俺どこどこに就職決まつたよ」って風に報告に来てくれる人はいた。「世話になつたね。俺、いつつに発つからね」「てね。……（省略）……引っ越しの時にいらぬい物はそのまま置いておけるから、道路の隅には多くの家具や鍋 窯や冷蔵庫などが山のように並んでいましたね。それでも、古河にいた人は衣食住が保障されていましたから、社宅に残つて暮らしてみたいという気持ちは強かつたと思うよ。血と汗で働いた人たちにとって、新天地に向かう意気込みと足尾を離れたくない複雑な気持ちが入り乱れて、名残惜しそうに足尾を離れて行つていましたよ。残された人たちにとっても、年をとつた人というのは親を置いては行けない人たちなので、町に起つられた企業に就職したとしても、慣れない仕事に苦労したと思いますよ。

#### 【お話を聞いて】

**S** — 食堂を営んでいた方だからこそ、細やかな視点ではつきりと意見を言って下さるFさん。昔に限らず、今に対する問題意識を持ち、包み隠さず正直にユーモラスに伝えてくれ、私自身がズキつと思い知らされてしまう。閉山といつ微

妙な出来事にも、真っ正面から向き合い、今までの足尾に寄り添つて来たからこそ、優しく堂々としたお人柄になつていつたのかなと感じる。

#### 飲み方の変化

〔2015年9月2日〕—Fさん、志村（S）〕

**F** — 同じく足尾の名店であるホルモン屋さんも、「閉山直後は案外忙しかった」とのこと。お店のカウンターから見ていた店屋さん。風俗関係のお店屋さんが何件ありましたかね、当時の様子。

**S** — 閉山の頃って、どんな感じだったか覚えてらっしゃいますか？  
**F** — 社宅関係はあんまり出入りしていないから、わからないんですけども。閉山の時にはまだ、町には女性のいるお店屋さん。風俗関係のお店屋さんは、結構あつたんですよ。それで、風俗関係は、11時が閉店の時間なんで、家（うち）らは風俗ではないから、夜2時頃まで許可をとつて営業していたんですね。まあ、実際は2時くらいまではお客様の数は少ないですけれども、でも1時くらいまではやつていましたね。風俗関係のお店屋さんは、結構あつたんですよ。

**F** — 以前はね。やっぱりあの、労働者同士だから、飲んだ後は喧嘩をするとか、ちよつともめるとかそういうことは往々にしてあるんですけども、閉山後の飲み方はそういう荒々しさではなく、楽しくというか…、飲んでいました。

**S** — スミマセン、「飲み方が荒い」というのは、ワイワイ、ガヤガヤ？

**F** — 以前はね。やっぱりあの、労働者同士だから、飲んだ後は喧嘩をするとか、ちよつともめるとかそういうことは往々にしてあるんですけども、閉山後の飲み方はそういう荒々しさではなく、楽しくというか…、飲んでいました。

**S** — ふーん。そうなんですね。  
**F** — 一名残を惜しんで、別れを惜しんでというかね。うん。いつももの雰囲気とは違いますね。

……（省略）……

**S** — 常連さんも結構足尾を離れられたんですか？

**F** — 隨分ね。結局は年配者の方、そろそろ定年になるようなそういう方たちは「今さら、出て行くのも大変だ」ということで、残つたんでしょうけれどもね。若い方たちはこれからお仕事をしなくちゃいけないのでね。

**F** — 客層はやっぱり足尾の方ですからね。みなさん、何て言つたのか、意外と労働者の町つていうのは飲み方が荒いんですね。荒いんだけども、閉山後はそういう雰囲気はなく、飲んでいましたね。うん。別れを惜しむというのか、どういうんでしきうね。

**S** — そうですね。今だと、選んでられないという感じですよね。

**F** — だからそういう点ではラッキーかな、悲しみの中でもラッキーな、

**S** — Fさんから見て、足尾を離れなくちゃいけなくなつた人たちはどんな風に見えましたか？

**F** — 間近にそういうのは見ていないからわからないですね。

けれども、やっぱり厳しかったですね。みなさんね、これか

ら他所に出て新たな生活をしていかなくちゃいけないので。

それで、あの、足尾の町では部屋は他と比べて広いんでしょうか？ 引っ越し前のゴミ捨て場には、何か家財道具が多くて、家財道具を持って行かれない。

**S** — あ、次の家に？

**F** — ええ。それで引っ越しの際にには、随分家財道具があちこちに捨ててありましたね。

**S** — あ、そろなんですか。持ち運べなくて？

**F** — そうそう。家具。タンスとかね。いろんな家具があちこちで、山のように置かれて行きましたよね。

**S** — そうなんですか。へー、引っ越しラッシュですかね。

はみんな手伝いに行くとかね。……（省略）……

**S** — 閉山後に、観光開発ということで銅山観光などができましたよね。そういった、観光していくアイディアはどう感じられますか？

**F** — やっぱり賑やかになることは良いことですよね。一時、随分減ったわけですからね。賑やかになることは良いことで、栄えてもうことは嬉しいことですよね。あとは、人の出入りが無ければお互困りますからね。

**S** — そうですね。それと、閉山に閑らずなんですけれども、今までのお客さんの出入りみたいなのって、どう変わってきたというか。例えば閉山直後というのは忙しい時期だったんだけれども、ある程度落ち着いてきた時期っていうのはあったのですか？

**F** — そうですね。他所の店はわからないですけれども、やっぱり人家が減るというのは八百屋さんにして、一般的に頼る人がいない訳ですから。どこも一緒でしょうね。ましてや、若手がいなくなるというのはね、即、店屋さんも影響するわけですよね。

**S** — ですよね。かといって、足尾にずっと住んでいた人も若

**F** — なので、それを見た時にやっぱり：「どうなるんだろう」と思うようですね。家族の方たちもね。道具持つて、段々増えるのが普通であつて、急にタンスを一竿、二竿置いて行くとか、その他の細々としたものを置いて行くというのは…。結局住宅関係か何かはわからないけれども、狭いからその道具を持って行かれなかつたんでしょうね。

**S** — ジゃあ、足尾はそういう意味で、家とかも住みやすかつたんでしょうね。広かつたりとか、

**F** — 広かつたんでしょうね。それだけの家財道具を捨てて行かなくちゃならない状態なんですね。まあ、行く先の住まいは狭すぎたのか、そのことは良くわからないけれどもね。

**S** — でも、一人二人ではなく町中でそうだったとしたら、いろいろな事情で捨てなくちゃならないということですね。…あと、社宅の人たちは毎日のように引っ越しがどこかにあって、お手伝いをし合つたと聞いたんですけども、

**F** — そうでしょうね。やっぱり、みんなさん何て言うかな、こう、友だち関係の範囲が広いですからね。みんな足尾の家族みたいな感じなんでしょうね。だから、知っている人

い人は外に出ちゃう。そうですか…。

**F** — だから平均年齢が高いんですね。足尾は。

**S** — 残れなかつたっていう感じなんですかね。

**F** — 職場がないということですよね。職場があればね、みんなさんやっぱり好きな足尾だから、携わりたかったんでしょうけれどもね。

……（省略）……

「お話を聞いて」

**S** — 普段お店とはちょっと違う、Fさんの表情や話しか方が新鮮だった。閉山のキーワードとして、女性の店や箪笥が真っ先に出たのが意外だったが、どちらも町部だからこそ気付いた確かに閉山の変化。荒々しい鉱山の飲み方を、親しみを込めて懐かしんでおられたが、今まで様々な場面（修羅場）がありがあつたり、評判を聞きつけて遠くからのお客さんがいたりする。ちなみに、私はこの豚足が大好物だ。

1 「間歩(まぶ)鉱山の坑道で地表にぬけているものをいう。」(金属鉱山研究会編集、「鉱山用語集」、東甲社、1976年、13頁)

2 山形にある永松鉱山は、明治24年に古河の経営に移り、昭和36年に鉱業所廃止。(参考・古河鉱業株式会社「創業100年史」、昭和51年)

3 同じ作りの長屋社宅が並んでいるため、社宅は「いろはにはへと」と手前から順に呼ばれていた。住所の番地のようなものらしい。

4 静岡県にある久根銅山は、明治32年に古河の経営に移り、昭和45年に久根鉱業所操業休止。和歌山県にある飯盛鉱山は、大正8年に古河が譲り受け、昭和43年に飯盛鉱業所廃止。(参考・古河鉱業株式会社「前掲書」)

5 昭和41(1966)年7月21、22日、古河鉱業株式会社足尾鉱業所が事業合理化のために労働者25名を8月1日付けて解雇。うち、7名が足尾銅山不当解雇反対同盟を結成し裁判闘争に入る。昭和45(1970)年1月10日、宇都宮地裁では申請人の主張をほぼ全面的に認めた形で判決が下され、企業側はこの判決を不服として控訴。昭和48(1973)年8月6日、東京高等裁判所第7回目の和解斡旋により合意。

6 銅山労働をする方の中て正式な職員ではない社外労夫のことを指す。下請けなどで一定期間足尾銅山で働いている方のこと。足尾出身ではなく、全国から働きに来ていたが、仕事のやり方や労働環境は大きな違いがあった。組夫(くみふ)明治期には職夫二類夫に当り、大工、煉瓦職、左官、石工、土工、鳶屋職、樵職、炭焼使夫等が相当する。戦後は、鉱山と請負組との契約の下で作業をする人をさすようになった。(村上安正「足尾銅山史」、随想舎、2006年、6-17頁)

7 技術関係の仕事(電車、機械、測量など)を担当する作業員のこと。直接の場合は、進鑿(しんさく)、支柱、運搬、縫路などの作業を指す。

8 「飯場(はんば)採鉱と製鍊に作業員を調達して作業請負を行う下請け組織。単身就業者のために宿舎と食事賄いを提供して労働と日常生活の管理を行った。」(村上安正、前掲書、6-18頁)

9 「平九郎(へいくろう)仕事を休むこと。またはよく欠勤する作業員をさす。欠番、バッタする。」(金属鉱山研究会編集、「前掲書」、83頁)

10 「時の状況を語つていただいている意義を重視し、そのままの言葉を掲載しています。

11 「操法とは、消防訓練における基本的な器具操作・動作の方式のこと。」(足尾町消防団は伝統的によく訓練され、昭和36年2月には日本消防協会より優良消防団として表彰旗を授与された。昭和39年8月には、県下消防団ボンブ操法競技大会可搬ボンブの部で優勝、昭和43年3月には模範消防団として消防庁長官より竿頭綬を授与された。)(足尾町郷土誌編集委員会編集、「足尾郷土誌」、(有)不二工房、平成5年、35頁)

12 「細尾峠は道幅が狭く、62カ所に及ぶアピングカーブがあり、特に冬季は通行に難渋をきたした。台風時には、道路崩壊で足尾が陸の孤島と化すこともしばしばであった。陸の孤島からの脱出と、町の振興発展のために、長年にわたり「日足トンネル」の早期完成を町民の悲願として各関係機関に働きかけた。昭和47年に栃木県が主体となって着手する運びとなり、足尾銅山閉山の年、昭和48年10月22日から約6年の年月を経て、昭和53年3月30日ようやく開通した。(参考・足尾町郷土誌編集委員会「前掲書」、58頁)

13 「銅山最盛期には足尾地域内に9店舗あり、町の消費の約7割を占めていたといわれる足尾銅山生協「三養会」は、閉山後の人口減少や日足トンネル開通による他地域への大型店舗を利用に対する対応を行なう総合病院。通院、入院で利用することはもちろんのこと、足尾内の方が働く貴重な勤め先にもなっている。

14 「銅山で働く人は3つの勤務時間に分けられていた。一方(かた)はその呼び方。「一方(かた)」操業上の就業区分で1日3区分の場合は、1の方、2の方、3の方とした。通常2の方が日勤の就業区分になるが、管理部門は1時間繰り下げている。」(村上、前掲書、6-15頁)

Sより　志村春海「平成25年～27年度足尾地域おこし協力隊」

Nより

中山京「平成25年～27年度足尾地域おこし協力隊」

『小滝坑　みたい姿は　こけの奥』この川柳は足尾に来たばかりの頃に思いつきましたが、今も同じ気持ちです。足尾での話の内容や今の現状を知るたびに、「みてみたかった」と思うことが沢山あります。ちなみに、3年間の聞き取りの感想を川柳に表すなら、『目の前に　いない人まで　主人公』となります。聞き取りでは、私自身が会えない方々（例えば、閉山で足尾を離れた方、外国人労働者、亡くなった方が登場します。その存在に気づけたことが、私にはとても大切なことです。これからも聞き取りで、目の前にあるありのままの声や姿、その背景にも注目していきたいと思います。

足尾の方の協力はもちろん、活動の意義に共感し、アドバイスや、荒々しい原稿案を丁寧に確認・校正してくれるなど、沢山の方に助けていただきました。本当にありがとうございました。

足尾に赴任してから3年間、大変多くの方々に足尾のことを教えて頂きました。みなさんにとっては日常で当たり前の話なのかもしれません、私にとっては驚きが多く、みなさんの話によって日々足尾への関心が深まり、足尾への愛着が増していました。

知つても知つても、まだまだ奥が深い足尾の生活史を今後も聞き続け、記録に残していくことが大切だと思います。また、町の方々の記憶は、まさにそれ自体が足尾の資源です。貴重な記憶を私たちの中にだけ留めず、いかに外に発信していくかも重要なだと思います。足尾にある記憶はきっと多くの人たちを魅了すると信じています。

私たち地域おこし協力隊を温かく受け入れて、多くのことを教えてくださったみなさんへ、心より感謝しております。ありがとうございました。これからも宜しくお願いします。

### Yより「暮らしの語りを聞き取る意味」

好井裕明「日本大学文理学部社会学科教授」

志村さんたちの聞き取りのお手伝いを始めて数年が過ぎています。銅山関連、山仕事などさまざまな場で仕事をしてきた人たちの語り、社宅で毎日の暮らしをたててきた女性の語りなどと出会い、足尾にも、分厚く多様な「人びとの歴史」が息づいています。

普通、地域の歴史を考える時、当時のできごとを伝える新聞記事や文書や写真など記録された資料をもとに考えようとします。状況を客観的に判断できる重要なものがからです。でも近年、人びとの生活史そしてライフストーリー（生活・人生の物語）を聞き取り、人びとの語りや記憶から地域の歴史、人びとの歴史を考えようとする動きが盛んに行われてきます。いわば地域で生きてきた一人一人の主観的な記憶、考え、価値観などを丁寧に聞き取り、そこから地域を捉え直そうとする動きなのです。

個人的な記憶をいくら聞いても、それはあくまで「その人」にとっての主観的な世界のことだけじゃないだろうかと思うかもしれません。確かにその通りのですが、人びとの暮らしの語りには、決して記録された資料や写真などだけではわからないさまざま「生活の知恵」「暮らしの価値」が含まれているのです。また主観的な世界にしても、ただ個人のものとしてではなく、まさに「足尾という地域」で生き暮らしてきたという意味で地域に根差し、地域の中ではさまざまな他の人びとともに暮らしてきた個人の主観的世界なのです。だからこそ、足尾で生きてきた人びとが語る「暮らしの語り」を丁寧に聞き取り、それを重ね合わせていくことで、さまざまな視点からみなざされた「生活の場」としての足尾の姿が確実に姿を現していくだろうと思っています。

冊子を読まれ、語りに共感される方、あるいは「いや、ちょっと違うかな」という違和を覚える方もおられるでしょう。それが自らの生活史をふりかえる大事なきっかけです。みなさんも「足尾で生きてきた」自らの歴史を語ってみませんか。

**緑化の歴史（治山、植生盤、山仕事、植樹）**

昭和31(1956)年に自熔製鍊法による煙害防止への具体的な取り組みが始まるのと同時に、本格的な荒廃地の緑化に着手。荒廃した山地に、治山ダムや緑化工などを配置し、山崩れの防止や緑のダムとしての水質源の確保をする治山事業と、土石流などを止めるための砂防堰堤設備を配置したり、土砂を押さえるための山腹緑化を行い、上流域の土砂災害と下流域の洪水氾濫を防止する工事方法がある。この冊子で主に取り上げられる植生盤とは、植樹用の種の入った土の板上のものを指し、これを人力で荒廃地の斜面に止めていった。人間の力が及ばない場所には、ヘリコプターを使って肥料や種の散布を行う方法がとられた。平成8(1996)年からはNPO法人「足尾に緑を育てる会」、平成17(2005)年からはNPO法人森びとプロジェクト委員会が活動を開始し、環境学習や植樹体験イベントを通じ緑化活動を行っている。

**閉山**

戦後、世界的に貿易の自由化が進み全国の鉱山にも影響が出始め、昭和47(1972)年11月1日、古河鉱業では鉱山部の廃止(製鍊所は存続)という閉山計画を発表。町で設けた閉山問題特別委員会や、銅山労働組合、「閉山反対町民大会」などによって、従業員の転職の斡旋や、過疎化の阻止や地域振興について話されたが、閉山自体を阻止することはできず、昭和48(1973)年2月28日に閉山した。

**閉山後の3本柱**

閉山後の基本対策として、栃木県が主となり足尾町振興緊急措置計画が昭和48(1973)年2月に策定された。『町の基盤整備』『企業誘致による産業開発』『観光資源の開発』の3本の柱を元に、県と町が7ヵ年計画で昭和55(1980)年の完成を目指された。足尾トンネルの開通や観光開発などが実施されたが、実現されなかつた計画もあった。

**新日光市誕生**

平成11(1999)年ころから國の方針で市町村合併が推進され、日光地区5市町村(今市市・日光市・藤原町・栗山村・足尾町)でも合併の気運が高まる。平成15(2003)年、「日光地区合併協議会」設立。平成18(2006)年3月20日に、新「日光市」が誕生。

**[参考]**

ふるさと足尾歴史セミナー自主研究会、『足尾銅山百選—産業遺産活用の手続き』、平成4年。足尾町郷土誌編集委員会、『足尾郷土誌』、(有)不二工房、平成5年。足尾町、『足尾町閉山記念「足尾博物誌」』、平成18年。

和暦	西暦	できごと	人口
天文19	1550	銅山が発見される：古河鉱業(株)(現在、古河機械金属(株))閉山時発表	
明治10	1877	古河市兵衛が銅山を買収、経営を開始	
明治14	1881	鷹之巣坑で直利を発見	
明治16	1883	本口坑で大直利を発見	
明治24	1891	田中正造が帝国議会で鉛毒問題を質問 足尾鉱業所が初めて砂防工事に着手する	11,664
明治29	1896	第1回(鉛毒)予防工事命令発令(明治36年まで5回)	11,448
明治30	1897	農商務省訓令により東京大林区署が「足尾官林復旧事業」を開始	27,426
明治34	1901	田中正造が鉛毒問題で明治天皇に直訴	22,708
明治35	1902	足尾銅山との示談により旧松木村廃村	22,708
明治40	1907	坑夫による大暴動事件が起こる	34,824
明治41	1908	本山に生活協同組合「三養会」を開設 (明治39年に三養会設立準備会発足、本山三養会一部開店)	28,618
大正元年	1912	足尾鉄道 桐生駅～足尾駅開通	29,774
大正10	1921	県内初のメーデーを足尾で開催	27,387
昭和20	1945	足尾銅山労働組合同盟会結成	20,997
昭和26	1951	前橋営林局の川端勇作が植生盤を発明する	
昭和29	1954	小滝坑廃止、フィンランドのオートクンプ社から自溶製鍊技術を導入	
昭和31	1956	「自溶製鍊法」、「電気集塵法」、「接触脱硫法」を応用した脱硫技術を世界で初めて実用化し、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功	
昭和48	1973	足尾銅山閉山(2月28日)	8,699
昭和53	1978	日足トンネル開通(延長2,765m)	6,426
昭和55	1980	足尾銅山観光オープン。坑内観光が始まる	6,078
昭和63	1988	製鍊所が事実上の操業停止	4,935
平成8	1996	「足尾に緑を育てる会」の活動が始まる(平成14年、NPO法人に認証)	4,077
平成18	2006	今市市、旧日光市、藤原町、足尾町、栗山村が新設合併し、新たに日光市が誕生	3,196

**[典拠]**

『足尾町閉山記念 足尾博物誌』(平成18年2月足尾町)、『足尾銅山近代化産業遺産MAP』(平成26年3月、第6刷改訂版 日光市教育委員会事務局文化財課世界遺産登録推進室)、「森よ、よみがえれ—足尾銅山の教訓と緑化作戦」(秋山智英、1990年4月、株式会社第一プランニングセンター)より引用。人口データは、『足尾町閉山記念 足尾博物誌』、永井謙「足尾銅山の生産システムの変遷と空間的都市構造」(平成20年7月1日、日光市教育委員会足尾銅山跡調査報告書)他、広報あしお、広報にここうを参考にしている。

執筆者の紹介

好井裕明(よしい・ひろあき)

日本大学文理学部教授。大阪出身の社会学者。志村が、著書『あたりまえ』を疑う社会学』(光文社、2006年)を読み(短くてとても読みやすいのでオススメです)、語りから考えていく手法など(エヌノメソドロジー、そしてライフストーリーと言ふらしいです)を知る。足尾での様々な要素を把握する際に、アドバイス相談の連絡をしたことがきっかけで、足尾の活動に協力。足尾での聞き取りはもちろん、かじか荘の温泉も楽しみに足尾に通い続いている。研究代表者。

三浦一馬(みうら・かずま)

日本大学大学院文学研究科博士後期課程社会学専攻。足尾を含めた過疎地域の研究をしている。北海道大学在学時に偶然出会った志村と炭鉱について話したこと がきっかけとなり、足尾へ。そのときの縁で現在の大学院に進学することとなる。定期的に足尾に通い、聞き取りを続けている。調査協力者。

中村哲也 (なかむら・てつや)

宇都宮市在住。志村が協力隊で足尾に在籍している頃から、「足尾が面白い！」「地域おこし協力隊が聞き取りをやっているのも面白い！」と様々な形で応援。働きながらも、独自に活動する研究者でもあり、自身も足尾にまつわる研究を行った。現在は社会福祉協議会に在職している。調査協力者。

志村春海(しむら・はるみ)

足尾について「公害の街」という教科書程度の知識しか持つ合せないまま、2014年、足尾地域おこし協力隊の一員として派遣される。その後、現地で見聞きして得た足尾に関する資料を自分の手元に留めておくのはもったいない……という気持ちから、聞き取り事業を担当することになる。2016年から地元の宮城県に戻っているが、ときどき足尾を訪れては、そこでの滞在を満喫している。調査協力者。

## コラム執筆者の紹介

市之瀬昌弘(いちのせ・まさひろ)

平成28年度足尾地域おこし協力隊として勤務。現在は地元の埼玉県で働いている。短い期間ではあったが、三養会の閉店時という貴重なタイミングに立ち会うことことができた経験をレポートでまとめた。今後も足尾を訪れたいと考えている。

中山貴仁(なかやま・たかひと) 長澤美佳(ながさわ・みか)

足尾にとって第4期目となる地域おこし協力隊。1年目の夏には、足尾庁舎にて、松木渓谷で撮影された熊の写真を集めた企画「足尾の熊」展を開催。今までの協力隊と違う目標線で、聞き取りを継続してくれている。平成30年度には足尾の商店や町部の文化をテーマにした冊子を発行予定。

中山京(なかやま・けい)

志村と同じ時期に足尾地域おこし協力隊として勤務し、寺子屋などを実施。退職後も足尾に住みながら、プライベートでも塾をやり続けている。中国留学や得意な外国語、旅の経験や考えを子供達に伝えたりする。過疎の現在の足尾でも、子供達の選択肢が広がるような方法を、自分の得意なことを生かしながら、できるこ

編集・日光市足尾地域おこし協力隊  
デザイン・木村稔将  
古河機械金属株式会社・新井雅之、伊  
協力・聞き取りに協力してくださった  
写真・伊東信、新井常雄

足尾町通洞 8-2

協力・聞き取りに協力してくださったみなさま、  
古河機械金属株式会社、新井雅之、伊東幸一、柄木限立文書館、好井裕明  
写真・伊東信、新井常雄

〔写真について〕  
前回の冊子と同様に、掲載している写真是新井常雄さん（1946年～2013年）、伊東信さん（1919年～2015年）が撮影したもので。お二人は写真撮影仲間で、生前には休日にお弁当を持って一緒に足尾町内の撮影をしていました。伊東信さんは、自身の写真を見せて下さるなど、私たちと一緒に経験談を話して下さいました。伊東信さんには、ご遺族の方々から、新井常雄さんの写真が収蔵されている栃木県立文書館に、伊東信さんの写真類も寄託される予定となっています。

「写真について」

# ごめんください、足尾のこと教えてください！—科研版—

発行日 2018年12月30日

発 行 好井裕明

編 集 好井裕明、三浦一馬、志村春海

執 筆 好井裕明、三浦一馬、志村春海、中村哲也、市之瀬昌弘、中山貴仁、長澤美佳、中山京

デザイン 合同会社デザインナギ

協 力 聞き取りに協力してくださった皆様、日光市役所足尾行政センター

写 真 伊東信、執筆者

〒156-8550

東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部社会学科 好井研究室

hyoshii@chs.nihon-u.ac.jp

©禁無断転載